このすば～もしもカズマがポケモン大好き野郎だったら～

クロウド、

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

もしもカズマが幼い頃からポケモン大好きだったら、ポケモンＧＯをきっかけに学校に行く決意をしていたら、そして、転生特典に自分が育て上げたポケモン達を連れていけることになったらという物語です。

※作者はポケモンに関してはにわかです。小さい頃からやってきただけで対戦とかそういうセオリー全くわかりません。なので、そこらへんは突っ込まないでいただきたい。

※ウルトラサンムーンの発売日とポケモンＧＯの配信日について時系列が合わないですがご了承ください。

目次

プロローグ ―― 1
このポケモンだいすき野郎に異世界転生を！ ―― 3
このポケモンだいすき野郎に王の剣を！ ―― 9
このポケモンだいすき野郎に冒険者生活を！ ―― 20
このポケモンだいすき野郎にパーティメンバーを！ ―― 27
このポケモンだいすき野郎に野宿を！ ―― 35
このポケモンだいすき野郎のスマホに新たな機能を！ ―― 41
ポケモン青空教室開講 ―― 47
このパーティメンバーにタマゴを！ ―― 53
この女神たちからお願いを！ ―― 60
このパートナーの誕生に祝福を！ ―― 70
この仲間たちと空の旅を！ ―― 79
時と空間の神話 ―― 85
このパーティで悪魔討伐を！ ―― 97
絆が導く新たな力 ―― 106
このパーティ結成に祝福を！ ―― 117
絆と白と黒の石 ―― 122
この素晴らしいキャベツ収穫で進化を！ ―― 133
このロトム屋敷と幽霊少女に幸せを！ ―― 151
このリッチーとゴーストタイプに祝福を！ ―― 168
この最弱ドラゴンと魔導具店に祝福を！ ―― 187
大いなる光？ ―― 198
この勝利に祝宴を！ ―― 221
翡翠の記憶 ―― 241

勇者候補同士の密談 ―――――――― 259
この機動要塞襲来に太陽を！ ―――――――― 267
太陽を喰らう獣 ―――――――― 284

プロローグ

「よっしゃ、イーブイの色違いゲット！」
「嘘っ、マジかっ!?」
　俺はスマートフォンアプリ『ポケモンＧＯ』の画面に映る本来茶色い毛並みのはずのポケモン、イーブイ。その色違い白っぽいイーブイがゲットされたのを見てガッツポーズを取る。
　高校からの帰り道、一緒に帰っていた友達二人のうち一人が羨ましそうに俺のスマホの画面を見て、もう一人が呆れたような笑みを俺に向ける。
「お前、ホントにポケモンＧＯ好きだよな。もはや、気持ち悪さを通り越して尊敬するレベルで」
「ＧＯだけじゃねぇよ、ポケモンは全般大好きだ」
「お前のポケモンへの愛は凄まじいよな」
「和真、前に言ってたしな『俺はポケモンのお陰で外に出るきっかけを持てたんだ』とか、なんとか」
「その恥ずかしいエピソードはやめろぉ!!」
　黒歴史を口にした友達に悲鳴じみた叫びを向ける。二人はクスクスと笑っている。こんにゃろうめ……！
　俺こと佐藤和真は高校一年の冬休みから数ヶ月の間、引き篭もっていた。理由は……確か、小さい頃結婚の約束をしていた女の子が不良っぽい先輩のバイクの後ろに乗って去っていくのを見て、だったかな？ハッキリ言ってもう覚えてない。
　今となってはどうでもいいが、その頃の俺はとてつもなく凹んだ。結果、引きこもりになってしまったわけだ。だけど、ポケモンＧＯが配信され、俺は勇気を出して外に出る決意をした。昔からポケモンが大好きだったからな。
　しばらくの間家を出てポケモンゲットをするというのが俺の日課になっていた。そんなときに出会ったのがコイツらだった。丁度、ポケモンＧＯを始めてばかりで色々教えてほしいって話しかけられたんだ。

そんで、基礎的なことをレクチャーしているうちに仲良くなって話してるうちにこいつらが二年に上がった俺のクラスメイトだったと知ったときは驚いた。
『実はクラスでＧＯが流行ってるんだよ、お前くらい詳しければ皆喜ぶからさ。』
『学校来いよ、皆が受け入れくれるからさ！』
あの言葉がなかったら俺は今も引きこもってた思う。二人の言う通りクラスメイトは暖かく俺を迎えてくれた。先生までＧＯやってるって聞いたときは流石に驚いたけど。
そのきっかけをくれたポケモンが俺はさらに好きになった。
そんな過去のことに思いを馳せていると少し離れたところでで俺と同じようにスマホ片手にポケモンＧＯを起動させている小学生くらいの男の子が目に映る。
その子はスマホを見ながら歩いており、所謂ながらスマホの状態だった。
「危ないなあ、ちょっと注意してくるわ」
ポケモンＧＯのながらスマホで事故になってるケースも結構あるし、ほっとけなかったのでその子のもとまで駆け出す。
その時、俺の視界に少年のもとへと真っ直ぐ、それも物凄いスピードで迫るトラックが映った。
「おいおい、マジかっ……!?」
それを見た俺はスマホをしまい込み少年のもとへと一気に駆け出す。走ることに気がいったせいで少年に呼びかけるという案が頭に浮かばなかったのは仕方ないと思う。
ーーーギリギリ間に合うかっ……!?
ギリギリでジャンプし、ドンッ！と少年を突き飛ばし、なんとかトラックの進路上から少年をどかすことができた。しかし、押し飛ばした体制のまま前のめりに地面に倒れた俺は……。
「あっ、やべ……。」
ーーー全身に衝撃を感じ、そこで俺の意識は途絶えた。

このポケモンだいすき野郎に異世界転生を！

「佐藤和真さん、ようこそ死後の世界へ。あなたはつい先程、不幸にもなくなりました。短い人生でしたが、貴方の生は終わってしまったのです」
「……そっすか」
　気づくと俺は真っ白な部屋で唐突にそんなことを言われた。俺の頭は驚くほどすんなり理解できた。ようするに、俺はトラックに跳ねられてそのまま死んじまったってことだろうから。
　俺は目の前で椅子に腰掛けているきれいな水色の髪を持つ少女。人間離れした美貌を持つ、見た目は俺と同じくらいの見た目、もしも女神様という存在がいるのならきっとこのような姿なのだろうと思わせる相手だった。
　俺は自分でも驚くほど、落ち着いた心境で目の前の少女に問いかけた。
「……一つだけ聞いても？」
「どうぞ」
「……俺が死んだあとってどうなりました？」
　やはり、自分が死んだあとどうなったのかはどうしても気になった。俺が突き飛ばした男の子や、同級生、親がどんな反応をしたのかがどうしても気になった。
　その俺の心境が伝わったのか、女の子は微笑んでその質問に答えてくれた。
「安心してください。貴方が助けた男の子は少々擦り傷を負っただけで大事ありません。そして、貴方のご両親や友人は貴方の死を心から悲しみ、貴方の名前は地方の新聞にも乗ることになりました。お葬式には多くの人が出席してくださることでしょう」
「そうですか……教えてくれてありがとうございます」
　そっかぁ、皆悲しんでくれたのかぁ……。たった数ヶ月ポケモン繋がりで仲良くなっただけだったけど、皆俺のことを友だちだって思ってくれてたのか。男の子も無事らしいし良かった。

「そういえばあのトラックの運転手は？」
「ああ、あの方は飲酒運転でつかまりました」
飲酒運転だったのかよ……。ながらスマホしてた男の子にも非はあるが、それ以上にやっちゃだめだろそれは。
「さて、改めまして初めまして佐藤和真さん。私の名はアクア。日本において、若くして死んだ人間を導く女神よ。……さて、貴方にはこの先二つの選択肢があります」
なんと、女神と思っていた女の子はマジで女神でした。こういう魂を導く仕事って天使かなんかの仕事だと思ってたんだが。
俺は女の子、アクアの話を興味深げに聞く。
「一つは人間として生まれ変わり、新たな人生を歩むか。そしてもう一つは、天国的なところでお爺ちゃんみたいなくらしをするか」
随分と身も蓋もない選択肢だな。
「天国的なところってのは、どんなものなんだ？」
「そうね、貴方達は知らないでしょうけど、天国ってのは人間が考えてるほど素敵な場所ではないのよ。死んだら食べ物は必要ないし、死んでるんだから、ものは当然生まれない。作ろうにも材料もなにもないし。がっかりさせて悪いけど、天国にはね、なにもないのよ。テレビもなければ漫画やゲームもない。そこにいるのは、既に死んだ先人達。もちろん死んだからエッチィことだってできないし、そもそも体がないんだからどうにもなんないわね。彼らと永遠に、意味もなく日向ぼっこでもしながら世間話するぐらいしかやることないわ」
ーーーそれ、天国じゃなくてただのムゲン地獄じゃないのか？
却下だな、となるともう一つの選択肢全部忘れて新しい人間として転生する、か。それはそれでなんか嫌だけど、コレしか選択肢はないんだよな。
そんな残念そうにしている俺を見て、アクアは満面の笑みを浮かべた。
「うんうん、天国なんて退屈なところ行きたくないわよね？かといって、今更記憶を失って赤ちゃんからやり直すって言われても、今までの記憶が消える以上、それって今貴方っていう存在が消えちゃうよう

なものなのよ。そこで！ちょっといい話があるのよ」
　なんだろう、ものすごく胡散臭い。というか、喋り方がだんだんフランクというか、女神らしさが消えてきたというか。
「あなた……。ゲームは好きでしょ？」
「ことポケモンに至っては大好きですが？」
「いや、そんな真顔で答えられても……。」
　なんだよ、お前がゲームは好きかって聞いたんだろうが。
　とりあえず、彼女の言ういい話とやらを聞いてみる。
　要約すると、ことは違う世界、すなわち異世界に魔王がいて魔王軍の進軍のせいでその世界がピンチらしい、その世界では、魔法があり、モンスターがいて。ポケモンで例えるなら、そう……不思議なダンジョンシリーズみたいな感じの世界があるらしい。
「その世界で死んだ人達ってさ、まぁほら魔王軍に殺されたわけじゃない？だからまたあんな死に方するのはヤダって怖がっちゃって。死んだ人達の殆どがその世界での生まれ変わりを拒否しちゃうのよね。ハッキリ言って、このままじゃ赤ちゃんも生まれないしその世界が滅びちゃうのよ。で、それなら他の世界で死んじゃった人達をそこに送り込んでしまうのはそうか？ってことになってね」
　何という移民政策。
　でも悪い話ではない。異世界とはいえ、人生をやり直せるのだから。
　だけど、
「どうせ、転生するならポケモンの世界に転生したかったな……。」
　贅沢言ってるのはわかるがそれでもやっぱりポケモンと一緒に旅をしてみたいと思ってしまう少年心はまだ俺の心に巣食っているらしい。
　そんな俺の声が聞こえたのか、アクアがポツリと返してきた。
「ポケモンの世界に転生させることはできないけど、その世界にポケモンを連れて行くことはできるわよ」
「……詳しく」
　アクアが零した言葉に少し頭がフリーズし、正気に戻って問い直

す。
　アクアの話を要約すると、転生した直後に死なれては困るので転生する魂には転生特典として凄まじい能力、伝説級の武器など誰にも負けない力を一つ与えてくれるらしい。
　そして、それは連れていける『モノ』であれば何でもいいとのこと。つまり、ポケモンも連れていける『者』としてみなしてもらえるらしい。
「今なら、アンタが今までゲームで育てたポケモンを連れていけるようにしてあげるわよ？男の子を守って死んだってことでそれなりにサービスしていいって上に言われてるし」
「是非にッ!!」
　俺は額を地面にこすりつけて懇願する。
「いや、土下座しなくても……。」
「ありがとうございます、アクア様ァ!!」
「まっ、まぁ感謝されるのは悪い気がしないけど……良ければ私の信者にーーー」
「それは遠慮します」
「なんでよぉ!!」
「いいから、早く転生させてくれ。ハリー！ハリー！」
　さり気なく宗教勧誘するアクアをひと蹴りして立ち上がり転生を急かす。早く、俺のポケモンに会いたい！
「も、もういいわ。ほら、そこの魔法陣の中央に立って」
　アクアが指差した先に現れた魔法陣の上に立つ。そして、表情を最初と同じようにキリッとさせると、
「それでは、佐藤和真さん。貴方をこれから異世界へと贈ります。魔王討伐のための勇者候補の一人として。魔王を倒した暁には、神々から贈り物を授けましょう」
「……贈り物？」
　俺の問い返しにアクアは微笑んで。
「そう。世界を救った偉業に見合った贈り物。……たとえどんな願いでも。たった一つだけ叶えて差し上げましょう」

「おおっ！……でもあれ？」
俺、ポケモンと一緒に旅したいって夢叶う時点で叶えたい願いなんかあるっけ？
そんな事を考えながら俺は魔法陣の中に吸い込まれていった。
〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜
「ここが異世界か……。」
目を開くと、そこには中世ヨーロッパのような町並みが広がっていた。凄いな、頭に獣耳ついてる人もいるし、ホントにファンタジーの世界らしいな。
ーーーだが、ハッキリ言ってそんなのは後回しでも構わない。
さて、俺のポケモンってのは一体。取り敢えず、体を探ってみる。しかし、死んだときの格好そのままなのか、高校の制服のままって……。
取り敢えず、腰にピンポン玉ほどの紅白のボール、モンスターボールが一つと何故かスマホが入っていた。取り敢えず起動してみると間違いなく俺のスマホなのだが『ポケモンバンク』というアプリがダウンロードされていた。これって、ＤＳ用のダウンロードソフトだろう？開いてみると、俺がよく見慣れたボックスが移り、俺が今まで捕まえてきたポケモンがソフト、アプリ関係なしに入っていた。
なるほど、コレはポケモンの預かりシステムだな。コレについては後で調べよう、下手に調べて街なかでどでかいポケモンを呼び出すわけにもいかんしな。
あとは、このモンスターボールの中身だが。
俺は中央のボタンを押してモンスタボールを野球ボール大の本来の大きさに戻す。
「すげえ、コレが本物のモンスターボールの重みか……！」
問題はこの中身のポケモンだけど……。
俺は周りを確認し、人がいない路地に入る。ゴクリと喉を鳴らし、緊張しながらボールを握る。
「よしっ、出てこいっ！俺のポケモンっ!!」
モンスターボールを空に放るとボールが割れ、中から光が溢れて俺

の足元で形となっていく。
「ブイブイッ！」
そして、現れたのは白い毛並みの犬のようにも見えるつぶらな瞳の小動物。
「お前、俺があのときゲットしたイーブイかっ!?」
「ブイッ！」
俺の質問に『その通りっ！』と言わんばかりに鳴いたイーブイは俺の右肩に飛び乗ってくる。そして、俺の頬に頬ずりしてくる。
やだ、愛らしい……！
肩に乗ったイーブイをできるだけ優しく撫でる。これがポケモンの手触りか。見た目通り、毛並みがふわふわだな。体温を感じる、コレが本物のポケモンの体温なのか。
ハッ！いかん、今の俺はおそらく誰かに見せられない顔になっていることだろう。ここが路地裏で良かった。とにかく、この愛らしさはいかん。一応、モンスターボールに戻しておこう。
「一回モンスターボールに戻ってくれるか？」
「ブイッ！」
俺がモンスターボールを近づけるとペシッと前足で弾かれる。これって、もしかして……。
「モンスターボールに戻りたくないのか？」
「ブイブイ」
その通りと言わんばかりにコクコクと頷く、イーブイ。
う～ん、まさかのサ〇シのピカチュウ状態とは……。まぁ、別にイーブイくらいの大きさのポケモンなら出したままでも大丈夫かな。それにせっかく出会えた俺のポケモン、もっと一緒にいたいし、
「よっし、わかった！一緒に行こう、イーブイ！」
「ブイッ！」
どうやら、当面の俺のパートナーはコイツになりそうだな。

このポケモンだいすき野郎に王の剣を！

「冒険者ギルド、ここだな……。」
「イブイッ！」
俺とイーブイは通行人に道を聞き、この街で一番大きな建物。『冒険者ギルド』へとやってきた。俺はポケモンが大好きだが、何もポケモンだけしかゲームをやってなかったわけではない。ＲＰＧもそれなりにやったのでこういうのの定番は冒険者ギルドに来るのが基本だと知っていた。
異世界のハロワみたいな場所だからな、ここは。
通行人は俺の奇妙な格好より、俺の肩にいるイーブイの方に興味津々だった。ときたま、撫でさせてくれっていう子供もいたし。
取り敢えず、中に入ってみようと扉を開けると。
「あ、いらっしゃいませー。お仕事案内なら奥のカウンターへ、お食事なら開いてるお席へどうぞー！」
短髪赤髪のウェイトレスのお姉さんが愛想よく出迎えてくれた。
もっと、荒くれ者共がいるような場所だと勝手に想像していたがそこは少し薄暗いだけで、それほどガラの悪い連中がいるようには見えなかった。
そして、その視線は新参者である俺。もっと言えば、俺の肩に乗ってるイーブイを注目している。
「ブイ～？」
自分が見られていることに気づいていないのか小首をかしげるイーブイ。そんな可愛い仕草に人差し指で首元を撫でてやる。
俺は取り敢えず、ウェイトレスのお姉さんに言われたとおりカウンターに並ぼうとした。カウンターは４つありそのうちの一つがやけに混んでいたので別のところにしようと思ったのだが、
「ブイッ！」
「あっ、イーブイっ」
俺の肩から床に飛び出し、人が並んでるところカウンターの前に並ぶようにする。

「ここに並べってことか？」
「イブイッ！」
なんだか、犬に案内される花咲かじいさんになった気分だな。
まぁ、パートナーのアドバイスだし聞いておいて損はないだろう。
「はい、今日はどうされましたか？」
やがて、俺の番が回ってきたので床を歩いていたイーブイを抱き上げる。
受付の女性はおっとりした感じの美人だった。
「冒険者になりに来たのですが、何分田舎から出てきたばかりで勝手がわからずここに来まして……。」
「そうですか。えっと、では登録手数料がかかりますが大丈夫ですか？」
「……登録手数料？」
「はい」
……どうしよう、この世界に来たばかりの俺に金なんてあるわけがない。それでも一応財布の中身を確認する……駄目だやはり日本円しか入っていない。
「ブイ～？」
俺の腕の中でイーブイが脂汗を流す俺を見て心配そうな顔で見上げる。
「ねぇねぇ、ルナ。どうかした？」
「あっ、クリスさん」
そこへ、一人のボーイッシュな姿の銀色短髪の少女が俺と受付嬢の前に現れた。クリスと呼ばれた少女は俺の格好を見ると、ふ～んと声を漏らすと。
「なるほど、ズバリ遠くから冒険者になりに来たけど。お金がなくて困ってるってところかな？」
「す、鋭いっ!?」
「最近、君みたいに変わった服装の子が多く現れてね。いつも同じように躓くんだよ」
多分、俺より前に転生した日本人のことを言っているのだろう。

「ルナ、彼の登録料は私が払うよ」
「え？」
「お、おい、いいのか？」
「いいって、いいって、困ったときはお互い様。まっ、その代わりといってはなんだけど……」
　クリスの視線は俺の手の中で抱かれているイーブイに映る。
「その子、君の使い魔だよね？撫でさせてくれないかな？」
「どうする、イーブイ？」
「イブイッ」
「いいってさ」
「やった！わぁ、モフモフ！」
　クリスは嬉しそうにイーブイの頭を撫でる。その顔はすごく幸せそうだった、まぁ気持ちはすっごくわかるけど。
「ふぅ、満足満足。はい、コレ約束のお金」
　イーブイを撫で終えたクリスはポケットから取り出した硬貨を俺に渡す。
「君とはまた会う気がするな、私は『盗賊』のクリスだよ。よろしくね」
「俺はサトウカズマ。カズマって呼んでくれ、でこっちはパートナーのイーブイ」
「イブイッ！」
「私は用事があるから、それじゃあねカズマ。イーブイちゃん」
　そう言ってクリスは走り去っていった。変わった女の子だったな。
「すいません、手数料できました」
「はい、確かに」
　俺はクリスから受け取ったお金をそのままカウンターに置く。受付嬢のお姉さんはそれを受け取ると説明を始めた。
「では。冒険者になりたいとおっしゃるのですから、ある程度理解されているとは思いますが、改めて簡単な説明を。……まず、冒険者とは町の外に生息するモンスター……。人に害を与えるものの討伐を請け負う人のことです。とはいえ、基本はなんでも屋みたいなものです。……冒険者とはそれらの仕事を生業とにしている人たちの総称。

そして、冒険者には各職業というものがございます」
職業、ジョブとかクラスのことか。戦士とか、弓兵とか、そういやクリスは盗賊って言ってたな。
そんな事を考えていると受付のお姉さんは免許証くらいのサイズのカードを俺の前に出す。
「こちらに、レベルという項目がありますね？御存知の通り、この世のあらゆるモノは、魂を体のうちに秘めています。どのような存在も、生き物を食べたり、もしくは殺したり。他の生命活動に止めを指すことで、その存在の魂の記憶の一部を吸収できます。通称、経験値、と呼ばれるものですね。それらは普通で見ることはできません。しかし……」
お姉さんが、カードの一部を指差した。
「このカードを持っていると、冒険者が吸収した経験値が表示されます。それに応じて、レベルというものが同じく表示されます。これが冒険者の強さの目安になり、どれだけの討伐を行ったかもここに記録されます。経験値をためていくと、あらゆるモノはある日、突然急に成長します。俗に、レベルアップだの壁を超えるだのと呼ばれていますが……。まぁ要約すると、このレベルが上がると新スキルを覚えるためのポイントなど、様々な特典が与えられるので、是非頑張ってレベル上げをしてくださいね」
ここまでの説明を聞く限りまるで、ポケモンのレベルアップまんまだな。
「まずはこちらの書類に身長、年齢、身体的特徴の記入をお願いします」
そう言われて差し出された書類の項目に記入していく。
身長１７２ｃｍ、体重５８キロ、年は１７で、茶髪に茶色目っと……。
「はい、結構です。ではこちらのカードに触れてください。それであなた方のステータスがわかりますので、その数値に応じてなりたい職業を選んでくださいね。経験を積むことにより、選んだ職業によって様々な専用スキルを習得できるようになりますので、そのあたりも踏

まえて職業を選んでください。」
　そう言われて、俺は冒険者カードに触れる。まぁ、平和な日本でくらしてた俺がチートステータスなんていうご都合展開あるわけないので期待薄でカードに触れる。
「……はい、ありがとうございます。サトウカズマさん、ですね。ええっと、筋力、生命力、器用度、敏捷性が結構高いですね。魔力は普通……あとは知力と幸運が非常に高いですね。コレなら上級職以外なら大抵の職業を選べますよ」
　おおっ、思ってたより俺のステータスは高かったらしい。毎日、GOのために遠くまで足を運んでたのが幸いしたのか？
「あれ？」
「どうかしましたか？」
　職業の選択欄を見ていたお姉さんが声を漏らしたので聞いてみると。
「見たことのない職業がありますね、『トレーナー』？」
「ッ！すいません、それでお願いします」
「え？」
「ブイ？」
　トレーナーという職業に食いついた俺にお姉さんもイーブイも目を丸くする。
「あっ、すいません。俺の地元じゃありふれた職なので。それに俺もそれになりたかったんです」
「そうですか、では職業は『トレーナー』ということで。早速クエストを受けられるのならあちらのクエストボードにあるものを選んでください」
　そういって指さされた方向にはいくつかの張り紙のある大きなボードがあった。さて、早速今後の生活費を稼ぐのに良さそうなものを選ばなければ。
「あっ、すいません……」
　俺がクエストボードに行こうとしたらお姉さんに呼び止められた、
「まだ、なにか？」

「よければ、私にもその子を撫でさせてくれませんか？」
「ブイ〜？」
「ーーー罪なやつだな、お前は」
〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜
ーーージャイアントトード。
牛を超える体躯を持つカエルのモンスター。その危険さは中々のもので繁殖の時期になると、産卵のために力をつけるため、餌の多い人里にまで現れ、農家の買っているヤギを丸呑みにするらしい。しかも人を喰ったという報告も上がっており結構危険なモンスターだ。
俺の今回の依頼は町の外にいるジャイアントトードを五匹の討伐だった。
そして、俺の視界には七、八体ののんびりした顔つきの巨大ガエルがいる。
「さて、やるか」
「イブイッ！」
俺の言葉に自分の出番と思ったのか肩に乗っていたイーブイが前に出る。だが、
「あぁ……イーブイ、悪いんだけど今日は下がって欲しいんだ」
「ブイッ!?」
やる気満々のイーブイにそう告げると、イーブイは驚愕の目で俺を見る。そんなイーブイには申し訳ないがジャイアントトードはヤギは愚か人すら丸呑みするような危険なモンスターだ。そんなのを相手にイーブイを前に出せるか。
「それに、さっき呼び出したこいつの力も見たいしな」
「ブイ〜」
俺がここに来る途中預かりシステムから呼び出したポケモンの入っているボールを取り出すとイーブイはむくれて頬をふくらませる。
「ごめんて、ほらこれあげるから」
「ブイッ!?」
イーブイは俺の手にある青い木の実を見ると目を輝かせて飛びつ

いてくる。まったく、現金なやつだなぁ。俺がイーブイに渡したのはポケモンの世界の木の実『オレンのみ』だ。ポケモン用のお菓子の材料として、体力回復として役立つ万能木の実。

なぜか、ポケモンの預かりシステムに十個ほど入っていたので一つ取り出しておいた。自家製キットもあったので今度育ててみようと思う。

俺の肩に戻ってきたイーブイは受けとったオレンのみをパクパクと食べ始める。

ーーーうん、実に愛らしい。スマホのカメラ機能は生きていたので、一枚パシャリと。

「さて、そろそろ行くか！」

俺はモンスターボールを構え空に向かって投げ上げる。

「出てこい、ギルガルドッ！」

「ギルッ！」

モンスターボールから現れたのは一本の剣から二本の腕が生えたようなポケモン、二本の手を交差させて丸い盾を構えている。その体はふわふわと宙に浮いている。

おうけんポケモン、ギルガルド。ゴースト、鋼タイプのポケモンで王の素質を見極める力を持ち、認められた人間はやがて王になると言われたポケモンだ。

俺のお気に入りの一体でヒトツキから育てて、ニダンギル、そしてギルガルドと進化させ、共にカロスリーグに挑んだポケモンだ。

俺は恐る恐る、ギルガルドに近づき、

「ギルガルド、俺のことわかるか……？」

「ギル？」

ギルガルドはその一つ目で俺を見つめると、俺の周りを浮かびながらくるくると回って観察している。

そして、

「ギル♪」

はずんだ鳴き声を出すと、俺にすり寄ってきた。

「ギルガルドッ……お前」

どうやら、彼は俺のことを自身のトレーナーとして覚えてくれているらしい。それが嬉しくて、俺もギルガルドの体に触れる。素人目から見ても凄まじい切れ味を誇りそうな剣の体。やっぱりカッコいいなギルガルド。
「ギルガルド、一緒にあのカエルを倒してほしいんだ」
「ギルッ！」
任せてくれと言わんばかりに鳴くとギルガルドは視線をジャイアントトードに向ける。
「行くぜ、ギルガルド。『せいなるつるぎ』だッ！」
「ギルッ！」
ギルガルドは両手で持っていた盾を片手に持ち替え、特性『バトルスイッチ』によって防御態勢の『シールドフォルム』から攻撃態勢の『ブレードフォルム』へとフォルムチェンジする。そして、自身の本体である剣に光が灯る。
ーーーそして、一閃。
「す、すご……。」
そんな陳腐な言葉しか思いつかないほどに美しい剣閃。文字通り一瞬の間にジャイアントトードは真っ二つに斬り裂かれた。
想像以上の力、いや、ある意味想像通りの力。だからこそ、俺はこのポケモンを選んだ。数々の難敵をゲームの中とはいえ、共に倒してきたコイツだからこそ選んだ。
そんな事を考えていると、他のジャイアントトードが舌を鞭のようにしならせてギルガルドを攻撃してくる。
「ッ！ギルガルド、『キングシールド』！」
「ギルッ！」
ギルガルドは俺の指示に素早く反応すると、再び盾を両手持ちに変えて『シールドフォルム』担って盾を構える。そして、ジャイアントトードの舌はギルガルドに届く前に不可視の盾に阻まれる。ギルガルドの固有技、『キングシールド』。あらゆる攻撃をはねのけ霊力のバリアで敵を弱めるギルガルド最強の盾だ。
俺は畳み掛けるように指示を飛ばす。

「ギルガルド、『れんぞくぎり』！」
「ギルッ」
三度、『バトルスイッチ』が発動し『ブレードフォルム』にフォルムチェンジすると周りのジャイアントトードを連続で斬りつけ、あっという間に全滅してみせた。
「よっしゃぁ、ギルガルド！さっすがだぜ！」
「ギル♪」
「イブイッ！」
俺はギルガルドの刃先に当たらないようにギルガルドに抱きつくと、ギルガルドも嬉しそうな声を上げてくれた。イーブイもギルガルドの戦いぶりに感嘆の声を上げる。
「それにしても大丈夫か？刃先とか汚れてないか？」
自慢の剣に汚れがついたりしたら大変だからな。案の定、ギルガルドの剣先にはカエルの粘液とか血とか少量ではあるがこびりついていた。これだけですんだのは多分、ギルガルドの剣戟があまりに速かったお陰だろう。
それにしても困ったな。俺、今拭けるような布持ってないからな。
「悪いな、ギルガルド。少しの間だけ我慢しててくれ、このカエル倒した報酬でなんか良さそうな布買うからさ。それまで、モンスターボールに入ってもらっていいか？」
「ギルギル」
ギルガルドは俺の言葉に頷いてくれた。そのままモンスターボールを向けると赤い光が放たれ、それにあたったギルガルドも赤い光となってボールに吸い込まれた。
「帰ろっか、イーブイ」
「ブイブイ！」
肩に乗せたイーブイを撫でながら俺はアクセルの街へとあるき始めた。
〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜
「ギルガルド、力加減はこんなもんでいいか？」
「ギル」

「そうか、ならよかった」
俺は膝の上に載せたギルガルドの返事を肯定と受け取りそのまま磨き続ける。
俺は今、ギルドの紹介でとある馬小屋の中にいた。今夜はここで寝ることになる。ジャイアントトードの討伐依頼では、宿に泊まる余裕もないのでただで貸し与えられているこの馬小屋で一晩を過ごすことになった。
「ごめんな、二人共。今日はこんなところだけど、明日はちゃんと宿に泊まらせてやるから」
「イブイッ！」
「ギルギル」
俺の言葉に、イーブイとギルガルドは『気にするな』と言わんばかりだ。
静かな馬小屋で俺は無心でギルガルドの刃を磨く。イーブイも眠いのか、薄っすらと開いている目で俺を見ている。そんなときだった、
「……あれ？」
「ギル？」
手元で拭いていたギルガルドの刃に一滴の雫が落ちる。それは、俺の頬を伝ってギルガルドの刃にポタポタと落ちていく。
馬小屋の中にある小さな窓から差し込む月の光がギルガルド剣身が俺の顔を鏡のように写している。
ーーーそれは、俺の涙だった。
「ブイ～？」
その光景にイーブイも寝ぼけ眼を見開く。
ーーーあぁ、そうか。俺は淋しいんだ。
誰も知る者がいないこの世界で夜を明かすことが……そして怖いんだ。この右も左もわからない世界で俺は生き抜いていけるか。今朝はイーブイやギルガルドと出会えた興奮のお陰でそんなことはなかったがいかんせん、夜というのは人をセンチメンタルにするらしい。

「ブイッ」
「イーブイ？」
　そんな不安にかられている俺の肩にイーブイが乗って俺の涙を舐め取る。そして、ギルガルドも俺の膝の上からのいて俺の前でじっと俺を見つめている。二人共まるで、『自分たちがいると』俺に言ってくれてるようだった。
　俺は二人を抱き寄せる。
「ありがとう、ありがとうな……。」
　そうだ、俺にはコイツラが。いや、こいつらだけじゃない、もっと多くの仲間がいるんだ。だから俺は決して一人なんかじゃないんだ。
　ーーーその日、俺と彼らは確かな家族になった。

「ルナさん、配達の依頼終わりましたよ」
俺は配達の依頼を受け、その完了を示すサインを受付嬢のルナさんに提出していた。
「カズマさん、もう終わったんですか？三日はかかると思ったんですが、やはり空を飛べる使い魔がいると早いですね」
「ハハハ、まぁそうですね」
俺は本来なら往復で3日はかかる街へ届け物に出ていた。だが、俺は預かりシステムから呼び出したリザードンに乗せてもらい、一日で往復してきた。
この街、『アクセル』に降り立って早一週間。俺はポケモンたちの力を借りていろんなクエストを受けていた。そのせいか、今では街で少し有名人みたいな扱いになっている。
今日の分の依頼を受け取り、宿に戻ろうとしたときだった。
「あの、カズマさんご相談があるのですが……。」
「はい、なんでしょうか？」
「実は最近、街の外でとてつもない威力の魔法を放つアークウィザードの方がいまして。そのせいで街の外にクレーターが沢山できてしまい、困っておりまして……。」
何というはた迷惑な話だ……。しかし、街の外にクレーターというのは実に危ない。他の冒険者達が怪我をしたりする原因になりうるからな。
「そこで街の外の整地を手伝ってくださる方がいないかという、土木作業員の方からの依頼が来ておりまして。カズマさんの使い魔の中に力になれそうな子はいらっしゃらないでしょうか？」
土木作業か。地面タイプの力自慢のポケモンなら比較的早くに終わらせることが出来そうだな。
「任せてください」
「ありがとうございます、助かります」
明日はどうやら土木作業の仕事らしい。

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

ーーー翌日、アクセル郊外。

「ドサイドン、バンバドロご苦労さま」

「ドッサイ!」

「ブルルゥ!!」

俺は目の前にいる巨大な二体のポケモン。岩のような鎧を纏いドリルのような角を持つポケモン、ドリルポケモンのドサイドンと、巨大な馬のようなポケモン、ばんばポケモンのバンバドロにねぎらいの言葉をかける。

ドサイドンが凹んだ地面を元に戻し、バンバドロがそれを踏むことでもとの状態に戻す。俺もツルハシでできるだけ協力し、それを繰り返していきなんとか夕暮れに全てのクレーターを埋めることができた。

「二人共、ゆっくり休んでくれ」

労いの言葉をかけ二体をモンスターボールに戻し、俺は依頼主である親方の元に行く。

「お疲れさまです、親方さん」

「おう、お疲れさん! いやぁ、助かったぜ。お陰で仕事がはかどったってもんだ! コレは礼だ、依頼した分より色付けさせてもらったぜ!」

「ありがとうございます!」

ごきげんな様子でサムズ・アップする親方さんから、依頼料の入った茶封筒を受け取り、工事中泥遊びするように言っておいたイーブイに声をかける。

「イーブイ、そろそろ帰るぞ」

イーブイの方を見ると、バンバドロが固めたのとは別の場所を前足でほっているイーブイの姿が映った。ただ、その瞳が妙に真剣で泥遊びをしているようには見えなかった。

「ここになんかあんのか?」

俺もしゃがみ込み、イーブイと一緒に底を掘ってみる。すると、俺

の指先になにか丸いものが当たる。
「イーブイ、下がって」
「ブイ」
俺はゆっくりと丁寧に盛り上げられた土を払い落とすと、土に埋もれて隠れていたものが顔を出す。
「おいおい、これって……！」
指で摘み上げたそれを夕日に翳す。それはビー玉ほどの大きさの透明な丸い石で中に特殊な紋様が刻み込まれていた。俺はその紋様をよく知っていた。
『キーストーン』……。」
ポケモンの最終進化形、それをさらにもう一段階進化させる『メガシンカ』。それを発動させるための『メガストーン』と対となる石。
なんでこんなものが土の中に……？　まぁ、なんにせよ。
「お手柄だぞ～、イーブイ～！」
「ブイブイ～！」
取り敢えず俺は、今日のＭＶＰをひたすらに撫で回した。
～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～
「明日はどんな依頼を受けようかなぁ～」
俺は土木工事のあと銭湯で汚れを落としたあと、ギルドによって明日はどんな依頼を受けようかなとクエストボードを除いていた。
俺の当面の目標はそこそこ大きな一軒家をもつことだ。リザードンや、ドサイドン、バンバドロのような大きなポケモンは宿ではモンスターボールの中から出せないしブラッシングもしてやれない。それこそ広い、庭でも持てればそれもしてやれるんだが……。
ここ、アクセルは駆け出しの街と呼ばれていて魔王軍の居城、魔王城から一番離れている街だ。だからこそ、モンスターの脅威はそこまで酷くはない。なので、実入りのいい依頼はそれほどないのである。
まぁ、楽して金を稼ごうなんて方が都合のいい話か……。
「アレ、イーブイ？どこいった？」
いつの間にか足元にいたイーブイがいなくなっていた。
最近、アイツはギルドのマスコット的な存在になってきたのでよく

ウェイトレスのお姉さんたちに撫で回されているのでさして慌てずイーブイを探す。本人が割と気に入ってるのでいいが、撫で回されるとブラッシングが大変なんだよな……。
「あ、いた……。」
視線の先には窓際の机で上でお座り状態の俺のパートナーがいた。
ここまでは別に変わった問題ではない。問題なのは、
「はわわわわわ……!!」
「ブイ～？」
彼女の対面に座り、深い紅の瞳をキラキラさせて手をワキワキさせてるくせにイーブイを触ろうとしない黒髪の少女の方だった。
「触らないのか？」
「キャッ！」
俺は少女の後ろから声をかけると、驚いた声を漏らしどこかおずおずとした態度で俺を見る。
「わ、悪い、驚かす気はなかったんだが……俺はその子のパートナーなんだが……。」
「で、でも私なんかが触れたら嫌がるんじゃ……。」
ふむ、なるほど自己評価が低いタイプの子か。
ならば、
「イーブイ、ＧＯ！」
「ブイッ！」
「わぷっ!!」
俺の合図でイーブイは少女の顔に勢いよく張り付いた。いきなり顔を塞がれた少女は両手でイーブイを引き剥がした。
「ブイッ！」
「か、可愛い……！」
「だろ？」
なんたって、俺のパートナーだしな。
「今まで動物に触ろうとしたらいつも逃げられたのに、この子は逃げないんだ」
「あぁ、だからか」

イーブイは人懐っこいポケモンだからな。この娘の難儀な体質も意味をなさなかったわけか。
「ところで、なんでこんな時間にギルドに居るんだ？」
今の時間は既によるの８時を回っている。みたところ、１５歳くらいの女の子がいるような時間じゃないと思うんだが。
「そ、それは……パーティメンバーの募集の紙を見た人が来ないか待っていたんです」
パーティメンバーの募集、クエストボードの横にある張り出しのことか。俺はポケモンたちの力借りてるから見たことなかったけど。
「へぇ、何時から？」
「……朝の６時からです」
「ろくっ……!?」
おいおい、ちょっと待て。今、夜の２０時ってことは……１４時間!?半日以上、ここにいたってことか!?
「もう、一週間くらい待っています」
「……。」
もう言葉が見つからない。
一週間ってことはつまり、１４×７で９８時間。四捨五入すれば１００時間……って、おいおい。
「誰も来なかったのかその間……？」
「いえ、来るには来たんですが……皆さん私が食い気味に話しかけるので逃げていってしまって……。」
「……。」
アカン、この娘。天性のボッチだ……。しかもこの歳で既にめちゃくちゃこじらせている。
ちらりと彼女が未だに撫でているイーブイを見る。これもイーブイのお告げかな……。
「じゃあ、俺で良ければパーティ組もうか？」
「え？」
「俺自身はそれほど強くはないんだけど、俺のポケモン……使い魔は頼りになるからさ。皆その子みたいに人懐っこいやつもいるからさ、

仲良くなれると思うぞ？」
「本当ですかっ!!」
「うぉっ！」
少女は机から身を乗り出し、俺の顔面ギリギリまで自分の顔を近づけてくる。その紅い瞳はランランと輝いている。
なるほど、食い気味だ。これは初見の人が逃げてもしかたないかもしれない。
「本当、本当だから……一回落ち着こう、なっ？すいませ～ん、この娘にオレンジジュース一杯！」
「は～い」
ウェイトレスのお姉さんにオレンジジュースを注文しする。女の子も自分の悪い癖が出たのに気づいたのか顔を真っ赤にして俯いている。それでもイーブイを撫でる手は止まらない。どんだけ嬉しかったんだ？
注文した、オレンジジュースがテーブルに届くと落ち着くために一口、口に含む。
「だけど、流石に今日はもう遅いからそれ飲んだら一回帰りなさい。明日の朝、またここで会おうぜ」
「わ、わかりましたっ！」
「よし、イーブイ。行くよ」
「ブイッ！」
イーブイは俺がよぶと少女の手の中からするりと抜け出し、俺の肩の上に戻ってくる。「あっ……」と残念そうな声を漏らした少女だったが、「明日また会えるから」というと「はい」と頷いてくれた。
「あ、あの私はゆんゆんといいます。アークウィザードを生業としていて、まだ中級魔法しか使えない半人前の身ではありますがよろしくおねがいします！」
そういって、立ち上がった女の子『ゆんゆん』は勢いよく頭を下げた。
あっ、そういえば俺もまだ自分の名前言ってなかったな。
「ああ、よろしく。俺はサトウカズマ。気軽にカズマって、呼んでくれ

ていい。こっちはパートナーのイーブイだ」
「ブイッ！」
「……。」
「どうかしたか？」
「あ、あのカズマさんはおかしいって言わないんですか？私の名前？」
「いや、別に？」
　ポケモンの中にも変わった名前のポケモンいるし、たしかに日本にはいないような名前ではあるけどこの世界と地球の価値観を同一にしちゃいかんだろ。
「それじゃ、俺そろそろ行くから。また明日な、ゆんゆん」
「はっ、はいっ！ブイちゃんもまたね」
「ブイブイッ！」
　ブイちゃんと来たか……まぁ、ブイブイ鳴いてるし妥当な愛称かもな。
　そんなわけで、
　テッテレー！『カズマはパーティメンバーを手に入れた！』

このポケモンだいすき野郎にパーティメンバーを！

ゆんゆんとパーティを組む約束をした翌日。俺は約束通りギルドに来ていた。
するとそこにはゆんゆんだけでなく彼女によく似たとんがり帽子をかぶった少女がいて、ゆんゆんとなんかいいあいしていた。
「お〜い、ゆんゆん〜！」
「ブイブイ〜！」
「カズマさん、おはようございます！」
「ああ、おはよう。ゆんゆん、誰だこの娘？君の妹？」
「なっ!?違いますよ！」
そう言って否定するとんがり帽子の女の子。他人と言うには似すぎている気がするけど。
そう思っていると、少女はバサリとマントを翻す。
「我が名はめぐみん！紅魔族随一の魔法使いにして爆裂魔法を操りしもの！」
「……なぁ、ゆんゆん。俺だって、馬鹿にされたら怒るぞ？」
「ちっ、違うんです！これは紅魔族特有の自己紹介の仕方で……！めぐみん、私まで巻き込まないでよ!!」
……取り敢えず、話を聞くために朝食をとることになった。
〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜
「つまり、二人は紅魔族っていう魔力の高い種族の生まれなのか」
「は、はい、そうなんです」
俺達は三人でテーブルを囲いながら朝食をとっていた。
「で、この娘との関係は？」
「ら、ライバルですッ!!」
「自称、ライバルです」
ほ〜う、ライバルとは。ライバルは大事な存在だ。今まで俺がやってきたポケモンにはライバルという存在が必要不可欠だった。ライバルとのバトルのあとにパートナーが進化したりすると熱くなったなぁ。

パートナーといえば、俺はめぐみんが連れていた翼の生えた黒猫を見る。そいつは今、イーブイと一緒に俺が上げたモモンのみをかじっている。

「その子は君の使い魔か？」

「ええ、『ちょむすけ』といいます。そちらの白い子は、貴方の？」

「あぁ、俺のパートナーのイーブイだ。俺は『トレーナー』っていう職業でな。この子みたいな使い魔、ポケモンっていうんだけど、そいつらの力を借りてるんだ」

「ポケモン、聞いたことがないですね」

「まぁ、そりゃな」

元々は別世界のゲームから生まれた存在とは言えないわな。

「ゆんゆん、今日はどうする？」

「どう、というのは？」

「いや、どんなクエストを受けるのかとか」

「わ、私が決めちゃっていいんですか？」

「そりゃ、パーティなんだからな」

互いに対等な立場っていうのがパーティってもんだろ。

「じゃ、じゃあ……」

「そうですね、今日はカズマの実力を見てみたいのでジャイアントトード狩りなんてどうでしょう？」

「ちょ、なんでアンタが決めてるのよ!?」

「まぁまぁ、いいじゃないか。俺もゆんゆんの魔法見てみたいし、めぐみん、君も来るか？」

「では、お言葉に甘えて」

「甘えないでよ!」

仲悪そうに見えるけど、どっちかっていうとただの照れ隠しに見えるのは俺の気のせいだったりするのだろうか。

「ところでライバルって言ってたけど、二人共いくつだ？」

「私もゆんゆんも１３歳です」

「………マジか」

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

「『ファイアーボール』!!」
ゆんゆんが魔法名を叫ぶとともに彼女のワンドから放たれた炎の弾にあたったジャイアントトードが火だるまになった。
アレが魔法か。ポケモンの技とはまた違う感じだな。
――俺はこの一週間で得たポイントを使って職業、『トレーナー』のスキルをいくつか習得した。『トレーナー』のスキルとはポケモンの状態異常を治す魔法や、ポケモンのお世話ブラッシングなどが上手くなったり事だ。さらに、『技習得』というスキルを得た。コレはその名の通り、ポケモンに技を覚えさせることができるスキルだ。『わざマシン』で覚えられる技を五つ習得した。『れいとうビーム』、『まもる』、『ソーラービーム』、『１０まんボルト』、『シャドーボール』。取り敢えず、即戦力として使えそうな技を適当に五つ選んだ。
どうやら、この『トレーナー』というジョブ、ゲームの世界での俺の経験がスキルとして反映されているらしい。
「イーブイ、『シャドーボール』！」
「ブイッ！ブ～イッ！」
イーブイの口元で形成された紫色のボールはジャイアントトードに向かって発射されると、着弾とともに爆発する。
「イーブイ、『シャドーボール』随分うまく使えるようになったな」
「ブイ～！」
ジャイアントトードを倒したイーブイを褒める。これだけ強くなれば、ジャイアントトードにも負ける心配はないな。
「ブイちゃんって、強かったんですね……。」
「言ったろ？頼りになるって」
……だけど、そろそろイーブイをどの個体に進化させるか決めないとな。
イーブイはしんかポケモンと呼ばれるほど多くの進化パターンがある。炎タイプの『ブースター』、水タイプの『シャワーズ』、電気タイプの『サンダース』、エスパータイプの『エーフィ』、悪タイプの『ブラッキー』、草タイプの『リーフィア』、氷タイプの『グレイシア』、そして、フェアリータイプの『ニンフィア』。

それぞれの条件のいずれかを果たしたときこの8体のいずれかに進化する。
俺はそのいずれもゲットしているが、進化したほうが強くなる。まぁ、最終的には本人が望む進化をさせてやりたいと思ってるが。
「それで、どうするか？このまま、カエル狩りでもするか？」
「いえ、ここは森に行きましょう」
「えっ!?」
「軽く戦闘を見てわかりました。私達はもっと強敵を相手にするべきです」
「いや、めぐみん。君は何もしてないよな？」
「……私達はもっと強敵を相手にするべきですッ！」
「あ、ごまかした」
「でも、森には賞金までかけられるほどの悪魔型のモンスターが出るって……めぐみん……？」
ゆんゆんの不安げな言葉にめぐみんが「くくく」と怪しげな笑みを浮かべる。
「遭遇したら好都合です！森に入ったら、ゆんゆん達は雑魚を引き受け、例の悪魔が現れたなら私が仕留めます」
「大丈夫かな……めぐみんがやりたいだけじゃ……」
ゆんゆんの言葉にぎくりとなるめぐみん。コレは図星だな。
だけど。
「その案、俺も賛成だ」
「カズマさんまで……!!」
「安心しろ、いざとなったらちゃんと守るから」
今の俺の手持ちは念のために俺の手持ちの中でもかなり強いポケモンで固めてある。もしものときはすぐに逃げられるように。
「では、早速行きましょう。」
「ちょっと、待ってくれ」
俺は六つあるモンスターボールの中から一つを手に取り。
「折角だ、空を飛んでいこう」
「「はい？」」

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

「リザードン、３人乗りだが重くはないか？」

「グルゥ!!」

問題ないようだ、流石にパワフルだぜ。

「ほ、ホントに飛んでる……。」

「驚くのはいいが、しっかり捕まっててくれよ。落ちたら洒落にならないからな」

俺の後ろで唖然としている二人に向けて注意をする。現在俺はイーブイを抱きかかえ、その後ろでゆんゆんが俺、めぐみんがゆんゆんの腰にしがみついている。それほど高い高度じゃないが、それでも魔法使い職が落ちたら怪我じゃ済まない高さだからな。

「か、カズマはドラゴンも従えていたんですね……。」

「残念だけど、リザードンはドラゴンじゃないぞ？」

「え、そうなんですか？」

リザードンは間違われやすい見た目をしているが炎、飛行タイプのポケモンだ。黒いメガリザードンにメガシンカできればドラゴンタイプになれるが、俺の手元には『キーストーン』しかないし、メガシンカのためには『リザードンナイトＸ』が必要なんだよな。

キーストーンがあるんだからどっかにあってもいいと思うんだが。

「まぁ、ドラゴンもいるけどな。でも従えてるってわけじゃないんだ」

「？」

「俺、訳あって家族がいないんだ。だから、今となってはコイツらが俺の家族なんだ」

「ブイ」

「グルゥ！」

そう言って、イーブイとリザードンを撫でる。

めぐみんとゆんゆんは込み入った事情を聞いたしまったという顔で申し訳無さそうな顔をしている。１３歳の女の子には少しヘビィな話だったか。

「だから、コイツらとゆっくりできる家がほしいんだがやっぱり金がなくてな。だから、賞金をかけられてる悪魔を倒すって案は俺も賛成

だぜ。さて、そろそろ降りるか。リザードン頼む」
「グルゥ!!」
俺は話を切るためにリザードンに指示を出し開けた場所に着地した。
「お疲れ、リザードン」
俺はリザードンにお礼としてオボンのみを上げる。そのリザードンの頭をなでながら、ゆんゆん達に声をかける。
「空から見てたけど、モンスターが見当たらなかったな」
「おかしいですね、この間はスライムだのムササビだのが襲ってきたんですが」
「それなんですけど……最近、森の奥にかくれたモンスターが街の近くに現れるようになったのは例の悪魔が原因って噂もあるんです」
なんか、ポケモンの世界でそれに似たことがあった気がするな。なんだったか、
「紅魔の里でコレと似た現象があった気がしま……」
めぐみんが言い終える前に近くの草むらがカサカサと揺れ始める。ゆんゆんとめぐみんが杖を構える。
「か、可愛いッ！」
しかし現れたのは、角をはやした愛らしい顔立ちのウサギだった。あれ？　コイツ確か。
「ほ～ら、野菜スティックあるよー」
「あっ、ズルいです、私にも餌を」
「まっ、まてっ、めぐみん、ゆんゆんっ!!」
無防備に野菜スティックをあげようとするゆんゆんを突き飛ばす。次の瞬間ウサギ特有の脚力でゆんゆんに向かって飛び込んでくる。
そして、背後の木にズガンと角が刺さり抜けなくてジタバタしてる。もう少しタイミングが遅かったら危なかった。
「あぁ、やっぱり一撃ウサギか……。」
「い、一撃ウサギ？」
「この間酒場で聞いたんだが、その愛らしい見た目とは裏腹にめちゃくちゃ凶暴なモンスターだって。因みに肉食だ」

「ど、どうりで……」
「で、でもなんでカズマさんは引っかからなかったんですか？」
「うちのイーブイのほうが百倍可愛いから」
「あっ、そうですか……。」
　そういった瞬間、森からドドドドドドという音が響き渡る。何だこの音は？
「止まった？」
　そう思った瞬間、草むらの中から凄まじい数の一撃ウサギが現れる。
「えぇ～～～!!」
「ッ！リザードン!!」
「ガァァァァ!!」
　リザードンは俺の前に出て、一撃ウサギを威嚇しはねのけていく。だが、それによって一撃ウサギ達はゆんゆん達の方に行く。
「イーブイ、『まもる』！」
「ブイッ！」
　イーブイが展開した光のバリアによってゆんゆんに飛びかかった一撃ウサギを弾く。
「あ、ありがとう……ブイちゃん……。」
「ブイ～！」
　さて、どうするか……流石に森の中でリザードンの『かえんほうしゃ』を使うわけにはいかないし、だからといって俺がリザードンに覚えさせる技って言ったら、水タイプ対策に覚えさせた『かみなりパンチ』と、『ドラゴンクロー』。そんで必殺技の『ブラストバーン』だけだしな。
　仕方ない、ここはギルガルドで……。
　そう考えている直後、一撃ウサギ達の上空に魔法陣が浮かびウサギ達がふわりと浮かび上がる。
「『先の軍勢、万の平甲。我が雄渾な力を以て、薙ぎ払え』！」
「ま、まさかここで!?」
　杖を掲げ魔法の詠唱らしきものをしているめぐみんにゆんゆんが

目を見開く。めぐみんの詠唱とともに大気を覆うプレッシャーが重みを増す。やばいと感じ、とっさにイーブイを抱いて魔法陣から背を向ける。
『エクスプロージョン』ーーーッッッ!!」
ドゴオオオオオオオオオンという凄まじい音とともに爆炎が俺達の視界を覆った。
「あ、あの馬鹿ッ!!自然破壊ってレベルじゃないだろうがッッッ!!リザードン、イーブイ大丈夫か?」
あんな至近距離で魔法をぶっ放し、森を吹き飛ばした魔法使いに憤慨しながらイーブイとリザードンに怪我がないか確かめる。よかった、二人共問題なさそうだ。
「おい、めぐみん、ゆんゆん。生きてるか?」
至近距離であの爆発に巻き込まれて地面に突っ伏しているめぐみんとゆんゆんを起こそうとする。
その時だった、
「グルルルルル……!!」
「リザードン、どうした?」
リザードンが森の方向に向かって低い唸り声を上げる。
「おいおい、なんでこんなところにドラゴンがいんだよ?」
俺達の目の前に黒い異形が姿を表した。

このポケモンだいすき野郎に野宿を！

「リザードン、大丈夫か？」
「グルゥ」
俺はアクセルの街から少し離れた平原で、瞬間的にとはいえ無理をさせてしまったリザードンを労うように体に触れる。多少息は上がっているが問題はなさそうだ。
例の悪魔ーーーホーストに『かみなりパンチ』を叩き込んだあと、俺は攻撃されないようにリザードンに全速力を出してもらって街まで戻ってきた。
めぐみんとゆんゆんにはギルドに戻って悪魔の存在の報告に行ってもらった。
あの悪魔はハッキリ言ってやばい……伝説のポケモンと対峙したときほどではないがあのプレッシャー、相当なものだった。まだ、バトルに慣れてない俺がポケモンに指示をして勝てるかどうか……。
「アレ……？」
なんで、俺……伝説のポケモンとあったときのプレッシャーなんて知ってるんだ？俺はまだ、ゲームの中でしかアイツラと対峙したことはないはずなのに。
あのポケモンたちは文字通り強すぎる。その存在だけで生態系が壊れかねないため、申し訳ないがもう暫く預かりシステムの中で眠ってもらうつもりだ。落ち着いたら山にでも登ってそこで会いたいと思っているが。俺はまだ彼らを直に見たわけではない。
だけど、俺はたしかに知っていた。カントー地方で出会った三体の伝説の鳥ポケモン、ジョウト地方で出会った虹色の羽と海の神、ホウエン地方で出会った海と大地を生み出したとされるポケモン、シンオウ地方で出会った時と空間を司るドラゴン、イッシュ地方で出会った理想と真実の英雄に力を貸したとされるポケモン、カロス地方で出会った『破壊』、そして、『生命』と『再生』を司る存在、アローラ地方で出会った太陽と月を司るポケモン。
あれらのプレッシャーを知っていたから俺は臆さずリザードンに

指示ができた。
「まさかとは思うが……『経験』だけじゃなくて、『記憶』まで引き継がれ始めてる？」
だとしたらなんのために……？もはや、特典という領域から逸脱し始めてるんだが……。
ん～。でもまだ実感が湧かないな……。考えてみたら俺のステータスが少し高かったのもそれが影響してるのか？
「ブイ？」
「グルゥ？」
イーブイとリザードンが黙り込んだ俺の顔を心配するように覗き込む。
「あぁ、ごめんな？大丈夫だ」
そういって、二人の頭を撫でる。
いけない、いけない。俺がポケモンを不安にしてどうする。こういうときこそ、トレーナーの俺がしっかりしなきゃいけないんだろうが。
「さて、一度街に戻るか」
密かに作っておいたアレが役に立つ時が来たようだ。
～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～
「カズマさん」
「ん？」
街に戻り宿をチェックアウトした俺は再び平原に戻る途中、俺を探しに来ていたゆんゆんと合流した。
「ギルドへは行かないんですか？」
「まぁ、大方想像はつくからな。多分だけど、暫く森は閉鎖だろ？」
「はい……王都からの討伐隊が来るまで、森は閉鎖で暫くクエストも受けられないと」
まぁ、それが妥当な判断だろうな。
「そういや、めぐみんはどうした？」
「めぐみんはその……あの魔法、『爆裂魔法』っていうんですが、アレを使うと魔力切れでほとんど動けなくなるので宿に送っていきまし

た」

なるほど……まぁ、アレだけの魔法だからな。

「ん？ひょっとして、最近町の外の平原でクレーターを作ってるはた迷惑なアークウィザードって……。」

「はい、めぐみんです……お恥ずかしい」

悪魔を討伐できるっていう自信はあの魔法の威力からなのだろう。

「それで、カズマさんはどうするんですか？それに、それは……。」

ゆんゆんは俺が肩に担いでるものを指差して、問いかける。

「まぁ、ちょっと……野宿の準備をね」

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

カンッ……カンッ……！

俺は戻ってきた平原、アクセルの正門から少し離れたところで、準備していたハンマーを使ってテントを支える支柱を地面に打ち付ける。

「カズマさん、なんでこんなところにテントを張ってるんですか」

ついてきたゆんゆんがやはりきになるのか質問を投げかけてきた。

「ん？ほら、さっきリザードンがあの悪魔の横っ面にパンチかましちゃっただろう？あの腹いせに街を襲われでもしたら……俺の責任だしな。暫くはここでテント張って野宿することにしたんだ。もう守衛さんにも許可貰ったよ」

「そ、そんなっ！カズマさんに責任なんてないですよ」

「いや、不謹慎だけど。コレは俺の夢でもあったんだ。ポケモンと一緒にテントで寝るって……。俺の尊敬してるポケモントレーナーみたいにさ」

子供の頃、ポケモンのアニメを見てからのずっと憧れだった。この世界に来てから子供の頃の夢がいくつもかなってるな、俺。

「それに、ホーストとはいつか決着をつけるつもりだ。そのためにもポケモンたちを鍛えなきゃいけない。街中でバトルの特訓なんてできるわけないし、ここのほうが気が楽ってもんさ、っと。よし、完成」

最後の柱を地面に打ち付けて俺は立ち上がり汗を拭う。

「こんな大きなテントどうしたんですか？」

「ん？手作りだよ」
「手作りっ？これが、ですか……？」
ゆんゆんの言う通り、このテントは普通のテントの約三倍、多分6、7人は余裕で入るんじゃないかな？
俺の職業、『トレーナー』は、ポケモン世界に『ブリーダー』、『ドクター』、『コーディネーター』と様々な職業があるように少しでもポケモンに関わるスキルならなんでも覚えられるらしい。なので、この間試しに鍛冶屋の親父さんに頼んで『鍛冶スキル』を習得した。
「で、特に作るものもなかったので、いつか役に立つかなぁって思ってコレを作ったわけだ」
「暇つぶしでコレを作ったってことですか……？」
俺の説明を聞いてゆんゆんが呆れたような視線を向ける。
「布団もあるし真冬ってわけでもないから凍死の心配もないし。食料は街でとるから大丈夫だ。まぁ、一種の強化合宿だな」
さぁ、そろそろ帰ったほうがいいぞと言おうとしたとき、ゆんゆんがとんでもないことを言い出した。
「だったら……私もその野宿に参加します！今回のことはめぐみんを止められなかった私にも責任があるので」
「は？」
流石に予想外な言葉に俺は間の抜けた声を漏らしてしまった。いや、流石にそれはまずいだろう……。
「ゆんゆん、テントは一つしかないんだ」
「でも、6、7人は入るって言ってたじゃないですか」
「ゆんゆん、毛布は一枚しかないんだ」
「最近温かいから私はいりません」
できるだけオブラートに包んで諦めさせようとするが、ゆんゆんはなおも食い下がる。
「……ゆんゆん、俺は男だ」
「え？は、はい、カズマさんは男性です」
「……ゆんゆん、君は女の子なんだ」
「え、はい……そうですね」

流石にゆんゆんも俺が言いたいことに気づいたらしく顔を赤くして俯いている。できれば最後までは言いたくなかったが、今後のことも考えてちゃんとハッキリ言っておくべきだと思い口にする。
「男と女、あまり世間体に良くないってのはわかるだろ？」
「は、はい……でも、私達パーティメンバーですしっ！野宿になることは珍しくないと思うんですっ！」
なおも顔真っ赤で食い下がるゆんゆん、どうやら引き下がる気はないらしい。
しかし……なるほど、そういう考えもあるか。確かにパーティならそういうこともあるかも知れないな。……アレ、だったら問題なくね？いや、でもなぁ……。
思春期特有の誘惑に必死に抗おうとする俺の理性。
「ーーーだったら、私も参加しましょう」
そこへ、聞こえる三人目の声。
「あっ、めぐみん」
そこには呆れた表情のめぐみんが立っていた。
「全く、なかなか帰ってこないと思ったら……はなしは聞かせてもらいました、今回の一件、森に行こうと言い出したのは私です。私も参加します」
「いや、だからさ……全く根本的な解決になってないからね、寧ろヤバさが増してるだけだからな？駄目だよ、君たちは宿に帰りなさい」
「嫌です。もし、断るというのなら」
「言うのなら？」
めぐみんは紅魔族特有の紅い瞳を帽子の下から輝かせて、好戦的な視線で俺を見る。
「食事のために戻ってきたあなたの背中にしがみつき、『捨てないで！』と街中で叫び続けます」
「お前俺になんの恨みがあるんだよっ!?俺を社会的に抹殺するつもりかッ!!」
めぐみんのとんでもない発言にゆんゆんもドン引きしている。
「めぐみん、それは流石に……。」

「何を言うんですか、ゆんゆん。折角できたパーティメンバーでしょう、苦楽をともにしてこそ真の仲間になれるのではないのですか!?」
「真の仲間ッ!?ーーーわかった、そのときはわたしもやる!」
「ゆんゆんっ!?」
ゆんゆんの背後にズガァンと雷が落ちたように見えた。この娘、乗せられやすすぎるだろう。そして、めぐみんはめぐみんでゆんゆんの扱いが上手い……。
なんなんだ、この娘は……。魔法といい、考え方といい、爆弾みたいな娘だな。
「おい、今何を考えたのか話してもらおうか?」
「なんでもないよ、さてーーー」
俺は二人の顔を見る。
ーーー駄目だな、どっちも折れそうにない。
「わかった、わかった、俺の負けだ。好きにするといい」
俺は諦めて苦笑いを浮かべ、両手を上げて降参のポーズをとって二人にそう告げた。

このポケモンだいすき野郎のスマホに新たな機能を！

ーーーある朝、アクセル郊外の草原で二体の影が激しくぶつかり合っていた。
「ジュナイパーは『かげぬい』！ジュカインは影に気をつけて回避からの接近！」
二体は俺の支持を受けると、指示のとおりに動き出す。ジュナイパーが翼からむしった羽根を弓にしてジュカインに放つ。ジュカインは自分だけでなく影にもその攻撃が当たらないように体制を低くしてジュナイパーの懐に潜り込む。
「ジュカイン、ジュナイパー、『リーフブレード』！」
「ジュラッ！」
「ジュパッ！」
ジュカインの腕についた葉っぱとジュナイパーの羽根が鋭い刃に変わりガキンッと言う金属のような音を立てて交差する。
ジュナイパーは一度一度空中に飛び上がると一気に降下してジュカインに迫る。しかし、その攻撃をジュカインはバックステップで回避し助走をつけてジュナイパーに斬りかかる。しかし、ジュナイパーは再び空中に逃げて回避する。
「ジュカイン、『いわなだれ』だ！」
「ジュカァ！」
ジュカインが吠えるとジュナイパーが飛行している空中から無数の岩が現れ地面に落ちていく。ジュナイパーは難なく回避するが、回避に専念するためにリーフブレードが解除されてしまう。だが。
「今だっ、ジュカイン！岩を足場にジュナイパーに『リーフブレード』!!」
「ジュッカァ!!」
「ジュパッ!?」
ジュナイパーはジュカインが持ち前の俊敏さで岩を蹴りながら自

分のところまで駆け上がってくるのを見て驚きの声を上げる。そして、リーフブレードを鋭くして斬りつける。
「ジュッ……！」
ダメージを受けて少し離れるジュナイパー、既に『いわなだれ』は終わっており飛行に問題はない。
「ジュナイパー、『ブレイブバード』！ジュカインは『りゅうのはどう』で迎え撃て！」
「ジュパァァァァァ!!」
「ジュッカァァァァ!!」
ジュナイパーの全身が青く光そのまま凄まじい勢いでジュカインに向かっていく。それを迎え撃つようにジュカインの口から放たれた龍の形をした波動が放たれ激突し、爆発が起こった。
～～～

カインにばかり指示がいってジュナイパーに回避の指示を送れなかった。」
　やっぱり、一人二役は難しいな……。かといって、この世界に俺以外のポケモントレーナーなんているわけがないしな。だけど、こんな特訓であの悪魔に勝てるのか？いや、伝説のポケモンならほぼ確実に勝てるだろうが、森は吹き飛ぶか二度と命が育たない地になるかも知れない。いや、それを直す力を持つポケモンもいるが……この世界のパワーバランスを崩すことになるだろう。
「どうしたもんかねぇ……。」
「ふっふっふっ、どうやら私の出番のようですね」
「どうした、めぐみん。自分が相手になるとか言って爆裂魔法を打ち込むとか言ったら俺達の関係はここまでだが」
「違いますよっ！私をなんだと思っているんですか!?」
「何ってお前、毎日のようにポケモンたちのバトルに惹きつけられて集まってくるジャイアントトードに爆裂魔法を打ち込んでドサイドンやバンバドロにその後始末を任せるはた迷惑な同居人だけど？」
「いや、あの……。」
「おいおい、どうしためぐみん？いつも爆裂魔法を打ち込んでクレーターを作って俺達がそれを直してる間、魔力切れでぶっ倒れて何もしないでそれを見ているめぐみん？」
「えっと、その……。」
「なんだよ、言いたいことがあるなら言ってくれてもいいぞめぐみん？　最初は快く引き受けてくれてた二人に『そろそろめんどくせぇなぁ』って目を向けられ始めてきためぐみん？　俺も頼むのけっこう大変なんだぞめぐみん!?」
「す、すいませんでした……。」
　俺から怒涛の口撃を受けて、頭を下げるめぐみん。まぁ、ドサイドンたちには交代で他の地面タイプのポケモンと代わってもらうように言ってあるし問題ないけど……。それになんだかんだいって、ポケモンたちの手入れとかポケモンフーズ配るの手伝ってくれたり助かってる面はあるけどさ。

「それで？まさかとは思うけど、お前がトレーナー役をやるとか言わないよな？」
「逆にそれ以外、なにがあるんですか？」
「お前なぁ、ポケモンバトルというのは結構奥が深いんだぞ？タイプの相性とかも知らない奴が簡単にできるものじゃないんだ」
「だったら教えて下さい、我々紅魔族は魔力と知力が高いですから」
「しかしだな、ジュナイパーやジュカインは……。」
「大丈夫ですよ、ほら」
「ジュカァ♪」
「ジュパァ♪」
　めぐみんがジュカインとジュナイパーの頭を撫でると気持ちよさそうな声を漏らす。まぁ、もう一週間くらい一緒にいるしな。それにめぐみんやゆんゆんは二人に結構毛づくろいしてもらったり体を拭いてもらったりしてたからな。懐いても仕方ないが。
「仕方ない、わかっただけど午後から最低限の知識はもってもらうぞ。トレーニングは明日からだ」
「あの、私にも教えて下さい」
「ゆんゆんも？」
「はい。私ももっと、ブイちゃんたちのことを知りたいんです」
「ブイ～」
　そういって膝の上に載せたイーブイを撫でる、ゆんゆんの目は真剣そのものだった。
　しかし、教えるにしたってどうやって教えるか……。
　俺は腰につけてあるモンスターボールを外して、目の前に持ってきて顎に手を当てて考える。だが、そのボールはモンスターボールではなく、黄色のハイパーボールだった。
「アレ？このハイパーボール……。」
「どうかしましたか？」
　このボール、俺が預かりシステムから呼び出したボールじゃないな。いつの間に、手持ちに紛れ込んだんだ？中身はなんのポケモンだろう。

「ん？」
　このボール……震えてる？
　パカン！という音とともにボールが開き、中から一体のポケモンが飛び出してきた。
「ケテテッ！」
「うわっ！」
「えっ？」
「キャッ！」
「ブイッ!?」
「ジュパッ!?」
「ジュカッ!?」
　俺達は各々、ボールから飛び出したそれを見てそれぞれ驚いた反応をする。ボールの中から現れたのは不敵な笑みを浮かべる電気のような体のポケモン。そいつはすごい速さで空中を飛び回っている。
「カズマ、このポケモンは一体!?」
「ロトムだッ、いたずら好きなポケモンだから気をつけろ！」
　プラズマポケモン、ロトム。電気、ゴーストタイプ。様々な電化製品に取り付きフォルムチェンジするポケモンだ。
　久々にボールから出てこれたのが嬉しいのか、縦横無尽に空を駆け回る。するとロトムが俺めがけてものすごいスピードで迫ってくる。
「ちょ、まっ……！」
　ロトムは俺の静止を聞かずに突っ込んできた。
　俺はとっさに両手で顔を守り、目を瞑るが。
「……？」
　いつまでたっても、衝撃が襲ってこない。
　目を開くとさっきまで空を飛び回っていたロトムの姿が消えていた。だが、皆が俺を驚愕したような目で見ていた。
「ロトム、どこいった？」
「えっと……。」
「和真さんの胸ポケットに吸い込まれたように見えたんですけど……。」

「胸ポケット……？」
あっ、スマホ！
まさかと思い、胸ポケットにしまってあった取り出してみるとスマホが激しくバイブし、スマホが空中に浮かぶ。そして、丸っこい手足が生え、画面に顔が浮かぶ。
そして、その目が俺達を見定めるとくるりと回って、
『コンニチハ、僕ロトムロト！』
「「しゃ、喋ったー!!」」
これが俺達とスマホロトムの出会いだった。

ポケモン青空教室開講

「それでカズマ。このロトム？というポケモンは一体」
「こいつは体がプラズマ、要するに電気みたいなものでできててな、機か……じゃなくて、電気で動く道具に取り付いて悪戯をするっていうポケモンなんだが……。」
俺はめぐみんに説明をしながらロトムが取り付いたことでスマホロトムとなった俺のスマホを見る。今はゆんゆんが興味深げに見ている。
まさか、俺のスマホが剣盾に出てくるスマホロトムになるとは――――もっと早く気付けばよかったかも。
「でも、なんでこの子他の子と違って話せるんですか？」
「多分、スマホの中の情報を読み取ったんじゃないか？」
「――――聞きそびれてましたけど、あのスマホとかいうアイテムも何なんですか？ポケモン並に謎のアイテムですが」
めぐみんの質問はまぁ、もっともだろう。このファンタジーの世界にスマホなんてあるわけ無いし、アクア……様のおかげでアイテムボックスよろしくなんでも出し入れできる不思議アイテムに変化してたし、そういやずっと気になってたけど、ホームに預けてるポケモンってどこに転送されてるんだろう？
思考が脱線しているとめぐみんにくいっくいっと袖を引っ張られる。
「カズマ？」
「あぁ、いや……そうだな、我が家に伝わる伝説のアイテム的なものかな」
「ほうっ！どうりで便利なアイテムなわけです、伝説のアイテム……実にいい響きですね」
適当にごまかしておき、スマホロトムに近づく。
「それでロトム、お前なんでいきなり出てきたんだよ？」
『ピピッ！実は頼まれたんロト、ユーザーカズマ、君をサポートしてくれって』

「頼まれたって、誰に？」
『ピピッ！それは――「お～い！」――ロト？』
　ロトムに俺をサポートするように言った人物の名前を聞こうとすると、背後から声がかかり振り返るとそこには見慣れた銀髪の少女が見慣れない金髪の鎧をまとった女性を引き連れてやってきた。
「久しぶり、カズマくん」
「クリスじゃないか、久しぶり」
「町の外でテント張ってるって聞いて見に来たんだけど、ホントだったんだねぇ」
「ブイッ！」
「わっ！あはは！イーブイちゃんも久しぶりだねー」
　現れたのはいつだったか俺にお金を恵んでくれた盗賊の少女、クリスだった。イーブイはクリスの姿を確認すると俺の肩からクリスの肩に飛び移った。クリスは久しぶりにあったイーブイの毛並みを楽しむ。
　そんなクリスを他所に俺は隣にいる女騎士さんに目を向ける。
「ところでクリス、そちらの方は？」
「ああ、この子は私の友達の――」
「――ダクネスだ、クルセイダーを生業としている」
　そう名乗る金髪碧眼の女騎士。クルセイダーといえばナイトの上位職、さらにぴしっと固めた鎧姿も相まってザ☆女騎士って感じの女騎士だなぁって思ってみていると、彼女の視線がジュカインやジュナイパーに向いているのに気がついた。
「あれが最近噂になっている君の使い魔か」
「えっ、あっ、うん、そうですけど」
「しかし、噂に聞いていた馬のような奴と、巨大な岩のような体の奴がいないな」
「バンバドロとドサイドンのことですかね」
「そうか、そういう名前なんだな。しかし、あの二体もいいかもしれない……。」
　なんか、うちのポケモンたちを見ながらぶつくさ言ってるけど

……。
「カズマさん、カズマさん」
「カズマだよ。どうした、ゆんゆん？」
「こちらの方とはお知り合いですか？」
　あっ、そっか。クリスと会ったときはまだゆんゆんとめぐみんとは会ってなかったんだった。とりあえず、クリスに二人を紹介して、五人と二匹は腰を下ろす。ロトムの騒ぎから全員立ちっぱだったしな。ちなみにイーブイはクリスの膝の上だったりする。
「それでクリス、さっき俺に会いに来た風なことを言ってたけど、なんか用か？」
「そうそうっ！悪魔対策のためにここでキャンプしてるって聞いてね。私達も混ぜてもらおうかと思って」
「えっ？どうして？」
「どうしてって？悪魔なんて害獣この世にいちゃいけないし、すぐにでも駆除しなきゃいけないじゃん？でも、今は魔王軍の幹部に動きがあったとかで、王都から戦力を送れないらしいんだよね。そこで！強い使い魔を使役してるっていう君に協力したいなぁって」
「なるほど……ダクネスさん、ちょっと」
「ん？どうした？」
　俺はハイライトを失いやたら早口で話すクリスに一旦背を向けてダクネスさんに話しかける。
「何あの子、悪魔に親でも殺されたの？悪魔の話をしてるときの殺気半端なかったけど……！」
「いや、そんなことはないはずなんだがなぁ……。」
　ダクネスさんの言葉に耳を疑う。
　いやそうでもなきゃあんないい笑顔でこんな殺気出せないって！めぐみん達ビビって両手繋いで震えてるじゃん！ジュナイパー達もいつでも戦闘いけますっ！みたいな顔してるし、イーブイもさっきまでくつろいでたのにプルプルしだしてるじゃないか！
　ゴーストタイプもビビる顔してたよあの子！
「知っての通り、普段はあんなじゃないんだ。……思い当たる節があ

るとすれば彼女は熱心なエリス教徒だからだろう。エリス教は悪魔に対して過激だからその影響ではないだろうか？」
　エリス教って言えばこの国の国教になってるやつだよな。エリス様っていう女神様を崇めてるっていう。
　ただそれだけにしてはこう鬼気迫るというかなんというか……。
「いや、でもなぁ。多分俺たちだけじゃ勝てないぞあいつ」
「何弱気になってんのさ、君の使い魔と前衛職の私とダクネス、それにそっちの子たちアークウィザードでしょ？これだけの戦力が揃ってて、それでもだめなの？」
「あいつ俺のポケモンの攻撃を受けていってぇで済ませるんだぜ？下手に追い込んで報復に来られたらどうすんだよ。この街終わるぞ」
「それは……そうだけど……。」
「壁役なら任せてくれ、私はどんな攻撃でも受け止める自信がある」
「いや、タンクがいてもバランスのいいアタッカーがいないと」
「むぅ……。残念だ」
　よし。俺の正論でクリスが冷静に戻った。ダクネスさんも食い下がったがそれもバッサリ切り捨てる。そのまま追い打ちをかけるように「それに」と言葉を続ける。
「俺たちはこれからポケモン青空教室をやるんだ、どっちみちすぐは無理だよ」
「なにそれ？」
「聞いての通り、ゆんゆんたちがポケモンについて詳しく知りたいって言うからこれから、俺が基礎的なことを教えるんだよ」
『僕も手伝うロト！』
「なっ、なんだこれは？」
「そいつも俺の使い魔みたいなもん、あんがとロトム。確かにお前がいたほうがわかりやすいかもな」
　ロトムを初めて見るダクネスさんが驚くが、俺が短く説明する。昼飯食ってから大分たったし、そろそろ始めようかね。そう思って立ち上がろうとすると、クリスから声がかかった。
「ねぇねぇ、その青空教室私達も参加していい？やっぱ、もしものとき

はこっちから行かなきゃいけないと思うし、連携とかの参考にしたいんだよね」
「え？いや、別にいいけど。かなり長いぜ？半日かけるつもりだし」
「え？そんなにかかるんですか？」
　俺の半日発言にゆんゆんは面食らったようだが普通に考えてそれくらいはかかると思う。
「さっき言ったろ？バトルってのは奥が深いって、おまけにゼロから教えるとなると色々と話すことがあるんだよ」
　タイプ相性とか、特性、天候、他にも色々。おまけにここは現実。ゲームみたいにコマンドでどうにかなる世界じゃないから、そこらへんも考慮して説明しなきゃいけないからどっちみち半日はかかっちまう。
「頼んだのはこちらからですから文句はないですけど、そんなに多いんですか？」
「そりゃなぁ……俺は小さい頃から少しずつ知ってたけど、一気にってなると基礎知識だけでそれくらいは」
　流石にそれを聞いて若干うへぇって顔になるめぐみん。
　――あっ、そうだ。
「よし、めぐみん、ゆんゆん。全部終わったら、お前らにいいものをやる」
「いいもの？」
「あぁ、お前らが絶対に喜ぶものだ。これでやる気出るだろ」
「それは本当ですか？　紅魔族との約束を破ると恐ろしい目に遭いますよ？」
「え？そうなのゆんゆん？」
「いやいや、ないですよそんなこと！めぐみんも適当言わないの！」
　ゆんゆんが慌てて否定するのでどうやら冗談らしい。いや、紅い目が一瞬妖しく光ったからマジかと思った。そんなことを思っていると物欲しげな目を向けるクリスと目が合った。
「あっ、もちろん二人にも渡すつもりだよ」
「やった！でも結局いいものって何？」

「こういうのは内緒にしといたほうがあとの楽しみが増えるってもんなんだよ」
「ふむ、一理あるな」
全員納得したところでそろそろ始めようと思ったときロトムが俺の近くにやってきて小さな声で尋ねてきた。
『カズマ、一体何をあげるつもりロト？』
「ん？あぁ、それはな――――」
俺はロトムにしか聞こえないように口元を隠して上げるつもりのものを小声で教えてやる。すると――――
『えぇぇぇぇ!!アレあげちゃうロト!!?』
「あぁ、俺一人が持ってても仕方ないし。大事に扱ってくれるなら渡してもいいかなって」
『う～ん、たしかにロト』
「だろ？」
ロトムの返しに満足し、俺はいよいよポケモン青空教室を始める。

このパーティメンバーにタマゴを！

「「「やっと終わった～!!」」」
「はいおつかれさん、皆さんよく頑張りました」
五時間に渡るポケモン講座が終わり、皆はすっかりぐったりしている。
いやぁ、俺も流石に疲れた。ロトムの映像資料がなかったらもっとかかったかもしれないしな。
まっ、でも思ったより皆、真面目に聞いてくれて良かった。めぐみんはどうやらドラゴンタイプに一目惚れしたらしくやたら質問してきたけど。
「さて、それじゃ約束のものだロトム、例のものを」
『了解ロト！』
俺の合図にロトムは画面を操作してあるものをストレージから取り出す。実体化されたそれは一抱えほどあるケース。それが四つ地面に並べられている。俺はそのうちの一つの上蓋を取り外し中身をみんなに見せる。
それを見た皆が驚いたように目を見開いた。中に入っていたのは誰がどう見てもわかる――大きな卵だったからだ。
「カズマさん、これってもしかして……！」
「そ。ポケモンのタマゴだ」
ゆんゆんの言葉に答えると、めぐみんが恐る恐るといった様子でタマゴの表面に触れる。すると、それに反応したようにタマゴが一瞬ピクッと動く。その様子にダクネスさんは声を上げ、めぐみんはバッと手を引いた。
「動いたぞっ！」
「それに、ちょっと温かかったです。ホントにこれを私達に？」
「勿論、大切に育てることが条件だけどな」
「「ほわぁぁぁぁぁ!!」」
俺の返しにゆんゆんとめぐみんはキラキラした目でタマゴを見る。あれだけ長い間ポケモンについてはなされたら自分のポケモンが欲

しくなっても仕方ないから当然の反応だが。
　このタマゴも俺がゲーム時代に集めていたものだったりする。一時期タマゴ集めに没頭してた時期があってその時のものも反映されていたらしいのである。
　ただ、めぐみんやゆんゆんとは逆にクリスやダクネスさんは若干心配そうにして話しかけてきた。
「ホントにいいの？タマゴとはいえ命でしょ？そんな簡単に――――」
「だからだよ。俺だって全部のポケモンの面倒をまとめて見られるわけじゃないからな。なら知識を持ったパートナーを見つけて大事に育ててもらえるようにする。それがタマゴの中のポケモンにとって一番いいって思うしな」
「ひょっとしてさっきの青空教室はそのためのものか？」
「う～ん、もともと頼まれてたしやるつもりはあったんだ。んで、ちょうどタマゴをどうしようかとな思ってたのを思い出して。ゆんゆん達はあの様子ならちゃんと育ててくれそうだしな」
「――――ふ～ん、ちゃんと考えてるんだ」
　俺の説明に二人は納得してくれたようだった。
「それで、二人はどうする？育てる自信がないなら俺が引き取るけど」
「――――私も貰おうかな、めぐみんたちと一緒ってわけじゃないけど。私もあの話を受けたあとだと自分のポケモンほしくなっちゃったし」
「私も貰おうと思う。どんなポケモンが生まれるかが興味があるからな」
「それじゃ、タマゴを選んでくれ」
　俺に促されて四人は四つのタマゴケースを見る。そして、当然の質問を俺に投げかけてくる。
「カズマ！ドラゴンタイプ！ドラゴンタイプのポケモンのタマゴはどれですか!?」
「私はほのおタイプがみずタイプ、いや、鋼タイプも捨てがたいな……あの巨体に踏み潰されたら……くぅっ！」
「私はイーブイちゃんみたいな可愛い子がいいなぁ」
「あっ、私もできればブイちゃんみたいなこがいいなぁ……ところで

カズマさんこのタマゴってなんのポケモンのタマゴなんですか」
「あ～っ、え～っとね……。」
俺は聞かれたくなかった質問に明後日の方向を見る。
「えっと、まさかとは思いますが……。」
「なんのタマゴか忘れたとかじゃないですよね？」
めぐみんの指摘に俺は慌てて弁明する。
「いや、違うんだよ。一時期タマゴを集めるのに熱中しててちょっと数え切れないくらいになっちゃって」
「「「なっちゃって？」」」
「どれがどのタマゴかわかんなくなっちゃったな～って……。」
「「「……。」」」
「……ごめんなさい」
四人のジト目に耐えきれず、俺は流れるように土下座をして謝罪した。いやだって、ポケモンのタマゴって見た目が全部同じなんだもん！わからんわ！
正座をしている俺からタマゴに視線を戻す四人。
「全く、そうなるとどう選ぼうか……。」
「そうだねぇ……ねぇ、カズマくん」
「はい、カズマです。なんでしょう、クリスさん？」
「一応聞くけど、危険なポケモンとかが生まれてくる可能性は？」
「私はむしろそんなポケモンのほうがありがたいのだが」
――気のせいかな、さっきからダクネスさんの言葉が特殊性癖を予感させる不穏な発言に聞こえるのは。
「いや、その四つはそういうポケモンのタマゴじゃなかったはずだ。うっすらだけど覚えてる。タイプは確か、エスパータイプとはがねタイプ、あとドラゴンタイプだったかな……あと一つはノーマルタイプだった気がするな」
「なんでそこまで覚えててなんのポケモンか忘れるかな……。で、どれがどれかもわかんない感じ？」
「面目ないっす……。」
「考えても仕方ありません。私はこのタマゴをもらいます」

そう言ってめぐみんは一番最初に触ったタマゴを抱くようにして持ち上げる。
「いいのか？それがドラゴンタイプのポケモンとは限らないんだぞ？」
「なんなら、生まれてから選ぶって手もあるよ？」
「いえ、最初に触ったときビビッときたんです！この子こそ私の覇道をともに歩むパートナーだと！」
そう言って自信満々にタマゴを掲げるめぐみん。あそこまで自信満々に言われると本当にあのタマゴドラゴンタイプが生まれてきそう。
「となると残りは三つか」
「……私、このタマゴがいいです」
ゆんゆんはいつの間にか蓋を外したタマゴの一つに触れながらそう言った。
「あらら、ゆんゆんさんもなんかビビッときた感じ？」
「そんな感じですかね……なんかこうこの子って感じがしたような……。駄目ですかね？」
「ううん、いいよ。年下の女の子から掻っ攫うような真似、盗賊でもやんないよ。ね、ダクネス？」
「あぁ、そのタマゴはゆんゆんに譲ろう」
「ありがとうございます！クリスさん、ダクネスさん」
ゆんゆんは嬉しそうにタマゴを抱きしめる。
さて、となるとだ。
「あと二つか、クリスどっちにする。私は残った方でいいぞ」
「そっか、ダクネスとしてははがねタイプがいいんだよね？」
「そうだな……あの黒光りする鋼で殴られたり踏み潰されたした日には、くぅっ！」
「クリスさん、クリスさん」
「なに、カズマくん？」
流石にそろそろ感化できそうにないので、俺はクリスに耳打ちしてダクネスさんに背を向ける。

「……ひょっとして、あの人あっち系でやばい人？」
「う、う～ん、友達としては否定したいところだけど。残念ながら君の想像通りかなぁ」
あっ、やっぱそうなんすか……。
見た目が女騎士のそれだったから、ちゃんとした人なのかと思ったが、とんでもない爆弾を抱えていました。
なんか、こっちに来てから癖の強い子にばっか会ってる気がするな。コミュ障、爆裂狂、悪魔嫌い、んでドＭですか。
こう言っちゃなんだがどんな色物パーティ？
「だ、大丈夫だよ！たまに過激なことを言うけど、いい子ではあるから」
「……いや、そうなんだろうけど」
ここまで来たら付き合ってくしかないしなぁ。クリスと親友なあたり根はしっかりした人だと思うし。
「で、クリスはどれにするか決めたのか？」
「いきなり話戻したね。まぁ、うん。あたしはこの子にするよ」
そう言ってクリスは残った二つのタマゴのうち右のタマゴを選んだ。これで残りの左のタマゴはダクネスさんが抱き上げる。
「それでカズマ、このタマゴどうしたらかえるんですか？」
「あぁ、それはな。ロトム説明よろしく」
『過去のデータによると、温めると早く生まれるらしいロト』
「一応、毛布が一枚あるけど」
「それじゃ足りないですよね」
「となると、ロトム。メラルバだ」
『了解ロト！』
ロトムに頼んで、俺の預けているポケモンを呼び出してもらう。ロトムが抜けたからちょうど手持ちが六匹になるので手持ちの交換をする必要はない。
ロトムが画面を操作すると俺の手元にモンスターボールが現れる。
「出てきてくれ、メラルバ！」
「メラッ！」

俺がボールを放ると、現れたのはイーブイほどの小さな白い虫ポケモン。
「カズマくん、この子は？」
『そこは僕にお任せロト！
メラルバ。たいまつポケモン。ほのお・むしタイプ
全身がかなり暖かく角の先から炎を出し、天敵や獲物を威嚇する。はるか昔の人はメラルバは太陽から落ちてきたと信じていた』
ロトムが図鑑の内容を皆に説明する。進化形のウルガモスでも良かったのだが、テントの中となると進化前のメラルバのほうがいいと思った。
「この子の特性『ほのおのからだ』はタマゴを温めて孵化を促す力もあるんだ」
「なるほど、では早速。メラルバ、お願いできますか？」
「メラッ！」
俺達はテントの中に入るとメラルバを中心にタマゴを並べる。
「どれくらいでかえるんだ？」
「う～ん、めぐみんのタマゴはさっき触ったとき動いてたし、ちょっとごめんよ」
俺は他の三つのタマゴの表面に触れてみる。すると、三つともピクリと動きコロンところがる。
「あっ、こりゃすぐ生まれるな。」
『早くて明日、遅くとも三日ってところロトかね』
ロトムの予測は多分、あってるだろう。それにしてもいいタイミングでうまれそうだな。
「でも、メラルバとタマゴがあるといくらこのテント五人は寝れないんじゃないかな」
「え？二人も泊まる気？」
「そりゃ生まれたときどうすればいいのかなんて私達知らないし」
「あ～、それもそっか。わかった、俺は今日は外で寝るよ、作るものもあるし」
「作るものって、なんですか？」

「モンスターボールだよ、ポケモン持つなら必要だろ」
「あれってそんな簡単に作れるんですか？」
「流石に個人で作れるものってなると、ヒスイ地方ってところで昔使ってた簡単なものしか作れないけどな。ただなぁ……。」
「ただ？」
「ざいりょうになるたまいしっていうのが四つギリギリなんだよな」
　ぼんぐりに関しては沢山あったし、もともと植物だから栽培すれば増やせるがたまいしってなるとなぁ。
「それってどんなものなんです？」
「ロトム、画像を」
　ロトムの画面に紅い鉱石が映し出される。
「これ、マナタイトもどき、ですよね」
「マナタイトもどき？」
「えっと、これがマナタイトなんですけど」
　そういって、ゆんゆんは腰にさしてあったワンドを俺に見せる。その中心に紅い鉱石が埋め込まれている。ただ、たまいしには似てるがそれよりもいくらか色が澄んでる。そういえば、めぐみんの杖にも似たものがあったな。

「もともとは魔力を増幅するためのものなんだけど、純度が低すぎて使い物にならないマナタイトをマナタイトもどきっていうんです。多分それじゃないかな」
「街の外に結構ありますよ」
「この近くでも少し探せば多分あるだろう」
「ならよかった。心置きなく残りの分を使える」
　――ぶっちゃけタマゴはまだまだあるし。
「さぁて、残る不安は今日の晩飯か。よし、ガラルで世話になったカレーでも作るか」
　――その後、俺のリザードン級カレーを作ったカレーの腕が火を吹いたとだけ残しておこう。

この女神たちからお願いを！

夜、俺はテントの前で火を焚きながらモンスターボールのクラフトに精を出していた。すでにボールは三つ完成し、残りの一つを組み立ててる最中だ。

女性組とイーブイはテントの中で就寝中だ。ダクネス（さんはいらないというので呼び捨てになった）は付き合うと言ってくれたが、タマゴの傍にいてやれと言ったら納得してくれた。

「よしっ、これで完成！」

最後の一つを組み上げて、俺はその出来に惚れ惚れしていると、テントからタマゴの様子を見に行っていたロトムが出てきたので完成したボールを見せて聞いてみる。

「どうよ、この出来？我ながらいい感じだと思うんだけど」

『比較的普通のモンスターボールロト』

「お、お前なぁ……。」

自信満々で自作のモンスターボールを見せるが、ロトムの手厳しい評価にガックリとうなだれる。

「はぁ。で、タマゴの方はどうだ？」

『まだ生まれる様子はないロト』

「そっか……やっぱ明日以降になるんだろうな」

しっかし、何度思い出そうとしてもなんのポケモンのタマゴか思い出せないんだよな。それに最後の一つに関してはホントにノーマルだったっけ？なんか忘れてる気がするんだよなぁ。

――――忘れてるっていやぁ。

「そういや朝の話まだ続きだったな」

『朝の話、ロト？』

「ほら、誰かに俺のサポートを頼まれたとかなんとか」

『あぁ!!すっかり忘れてたロト!!』

ロトムはどうやら朝の話を思い出したらしようで、慌てだした。

だが、そのタイミングでスマホロトムがいきなり震えだした。画面を確認するとそこには着信『非通知』の文字が映し出されていた。

「って、着信っ!!?」
この電波もなにもないファンタジーの世界で電話がかかってくるってどういうことっ!?
一瞬、ゴーストタイプのポケモンの悪ふざけかなんかかと思ったが、今の手持ちにいるゴーストタイプってジュナイパーだけだし、そんな事するようなやつではないということは知っている。
ええ、怖……。リアルホラーじゃん。
「……。」
『とりあえず、出たらどうロト』
「――そうだな、このままなのも怖いし」
ロトムに促され、俺は恐る恐る通話ボタンに触れて、スマホロトムを耳に近づける。そして、声が震えそうになるのを必死に堪えながら電話の向こうの相手に語りかける。
「――も、もしもし?」
『もしもし、佐藤和真さんですか?』
俺の言葉に打てば響くように返ってきたのは澄んだ女性の声だった。てっきり、幽霊の声が返ってくるかと思っていたので一瞬ホッとした。
「えっと、どちら様でしょうか?」
『こんな方法で突然申し訳ありません。私、エリスというものです』
電話の向こうの女性はエリスと名乗った。
エリス?なんかすごく聞き覚えのある名前な気がする。
エリス、エリス、エリス……ん?　もしかして。
「ひょっとして、エリス教の御神体のエリス様?」
『はい、そのエリスです』
「……ざ、斬新ですね!女神様詐欺って!」
『本物ですよ!』
俺が半分冗談でそういうと、ものすごい勢いで否定の言葉が飛んできた。
あっ、やっぱそっすか……まぁ、この世界で電話がかかってくる時点で本物だろうってことはわかってたから自分の緊張をほぐすため

の小粋なジョークのつもりだったんだが。
　そんなとき、電話の向こうから聞き覚えのある声が聞こえてきた。
『プークスクス！エリスったらざまぁないわね。だから、私が話すって言ったのよ』
『先輩は黙ってくださいよ！そもそも誰のせいでこんなことしてると思ってるんですか⁉』
『なんですって⁉私の後輩のパッド女神のくせに生意気なこと言うんじゃないわよ！』
『それを言ったら戦争ですよ！』
　電話の向こうで激しい口論が聞こえてくる。え～、何なのこの状況……。
　というかさっきから聞こえてくるこのもうひとりの声って、
「アクア様、ですかね？」
　俺の言葉にスマホをひったくるような音がしたあとで息を切らしたアクア様の声が聞こえてきた。
『も、もしもし久しぶりね！えっと、カズマでいいかしら？』
「えっと、はい。その説は大変お世話になりました。今はポケモンたちと楽しく過ごさせていただいてます」
　まさか、また話すことになるとは思わなかったがとりあえずポケモンと一緒に異世界ライフを過ごさせてもらっているお礼を告げる。
『うんうん、随分楽しそうにやってるようで良かったわ。それでとは言ってはなんだけどあんたに頼みがあるのよね』
「頼み？魔王討伐以外のことでですか？」
『そうそう、実はあんたが連れてったポケモンについてなのよ』
　ポケモンについて？一体どういうことだろう。
　そう思っていると、また電話の向こうからまた口論が聞こえ「あぁ！私のアルセウスフォン返しなさいよ！」、「先輩のじゃありません私がアルセウスからもらったものです！」という声が聞こえてきたあとまたエリス様に代わった。
　――つうか、かなり聴き逃せないワードがあったような。
『もしもし、エリスです。ここからはアクア先輩に代わって私がお話

させていただきます』
「は、はぁ……。」
『ですが、その前に貴方の特典について補足説明することがあります』
補足説明？確かに俺のスマホはまだまだ俺の知らない機能が沢山あるから俺は真面目に聞き耳を立てる。
『まず、貴方のポケモンですが手持ちの六匹以外は天界つまり私達がいるここに転送されています』
「はいっ!?」
いきなり、すごいことをカミングアウトされたんですけど!?
え？俺のポケモンたち今天界にいるの!?
『安心してください、貴方のポケモンたちは私や天使たちが責任を持ってお世話をさせていただいていますので』
「そ、それは本当にありがとうございます」
『スマホを操作していただければいつでも呼び出せますので』
あぁ、確かにメラルバもジュカインたちも普通に呼び出せたし。
『ただ、それには制限がありまして』
「制限？」
『はい、強力な力を持つポケモン。所謂、伝説のポケモンと言われるポケモンたちの呼び出しは私達の方で制限させて頂いています。その理由はなんとなく察していただけると思いますが』
「……。」
まぁ、わからなくはない。なにせ伝説のポケモンは皆、その気になれば国さえ滅ぼしかねない力を持ち得ているからな。そんなポケモンと一緒にいたら確実に狙われるしな。
『ただ、緊急事態に関しては私やアクア先輩の判断で許可を出しますので。ただ、あるポケモン。このポケモンだけは絶対に地上に送るわけには行きません』
「ひょっとして……」
『はい。そうぞうポケモン、アルセウス。この子は私共のほうで管理させていただいています。今は私の眷属として扱わせていただいています。勝手で申し訳ないと思いますが』

「――わかりました、俺のアルセウスをどうか大切にしてやってください」
ぶっちゃけ泣きたいがこれは仕方ない……。なにせ、アルセウスの力は世界の創造、そしてその逆の破壊すらなしうる強力なものだから、神様が危険視するのはよく分かる。
『――言ってくだされば いつでも写真を送りますので』
「はい、ありがとうございます……。」
『――それで、ここからが本題なのですが』
「さっきのアクア様のお願いというやつでしょうか？」
『はい、そうなんです……はぁ、珍しくまともな案を出したと思ったら本人から未了承だったなんて』
『ちょっと、珍しくって何よ』
『……。』
『わ、わかったわよ。もう口出ししないからそんな怖い顔しないでよ』
また女神同士の口論が始まるのかと思ったが流石にエリス様もマジギレ寸前らしい。何も言わずにアクア様を黙らせた。
『佐藤和真さん、なぜ我々天界が地球で亡くなった人の魂をその世界に送っているか、その理由は覚えていらっしゃいますか？』
「えっと確か、魔王を倒すためと……こっちで殺された人がこの世界での転生を拒んでいるから、でしたっけ？」
『はい、そのとおりです。そして、それは人だけとは限らないのです』
「？」
どういうことかいまいちわからず、首を傾げる。
『例えば動物はモンスターたちに食い荒らされ、食物連鎖が崩れ、自然も蹂躙され不毛となった地がいくつもあります。そのことに関して天界では議論がありました』
「――それで、俺にどうしろと？」
『その議論に関してアクア先輩がある案を提出しました。『ポケモンによる自然環境の回復』というテーマで』
「えっ？」
あっ、やばい――話のオチが見えてきたんだけど。

それを察してエリス様がちゃんとした説明をしてくれる。
『はい、そうです。貴方がポケモンと一緒に連れて行ったタマゴ、そこから生まれたポケモンたちを野生に放ち、その特殊な力をによって土地の復活やモンスターの駆除と言ったことを期待するという案です』
「あぁ、やっぱり……。」
『案としては決して悪いものではないと思っていました。ですが、よりにもよってそれを行うはずの貴方に話を通す前に提出、そのまま申請が通ってしまい……私に泣きついてきたというわけです』
あ、エリス様心中お察しします。
悲壮感漂うエリス様の声音に心から同情を禁じえなかった。
「あの、エリス様。すっごい失礼なこと言ってもいいですかね?」
『……どうぞ』
「あの女神様、アホなん?」
『あんですって―!?』
俺の声が聞こえてたのかアクア様――――いや、もうアクアでいいや。アクアの怒声が響いてきて俺は慌ててスマホを耳元から離した。
『あんたねぇ!転生させて特典まで受け取っておいてアホ呼ばわりって何よ!』
「やかましいわっ、二つの意味でやかましいわ　!恩もなにもあんたのやらかしのせいで全部パーだわ!!」
いい加減に頭が痛くなってきたので俺もタメ口で怒鳴り返してやった。
「大体なぁ、あんたが俺に連絡も取らずにそんなことしたのが悪いんだろうが!」
『仕方ないじゃない!いい案が思いついたらすぐにでも誰かに聞いてもらいたくなるのが性ってもんでしょう!?』
「それでも報連相は基本だろうが、実行する人に言わないでどうやってその政策をするつもりだったんだ、この駄女神がっ!さらにいえば、なんかお前にはどっか別のところでありえないくらいの迷惑を被ってる気がするんだよ!」
『ああ、ついに言ってはならないことを言ったわね!!絶対天罰落とし

てやるから！』
「上等だ、やってみろ！そしたら一体誰がお前の言う良い案とやらを実行してくれるんだろうなぁ！」
『こんのぉ！待ってなさい、今から外界に降臨してその横っ面にゴッドブローを……。』
『――――アクア先輩』
白熱する口論の中、やたらとよく響く声が聞こえてきた。
背中に冷たい汗が流れる。
『え、エリス……。』
『いい加減にしてくださいよ、アクア先輩？』
『ご、ごめんエリス！も、もう邪魔しないから』
『もういいですよ、アルセウス『サイコキネシス』で放り出してください』
『キュイィィィィ!!』
『あっ、ちょま……！』
アルセウスの鳴き声のあと、なにかが空を切る音となにかが地面に叩きつけられる音がしたが聞かなかったことにしよう。
『さて、それでは佐藤和真さん』
「は、はい……。」
『誠に申し訳ありません、どうかアクア先輩の案に乗っていただけないでしょうか？』
「えっとぉ、そんな事言われても生まれたばかりのポケモンをいきなり野生に帰すってのは」
いくらポケモンって言っても生まれたばかりでモンスターに太刀打ちできるかわかんないし、それにモンスターに間違えられて討伐されるおそれだってある。いくらなんでも、そんな事がわかってて乗り気にはなれない。
そのことを説明すると、エリス様はまるでこう言われることがわかっていたように返してきた。
『確かにそのへんをアクア先輩は考えていなかったようですが、今朝貴方が打開策を示してくれました』

「俺が？」
『貴方は今朝、パーティメンバーにポケモンのタマゴを託しましたよね？』
「え？そうですけど、なんで知ってるんですか」
『へっ？そっ、それはですね、私の信者であるダクネスとクリスを通じてみせていただいたから、ですよ？』
「何故に疑問形？でも、それが打開策っていうのは一体？」
俺が疑問符を浮かべて質問すると「コホン」という咳払いのあとエリス様が答えてくれた。
『つまりですね、まずは貴方が信頼がおけるかたにタマゴから生まれたポケモンを託しそれを色んな所で触れ回ってもらう。これで、モンスターとして討伐される心配は軽減できるでしょう』
「あぁっ、なるほど！」
エリス様の説明に得心がいった。それなら確かにモンスターとして討伐対象にされることは減らせるかもしれない。
『生まれたばかりの子に関しては申し訳ありませんが、野生で生きていけるまでお世話していただくしかありませんが……。』
「それくらいなら、まぁ、なんとかなる、かな？」
『ふぅ、長々と説明させていただきましたが。どうでしょう、お引き受け願えないでしょうか？』
エリス様のすがるような声に俺は頭をガシガシとかく。さっきは、あんなこと言っちまったけど、アクアに感謝してるのは事実だしなぁ。
俺は意を決し、答えを返す。
「わかりましたよ。受けます、受けさせてもらいますよ。その話」
『本当ですかっ!?』
「はい、やらせてもらいますよ。その話。ポケモンがこの世界に受け入れてもらえるなら俺にも悪い話ではないので」
『ありがとうございますっ！アクア先輩をかばったことがバレたら私も処罰ものでしたので』
「あ～、世話のかかる先輩を持つと大変ですね」

『……はい』
「あっ、そういえばロトムをサポートに送ったのって」
『あっ、はい私です』
やっぱりか。
あっ、せっかく女神様と連絡できたんだし、もう一つ聞きたいことを聞いとこうか。
「すみません、実はこの間この世界にないはずのアイテムを見つけたんですけど」
俺はポケットに入れておいたキーストーンを月明かりに照らしながら、聞いてみる。
『あぁ……それですか、実はあの案が通ったことで世界にも若干の変化があったようで、その産物でしょうか。多分他にもあると思います』
「はぁ」
ってことは、メガストーンや進化の石もありそうだな。時間があったら探してみるか。
――どうやら互いに話すこともなくなったようで最後にエリス様が連絡のような話をする。
『それでは今回はこのへんで。また何かありましたら、連絡させていただきます』
「わかりました、こっちでもなんかあったら報告したほうがいいですかね？ってか、こっちからってつながるんですか？」
『はい、大丈夫ですよ。いつでも私のアルセウスフォンと繋がります』
「あのさっきから言ってるアルセウスフォンってもしかして」
『アルセウスがくれました』
「――一つ聞いていいですか？」
『何でしょうか？』
「持ちづらくありません？」
『え、ええ、まぁ……。』
ぶっちゃけＬＥＧＥＮＤＳのとき絶対持ちづらいって思ってたからなぁ。

『それでは今度こそ……あっ、その前に』
「？」
『今回のことは外界の混乱を防ぐために天界だけでの話ですので言いふらしたりしないようにお願いします』
「あぁ、はい。わかりました」
『それと、私と連絡ができるということも混乱を招きかねません。なので、このことは秘密ですよ♪』
「うっ！」
俺はあまりの可愛い言葉に胸を押さえた。
今の一言でわかったこの人絶対かわいい。だって、胸がトゥンクってなったもの、こんなことって少女漫画とか、恋愛漫画でしかないと思ってたがまさか現実でなるとは。
『あっ、あの……。』
「あっ、やべ……すみません、わかりました。内緒にします」
『それではカズマさん、おやすみなさい』
「はい、おやすみなさい」
その言葉を最後に通話は切れた。
通話が終わると同時にするりとスマホロトムが空中に浮かび、ロトムがすごく同情的な目で俺を見る。
『これから大変ロトね』
「……だな」
俺は疲れた声音で返し、苦笑いをした。
まさか、女神様からこんな大役を任せられるとは……悪魔騒ぎも終わってないし、前途多難だなぁ。

このパートナーの誕生に祝福を！

「…ズ……ん！…ズマくん！」
遠くから誰かの声が聞こえる。なんだろう、酷く聞き覚えがあるような気のする声だなぁ……。
昨日の夜、嫌ってほど聞いたような……。
「起きなさい、カズマくん！」
「んぅ？なんだよ、クリスか……。」
俺は重たい瞼を開き、俺を呼びかける相手を見る。そこには、どこか切羽詰まった様子のクリスがいた。
空を見るとまだ空がしらみ始めたばかり。時間で言えば、多分５時くらいだろうか？
「ブイッ！ブイッ！」
「あぁ……イーブイもおはよう……。」
「呑気なことを言ってる場合じゃないの！」
「なんなんだよ、こんな朝っぱらから……。」
『ん～、なんの騒ぎロト？』
どうやら座ったまま寝てしまったらしく、長い間変な体制を取ってたせいかけのびするだけで腰や背中からポキポキという音が聞こえる。
ついでに、俺が持ちっぱにしてたロトムも起きた。そういや、これからどうしようかとあれからロトムと二時間くらい相談してたんだっけか。そのまま寝落ちしちまったのか。
あくびをしながらまだぼやけた頭でこんな時間に叩き起こしてくれたクリスの方を恨みのこもった目で見てやる。だが、俺は次の一言で一もニもなく、目を覚ますことになる。
「タマゴ！タマゴが光ってるんだよ！」
「なにぃ!?」
『ホントロトッ!?』
「冗談言ってどうすんの！早く来て！」
『す、すみません（ロト）』

ものすごい剣幕でどなるクリスに俺たちは思わず敬語で答えてしまった。それだけ迫力があったのである。
クリス怖ぇ……。昨日とは別ベクトルで怖いよ。
俺はクリスに手を引かれて狭いテントの中に入ると、そこにはすでに起きた三人が発光しているタマゴを取り囲んでどうしたらいいかわからないという顔をしていた。確かに四つのタマゴが全て淡い発光をしていた。
「マジか……四つ同時かよ……。」
「カズマ！もしかして……！」
「あぁ、皆それぞれのタマゴを持ってテントを出るんだ。孵化が始まるぞ」
俺の指示を受けてめぐみん達はタマゴを抱えてテントの外に出てくる。テントの中では生まれたポケモン達が動き回れないし、万が一巨大なポケモンが生まれる可能性もあるからだ。
そして、二、三分がたち、タマゴ達が震えだした。そろそろだな。
「始まるぞ」
――俺の言葉を合図にしたようについにその時はきた。
ピシッ、という音が響きゴクリという喉を鳴らす音が聞こえる。淡かった光がまるで白夜のように眩しい光となり、俺達は一斉に目を隠した。
「カフッ！」
「ラ～……。」
「ダァン……！」
「チュッキプリィィィ!!」
そして、光の中から聞こえた産声に覆っていた腕を下ろすと、そこには４匹のポケモンがいた。
めぐみんが持っていたタマゴから生まれたのは小さなサメのようなポケモン、フカマル。
ゆんゆんが持っていたタマゴから生まれたのは瞳を緑色の髪で隠した白い子供のようなポケモン、ラルトス。
ダクネスが持っていたタマゴから生まれたのは鋼鉄の腕のような

姿をしたポケモン、ダンバル。
　そして、クリスの持っていたタマゴから生まれたのは小さなタマゴから手足と頭が生えたような可愛らしいポケモン、トゲピー。
「う、生まれたっ！生まれましたよっ！」
「なんか、感動しちゃうな……。」
「ほらほら、何してんだ。感傷に浸ってないで、早く自分のパートナーに話しかけてやれよ」
　俺に言われて四人はそれぞれのパートナーに近づく。
「やっぱり生まれたばかりだから皆小さいですね」
「そりゃあな、個体差はあるが生まれたばかりならこんなもんだろ」
「それで、この子たちはなんていう名前なんですか？」
『それじゃあ、それぞれのパートナーについて僕が説明するロト！』
　ゆんゆんの質問に答えたのはすっかり目が覚めた様子のロトム。昨日の青空教室ではポケモンの名前までいちいち教えてなかったからな。
　ロトムはまず、めぐみんの足元にいるフカマルを見る。
『まずはめぐみんからロト。
　フカマル　りくザメポケモン　ドラゴン・じめんタイプ
　洞窟の小さな横穴をねぐらにする。獲物が近づくと素早く飛び出し捕まえる。かつては熱帯の土地にいたが、寒さを避けるために地熱で暖かい洞窟で暮らす』
「ドラゴンタイプキターーーーーーー!!!!」
　ロトムの説明を受けためぐみんは歓喜の叫びを上げた。
　すげぇな、めぐみん。まさか本当にドラゴンタイプを引き当てるとは。マジで運命的なものを感じたというのを信じざるをえなくなるな。
「確かにドラゴンタイプだけど、フカマルはまだまだ幼竜の部類だ。最終進化のガブリアスまでの道は遠い。しっかり面倒を見るんだぞ」
「もちろんです！念願のドラゴンタイプ……さぁ、フカマル！貴方は竜王への道を私は爆裂王の道を！ともに邁進しようではありませんか！」

「カフッ！」
「なー……。」
「あっ、ちょむすけもおきましたか」
　めぐみんがポーズをつけて宣言するのに答えるようにおうよ！と言わんばかりに鳴くフカマル。しかし、そんなフカマルの視線にさっきまでの騒ぎで目が覚めたらしいちょむすけがテントから出てくる。フカマルの瞳がちょむすけを映すと、まるで獲物を見つけたジョーズのように目をキラーンと光らせ。
「ガブッ！」
「なー!?」
　ちょむすけに思いっきり噛み付いた。
「あっ、ちょっと！ちょむすけを噛んじゃだめですよ！その子も私の使い魔、貴方の仲間ですよ！」
『ピピッ、補足説明。フカマルには噛み癖がある場合があるロト。そのへんの躾もちゃんとするロトよ』
　ちょむすけにかぶりついたままのフカマルはめぐみんに任せて、次のペアを見る。ゆんゆんとその足元でキョロキョロと不安そうにあたりを見回すラルトスに。
『次はゆんゆんロト。
　ラルトス　きもちポケモン　エスパー・フェアリータイプ
　頭のツノで人の気持ちを感じ取る。明るい気分の人の前に現れるという。』
「へぇ～、この子もかわいいね」
「ラッ！ラル……。」
「えっ、どうしたの？」
　クリスが顔を近づけようするが、驚いてゆんゆんの足の後ろに隠れてしまう。ラルトスは臆病だったり、恥ずかしがりやな子が多いからクリスのことが怖いんだろう。
「どうやら、この子は恥ずかしがってるようですね」
「でもこの子、ゆんゆんさんの後ろに隠れるってことはゆんゆんさんには心を許してるってこと？」

「エスパータイプだからな。きっとタマゴの中からでもこの子を思ってるゆんゆんの気持ちが伝わったんじゃないか」
「そうなの？」
「ラ～♪」
　ラルトスはさっきまでの怯えた表情とは裏腹にゆんゆんからの質問には嬉しそうに答えた。
「そうだってさ」
「……良かったですね。いいパートナーができて」
「うっ、うんっ！……アークウィザードとしてもトレーナーとしても半人前の私だけど……これから、一緒に頑張ろうねラルちゃん！」
「ラ、ラルッ！」
　ラルトスの視線にまでかがんで目線を合わせて宣言するゆんゆんの心意気を感じ取ったのか、少しだけ張り切ってる様子でラルトスは答えた。うん、このコンビも問題なし。
　次はっと。
『次はダクネスロト。
　ダンバル　てっきゅうポケモン　はがね・エスパータイプ
　磁力の波長で仲間と会話する。群れになったダンバルは一糸乱れぬ動きをする。』
　ダクネスの近くでゆらゆらと浮いているダンバル。ダクネスはそのダンバルの姿を興味深げに眺めている。
「はがねタイプ。だが、なんというかなにかの腕のような姿をしているな……。」
「いいところに気付いたな、だけど、それは進化するまでお預けにしとこう。よかったな、お目当てのはがねタイプだぞ」
「あぁ、鋼鉄の塊……こいつに突進されたら私はどうなってしまうんだ……！想像するだけでクゥッ！」
「ダ、ダァン……？」
　ダクネスの変態発言にダンバルは完全に困惑している。まるで、「私のパートナー本当にこの人ですか？」と訴えているようだ。これから大変だな、ダンバル。

さて、残るは。
俺達ははしゃぐトゲピーを大事そうに抱きかかえるクリスに視点を向ける。
『最後はクリスロト！
トゲピー　はりたまポケモン　フェアリータイプ
殻の中に沢山の幸せが詰まっていてやさしい人に幸せを分け与えるという』
「フェアリータイプ……幸福の妖精か。ちょっとアタシのガラとは違うけどほんっとに可愛いね君～！」
「チュキィィィ！」
締まりのなくなった顔でトゲピーに顔を擦り寄せるクリス。まぁ、イーブイの反応からわかってたけどサバサバした見た目とは裏腹に可愛いものに目がないようだ。
「だけど、最後のタマゴはノーマルタイプではなかったんですか？」
「あぁ、思い出したよ。フェアリータイプは他のタイプと違ってあとから発見されたんだけどそれまではトゲピーのタイプはノーマルタイプとされてたんだ。それでうろ覚えだったんだよ」
「なるほど」
めぐみんの質問に俺は思いだした答えを返した。ただ、クリスは喜んでるし結果オーライだ。
四体ともパートナーはなついている様子ではある。大事に育ててくれればきっと良いパートナーになってくれるだろう。
「さて、と。自分のパートナーの確認も終わったところでモンスターボール配るぞー！」
俺は一人ずつ昨日の夜に作っておいたクラフト式のモンスターボールを配る。四人はそのボールと俺が腰につけているボールを見比べる。
「カズマさんのとは大分形が違いますね」
「そりゃ、かなり古いタイプのボールだからな。大きさを変える以外の機能は同じだから気にしなくていいぞ」
「どう使うんだ？」

「どこでもいいからボールをポケモンに当てるんだよ。そうすれば、ボールにポケモンが登録されていつでも出し入れができるようになる」
「ふむ」
　めぐみんは未だにちょむすけに噛みつこうとジーっとちょむすけを見ているフカマルの頭にコンッとボールを当てる。
　するとボールがパカッと開いてフカマルが光となって収まるとボールが閉じて、三回小刻みに震えると最後にポンッという音がなった。
「これでいいんですか？」
「ああ、あとは投げれば中のポケモンが出てくるようになる」
「こうですか？」
　俺に言われたとおりにボールを空中に放ると、中から光が飛び出しそれがフカマルの姿で現れる。そして、ちょむすけは再びフカマルに追い回されるのであった。
「ガブガブッ！」
「なーー!!」
「どこかで見た光景ですね」
「こめっこちゃんじゃない？」
「あぁ、なるほど……。」
「よくわからないけど、助けてやれよ」
　俺に言われてめぐみんは再びフカマルを止めに行く。
　隣でトゲピーを抱えてモンスターボールをジッと見る、クリスから質問が投げかけられる。
「これ、どういう原理？」
「え～っとだな……俺も詳しくは知らないんだが、ポケモンには元々小さなくなる特性？みたいなものがあってそれを応用したのがモンスターボールって話らしい」
「ずいぶんふわっとした説明だねぇ……まぁいいや。トゲちゃん、ちょっとごめんね」
「チュキィ？」

クリスもトゲピーの額にコツンとボールを当てると再び三回の揺れのあとポンという音がなってゲットが完了した。そして、ボールから出てきたトゲピーをまたさっきと同じように抱きかかえる。
気に入ったのかな、あの定位置。
ダクネスとゆんゆんもダンバルとラルトスをゲットして、またモンスターボールの外に出してやる。
その様子を眺めていると俺の肩にいたイーブイと足元にいたメラルバがフカマルとちょむすけの間に割って入る。
「ブイッ！」
「メラ」
「カフッ？」
「ブイブイ」
「ダァン」
未だにちょむすけを追い回すフカマルの前にイーブイとメラルバが出てきて、やめてやれと年下のフカマルにいっているようだ。そこで、ダクネスのダンバルも一緒にフカマルを説得している。
流石にイーブイとダンバルに言われてフカマルもちょむすけを追うのを諦めたようだ。
「チェッキィ！」
「あれ？トゲちゃん？」
「ラル？ラ～？」
すると、クリスに抱かれていたトゲピーが飛び出し。ゆんゆんの足にしがみつくラルトスの手を引いて、イーブイ達の元へ連れて行く。
「チェッキィ！」
「ラ、ラル……？」
「ブイブイ！」
「メラ」
「カフッ！」
「ダァン！」
「ラ、ラルッ♪」
トゲピーが輪に入れていなかったラルトスを連れてきたようだ。

イーブイたちもそれを受け入れ、楽しそうに話しかけている。その様子にラルトスも心を許したらしい。楽しそうに話している。
「なにかお話してますね」
「みんなコロコロしてて可愛いね」
「ああ、そうだな」
「よし、ロトム一枚頼む」
『お任せロト！』
その微笑ましい光景を眺めているうちにロトムに頼んで記念に一枚写真を撮ってもらう。その様子を見ていためぐみんがロトムの画面を覗き込み今撮った写真を興味深げに見る。
「カズマ、なんですかこれは？」
「スマホの機能の一つで、その時の光景を記録できるやつなんだが。そうだな、せっかくだし記念に一人ずつ撮っとくか？」
「さぁ、カズマ！かっこよくお願いしますよ！」
「ポーズとるのはええな、おいっ！」
いつの間にかフカマルの隣に立ってポーズを取っていためぐみんに思わずツッコミを入れた。というか、撮るの俺じゃなくてロトムだし。
――かくして、めぐみん、ゆんゆん、ダクネス、クリスの四人はパートナーを手に入れこれから良好な関係を気づいていくことだろう。はてさて、彼女らがこれから先どんな道を辿るのか。
続く――ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ――

この仲間たちと空の旅を！

「それで、カズマくん。今日はどうするの？」
昨日の残りのカレーを朝食にとっていると、クリスがたずねてきた。
ぶっちゃけ、タマゴから生まれたばかりのフカマルたちがカレー食えるのかとちょっと心配になったが、フカマルとダンバルはバクバク食ってるし、ラルトスとトゲピーはゆんゆんとクリスに手伝われながらちびちびと食べさせてもらっている。
俺は口元のカレーを拭いながら答える。
「もともと、昨日の青空教室はめぐみんとゆんゆんにバトルの練習相手をしてもらうためだったからなぁ。今日は俺のポケモンを使ってもらってバトルの練習にしようかと思ってたんだが」
「私はそれでいいですよ」
「私もそれでいいんですが、その前に今日の分の爆裂魔法を撃たなくては。フカマルにも見せたいですし」
「あっ、そうそうめぐみんちゃんに守衛さんから言伝があるんだっけ」
「言伝？」
めぐみんだけではなく俺とゆんゆんも耳を傾ける。
「爆裂魔法の音がうるさくて苦情が相次いでるって」
「はぁ……またですか」
「またってお前、前にも言われたのかよ……。」
「はい……今でこそカズマさんと私がいますけど、それまでは守衛さんに倒れたところを回収されてましたから……。」
あぁ、そりゃ守衛さんからしたら迷惑な話だわ……。
「めぐみん、後で謝りに行くぞ。一緒に行ってやるから」
「うっ……わかりました。じゃあ今日からの爆裂魔法はどこで撃てば……。」
撃たなきゃいいのでは、とは野暮なことは言わない。この数日でめぐみんの爆裂魔法への情熱は俺のポケモンへの愛に勝るとも劣らないのは接していてわかった。

――悪く言えば、言っても無駄だということななので無駄なことはしない。
そう思っていると、ダンバルが食事をしている様子をどうやって食べているのか観察していたダクネスが何かを思い出したように提案してきた。
「この街から少し離れたところに大きな湖がある。ちょうど、悪魔が現れる森とは反対方向だし、そこで撃ってはどうだ？」
「でもあそこまでは少しかかるよ？」
「カズマ、リザードンです！」
「いくらリザードンでもこの人数とポケモンを載せられるわけ無いだろ？」
「そうだよ、めぐみん」
「むぅ」
俺とゆんゆんに反論されて、めぐみんは悔しそうにしてふてくされたようにフカマルを撫でる。まぁ、めぐみんだけ載せてとっとと撃たせて戻ってくればいいんだが、それじゃあつまらないしな。
俺は食事の様子を記録していたロトムをちょいちょいと呼ぶとスマホの画面に指を滑らせる。
「用意しといてよかった」
俺がスマホを操作すると気球とかで人が乗るような籠が２つ現れる。人が３人くらい入っても余裕そうな大きさのものだ。ついでに、ホームの手持ち入れ替え画面で二つのボールを入れ替える。
「なんですかこの籠は？」
流石にもう何度も見ているせいか、スマホから物を取り出しても驚かなくなった俺のパーティメンバー。
俺は食べ終えたカレーの皿を近くにおいて、立ち上がり籠のそばに立って呼び出したボールを空中に放る。
「出てきてくれアーマーガア！」
「――ガァ!!」
「うっわ、おっきぃ！」
現れたのは二体の巨大な黒い鳥ポケモン、アーマーガアだ。クリス

もその大きな体に目を丸くしている。
　そして、初めて見るポケモンが現れたということではりきるのがうちのポケモン図鑑だ。
『僕の出番ロト！
　アーマーガア　カラスポケモン　はがね・ひこうタイプ
　ガラル地方の空では敵なし。黒光りする鋼の姿は相手を威圧し恐れさせる。飛行能力に優れていてとてもかしこいためガラル地方で空のタクシーとして活躍している。』
「この翼、鋼なのか？こんなポケモンもいるのか」
　はがねタイプが気に入ったらしいダクネスがアーマーガアの姿を興味深げに見ている。
「コイツラにこの籠を持ち上げてもらっていこう、俺はリザードンに乗ってくから二人ずつ乗ってもらって連れてってもらおう。お願いできるか、アーマーガア？」
「「ガァ！」」
　俺の問にアーマーガア達は自信満々の様子で答えてくれた。
　そして、いつの間にかカレーを食い終わったらしいゆんゆんとラルトスが籠の方をみている。
「カズマさん、もしかしてこれもテントと同じで？」
「いいや、俺ってゆんゆん達と組む前は結構宅配の依頼とかしてたんだよ。それに使えるように作ったんだ。かなり重い荷物も運べるように頑丈に作ったから安全性は問題ないはずだ」
　リザードンの背中に乗せられないような荷物を頼まれたとき、これに乗って行けたらと思って用意しておいた。本物のアーマーガアタクシーと同じってわけには行かなかったけど、なかなかのものにはなったはずだ。
「だけどホントに人を乗せられるの？」
「ロトムも言ってたけどアーマーガアはガラル地方ってところだとアーマーガアタクシーって言って、人を運ぶ役目を担っているくらい飛ぶ力が強いんだ。だから、一体で二人くらいは乗せて飛ぶことができるはずだ」

俺の説明にクリスはへぇと言って納得した様子だ。
「それじゃ、皆食い終わったし食器を片付けて出発するか」
～～～

ありません。そんな事ができるのはそれこそ空を飛べるモンスターや悪魔、そしてこの子達のようなポケモンくらいです」
「風の魔法で落下を軽減させることくらいはできるけど、空を飛ぶっていうのはちょっと……。」
ゆんゆんの答えにふ～んと納得する俺。言われてみれば、リザードンに乗ったときも二人は随分驚いていた気がするな。そこからは皆、初めての空の旅で小さく見える地上を見下ろしていた。
それから約２０分ほど、空の旅を楽しみ、景色を楽しんでいると目的の湖が見えてくる。
「おっ、あれがダクネスの言ってた湖か？」
「あぁ、しかし、空から見るといつもと違って見える」
多分ダクネスが言っているのは俺たちが湖の真上を飛んでいるから太陽の光が正面から反射しているのが見えて、水面がキラキラと光っていることだろう。こんな光景は空でも飛ばないと見れないものだからな。
ロトムに言って、一枚撮っておく。
「そろそろ降りるぞ！」
「「ガァ！」」
俺が声を上げて合図を送ると、リザードンとともに先導して籠が倒れたりしないようにアーマーガアたちがゆっくりと下降していく。
無事着陸して、籠から四人が出てくる。
「どうだった、初めての空の旅の感想は」
「あぁ、滅多にできない体験だったからとても楽しかったよ。もし、落ちてしまったらと思うとハラハラして……悪くなかった！」
「ダァン……。」
また変態発言をしようとしたダクネスの隣でダンバルが「うちのがすみません」と言わんばかりにゆっくり頭を下げた。ホントに大変だなダンバル……。
「私も楽しかったよ。この国でもさっきカズマくんが言ってたアーマーガアタクシーっていうのが流行るといいのにね」
「チュッキィ！」

クリスがアーマーガアの頭を撫でながら、そんな事をいう。トゲピーは送ってくれてありがとうと言っているようだ。
アーマーガアの進化前のココガラのタマゴも確か結構あったと思うから、根気よく育てればできなくはないと思うけど、国とかが認めてくれなそうだな。実際あったら便利なんだろうけど。
「さて、ここならぶっ放しても街には迷惑はかからないだろう」
「ありがとうございます、カズマ。フカマル、よく見ているのですよ、我が紅蓮の爆炎を！」
スイッチが入ったらしく、マントをバサッと翻して杖を構える。俺もゆんゆんもしょうがないなぁって顔でそれを見守る。
そして、湖の中心に何重もの紅い魔法陣が展開される。
『黒より黒く、闇より暗き漆黒に我が真紅の混淆を望みたもう、覚醒の時来れり。無謬の教会に落ちし理、無行の歪みとなりて現出せよ』!!」
やたらと厨二心をくすぐる詠唱の後に杖から光が放たれる。
『エクスプロ――ジョン』!!!」
視界を埋め尽くすほどの紅い閃光の後に遅れて聞こえてくるドゴオオオオオオオンという凄まじい音と風圧が辺り一帯に拡散する。
「相変わらず凄い威力だな……。」
いい加減慣れたので感心しながらその光景を見る、俺。
Z技やダイマックス技に勝るとも劣らない爆炎。いつかリザードンのキョダイゴクエンと威力を比べてみたいもんだ。
「ふふふ、どうでしたフカマル？我が爆裂魔法は？」
「カフッ！カフッ！」
「そうですか、そうですか。貴方にもわかりますか、この魔法の素晴らしさを」
地面に突っ伏しためぐみんの隣で余程あの爆裂が気に入ったのか、フカマルが飛び跳ねている。なんというか、ホントに良いパートナーになりそうだよ、この二人。

「さて、それじゃ始めるとするか」
「ようやくですか」
めぐみんが爆裂魔法を放って三十分くらいがたった。魔力切れで倒れてためぐみんも動けるようになり、せっかくだから、ここでバトルの練習をしようって話になった。
俺は用意しておいた、二つのモンスターボールを取り出して中のポケモンを呼び出す。
「ジュラッ！」
「ウ～ラ～」
現れたのは二体のドラゴンタイプのポケモン。一体は体が磨き上げられた鋼のような体のドラゴンジュラルドン。もう一体は巨大な頭と発達した足を持つポケモンウオノラゴン。
「ジュラルドン、ウオノラゴン久しぶりだな」
「ジュラ～！」
「ウ～ラ～！」
「……ウオノラゴン、噛みつくのやめてくんない？」
二人に話しかけると、俺は背後からウオノラゴンに頭をガブッと噛まれる。う～ん、痛くないから甘噛みなのはわかるけども。因みにこの二人なのはせっかくガラル出身のアーマーガアがいるのだから同じガラル出身のこの二体にお願いした。
「ふたりとも少し頼みがあるんだけど」
「ウ～ラ？」
「ジュラ？」
「少しの間、どっちかがこの子のパートナーになって欲しいんだ」
「め、めぐみんですよろしくおねがいします」
「ウ～ラ～」
「ジュラ」
めぐみんが挨拶をすると、二人共頷いてくれる。妙に恐縮している様子だが、多分なにげに俺の持ってるドラゴンタイプのポケモンを見

るのは初めてだからだろう。
「んじゃ、めぐみん。好きな方を選んでくれ」
「と、言われましても……ロトム、説明お願いします」
『お任せロト！
ジュラルドン　ごうきんポケモン　はがね・ドラゴンタイプ
磨き上げた金属のような体は軽い上に硬いが錆びやすいのが欠点。
ウオノラゴン　かせきポケモン　みず・ドラゴンタイプ
ずば抜けた脚力と顎の力で古代では無敵だったが獲物を取り尽くして絶滅した。』
「ふ～む……。」
ロトムの説明を聞いてもイマイチどちらを選ぶか決めきれない様子、そこに。
「カフッ！カフッ！」
「どうしましたフカマル？」
「カフッ！」
「ジュラ？」
フカマルはジュラルドンを指さして、まるでこっちにしとけと言っているようだ。
「なぜ、ジュラルドンなのですか？」
「カフッ！」
「ウ～ラ？」
フカマルは自分の口と、未だに俺の頭を噛み付いているウオノラゴンを指差す。その様子を見ていて、クリスがなにかに気づいたように近づいてきた。
「もしかして、自分とキャラが被ってるって言いたいの？」
「カフッ！」
「どうやら、あたりみたいですね……。ふぅ、わかりましたよフカマル。ジュラルドン、お願いできますか？」
「ジュラ！」
「となると、俺はウオノラゴンか。よろしくな」
「ウ～ラ～！」

俺がウオノラゴンにそう言うと、ウオノラゴンは頭を持ち上げて威勢のいい雄叫びを上げる。
だが、忘れてはいないだろうか？俺まだウオノラゴンに噛まれたままなんだけど。
「「「あ……。」」」
「あ～れ～……。」
皆の間の抜けた声が聞こえた。
その視線の先で、ウオノラゴンの口からスポッと抜けた俺の体は放物線を描きながらドボンという音を立てて湖にダイブした。
「「「か、カズマ（さん）（くん）ーーー!!」」」
「ブイーーーー!!」
～～～

「ジュウラァ!!」
　めぐみんの指示を受けて、ジュラルドンの体から黄色い電撃が放たれる。
「ウオノラゴン、『ドラゴンダイブ』で避けろ！」
「ウ～ラァ！」
「「と、飛んだっ！」」
　ウオノラゴンは体に竜のオーラを纏いながらその強靭な脚力で空中に飛ぶ。その姿に観戦していたクリスたちが驚く。そして、そのままジュラルドンめがけて凄まじい勢いで落下する。
「ジュラルドン、『ラスターカノン』です！」
「ジュラッ！」
　銀色の光線が落下してくる、ウオノラゴンに向かって放たれる。
　二つのエネルギーのぶつかり合いで爆発とともに、二体が弾かれあう。
「――やるな、あの土壇場で『ラスターカノン』を選ぶとは」
「どのみちよけれませんからね、ロトムから『ラスターカノン』の追加効果を聞いておいて正解でした」
『ラスターカノン』の追加効果、それは相手のポケモンの特防を下げること。特殊アタッカーのジュラルドンにとっては決め手の前の下準備になる。
　大技を撃たれる前に決めるか……。
「『エラがみ』！」
「近づけさせませんよ、『りゅうのはどう』！」
　ジュラルドンが放った『りゅうのはどう』が『エラがみ』の構えを取って駆け出していたウオノラゴンに直撃する。
「ウ～ラ～……。」
「ウオノラゴン！」
「確か、ドラゴンタイプにドラゴンタイプの技って――」
「効果は抜群だったはずだ、しかもさっきの技で耐性を下げられたということは結構痛いぞ。……羨ましい」
「ダンッ！」

「痛っ！なにをするんだ、ダンバル」
視界の端でいい加減にしろって様子のダンバルがダクネスを折檻しているが、今はバトルに集中しないと。
「ウオノラゴン、まだ行けるよな？」
「う、ウラッ！」
一瞬ふらついたが、ウオノラゴンはすぐにしっかりと立ちジュラルドンを見据える。それを見た、めぐみんが勝負をつけるために大技を仕掛ける。
「一気に決めますよ！ジュラルドン、『りゅうせいぐん』ですっ!!」
「ジュゥラァ!!」
ジュラルドンが口に溜めたエネルギーを上空に向かって放つと、空中で無数の隕石となって降り注ぐ。
ドラゴンタイプ最強の技『りゅうせいぐん』は使うたびに威力が落ちるため、連発時の威力は期待できない。ここで勝負をつけるきだな。
だけど、ピンチこそ最大のチャンス！
「ウオノラゴン！りゅうせいぐんを足場にジュラルドンまで駆けろ！」
「なっ!?」
「ウラッ！」
俺の指示にめぐみんは驚愕し、目を見開く。
ウオノラゴンは俺に言われたとおり降り注ぐ『りゅうせいぐん』を足場に一直線にジュラルドンに向かっていく。ウオノラゴンの脚力があってこそなせる技だ。
「すごいっ……！」
「それってありなんだ……。」
ゆんゆんとクリスもあの巨体で身軽に飛び回る姿に驚きすぎて若干唖然としているが、その間もウオノラゴンは走り続け、ついにジュラルドンの間合いに入る。
「『けたぐり』だ！」
「ウラッ！」

「ジュ、ジュラァ!!!」
　ジュラルドンはステータスの中で防御が群を抜いている。だが、かくとうタイプの技である『けたぐり』ははがねタイプのジュラルドンには効果抜群だ。さらに言えば、『けたぐり』は相手が重ければ重いほど、その威力が高まる。ジュラルドンはその見た目からわかるとおり重量級のポケモンだ、よってそのダメージは凄まじい。
「ジュラルドン!?」
「『エラがみ』で決めろッ！」
「ウーラッ!!」
「ッ!?ジュラルドン、『十万ボルト』です！」
「ジュラッ……！」
　ウオノラゴンはその巨大な口を大きく開いて水の力をまとったままジュラルドンに向かっていく。めぐみんはとっさにジュラルドンに指示を出すが、ジュラルドンが技を出すより前にウオノラゴンの牙がジュラルドンに届いた。
　そのまま爆発して、ジュラルドンは倒れた。
「ジュラァ……。」
『ジュラルドン、戦闘不能。よって勝者ウオノラゴンとカズマロト！』
「やったな、ウオノラゴン」
「ウ～ラ～」
「……だから噛むのやめてね」
　ウオノラゴンに労いの言葉をかけるとまた頭をガブッといかれた。ハハハ、これじゃめぐみんのフカマルのこと言えないなぁ。しかたないので、噛まれたままジュラルドンの側にいるめぐみんのもとへ向かう。
「ジュラァ……。」
「すみません、ジュラルドン。私が未熟なばかりに……。」
「そんなことはない」
「カズマ……。頭かじられながら言っても説得力ないですよ」
「うっさいわ！……少なくとも、お前の指示にあまりミスはなかった。ただ、やっぱり慣れが足りなかったな。だけど、才能があるよ、お前

は」
「カフッ！カフッ！」
いつの間にか近くに来ていたフカマルもそうだというように鳴く。その様子にめぐみんも顔を上げた。ぶっちゃけ、『りゅうせいぐん』が一発でも当たってたらやばかったし。
――このあとはジュラルドンを回復させて街に戻ることになったので少しの休憩を取ることになった。
「カズマ、最強のドラゴンタイプってどんなポケモンなんですか？」
皆できのみをおやつにかじっていると、めぐみんから唐突にそんな質問が飛んできた。相変わらずドラゴンタイプ好きだなこいつ。
俺は少し考える素振りを見せたあと、すぐにあのポケモンたちだなと当たりをつける。
「そうだな、やっぱりまず最初に名があがるのは伝説のポケモンだろうな」
「伝説のポケモン!?なんですか、その心を惹かれるフレーズは！」
テンションを上げるめぐみんだけじゃなく、ダクネスやクリス達も俺達の話に耳を傾けてる。
「俺が旅をしてきた地方にはそれぞれ伝説に登場するポケモンがいるんだ。その中の一つにシンオウ地方という場所に伝わる神話にドラゴンタイプのポケモンがあらわれるんだ」
正確には俺の分身が、なんだが、今はそのへんはいいだろう。最近ますます、ゲーム世界の記憶が流れ込んできてその時の光景がはっきり思い出せるくらいになってきたし。これもエリス様の言っていた世界の変化にともなうものなのか――この間聞いときゃよかったな。
「時を司る神と呼ばれしポケモン、ディアルガと空間を司る神と呼ばれしポケモンパルキア」
「ディアルガと……。」
「パルキア……。」
「神話において、シンオウの時間と空間は彼らが作ったとされている」
『では、僕から説明させてもらうロト

ディアルガ　じかんポケモン　はがね・ドラゴンタイプ
時間を操る力を持つ。シンオウ地方では神様と呼ばれ神話に登場する。ディアルガが生まれたことで時間が動き出したという伝説があるポケモン。
パルキア　くうかんポケモン　みず・ドラゴンタイプ
空間を操る力を持ちシンオウ地方の神話では神様として描かれている。並行して並ぶ空間の狭間に住むと言われている。』
ロトムの画面に青い体に鋼のような爪を持ち、胸にダイヤモンドのような宝石のあるドラゴンと白い体に桃色のラインがあり肩にパールのような宝石が埋め込まれているドラゴンが映し出される。
「これがディアルガとパルキアですか……。」
「なるほど、神と呼ばれるだけある」
「はい、なんかこう……神々しいですよね」
「そうだねぇ」
ロトムの画面の映し出された姿を見ながら、各々の反応を見せる面々。なぜか、クリスの反応だけが淡白だった気がするが、まぁいいだろう。ピンときてないだけかもしれないし。
そう思っていると、またもやめぐみんから質問が投げかけられた。
「それで、カズマ。このディアルガとパルキアはどちらが強いんです」
「あぁ～……そうだな。めぐみん、この二体に関してはどちらが強いとかそういう上下関係はないんだ」
「？」
「時間と空間、それら二つはどちらか一方が欠けることは決してあってはならない。故に彼らの力は均等でなければいけないんだ」
「えっと、よく意味が……。」
「う～ん、脱線するし長い話になるがいいか？」
「はい、構いません」
めぐみんに許可をとってからどこから話すか思案する。
――――うん、やっぱりあそこからかな。
「往古来今（おうこらいこん）　謂之宙（これちゅうという）　四方上下（しほうじょうげ）　謂之宇（これうという）」
「――――え、えっと、どういう意味ですか？」

ヒスイ地方でコギトさんに教わったことをそのまま伝えようとしたが、どうやら難しすぎたらしくゆんゆんたちにもっと詳しく説明をしていく。
「現在を含む未来、すなわち時間を宙と呼び。
前後左右上下の全方向、すなわち空間を宇と呼ぶ。
時間と空間、二つがそろって宇宙という時空が形成されているんだ」
「つまり、私達が今いる場所がパルキアが司る空間で――――」
「――――今流れている時間を司るのがディアルガということですね」
「そして、その両方が揃って世界を形成しているということか」
『クリス、めぐみん、ダクネス大正解ロト』
ロトムが三人を称賛すると、三人は仲良くハイタッチをする。
そして、俺はゆっくりとこの話の肝である結論を述べる。
「時間と空間、それら二つは世界を作る重要な要素だ。よって、どちらか一方の力が強かったり、よわかったりすると、世界は乱れ最悪滅びてしまう可能性があるんだ」
「……だから、どちらの力も同じでなければならない」
「そうなるな」
――――一つ、俺は四人に質問を投げかけてみた。
「さて、四人とも。俺から一つ質問だ、ディアルガは時間をパルキアは空間を創った。では、その中で生きる人々の役目とはなんだと思う？」
「また難しい問題を出してきましたね……。」
「ゆんゆんはどう思う？」
「えぇ!?私ですか……？」
さっき質問に答えられなかったゆんゆんに尋ねるが、急に俺に話を振られてゆんゆんはあたふたしてしまっている。すると、ラルトスがそばに彼女の足に触れる。
「ラルちゃん？」
「ラ～ル」
まるで、自分のパートナーを落ち着かせるような姿に俺は目を見開

く。まだ、生まれてから一日も経ってないのに、もうここまで信頼関係を築いているとは……。
　そういえば、イーブイもゆんゆんとはすぐ仲良くなってたし。ゆんゆんはもしかしたら、ポケモンに好かれやすい質なのかも……。
　ゆんゆんはラルトスを胸に抱いて、意を決したように俺に質問の答えを返してきた。
「……多分、その世界をより良くするため……だと思います」
「ほう、ゆんゆんにしては興味深い答えですね。その心は？」
　何故か上から目線のめぐみんだが、その顔は真剣なので馬鹿にしている様子はなさそうだ。クリスとダクネス、フカマル達も真剣な顔で聞き耳を立てている。
　ゆんゆんはキラキラと太陽の光を反射する湖を瞳に映しながら答えた。
「だって、折角神様がくれた世界ならもっといい世界にしたいじゃないですか」
「ぷっ……なんですかそれ？」
「な、なによ、めぐみん！」
　ゆんゆんの答えに吹き出して笑うめぐみん。だけど、それは嘲笑だとかそういう陰気なものではなく寧ろ清々しいものだ。
「まぁまぁ――ゆんゆん、ぶっちゃけこの質問に答えはないんだ」
「ええ!?」
「そりゃ、神様の考えなんかそうそうわかるもんじゃないしな。でも、俺の考え自体はゆんゆんと同じだ」
「ホッ……。」
「そして、俺なりの世界を良くする方法がこいつらだ」
「ブイッ！」
「ここことは違う、遠い遠い場所ではポケモンが人や自然を支えている地がある。この場所もそんな世界になって欲しいって思ってる」
　――元々はエリス様のお願いだったが、あのあとロトムと話しているうちに、段々この世界でポケモンが生きているのを想像するのは……結構楽しかった。というか、ワクワクした。

そう。あのとき、俺はこの世界で夢を見つけたんだ。
「ある人は言っていた、『すべての命は別の命と出会い、何かを生み出す』。
――世界には変化がある。良い変化もあれば、悪い変化もある。俺はポケモンたちが良い変化としてこの世界に受け入れてもらえたらって……思ってる」
「「「……。」」」
「って、ちょっとカッコつけすぎたかな？」
ガラにもなくあつく夢を語ったせいで、話し終えたら段々恥ずかしくなってきた。頭をかきながら皆の方を見ると、皆が感心した様子でうんうんと頷いていた。
「カズマ、貴方も私に負けないくらいの野望を抱えていたのですね」
「夢といえ、人聞き悪い」
「まぁまぁ、いい目標なのは変わらないんだから」
「あぁ、素晴らしい考えだと私は思うぞ」
「わ、私もできることがあるなら言ってくださいね。ね、ラルちゃん？」
「ラ～！」
「～～～ッ！そ、そろそろ、帰るぞ。人が増えたから買い足しもしなきゃいけないし」
なんか皆が俺に温かい視線と言葉を向けてくるので俺はアーマーガアたちのもとに向かう。
その背後で四人と数匹が顔を寄せ合っている。
「照れてますね」
「照れてるな」
「照れてるねぇ」
「照れてるん……ですかね？」
『心拍数が上がっているのが確認できたロト、間違いなく照れてるロト』
「ブイッ！」
「カフッ！」

「ラル……。」
「ダァン」
「チュッキィ！」
「おいっ、置いてくぞ！」
「「「あっ！ちょっと!!」」」
コソコソ話してるつもりだろうけど、丸聞こえなんだよ！イーブイとロトムまで何してんだ。
俺がリザードンに跨ったのを見て本気で置いてかれると思ったのか、慌ててアーマーガアの籠に乗り込んでいった。

このパーティで悪魔討伐を！

湖をあとして三十分程、途中寄り道などをして景色を楽しみアクセルの街に戻る俺達。

やがて、眼下に見慣れた街の門が見えるが、そこでは数十人の、服装からいって冒険者であろう人間たちがごった返していた。

「――なんの騒ぎだ？」

門の前の連中のことが気になりめぐみんたちを乗せたアーマーガアたちを待機させ、先行してリザードンとともに地上に降りると、何人かの冒険者は警戒したが、ほとんどの冒険者はこの街に来てからポケモンのことで目立っていた俺のことを知っていたので周りの俺のことを知らない冒険者に警戒を解くようにいう。

そんな彼らの体はところどころ汚れていたり傷ついている、その中で立派な鎧をつけた一人の青年がボロボロの状態で冒険者達に運ばれていた。近くには彼の仲間と思わしき女の子が二人気を失っている彼に必死に呼びかけていた。

「これはいったい……。」

「カズマさん！」

「ッ、ルナさん？」

呼ばれた方向に目を向けるとそこには俺がギルドでよく世話になっていた職員、ルナさんが慌てた様子で俺の傍に駆け寄ってきていた。

「ルナさん、この騒ぎは……。」

「実は……。」

慌てて近づいてきたルナさんは俺の質問に息も絶え絶えに答えてくれた。

どうやら、しびれを切らした冒険者たちは高レベルの上級職『ソードマスター』の青年を中心に例の悪魔の討伐隊を結成し、正午――ちょうど俺たちが湖にでかけたときの話だ――に討伐に出たらしい。だが、結果は見ての通り、惨敗だったそうだ。

討伐隊は命からがら例の悪魔、ホーストから撤退したらしい。ただ

し、最前線で戦ってた『ソードマスター』の青年は重傷を負ったということだ。
俺はその話を聞くと、腰のホルダーから一つのボールを手に取り宙に放る。
「――ハピッ！」
中から出てきたのはさっきバトルしたジュラルドンとウオノラゴンの回復のために手持ちに加えておいた、ピンクの体に白いレースのような体毛がナース服のように見えるポケモン、ハピナスだ。
俺とハピナスは冒険者の波をかき分けて例の『ソードマスター』の青年のもとまで走る。
「悪い、少しどいてくれ」
「ちょ、ちょっと！キョウヤに何を――――！」
「イーブイ！」
「ブイッ！」
「キャッ！」
「何この子ッ!?」
俺が青年の側によると仲間らしい女の子たちは急に現れた俺に不審な眼差しを送り、青年から遠ざけようとするが、ことは一刻を争うのでイーブイに頼んで二人を遠ざけてもらう。
「ハピナス、『いやしのはどう』だ」
「ハピ～！」
ハピナスは全身からまばゆい波動を放つ。すると、ボロボロだった青年の体がみるみる綺麗になり、傷がふさがっていく。流石に、全ての傷を塞ぐことはできなかったが応急処置くらいにはなっただろう。
「「キョウヤッ!!」」
「あとはプリーストあたりに任せれば大丈夫だろう、ただしばらくは動けないかもな」
傷が治った青年に二人は泣きそうな顔で近づいた。そんな二人に一応ちゃんとプリーストに見せるように注意すると、二人はなにかお礼を言っていたが、それよりも先にやることがあるので適当に返して人混みから出る。

指を加えて、ピューッと合図を送ると上空で待機していたアーマーガアたちが降りてきてめぐみんたちと合流する。
「カズマ、何があった？」
「それが……」
俺はルナさんからさっき聞かされた話をそのまま四人に話した。話していくうちにクリスとダクネスが苦虫を噛み潰したような表情をする。
「そうか……バカ者共め」
「……実は私達が君たちのところに出る前にはその話が上がってたんだけど、まさか、私達が戻ってくる前に討伐に出ちゃうとは……。」
「いや、俺も考えが楽観的だったんだ……。あのとき、素直に協力すると言っておけば」
――考えてみればあの森はただでさえ収入が限られているこの街の収入源の一つだった。それが、何日も封鎖されてじっとしているほど冒険者という連中は品のいい連中じゃない。必ず誰かが爆発する、そこまで頭が回らなかった。
いや、違う。ポケモンと一緒にいて浮かれてたんだ……。
だが、今は過去の過ちに打ちのめされている暇はない。大事なのはそこから何を学び行うか。
「すぐにでも対策を練ろう。早くても明日、ホーストの討伐に出る」
「だけど……殆どの冒険者が戦意喪失してますよ……戦える冒険者はもう……。」
「私達くらいしかいない、か……。」
「いや、実を言うと……倒せるかもしれない手があるんだ」
「「「ッ!?」」」
俺の言葉に全員が眼を見張る。
「本当かカズマッ!?」
「あぁ。ただ、ぶっちゃけ博打に近い方法だから使いたくなかったんだけどなぁ……これ以上チンタラもしてらんないし……。」
「どんな作戦なの？」
俺は皆の前で以前から考えていた作戦について詳しく説明してい

く。ただ、説明と言ってもかなりシンプルかつ大胆な作戦のため説明はすぐに終わった。
「――いいだろう、その作戦に乗ろう。今ある中で一番、可能性がある作戦だからな」
「確かに博打みたいな作戦だけど、これ以上引き伸ばしにもできないしなぁ。私も乗った」
ダクネスとクリスの承諾はあっさりと取れた。まぁ、元々そのために俺にコンタクトを取ってきた二人だからな、この二人に関しては心配していない。
――問題なのは。
「あわわわわ……。」
「えっと、その……私は……。」
完全に動揺しまくってる紅魔族の二人だ。
めぐみんは緊張で震え上がっている上に焦点が合わない瞳が右に左にぶれていて明らかにまともな状況じゃない。
ゆんゆんに関しては出会ってから引っ込み思案が治りかけていたように思いきや、今の作戦を聞いてまた人とうまく話せない状態になっている。
めぐみんのことはなんとしても説得しなきゃならない。この作戦にはめぐみんは必要不可欠だからだ。ただ。
「ゆんゆん、この作戦は俺のポケモンの技とめぐみんの爆裂魔法ありきの作戦だ。だから、言い方は悪いが……その……。」
「――私は必要ない、ですか？」
「……そうとは言わない。ただ、参加する必要がないとだけ言っとく」
ゆんゆんの言葉に俺はまっすぐ彼女の目を見る自信がなく、うつむきながら答えた。だが、作戦に参加する必要がないってことは危険な目にあう心配もないということだ。
勿論参加してくれれば、万が一の対処ができるが、わざわざ命の危険のある作戦に参加する必要などないのだ。
彼女は視線を泳がせていると、その視線が足元にいるラルトスで止まった。

――ラルトスの髪の下の赤い瞳とゆんゆんの紅い瞳が交差する。
五秒ほど見つめ合うと、ラルトスはきっと表情を強張らせ今まで一度も見せたことのない表情でゆんゆんに語りかける。
「ラッ！ラ～！ラルッ！」
「ラル、ちゃん？」
必死にゆんゆんに訴えかけるラルトスの姿は俺の目には『逃げるな』といっているように見えた。どうやら、そう見えたのは俺だけではなかったらしい。
「パートナーに叱られる気分はどうですか？」
「めぐみん……。」
「私は腹を決めましたよ」
いつの間にか動揺から復活していためぐみんがゆんゆんに挑発しながら参加を表明する。その顔はさっきまで微塵も感じられなかった自信に満ち溢れている。
おおかっこいいぞ、めぐみん――足にフカマルが噛み付いてなきゃな！
どうやら、めぐみんもパートナーに激励を入れられたらしい。結構強めに噛まれてそれなりに痛かったらしく、若干涙目なのは俺もダクネスもクリスも見なかったふりをしてやった。
「それで？私のじ・しょ・う！ライバルさんは、どうするんですか？逃げた時点で私には永遠に勝てなくなりますが、それでいいのなら「いいわけないでしょっ！」――ほう？」
「カズマさん、私やりますッ！めぐみんが失敗したときのために！」
「何、人が失敗する前提の話をしてるんですか、このボッチがッ！」
「ボッチじゃないもん！もうラルちゃんがいるもんッ！」
立ち直ってくれたのはいいが、キャットファイトを始めるのは勘弁していただきたい。
仲がいいのはいいことだけどさ……足元のパートナーたちが呆れてるからやめてあげてほしいんだが。
「はぁ……話進めるぞ～」
俺がパンパンと手をたたくと睨み合いながらも俺の話に耳を立て

る。今は聞いてくれるだけ良しとしようか……。
「出発は明日の正午で行こう、森の中じゃできるだけ明るいときじゃないと向こうの動きが見づらいからな。あいつただでさえ、体黒かったし」
「確かに。あたしは『敵感知』のスキルが使えるけどダクネスや君たちはわからないもんね」
　盗賊職のスキル、『敵感知』や一部のポケモンたちの能力を使えば相手の居場所を探ることは可能だが、今回の戦いはめぐみんを中心にした作戦である以上めぐみん本人に見えていなければ意味なんてないからな。
　そこまで話すと、俺は全財産の入った財布を取り出してクリスに差し出す。
「なにこれ？」
「俺の全財産、役に立ちそうなものを買うときに使ってくれ」
「……いいの？」
「正直痛い出費だけど、しょうがないだろ……使えそうなアイテムがある店とか知ってるなら頼むよ」
　この中で目利きが一番できそうなのはまず間違いなくクリスだろう。めぐみんとゆんゆんはつい最近、紅魔の里から出たばかりと言っていたし、戦士職のダクネスはそういうものとは縁がなさそうだし。
「……わかったよ。但し、討伐に成功したら懸賞金からこの額を先に払わせてもらうからね？」
「……。」
「どしたの？」
「いや、てっきりそのまま忘れ去られるものかと」
『盗賊』っていうくらいだから、それくらいはするものだと思っていたが。いや、別に構わないんだけど。こっちも命かかってるし。
「まぁ、普段ならそうするね」
「やっぱするのか」
「でも、今回はあたしが巻き込んだようなもんだしそれくらいの義理は果たさせてよ。皆も文句ないよね？」

クリスが皆に視線を向けると三人はもちろんと言いたげに深く頷いた。流石にその思いを無下にすることはできないので、そのときは素直に受け取ることにしよう。
「ダクネスは今日戦った奴らに聞いて奴がどんな戦いをするかを聞いておいてくれるか？」
「任せろ」
「よし、夜にテントに集合しよう。そこで具体的な作戦を立てるとしようか、って……。」
「どうしたんですか？」
急に言葉に勢いがなくなった俺をゆんゆんが不思議に思った様子で尋ねてくる。
「いや……俺、リーダーでもないのに何仕切ってんだって思ってさ」
俺自身には大した力はない、ポケモンに力を借りているだけだ。上級職のダクネスやめぐみん、ゆんゆんにには勿論、『盗賊』のクリスにも相手にならない男だ。
そう思っていると、皆が面を食らったような顔をして笑みを零す。
「なんだ、そんなことですか？」
「今更何言ってるのって話だよねぇ？」
「あぁ、少なくともこの中で最も先導者に向いているのはお前だぞ？」
「私も、カズマさんがリーダーがいいです」
「お前等……。」
「さっきのバトルと、夢の話」
「？」
「君は何よりも先を見てものが言えるし、的確な指示ができる。君なら安心して、リーダーを任せられるよ」
クリスそういって俺の肩に手を置く。ふと、周りの皆に視線を向けると、皆がクリスと同じように俺を信じた眼差しを向けていた。
「それじゃ、明日の討伐の指示任せたよリーダー？」
「ブイッ！」
「イーブイ……。」
足元のイーブイが俺の肩まで上ってきて頑張れと言うように鳴き

声を上げる。まさか、俺まで激励を送られるとは。
「わかったよ、引き受けてやるよ。お前らのリーダー」
俺の言葉に頷く一同、よし、まずはリーダーとして最初の仕事をしなくては。
「クリス」
「うん？なに？」
「……今晩の買い出しお願いできる？食費もさっき渡した財布にあるから」
「締まらないリーダーだねぇ、君……。」
「チュギプリィッ！」

「ありがとう、ウィズさん。いい買い物ができたよ」
「ありがとうございました、店主さん」
「いえいえ、今後ともウィズ魔導具店をご贔屓にお願いしますね」
作戦会議の後、クリス、そしてゆんゆんはクリスの行きつけの魔導具店、『ウィズ魔導具店』にカズマから言われた討伐に使えそうなアイテムを見繕いに来ていた。
なぜ、頼まれていないゆんゆんがここにいるのかというと、魔導具の中には魔法使い職の冒険者の能力を上げるものがある。そのため、彼女の詳しい魔法とそれにあった魔導具が必要なため同行を申し出たのである。
店主たるローブの女性はクリスとゆんゆんに笑顔で返し、見送ろうとカウンターの外へ出てくる。
店主に見送られながら、店を出ようとしたクリスとゆんゆんだったがその前にラルトスが店の前に店に飾られているあるものを見て、ゆんゆんの足を掴む。
「ラッ、ラ～!!」
「どうしたの、ラルちゃん？」
「ラルッ！ラルッ！」
「……あの水晶玉が気になるのかな？」
そういったクリスの視線の先には占いなどでよく見かける水晶玉

があった。ただし、その水晶には三色の遺伝子のような紋章が刻まれていた。

――二人にも理由はわからないが、どうやらラルトスはこの水晶玉に何かを感じたようだ。

「ウィズさん、あの水晶玉って」

「これですか？仕入れのときにおまけで貰ったんですけど。使い方がわからないので売れ残ってしまって……よかったらお守り代わりにどうです？サービスしますよ」

「どうしましょう？」

「う～ん、どうもこの水晶玉持ち帰らないとこの子てこでも動かなそうだし……仕方ないかぁ」

「ラルっ！」

喜ぶラルトスを尻目に、クリスは諦めたように財布の紐を解いた。

絆が導く新たな力

――翌日。

俺達はホーストがでるという、森にやってきた。目的は勿論ホーストを倒すため。

因みに皆のパートナーとイーブイ、ロトム、ちょむすけは危険なのでめぐみんの知り合いのプリーストにあずけてもらった。めぐみんいわく、悪い人ではないと言っていたし、問題ないだろう。

やがて、俺達の視界にかつて見た黒い異形の姿が見えてきた。奴は、俺達の気配に気づきこちらを向く。

「――久しぶりだな、ホースト」

「あっ、テメェは俺をぶん殴ったドラゴンの……。」

「覚えてたか。じゃあ、俺が何をしに来たかわかるよな」

俺は右手の指に挟んだ三つのモンスターボールを一斉に地面に投げつけて中のポケモンを呼び出す。

「エルッ！」

「ギルッ！」

「ジュパッ！」

現れた三体のポケモンはラルトスの最終進化形の一つであるエルレイド、そして、お馴染みのギルガルドとジュナイパー。今回の討伐のために組んだパーティだ。

「悪いがこれ以上お前にここに要られちゃ困るんだ」

「ここで討伐させてもらうぞ、悪魔ホースト！」

エルレイド達の隣で剣を抜いて立つダクネスとナイフを構えるクリス、その後ろでワンドを構えるゆんゆんと杖を構えるめぐみん。ジュナイパーはゆんゆんとめぐみんの護衛のために同じように後ろに下がる。

「はっ、またかよ。昨日も武器だけはいっちょ前のソードマスターが来たが、これでも俺様は上級悪魔だぜ？駆け出しの街の冒険者なんぞに負けるわけねぇだろうがぁ!!」

咆哮のような叫びに大気が震えるのを感じる。まるでオヤブンポ

ケモンの咆哮だ。それでも、ここまで来て引き下がることはできない。
「全員、作戦通りに行くぞ！」
「おうっ！」「うんっ！」
　俺の号令とともにダクネスとクリスが先行して前に出る。ホーストは前に出てきたダクネスに向かってその大きな拳を振り下ろす。
「おらあっ！」
「ぐっ！流石は上級悪魔、なかなかいい攻撃をするじゃないか……！」
「ハアッ!?」
　重い攻撃を受けながらもそれをしっかりと剣で受け止め安定の変態発言をするダクネス。その姿にホーストは量目を見開いて驚愕する。
「手加減してねぇんだぞ？　それで吹き飛ばないとか、お前の筋肉鋼でできてんのかよッ!?」
「しっ、失礼な！私の筋肉はそこまで硬くない！」
　死地とは思えない気の抜けた会話に脱力しそうになるが背筋にゾクリと悪寒が走る。これは……ホーストの殺気じゃない。昨日感じたことのある殺気、その殺気の正体がダクネスの影から飛び出す。
「シッ！」
「ぎゃあああぁぁぁぁぁぁ!!何だこれめちゃくちゃいてぇぇぇぇ!!」
　クリスが持っているナイフに切り裂かれたホーストはとてつもない絶叫を上げる。え？あれ、そんなに痛いの？見たところただのナイフでできた切り傷にしか見えないし、そこまで深くなさそうだが。
　ホーストは傷を押さえながらダクネスとクリスから距離を取る。
「なっ、何だそのナイフッ!?ただのナイフじゃねぇだろ！」
「そりゃそうだよ、君みたいな害虫に効果抜群な神聖な加護を受けたナイフだからねぇ！」
「え？そうなの」
　初耳だ。作戦会議でもそんなこと言ってなかったじゃないか、ちゃんと報告してくれよ。
「チッ、確かにそれを喰らい続けたらやべぇな……ならっ！」

「はやっ！」
　クリスに狙いを定めたホーストは突如、凄まじい速度で駆け出しクリスの眼前に立ち拳を振り上げる。あれじゃ、ダクネスの防御もクリス自身の回避も間に合わない。
「ギルガルド！『キングシールド』!!」
「ギルッ！」
「なんだとっ！」
　空中から、クリスとホーストの間に割って入ったギルガルドのキングシールドによってホーストの拳は防がれる。これで、あいつの攻撃力は弱体化した。一気に畳み掛ける。
　俺はゆんゆんにアイサインを送ったあと、エルレイドとギルガルドに指示を出す。
「エルレイド『つじぎり』、ギルガルド『せいなるつるぎ』！」
「『ファイアーボール』！」
「ぐおぉぉぉぉぉ!!」
「ゆんゆん、たたみかけろ！」
「はいっ、『ライトニング』！」
　ゆんゆんのファイアーボールが炸裂し、更に左右からエルレイド、ギルガルドの強烈な斬撃技が直撃した。さらに、ゆんゆんの雷属性の魔法が直撃する。
「いってぇなクソッ！」
　流石にやられたい放題で頭に血が上り始めたらしいホースト、すると彼の頭上に巨大な炎が出現する。だが、あれについてはすでにダクネスが他の冒険者から聞いている。やつは炎属性の上級魔法が使えると。当然、その対策もした。
「消し飛べ！『インフェルノ』！」
「させるかよッ!!」
　俺は残りのモンスターボールのうち一つを炎に向かって大きく振りかぶって投げる。ボールの中身のポケモンが炎の中でその姿を表す。
「シャ～ン」

「シャンデラ、『もらいび』だ！」
　現れたのはシャンデリアのような姿をしたゴースト、ほのおタイプのポケモンシャンデラ。そして、シャンデラの特性『もらいび』はほのお系の技全ての攻撃を吸収し、自分の力とする。
　シャンデラは『インフェルノ』を吸収すると、頭の紫の炎が巨大に肥大化する。
「んだ、そりゃあッ！」
「お返しだ。シャンデラ『オーバーヒート』!!」
「シャ～ン!!」
　驚くホーストを無視してシャンデラに指示を出すと、シャンデラは『インフェルノ』を吸収したことで肥大化した炎のエネルギーを一気に解き放つ。『インフェルノ』を吸収し、自らの力を上乗せしたオーバーヒートは視界を真っ赤に染め上げ、ホーストを飲み込み凄まじい爆発を起こす。
　俺たちは熱風と爆風から顔を覆う。
「凄まじい、威力だな……！さすがの私もあれを喰らうのは御免だ」
「……本来は一回の攻撃では一段階しか攻撃力は上がらないんだが……それだけ強力だったってわけか」
「説明はいいから、今がチャンスだよ！」
「あぁ、わかってる」
　俺は翼でゆんゆんとめぐみんを爆風から守るジュナイパーと守られているめぐみんにアイコンタクトを送りうなずく。ここからがこの作戦の肝だ。もうすぐ爆煙が止む。ジュナイパーは翼で弓を作り、羽根で矢を作り準備をする。めぐみんも爆裂魔法の詠唱を開始する。
　そして、ホーストの影が爆煙に映し出される。
「今だっ！ジュナイパー、『かげぬい』！」
「ジュパッ！」
　俺の指示でジュナイパーは必中の矢を放つ。
「ッ！」
　しかし、その矢は咄嗟に気づいたホーストによってヤツの影の方へと叩き落とされる。

「ちくしょう……侮ったぜ、まさかここまでやりやがるとは。だが、ここからは容赦しねぇぞ。ゴリ押しなら一撃の威力が高い俺が勝つからなぁ」
「――いいや、もう終わったよ」
「何を言って……！」
　俺の言葉を挑発と受け取ったのか無視して攻撃の構えを取ろうとしたホーストだがその表情から余裕が消えた。当然だろう、体が動かせないんだから。
「なっ、何だこりゃ！『パラライズ』かッ!?」
「ちげぇよ。ジュナイパーの矢、『かげぬい』は射抜いた影の持ち主の動きを封じる」
「ッ！さっきの矢はそのためか……だが、動きを封じたところで俺様は倒せねぇぜ」
「……それは、私の魔法を受けてから言ってくれますか？」
　ジュナイパーに守られていためぐみんが前に出るとホーストの頭上に無数の魔法陣が展開される。その光景と待機に広がる魔力にホーストが冷や汗を流す。
「何だこの魔力は……長く生きてきたがそうそう感じたことのない魔力だ」
「――我が名はめぐみん。紅魔族随一の魔法使いにして爆裂魔法を操りしもの」
「ッ！そうか、テメェらはじめからこれが狙いかッ！」
「悪いな、俺達の狙いははなからお前の動きを封じる一点だ、トドメはこいつが決めてくれるからな」
「テメェ、やってくれたなぁ……！」
「恨み言はいくらでも聞くぜ。これに耐えられたらな。めぐみん、やっちまえ!!」
　俺が声を上げると詠唱が完成しためぐみんの必殺の一撃が放たれた。
「喰らうがいい、『エクスプロ――――ジョン』!!!」
「クソがアァァァァァァ!!!」

ホーストの絶叫とともに放たれた一閃は先程のオーバーヒートによる『赤』の爆炎ではなく、『真紅』の爆炎で俺達の視界を覆い尽くした。

～～～

周りを見回すと、さっきの魔法の衝撃でクリスとダクネス、ジュナイパー、ゆんゆん、めぐみんも吹き飛ばされていた。皆、苦悶の表情を浮かべながら僅かに体が動いていることから生きてはいるようだ。どうやらゆんゆんはジュナイパーが、クリスはダクネスが守ってくれたらしい。

だが、問題なのは……。

俺は衝撃波の中心で未だ立ち込める煙幕の中から重い足音を鳴らしながら、現れる巨体を睨みつけながら悪態をつく。

「くそったれが……！」

「よう、恨み言はいいから聞きたいことがあんだけどよ……。」

そこには残った羽と片腕が吹き飛び、全身ボロボロになりながらホーストが仁王立ちしていた。

「アレ喰らって、まだ耐えるのかよ」

「あぁ、もうちょっと威力が高かったら吹き飛ばされてたけどよ……なんとか耐えきったぜ」

どんだけタフなんだ、この悪魔はッ！

どうする、めぐみん達は完全に気絶してる。ギルガルド達は戦闘不能、残ったのは俺とエルレイドのみ。

これだけ攻撃を仕掛けた以上、交渉は不可能。絶体絶命ってやつか……。

「聞きたいことがあるって言ったな、なんだ？」

「随分素直に答えるじゃねぇか」

とにかく今は戦えない奴らから意識を逸らすしかない。こいつの質問には素直に答えておくしか。

「まぁいい、俺様が聞こえたのはたった一つだ。この辺で黒い獣を見なかったか？」

「黒い獣？」

「あぁ、俺の契約者が探しててな。その方、邪神ウォルバグ様の半身だ」

邪神の半身？黒い獣？そんなヤツ知るわけ……。

『なー！』

「ッ！」
まさか……！
俺の動揺を表情から読み取ったのか、ホーストが笑みを浮かべる。
「その顔、知ってやがるな」
「……なんのことだかな」
「とぼけんな。お前たちからは僅かだがウォルバグ様の匂いがする、俺様は鼻が利くんでな」
「……。」
「取引しようぜ、ウォルバグ様の居場所を言えば。お前達とあの街には手を出さない」
「……信じろってか？」
「俺達悪魔は契約には従う、それが掟だからな」
どうする……ここでちょむすけを売れば俺達とアクセルは助かる。俺はズキズキと痛む肩のせいでまともな思考ができないなりに必死に考えを巡らせる。
すると、目の前に一つの影が現れる。
「エルッ！」
「エルレイド？」
「エェェェル……！」
いつの間にか眼前にいたエルレイド、彼の両腕の鎌が巨大化し、全身に闘気が満ちてるのがわかる。これは攻撃力が上昇しているのか？
「まさか、特性かッ!?」
エルレイドの特性、『せいぎのこころ』。悪タイプの技を受けたとき攻撃力を上昇させる。さっきのホーストの攻撃でそれが発動したのか。
エルレイドはゆっくりと俺の方に振り返る。その目を見て、俺は息を呑んだ。まるで、何自分のことを忘れて諦めてるんだって言いたげだった。……そうだ、そうだったよなぁ。俺達ポケモントレーナーは何よりもお前らを信じて行動しなきゃいけないんだったよなぁ！
俺は左手でエルレイドの肩を掴みふらつく足に残った力をすべて

込めて立ち上がる。
「……悪いが、その契約は不成立だ」
「なに？」
「――俺達がお前をここでぶっ飛ばすからな」
「エルレイッ！」
――エルレイドと俺の気持ちが一つになったその時、俺のポケットから凄まじい光が放たれる。
「なんだ、この光ッ！」
突如、放たれた光にホーストは警戒する。その光の発生源はいつかのイーブイが見つけたキーストーン。さらに、光の発生源はもう一つある。ゆんゆんのマントの裏からだ。
その光の発生源はひとりでにマントから飛び出し、エルレイドの元へと飛んでいく。
「それは、エルレイドナイト！」
メガストーンの一つであり、エルレイドをメガシンカさせるために必要なアイテム。なんでゆんゆんがこれを……いや、今はそんなことを言ってる暇はないな。
「――行くぞ、エルレイド！」
「エルレイッ！」
「メガシンカだッ!!」
キーストーンを握りしめると、拳から漏れ出た光とエルレイドナイトから放たれた光が繋がりさらなる輝きを作り出し、エルレイドの体を包み込む。光の中でエルレイドの姿を変えていく。
「エールレーイッ！」
雄叫びとともに光が消えると、白を貴重とした姿へと変わり両手の鎌がより鋭利になり、現れた白いマントが風で翻る。これがメガシンカ、これがメガエルレイドだ。
ホーストもメガエルレイドの姿から何かを感じたようで、警戒の体勢を取る。
「姿が変わっただけ……ってわけじゃねぇようだな」
「――お互い、あと一撃で倒れる身だ。終わらせようぜ」

「なんだ、バレてたのかよ」
「うちの頭のおかしい爆裂娘を舐めんなよ。アレ喰らって、立ってる方が不思議なんだよ」
カマをかけたつもりだったが、どうやらマジらしいな。
――話を終えたホーストとエルレイドはお互いにザッと足を踏みしめて技を構える準備をする。
そして、互いが同時に駆け出す。
「ッ!!」
ホーストの拳とエルレイドの拳が激突する。さっきの魔法にも負けないくらいの衝撃波に吹き飛ばされそうになるが必死に足に力を込めて踏ん張る。
俺は腹に力を込めて最後の指示をエルレイドに送る。
「エルレイド、『きしかいせい』!!」
「エールレイーッ!!」
「くっ……なんだこのパワーはッ!!」
かくとうタイプの技『きしかいせい』は自身へのダメージが多いほどに威力を増す、文字通り起死回生の一撃。拮抗していた力の流れがエルレイドに傾きホースとの拳に光のひびがあらわれ、全身に広がる。
「決めろっ！エルレイドッ!!」
「エルゥゥゥゥレエエエエイ!!!」
「ぐおぉぉぉぉぉぉ!!!……くそっ、ここまでかよ」
絶叫を上げていたホーストが突如何かを悟ったような言葉を漏らした。
「まさか、この俺様がこんな街の近くでやられるとはな……これで残機が一人減っちまうな、あ～あ、これでウォルバグ様との契約も強制解除で晴れてフリーの身か……マジでいつかあのガキに使役されちまいそうだぜ」
まるで遺言のような文句に俺は何も言わず耳を傾ける。
――やがて、ホーストの拳が崩れ去って形を失いエルレイドの拳がホーストの胸を貫いた。

「ぐはっ！……ったく、なんだってんだよこの街はよぉぉぉぉぉ！！！！」
悪魔ホーストはその絶叫を最後に体が消滅しその残骸は空に消えていった。
「勝っ……た？」
「エルッ！」
目の前の光景が信じられない俺の元へメガシンカから元の姿に戻ったエルレイドが笑顔で駆け寄ってくる。その姿に本当に勝ったのだと確信した。
その瞬間、足から力が抜けその場に倒れ込む。瞼も急激に重くなり、慌てて駆け寄ってくるエルレイドの姿を最後に視界にとらえてそのまま俺は意識を手放した。

このパーティ結成に祝福を！

「ふわぁ……久しぶりのベットは気持ちよかったな。イーブイ？メラルバはどうだった？」
「ブイッ！」
「メラッ！」
「そうか、気に入ったか」
俺はあくびを噛み殺しながら肩に乗ったイーブイと手の中に収まるメラルバに尋ねると二人共元気よく返事をする。
『僕もぐっすり睡れたロト』
「お前はスマホの中にいるんだからどこでも寝れるだろうが」
――俺は今、ギルドに向かっている。三日前のホースト討伐が成功した報酬を受け取るためにだ。
なぜ、三日も日を空けたというとまぁ俺達全員結構な重傷だったからなんだけどな。それがたった三日で治ったのはめぐみんとゆんゆんの知り合いであるアクシズ教のプリーストのおかげだ。一回会ったが、少し……いや、かなり我の強い人だった。
ただ、アクシズ教……つまりあのアクアを信仰しているプリーストなら『あぁ、なるほどな』と納得してしまうあたり俺の中のアクアの株は地の底まで落ちているのだろう。
「しかし、ロトムに続いてお前まで勝手についてくるとはな」
「メラッ！」
因みになぜ手持ちから外したはずのメラルバがいるのか、それはシャンデラたちを回復のために天界に送ったときにロトムと同じように勝手に天界から転送されてきたのである。エリス様に問い合わせたところ、『どうしてもカズマさんのそばにいたいらしくて……』と困った声で言われた。
そういうことなら仕方無しと、イーブイに続いて俺の固定メンバーの一体になったのである。
「メラ？メラっ!?」
「イブイッ！」

「ん？どうした、メラルバ、イーブイ？」
　手の中のメラルバに話しかけながら歩いていると前方を見ていたメラルバとイーブイが声を上げる。俺も顔をあげると、そこにはちょむすけを抱いて、足元にフカマルを待たせているめぐみんが立っていた。
「めぐみんじゃん。どうした、今日はギルドで集合のはずだろう？」
「その……カズマに話があったので先に会いに来たんです」
「？」
「とりあえず、ギルドに行きましょう。話はその途中で」
　めぐみんはそういってギルドの方にあるき出す。俺もその隣を歩いていく。
　若干もじもじとしながら俺の顔を覗き込んでは前に向き直るめぐみん。お兄さんね、そういう態度を男の隣でやるのは良くないと思うよ。俺じゃなかったら勘違いする顔してるぜ。
　俺？　ハハハ、子供の頃結婚の約束をした子に振られて一時引きこもったほどのショックを受けた男だぞ？　その上勘違い男にまでなったら……生きていける自信がありませんッ！
　そんな過去の自分の黒歴史から覚えた教訓を復唱していると、めぐみんがようやく口を開いた。
「――カズマ、ありがとうございました」
「？」
「ちょむすけのことですよ」
「！聞いてたのか……。」
「ええ、その後直ぐに気を失いましたけど」
　ってきり、ホーストの魔法からふっ飛ばされたときに気を失ったと思っていたが。そういや、こいつだけ他の三人とは違って俺だけじゃなくギルガルドとシャンデラにも助けてもらったんだったな。だから、俺も肩が外れる程度で済んだわけだし、そこに俺が庇った分も合わせて衝撃が緩和されたんだろう。
「……別に礼を言われることじゃねぇよ。イーブイが同じ立場にいたら何をしてでも助ける、お前にとってはそれがちょむすけだってこと

を知ってただけだからな」
「でも、ちょむすけはポケモンじゃないし。戦う力もないのに……」
「役に立つ、役に立たないがそんなに重要なことか？」
「えっ？」
「役に立たなくたって、お前がちょむすけを大切に思ってる。重要なのはそこなんじゃないか？」
――昔、何度か好きなポケモンだけでパーティを組んで冒険をしたことがあった。ただ、そいつらが皆進化するまで時間がかかったり、弱点が多かったりとなかなか難しい旅になったのを覚えている。
ただ、面倒くさいとかパーティを変えようとか思ったことはなかった。大切な仲間と旅がしたい、それだけで十分だったからな。
俺の言葉にめぐみんはなにも答えなかったがどうやら、納得はしたらしい様子だった。
そのまましばらく歩いてると、めぐみんがまた口を開いた。
「――もう一つ、聞いてもいいですか？」
「なんだよ？」
「……『頭のおかしい爆裂娘』とは誰のことか教えてもらおうか？」
「……。」
めぐみんの質問に冷や汗を流しながら黙り込む。
やっべぇ……そういや、ホーストにいっちまったよそんな言葉。まずい、めぐみんが紅魔族特有の紅い瞳をギラギラと光らせてこちらによってくる。
こうなったときのめぐみんはだいたいろくな事をしないとゆんゆんから聞いている。
即ち。
「逃げるが勝ちッ！」
「させませんよ！フカマル、やりなさい！」
「ガフッ！」
「何ッ!?」
駆け出した俺の足元にいつの間にかいたフカマルがめぐみんの合図と同時に俺の頭にかぶりついた。

「いだだだだだ!!」
「フカマル、もうちょっと強めでもいいですよ」
「いい訳あるかッ！離れろっ、フカマルッ!!」
「ガブガブッ！」
　メラルバをイーブイの背中に乗っけて、両手で引っ張っるが凄まじい力で噛みついていて頭から離れないフカマル。畜生、すっかり息ぴったりになりやがって！
　その後、途中で合流したゆんゆんがラルトスのねんりきで引き剥がすように言ってくれたお陰で特に怪我もなく済んだ。
「将来ハゲたら一生恨んでやるからな……。」
「ふんっ」
　頭をさすりながらめぐみんに恨みのこもった目を向ける俺にめぐみんはフカマルを撫でながらそっぽを向く。コイツめぇ……。
　――俺たちは今、合流したクリスダクネスを合わせた五人で酒場のテーブルを囲っている。密やかではあるがホースト討伐の打ち上げのようなものだ。
「はいはい……そこまでそこまで。あっ、そうそう、将来って言えば皆はこれからどうする？」
　クリスが俺とめぐみんを宥めながら、今後のことを尋ねてきた。俺はとっくに決めてるので即答した。
「俺は元々ゆんゆんと組むことになってたし、これからもしばらくは冒険者として資金を稼ぐよ。夢を叶えるための資金はいくらあっても足りないしな。ゆんゆんはどうする？」
「は、はいっ！私もお付き合いします！」
「仕方ありませんねぇ。私も付き合いましょう」
　ゆんゆんが嬉しそうに返事をするとめぐみんがやれやれと言いたげにめぐみんが話に入ってきた。その上から目線な態度にゆんゆんがキレた。
「何言ってんの！爆裂魔法しか使えないくせに！カズマさん、めぐみんのことは放っておいてかまいませんよ」
「何言ってくれてるんですか、このボッチが！」

「何度も言わせないで！私にはもうラルちゃんもカズマさんもいるの！ボッチなのはめぐみんのほうよ！」
「ラ～？」
「な、なにおう！私にもちょむすけとフカマルがいます！」
「カフ～？」
お互いの相棒を見せつけるように持ち言い争う二人。
ホント、仲がいいんだか悪いんだが……。まぁ、めぐみんに関しては別に構わないんだけどな、なんだかんだ言ってこの三人でいるのがスタンダードになってきてたし。
「そっちこそ、このあとどうすんだ？」
「それなんだが、よければこのままこの五人でパーティを組まないか？」
「ちょうど、アタシ達もパーティメンバーを募集してたんだよね。前衛職一人と後衛職二人でね」
「あぁ、そういえばなんだか見た覚えがありますね。そんな募集」
ゆんゆんとめぐみんが後衛職で、俺のポケモンが前衛職の代わりってことか。確かに丁度いいかもしれない。それに、二人に託したダンバルとトゲピーのことも気になるし。
ちらりとめぐみんとゆんゆんに目配せすると、二人共喧嘩を中断して笑って頷いた。
「わかったよ。それじゃあ、この五人でパーティ結成ってことでいいのかな？」
「さんせーい！」
「チュギプリイ！」
こんな感じで組んだパーティ。
皆、それぞれ問題はあるがそれぞれ秀でた優秀な技術のあるメンバー。大変なこともあるだろうが、こうして俺の夢に向かっての第一歩がスタートしたわけである。

絆と白と黒の石

「さて、そんじゃやるかぁ」
「待ってました！」
俺達は今、おなじみの平原であることを行おうとしていた。
俺は一つのボールをホルダーからとって、空に向かって放る。
「出番だ、エルレイドッ！」
「エルッ！」
出てきたのはホーストとの戦いの傷がすっかり癒えたエルレイドだ。
あのあと、最終的にどうやってホーストを倒したのかという質問をクリスとめぐみんからされ、メガシンカの説明は口で言うよりも実際にやってみせたほうがわかりやすいと思ったので、実際に見てもらうためここで実践することになった。
『エルレイド　やいばポケモン　エスパー・かくとうタイプ
ラルトスの最終進化形。
伸び縮みする肘の刀で戦う。居合の名手。礼儀の正しいポケモン』
前回、説明をしていなかったのでいつものごとくロトムが図鑑の説明を読み上げる。
「ラルトスの最終進化系？」
「どうりで……なんとなくラルトスと色合いが似てると思ったんだ」
多分、皆が気にしてた疑問はロトムがした説明で納得したようだった。確かにエルレイドは頭の赤い触覚や緑色の髪などラルトスと酷似したところがあったので作戦会議のときは皆どこかラルトスとエルレイドを見比べてるときがあったからな。
ゆんゆんの足に隠れたラルトスも覗くようにエルレイドの姿を見ている。
ゆんゆんとクリスの話だと、マジックアイテムの準備のために行った魔導具店でエルレイドナイトをラルトスが見つけたらしい。それがなかったら、俺達今頃ここにいないかもなぁ。
「マジでエルレイドナイトをラルトスが見つけてくれなかったら俺達

死んでたかもな……。ありがとな、ラルトス」
「ホントだねぇ……ありがとね、ラルトス」
クリスが礼を言うとダクネスやめぐみん、パートナーであるゆんゆんもラルトスにお礼を言う。本人は相変わらず恥ずかしがってる様子だったが。
「エル、エルレイ！」
「ラッ……ララララ……！」
すると、俺の隣りにいたエルレイドもラルトスの前に出て膝を降り笑顔で礼を言う。すると、どうしたことだろう、ラルトスは顔を真っ赤に染めてゆんゆんの後ろにすごい速さで隠れてしまった。
「わっ、ラルちゃんどうしたの!?」
「大きいエルレイドが怖いのでは？」
「エルッ……。」
エルレイドはめぐみんの言うとおり自分がラルトスを怖がらせてしまったと思ったのか申し訳無さそうに声を落とした。
だが、俺にはそれが違うとわかった。あの反応、そしてエルレイドとラルトス……。んで、ゆんゆんのラルトスは……だもんなぁ、これはあれで確定だろう。
「罪な奴め」
「エル？」
『！なるほど、そういうことロトね』
俺はエルレイドの肩に手を乗せるが、本人は自覚なしと来た。同じエスパータイプ同士だと考えを読むことができないのだろうか？
まぁいいや、エルレイドとラルトスのことは後回しだ。先にメガシンカについて説明しないとな。
「ゆんゆん、エルレイドナイトを」
「あっ、はい！」
俺は元々の持ち主であるゆんゆんに預けていたエルレイドナイトを受け取り、ポケットからイーブイが見つけたキーストーンを取り出して皆に見せる。
「メガシンカにはトレーナーが持つキーストーン、そして、ポケモンに

持たせる専用のメガストーンが必要になる。今回はエルレイド専用のメガストーン、エルレイドナイトだな」
『メガストーンはそれぞれ配色が違うから、それで見分けるロトよ』
「かなりの種類があるんだな……。」
　ロトムが画面にそれぞれのメガストーンを映すと、それを注意深く見るダクネス達。
「そして、メガシンカには必要なものがもう一つある」
「もう一つ？」
「ポケモンと人間の信頼関係、端的に言えば絆だな」
「絆、ですか？」
「ああ、だから俺のエルレイドをメガシンカさせられるのは俺だけ、たとえ俺以外の誰かがキーストーンを持っていてもな」
　説明をしながらキーストーンを強く握りしめる。すると、拳の隙間から光が漏れ出る。
「うわっ！」
　いきなり輝きを発したキーストーンに驚きの声を上げる一同。
　そんな皆をよそにエルレイドが持つエルレイドナイトからも光が放たれる。二つの光は帯のように互いに伸びて、やがて結びつく。
　エルレイドの体が虹色に発光し、徐々に姿を変えていく。両腕の鎌は更に鋭利な形状へと変化し肩から伸びたマントが風になびく。考えを読み取るための角も形を変える。
　ふとゆんゆん達のほうに視線を向けると、四人はその神秘的な光景から目が離せない様子だった。
「エエエエエルレエエエエイ!!!」
　全ての変化が終了すると、全身を纏っていた光を払いのけるようにエルレイドの、いやメガエルレイドの咆哮が平原にこだました。
「これがメガシンカ……人とポケモンが揃っていなければ到達できない領域だ」
「す、素晴らしいですよ、カズマッ！メガシンカっ、紅魔族の琴線にビビッときました!!」
　四人の中で一際メガシンカに感動したらしい、めぐみんが紅い瞳を

ルビーのように輝かせながら感動を熱弁していく。他の三人もめぐみんほどではないがその光景に感銘を受けた様子だった。
「しかし、ポケモンのことといいメガシンカのことといい……カズマはどこでこれほどのことを知ったんだ？」
「――――俺は、幼い頃からずっとポケモンたちと旅をしてきた。それまで色んな経験をした、メガシンカもその時に知ったんだよ」
「幼い頃からって……。」
「懐かしいなぁ、カロス地方、マスタータワーで初めてメガシンカをしたときのことを」
　シャラシティ、シャラジムのジムリーダー・コルニに託されたルカリオとメガリングを使って初めてメガシンカをさせたときのことを思い出す。あれからいろんなメガシンカを見てきたが、やはりメガストーンやキーストーンよりも絆が必要なのだと思い知らされた。
　――――こんな記憶がある辺り、俺にとって向こうの経験は完全に今の自分に蓄積されているらしいな。複雑だが、今のところは便利だしいいか。
「カズマッ！フカマルもメガシンカできますか⁉」
　感傷にふけっているとめぐみんがフカマルを抱きかかえて、目をキラキラさせてにじり寄ってくる。
「近い近いって……！」
『フカマルの最終進化形であるガブリアスのメガシンカも確認されているロト』
「ではっ……！」
「ただし、そのためにはガブリアス専用のメガストーン、ガブリアスナイトが必要になる。勿論、お前専用のキーストーンもな」
「どうやったら見つかりますか！」
「そこまではなぁ……ただ、ラルトスがエルレイドナイトを見つけたのを考えると、もしかしたらメガストーンとそれに関連するポケモンはお互いに引かれ合っているのかもしれないな」
　エルレイドナイトがあったってことはまず間違いなく他のメガストーンもこの世界に存在するだろう。それを見つけられるかどうか

で、これからの皆の戦い方も大きく変わっていくだろう。
　メガシンカの説明も終わったのでエルレイドのメガシンカをといて、エルレイドナイトを受け取る。
「さて、ゆんゆん。エルレイドは確かにラルトスの最終進化形ではあるが君のラルトスはエルレイドにはなれないんだ」
「えっ、どうしてですか？」
「エルレイドはオスのラルトスでしか進化しないからだ」
「ということはゆんゆんのラルトスは……」
「そっ、メス。つまり女の子だな」
　そういった瞬間、ゆんゆん以外の全員がさっきのラルトスの反応から何かを察したようだった。
「なるほど、そういうことでしたか」
「なるほどねぇ……。」
「しかし、だとしても早すぎないか？まだ、生後一ヶ月も経ってないんだぞ？」
「ませてますねぇ……そんなところもパートナーに似たんでしょうか」
「えっ、ゆんゆんさんってそうなの？」
「あ、あの……みなさん何の話を……。」
　何故だか、ゆんゆんを除く三人がヒソヒソと話すなか、仲間はずれにされてるように感じたのか若干涙目になったゆんゆんが皆に声をかける。流石に見てられないので俺がストレートに教えてやる。
「あ～、だからなゆんゆん。君のラルトスはメスでエルレイドはオスしか進化しないから必然的にオスなわけだ。んで、さっきのラルトスのいつもとは違った恥ずかしがりよう……とくれば答えは一つしかないだろう」
「……あっ！えっ、そういうことなのラルちゃん!?」
「ラッ、ラル～～～～～～～……。」
　どうやら俺達と同じ結論に至ったらしいゆんゆんが足元のラルトスに問いかけるといつも以上に髪の毛で瞳を隠してしまうラルトス。
　これは確定だな。

――――そう、ラルトスは俺のエルレイドに一目惚れをしてしまったのである。
そのことにきづいたゆんゆんが一気に顔を赤くしながら慌てだす。
「どどどどどどうしたらいいんでしょうか、私は!?」
「どうするもなにも……ラルトスの恋を応援してあげたらいいんじゃないか？」
「で、でも何をしてあげれば」
「あっ、だったらそれを改めてラルトスからエルレイドに渡してあげたら？」
考え込むゆんゆんに助言をしたのは俺が持つエルレイドナイトを指さしたクリスだった。
「だって、ゆんゆんさんのラルトスじゃエルレイドにはなれないんでしょう？だったら、贈り物ってことでエルレイドにプレゼントするのはどう？」
「うん、いいアイディアじゃないか？」
「確かに、まずはきっかけが大事ですからね」
クリスのアイディアに次々と賛同する女子たち。高校でも思ったけど色恋が関わったときの女の子の行動力っていうか積極性ってやっぱすごいわ。
「それじゃあ、ラルちゃん。やってみる？」
「ラルッ！」
一瞬戸惑う様子を見せながらもラルトスは力強く頷いてエルレイドナイトを受け取った。ゆんゆんを励ましたときも思ったがもしかしたらいざというときの行動力は他の子よりも強いのかもしれない。
「頑張ってラルちゃん……！」
「ファイトですよ、ラルトス！」
「自分の気持ちを伝えるんだ！」
「勇気を出してッ！」
エルレイドのもとへと向かうラルトスにエールを送る女性陣、ただなぁ……エルレイドは騎士道精神をモットーとした堅物だからなぁ。ラルトスからの好意にも気づいてないようだし……。

「ラ、ラ～……。」
「エル？」
　エルレイドのもとにたどり着いたラルトスはおどおどしながらもエルレイドナイトを差し出す。その様子に「自分に？」と問いかけるエルレイドに頷くラルトス。その手からエルレイドナイトを大事そうに受けるエルレイド。
「エルレイッ！」
「ラ、ラ、ラ……ラァァァァァァ!!!!」
「え？ラルちゃんッ!?」
　目的を達し恥ずかしさが一気にこみ上げて来たのかラルトスはダッシュでゆんゆんのもとに戻り、腰のモンスターボールに触れる。そのまま光となってボールの中に戻っていった。
「あっ、ボールに隠れちゃったね」
「いきなり難易度が高すぎたか……。」
　――ラルトスの恋が叶う日は来るのだろうか、俺達の密かな楽しみが一つ増えた。
「――そういえばさ」
　メガシンカの説明も終わりクリスが何かを思い出したように呟いた。
「どうした、クリス？」
「行商の人に聞いたんだけど、最近ここの近くで馬車が悪魔に襲われたって」
「悪魔、ホーストとは別のか？」
「うん、人間に近い姿の女の悪魔。ホーストほどじゃないけど、腕利きの冒険者が何人も瀕死にされたって」
「初耳だな、それでその悪魔はどうなったんだ？」
「それがねぇ」
　クリスはめぐみんとゆんゆんの方に視線を向ける。
「ちょうど居合わせた二人組の紅魔族の少女が討伐したって言うんだよ」
「ふふふ、いかにも！その女悪魔アーネストを屠ったのは我が爆裂魔

法です！」
　クリスの言葉に自信満々に答えるめぐみん、驚いたなホーストを討伐する前にすでに悪魔を討伐していたなんて。
「何偉そうに言ってるのよ！他の冒険者さんが守ってくれてたからでしょうが！」
「それにしたって……お前らよく無事だったな」
「ふふふ、それはこれのお陰です！ほら、ゆんゆんも」
「え～、仕方ないなぁ……。」
　完全に天狗になっているめぐみんが懐から何かを取り出そうとし、彼女に言われてゆんゆんも懐から何かを取り出す。めぐみんが取り出したのは白い石、ゆんゆんが取り出したのは黒い石。どちらも全く同じ形状をしていることから自然にできたものではないことは明らかだった。
「なにこれ？」
「ただの石に見えるが……。」
　ダクネスとクリスはめぐみんとゆんゆんが取り出したものをまじまじと見つめている。だが、俺は二人が取り出したそれを見た瞬間目を見開いた。
「嘘だろ……。」
「カズマくん、どうしたの？」
「様子がおかしいぞ？」
　無意識に口から溢れた言葉と俺の唖然とした態度から只事ではないと思ったのか二人が心配してくれるが今はそれどころじゃない。
　俺は生唾を飲み込み今にも確認のために二人の手からひったくりそうになる衝動を抑えながら、めぐみんが持つ白い石とゆんゆんが持つ黒い石を見つめる。
「ダークストーンとライトストーン……？」
　二人が持つその白と黒の石の名を呟いた。
　それは正しく、イッシュ地方に伝わる真実と理想の神話。そこに現れる二体の大いなる竜、彼らがその身を石に変えた姿そのものだったからだ。

かつて俺もその眠りを覚まさせたことがあるからわかる。この独特の感覚、これは間違いなく本物のライトストーンとダークストーンだ。

――だが、何故だ？

何故イッシュ地方に伝わるこれがここにあるッ!?

「めぐみん、ゆんゆんこれを一体どこで？」

「えっと、私はめぐみんにもらったんですけど……。」

「――ふふふ、ついに語るときが来たようですね。我が大いなる過去を」

「また始まった……。」

よくぞ聞いてくれましたと言いたげなめぐみん、だが対象的にゆんゆんは呆れたような視線を向けている。そんな様子を無視してめぐみんはライトストーンとダークストーンを手にした経緯を話してくれた。

「あれはまだ私が幼いときの話です。とある理由でモンスターに襲われていた私はとある二人に助けられました。

一人は爆裂魔法を操る魔法使いのお姉さん。ただ、お姉さんが撃った爆裂魔法の音で新しいモンスターが次々と現れまして……。」

爆裂魔法は一度撃ったら基本的にもう魔法は使えない、それだけ必要となる魔力が膨大なのだ。そうか、めぐみんの爆裂魔法への思いはそれがルーツなのか。

「その時に現れたんです。巨大な白と黒の竜を従えたお兄さんが」

「白と黒の竜……。」

「そのお兄さんは竜に指示を出して現れたモンスター達を次々となぎ倒していったんです！あの雷鳴と爆炎、そして竜の背に乗った威風堂々たる姿に私は憧れたのです！」

まるで子供が物語に出てくるヒーローの話をするように目をキラキラさせながら熱く語るめぐみん。ゆんゆんは何度も聞いた様子でうんざりしたような顔をしていた。

俺はめぐみんの話を真剣に聞きながらその竜使いの青年について考えていた。

白と黒の竜。まさか、レシラムとゼクロムのことなのか？いや、状況から言ってその二体の可能性が極めて高いか。
「私はお姉さんの爆裂魔法に憧れ、そして、竜を従える青年にも憧れました。いずれ、あんなふうになりたいと！だから、フカマル。貴方が生まれてきてくれたときは本当に嬉しかったのですよ」
「カフッ！」
しゃがみこんでフカマルの頭を愛おしそうに撫でるめぐみん。
めぐみんがドラゴンタイプに拘る理由は一目惚れじゃなかったってことか。
そして、苦笑いをしながら俺に視線を向ける。
「実を言うと、リザードンを連れているのを見てもしかしたら、あの人がカズマなんじゃないかと思ったのですが。違いますよね……十年近く前の話なのでどう見ても年が合わないですし」
「だろうな、俺も身に覚えがないし」
「爆裂魔法のお姉さんはともかく竜使いのお兄さんに関しては夢でも見たんじゃないのって言ってるんですけど、頑なに認めないんですよ」
「あたりまえでしょう！あの感動を夢で片付けられてたまるものですか！」
「でもいくらなんでもありえないじゃない、そんなドラゴンを二体も従える人がそうそういるわけ――――」
「じゃあここにいるこの人は何なんですかっ！」
「あっ」
めぐみんの話の内容を否定するゆんゆんだったが、めぐみんが俺の方をビシッと指差すと言葉に詰まった。
いや、確かにウオノラゴンとかジュラルドンの他にもドラゴンタイプは持っているけど俺じゃないぞ、そのドラゴンつかいの青年は。
流石に話が進まないのでクリスが仲裁に入った。
「はいはい、それで？その石のおかげで悪魔を倒せたってどういうこと？」
「あぁ、そうでした。この石は私達がピンチになるといつも光りだす

んです、紅魔の里やアルカンレティアでもモンスターに襲われたときに強い光を発したんです」
「馬車のときもその光に怯んだスキに爆裂魔法でトドメを刺してました」
石が、いや、レシラムとゼクロムが二人を護ったのか。
だとするなら、考えられることはたった一つしかないだろう。
「――その石、絶対になくすなよ」
「え？」
「カズマさん？」
至極真面目な顔でそういった俺に二人は面食らってる様子だがちゃんと伝えなきゃいけないことだ。
「これからお前らがどんなピンチに陥ってもその石がきっと守ってくれる」
「カズマはこの石がなんなのか知ってるんですか？」
「もしかしてメガストーンと同じでポケモンに関係するものとか？」
「今は言えない……ただ、その石がお前達を守ったってことは、きっとお前達が強くなるのを待っているはずだ」
俺やNが選ばれたように……もしかしたらこの二人も……。考えすぎだろうか。
「……。」
だが、そもそもなぜライトストーンとダークストーンがここに……。キーストーンやメガストーンとはわけが違う。なにせ姿が石とはいえ伝説のポケモンだぞ。
まさか、俺以外にもポケモンをこの世界に連れてきたやつがいるのか？
これは、エリス様に相談する必要がありそうだな……。

この素晴らしいキャベツ収穫で進化を！

――二人から石を見せてもらった数日後。

俺達のパーティは午前中に簡単なクエストを済ませて、一緒に昼食を取ろうということになった。

「……。」

壁際の席に座っている俺は、ギルドの窓から晴れ渡った空を見上げていた。頼んでいたパスタの皿はとっくに空になっている。

ギルドは相変わらず冒険者たちの喧騒が聞こえてくるが、なぜだか俺の耳には酷く遠くからのものに聞こえた気がした。だが、すぐ隣からの声は流石にしっかり聞こえる。

「カズマくん、カズマくん」

「お～」

「ちょっとロトム君、貸してくれる？」

「お～」

隣に座っていたクリスに頼まれてポケットからロトムを取り出してクリスに預ける。最近、クリスはロトムに搭載されているポケモン図鑑でかわいいポケモンを見るのが日課になっている。癒やされるんだそうだ。

『クリス、またロト～？』

「いいじゃん、減るもんじゃないし」

「あっ、私もいいですか？」

「いいよ、いいよ、ゆんゆんも一緒に見よ！」

そういえば、いつのまにかさん付けじゃなくなったらしい。パーティメンバーになったし年下なんだからもっと気軽に呼んでほしいって……ゆんゆんなりに勇気を出したんだと思う。めぐみんもちゃんづけじゃなくなった、こっちは普通に子供扱いが嫌だったらしい。

ただ、俺はそんな二人をチラ見しただけで、すぐに空へと視線を戻した。

――ライトストーンとダークストーンをめぐみんとゆんゆんに

見せてもらったあと、宿屋からエリス様に連絡したときのことを思い出していた。

～～～

ついての資料を見返してみたのですが、そんな人物はいませんでした』
　エリス様の返答に俺も戸惑う。
　だとしたら、あのライトストーンとダークストーンは一体……。
『カズマさん、図々しいお願いだとは思うのですが……。』
「わかってます。俺のパーティメンバーが持ってるものですし、俺が監視しておきます。なにかわかったら、連絡しますので」
『ありがとうございます。こちらでもなにかわかりしだい――――』
『ポチャアアアアア!!』
『いったぁぁぁぁぃ!!』
　エリス様がなにか言い終える前にポケモンの鳴き声とアクアの悲鳴が聞こえてきた。遠くから聞こえてきたので前みたいに耳からスマホを離すことはないけどそれでもまぁまぁうるさい。
　エリス様が『ちょっと待っててください』といってスマホの側から離れ多分、おつきの天使（この前教えてくれた）さんらしき人との会話が聞こえる。ただ、通話中なので会話の内容は全部聞こえてきた。
『なにごとですか？』
『あっ、エリス様！それが、アクア様がカズマさんから預かっているポケモンのお世話中にペンギン？という動物に似たポケモンをいきなり掲げて『この子を我がアクシズ教団のマスコットにするわ！』とかろくでもないこと言い出して、怒ったその子にビンタされまして』
『……。』
「……。」
　エリス様も俺も呆れて言葉が出ない。何やってんだあの駄女神。
　多分、アクアを引っ叩いたのはポッチャマだろう。見た目は小さなペンギンのようで可愛らしいポケモンではあるがその実かなりプライドの高いポケモンで有名だ。ポッタイシ、エンペルトと進化するたびに群れを率いる役目を担うため孤高であろうとするからだ。
『わかりました、そのポッチャマは私が後でなんとかしておきますので、アクア先輩はしばらくポケモン達に近づけさせないでください』
『了解しました！』

エリス様の指示を聞き天使さんが出ていく音が聞こえる。ただ……なんだろ今の会話。何か、違和感があったような気が。
その違和感の正体を探る前にエリス様の声が聞こえてきた。
『もしもし、すみませんお話の途中に』
「いえ、こっちこそうちのポケモンが迷惑かけたみたいで……。」
『構いませんよ、私達女神や天使は基本的に魂を導くこと以外仕事がありませんので寧ろ楽しいとさえ思ってます』
なら良かったとホッと胸を撫で下ろす。
あっ、そうそう、前々から聞こう聞こうと思ってたことがあったんだった。
「あと一ついいですか？」
『はい、私に答えられることなら』
「俺の記憶についてなんですけど……」
『記憶、ですか？』
俺はエリス様に俺の記憶に起き始めた変化について話した。ゲーム世界でポケモンたちと旅をしたことからゲームの画面ではわからない旅の間に起きた小さな出来事、旅の中で出会った人達から教わった小さな技術まで受け継がれてることを説明する。
『……カズマさんよく聞いてください』
「はい？」
『それは私達によるものではありません』
エリス様の返答に一瞬頭が真っ白になった。
「えっ、それじゃもしかして、俺の妄想……。」
『いえ、そうでもありません。そこまではっきり記憶に残っているということは間違いないでしょう。ですが、私達は転生の際に能力や武器を与えることはできても記憶を追加したり操作したりすることはそもそもできないんです』
する、しないではなく、できないか。
でも、エリス様達や俺の妄想の線もないなら一体この記憶はなんなんだろうか。
『私に一つ心当たりがあります』

「それは？」
『アルセウスです、貴方のポケモン世界での冒険を知っていてそんな事ができる存在がいるとしたら私達と同等の力を持つアルセウスくらいでしょう』
　アルセウスが……確かにそれくらいしか説明がつかない。だけど、どうしてアルセウスが……。
「というか、アルセウスがエリス様と同等の力って」
『カズマさん、私達は貴方のポケモンを現実の存在としたんです、アルセウスが全能の神として存在していたなら当然、その力は私達と同等のものです。だからこそ、アルセウスや伝説のポケモンたちは私達の監視下にあるんですから』
　エリス様の言葉に俺は納得する。そういえばそんな話だった気がする。
『――アルセウスはよくここから貴方の姿を見ています。きっとここから貴方を見守っているのでしょう』
「アルセウス……。」
　俺は窓の外から見える星空、その上にある天界で今も俺を思って見守っていてくれるアルセウスの姿を思い浮かべ、目尻に涙が浮かんだ。例え、離れていてもアイツは俺を守ってくれてるんだと感動したからだ。
『――そのアルセウスがしたことならおそらく貴方の助けになることだと考えたからだと思うので、そのことについては心配いりません』
～～～

「なんだよ、じゃないよ。いつまでも空を見てボーッとしちゃって」
「どうしたんですか、カズマ。最近ずっとですよ？」
「あっ、あー……イーブイの進化について考えてたんだよ！」
　どうやらアルセウスのことを考えていたせいで上の空だった様子の俺はクリスとめぐみんの言葉で我に返った、ゆんゆんとダクネスも心配そうに俺を見ていた。
　四人に心配をかけないように俺は適当な答えを返した。
「イーブイの進化、ですか？」
「そういえば、聞きそびれていたがポケモンの進化とは具体的にどんなものなんだ？」
「前は簡単に話してくれただけでしたよね？」
「どうせだし、詳しく教えてよ」
　誤魔化しのつもりで言ったが四人から質問攻めにあい、腕を組んで う～んとうなりながらどう話したものか考える。
「簡単に言うなら一定の条件が整うと起きる現象だな」
「一定の条件？」
「代表的なのは経験値を上げて起こる場合、これはトゲピー以外のお前らのパートナーに当てはまる」
「トゲちゃんは違うの？」
「トゲピーはトレーナーへよく懐いているときに進化する、通称なつき進化だな。だから、ぶっちゃけトゲピーに関してはいつ進化してもおかしくないんだ」
「へぇ～、だってさ！楽しみだね、トゲちゃん！」
「チュキィ！」
　相変わらず腕の中に抱いているトゲピーに笑顔で話しかけるクリス。トゲピーに関してはあれだけ懐いてるし戦わせなくても進化するだろうな。
「あとは、アイテムを使って進化させる場合とか、一定の時間にレベルアップするとか、ある技を覚えさせてのレベルアップとか結構種類があるんだな、これが。で、同じポケモンでも方法を変えることで進化先が全く変わるポケモンもいるんだ」

「「へぇ～（ほう）」」
俺の説明に感心の声を漏らす四人。
これは後で知ったことだが、どうやらこの世界のあらゆるものには魂が宿っているらしく、例えば食べ物を食べてその魂を取り込むことでレベルアップすることもできるそうだ。
「それらの条件を満たしたときに能力や姿が変化すること、これをポケモンの進化というわけだ。わかったか？」
「なるほど！」
「勉強になりました！」
めぐみんとゆんゆんをはじめクリスとダクネスも頷いてくれてるから皆ちゃんと理解してくれたらしい。
ナナカマド博士みたいに進化を専門で研究しているわけじゃないが、ちゃんと説明できてよかった。
「さて、そんな進化だがそれを代表するポケモンがいる。な、イーブイ？」
「ブイッ！」
「ブイちゃんが？」
「イーブイは厳しい環境に対応するために様々な進化先があるポケモンなんだ、その数は八種類」
「「「八種類!?」」」
四人はその数に驚きの声を上げて、まじまじとイーブイのことを見つめる。
「だから、悩んでたんですね」
「まぁ、八種類もあればね……。」
「俺はイーブイが望む進化先にさせてやりたいんだが……。イーブイも迷ってるようで、なにかきっかけがあればいいんだが……。一応、自然に進化しないようにこいつをもたせてるんだけど」
俺はイーブイを抱き上げて首元につけてある紐を通した石を皆に見せる。
「なんですかこれは？」
「『かわらずのいし』っていうアイテムでな、持たせてるとポケモンが

進化しなくなるっていう石なんだ」
「ほぉ～、そんなのもあるんですね」
「進化しないほうがいいって人もいるだろうし、需要はありそうだよね」
かわらずのいしを眺める四人。
もうこっちの世界に来て三ヶ月近くたつし、そろそろ進化させるのがイーブイのためだと思うし……イーブイ自身は別に進化を嫌がってるってわけじゃなさそうだから、やっぱりさっきも言ったけどきっかけが必要なのかなぁ……。
――そう思った矢先だった。
『緊急クエスト！緊急クエスト！街の中にいる冒険者の各員は、支給冒険者ギルドに集まってください！繰り返します。街の中にいる冒険者の各員は、支給冒険者ギルドに集まってください！』
魔法か何かで拡大された大音量の音声が街中に響き渡った。
「なんだ？街にモンスターでも襲撃してきたのか？」
今までにない状況に俺は戸惑いを隠せないでいると、めぐみん達は特に気にした様子もなく、落ち着いた様子で俺に答えた。
「多分、キャベツの収穫だろう」
「そういえば、もうそんな時期だっけ？」
「はい？」
当たり前のようにそう口にした二人に俺は耳を疑った。
～～～

この世界のキャベツは飛ぶらしい。味が濃縮してきて収穫の時期が近づくと、簡単に食われてたまるかと言わんばかりに。街や草原を疾走する彼らは大陸を渡り海を超え、最後には人しれぬ秘境の奥で誰にも食べられずひっそりと息を引き取るという。

「皆さん！今年のキャベツは出来が良く、一玉の収穫につき1万エリスです！すでに街中の住民は避難していただいています。では皆さん、一玉でも多くのキャベツを捕まえ、ここに納めてください！くれぐれもキャベツに逆襲されて怪我をしないようお願いいたします！なお、人数が人数、額が額なので報酬の支払いは後日まとめてとなります！」

「「「「うおぉぉぉぉぉ!!」」」」

大きな檻を台車で転がしながら持ってきた受付のお姉さんが拡声器でいうと、冒険者たちから歓声が上がる。このクエストはキャベツの買取額がいいことからボーナスクエスト扱いらしい。

そんなこんなしていると、キャベツたちが俺達のもとまでやってくる。

「ロトムは隠れてろよ」

『了解ロト！』

ロトムは俺に言われると一目散に俺のポケットに隠れた。中のロトムは無事だろうけど、俺のスマホはそうは行かないだろうからな。

「キュウコン、頼む！」

「コーンッ！」

俺は呼び出しておいたボールから美しい毛並みの白い狐のようなポケモン、きつねポケモン、キュウコンのアローラの姿を呼び出した。アローラ地方でゲットした俺のお気に入りの一体だ。

一説では神の化身と言われるだけあってその姿は美しいの一言で表せないものだった。こんな状況でなければ、皆が見惚れていることだろう。しかし、すでにキャベツとの戦いのゴングは鳴っている。

「キュウコン、『ふぶき』っ！」

「コーンッ！」

キュウコンが放った凄まじい吹雪によってキャベツ達は氷漬けに

なってゴトゴトと地面に落ちていく。俺はそれをギルドで借りた籠に入れて檻の方に持っていく。そして、氷漬けになったキャベツを放り込む。
「よし、メラルバ。頼む」
「メラ～」
俺が合図をすると俺の近くで待機させていたメラルバが体から熱を放つと氷が溶けると言った具合だ。俺はその方法を繰り返しながら、仲間たちの様子を見ていく。
前衛職のダクネスは、すでに最前線にいるのだが……振っている剣がキャベツにかすりもしない。
――あのあと、クリスに聞いたんだがダクネスは不器用すぎて剣がまともに当たらないのだそうだ、タンクとしては一流なんだが、それが残念である。
「あぁっいいっ！いいぞっ！もっと来いっ！」
実際他の冒険者をキャベツの突進から庇ってるように見えて、実は自分が楽しんでるだけだったりする。あれ？ダンバルは？と思い、あたりを見回すとなんかボスっぽい目元に傷があるキャベツと対峙していた。
「ダァン……！」
「キャベェ……！」
一瞬の睨み合いの末、同時に飛び出してぶつかり合う。それを何度も繰り返す、なんだ、あの長年のライバルと戦うみたいな雰囲気は？
『ライトニング』！」
そんなことを思っていると、近くのキャベツが雷に貫かれて地面に落ちる。雷がきた方向を見ると、そこにはワンドを構えたゆんゆんが、さらに足元にいるラルトスが青く光ると落ちたキャベツがひとりでに浮かび上がり檻の方に向かっていった。
「なるほど、ゆんゆんが魔法で倒してラルトスが『ねんりき』で回収か。あれ？そういえば、俺のパートナーはどこいった？」
さっきまで、一緒にいたんだが。
「ブイ～……。」

あたりを見回してみるとイーブイはキュウコンの直ぐ側にいた。
というか、キュウコンを見ていた。ただ、なんというか、キラキラした目で見ているというか……。
もしかしたら、キュウコンと会わせたのがいいきっかけになったか？
「『エクスプロ――――――ジョン』!!」
「!」
と、今度はめぐみんの爆裂魔法がキャベツ達を焼き尽くした。
相変わらず、爆裂魔法を撃ったあとに倒れるのは変わらないようでそのままぶっ倒れる。そんなめぐみんに狙いを定めたのかキャベツたちがめぐみんに襲いかかる。
「ガブッ!」
だが、めぐみんの側から飛び出したフカマルがサメのようにキャベツに喰らいつき、そのままムシャムシャと咀嚼して食べてしまった。別に討伐してもそれなりのお金はもらえるらしいからそれでもいいかもしれないが……。
「カフーッ!」
「あっ、フカマル!」
キャベツを一玉丸々食べ終えると、フカマルはめぐみんが呼び止めるのを無視して目をキラキラと光らせて他のキャベツに飛びついていく。フカマル、お前りくざめポケモンのくせにベジタリアンだったのか……そういえば、よく俺にきのみをねだってきてたな。
「すげぇな、あのちっこい……サメ？」
「ドラゴンです……!」
フカマルの様子を見ていた冒険者の誰かがフカマルをサメと間違えたが、秒でめぐみんが否定した。いや、りくざめポケモンでもあるから、サメでもあってるんじゃ……。
なんとなく、フカマルの様子が気になったのでキュウコンが凍らせたキャベツを回収しながら見ていると五玉位食べ終えたあたりで満足したのか腹をポンポンと叩いてケフッと一息する。
「カフッ？」

「えっ、フカマル？」
――そして、そのときはやってきた。
フカマルの全身が青く発光を始めたのだ。
「えっ？えっ？カズマ、これはなんですか？フカマルになにが！」
「これは、まさか……。」
「カズマくん、これなんなの？」
キャベツを檻に入れる為に戻ってきていたクリスが尋ねてくる。ちなみ、クリスのトゲピーは危ないのでルナさんが預かってもらっている。
「――進化だ」
「なぁんだ、進化か……って進化!?」
「し、進化って、カズマが言っていたあの進化ですか？」
驚愕しているクリスの隣から、立ち上がるくらいの体力が戻ったためぐみんが杖で体を支えながらヨロヨロとこちらに近づきながら問うてきた。
「あぁ、ラルトスとダンバルはそろそろだと思ってたけど……まさか、二人より先にフカマルが進化するとは……。」
「もしかして、キャベツをいっぱい食べて経験値を得たからとか……。」
「それでいいのかドラゴンタイプ……。」
クリスの予測に多分、というか間違いなくそれだろうと思いながら呆れた。
キャベツを食べて進化って……長いことポケモンと一緒にいたがそんな話聞いたことがないぞ。あっ、りんごで進化ってのはいたな。
そんなことを呑気に考えてるうちにやがて光によってフカマルの姿が完全に見えなくなり、その輪郭すらも変えていく。その幻想的な姿に冒険者も、キャベツさえもその動きを止めていた。
口元が特徴的だった小さな体は小さかった手足がはっきりと区別ができるサイズになり、その両手には鋭い爪がある。体長も０．７ｍしかなかったのに対し倍の１．４ｍにまで大きくなる。
「ガァバッ！」

やがて変化が終了し、光が晴れるとそこにいたのは誰が見てもドラゴンだとわかる姿をしたポケモン、ガバイトが勇ましい咆哮を上げて。
「無事に進化したな……。」
「これが進化……初めて見たけど凄いね、これは……。」
無事に進化が完了しほっとする俺と初めて見るポケモンの進化にどこか呆気にとられているクリスを放って、フカマル、いやガバイトのパートナーであるめぐみんが爆裂魔法で体力が尽きているのにも関わらずよたよたとガバイトに近づく。
「……フカマル？」
「ガバ？」
心配げな声音で進化したガバイトに話しかけるめぐみん。ついさっきまで自分の足元にいたフカマルが今はまるっきり姿を変えて自分と同じ目線のところにいるのだから、戸惑うのは当然だろう。
俺も始めてギルガルドを呼び出したとき自分のことを覚えているか心配だった。多分、今のめぐみんと似た心境だろう。
ただ、そんな俺達の心配とは裏腹に――――
「ガァバッ♪」
「うわっ！」
――――ガバイトは笑ってめぐみんに抱きついた。
「ギャァバ！」
「……く、くすぐったいですよフカマル！」
嬉しそうな声を出しながら擦り寄る姿に、ガバイトはちゃんと自分のことを覚えていてくれたという確信が持てたんだろうめぐみんの表情から緊張の色が消えた。
俺も一安心してめぐみんとガバイトに近づく。
「めぐみん、そいつはもうフカマルという名前じゃない。今のコイツの名前はガバイトだ」
「ガバイト……それが今のあなたの名前なのですか？」
「ガァバッ！」
めぐみんが名前を呼ぶと嬉しそうに鳴き声を上げるガバイト。ど

うやら、進化しても大して性格に変化はない様子だ。
　めぐみんに懐いているガバイトの姿に安心していると当然、ガバイトがめぐみんを俺に預けてキャベツ達に向き直った。
「ガバッ！」
「どうしたんですか、ガバイト？」
　キャベツを視界に収め、やる気満々のガバイトの様子に俺はもしかしたらと思い言葉をかけた。
「もしかして、新しい技を覚えたのか？」
「そうなんですか？」
「ガバッ！」
　めぐみんの質問に力強く頷くガバイト。
「「キャベー！」」
　そして、そこに丁度良く飛来するキャベツの群れ。
「ガバッ！」
　ガバイトが威嚇するように鳴くと彼の両腕に緑色のオーラが現れ、それが爪の形を形成する。そして、足に力を込めると一気に駆け出す。
「ガァバッ！」
　ガバイトとキャベツ達がすれ違うと、キャベツ達は羽のみを切り落とされてバタバタと地面に落下していく。
「あの技は……。」
「『ドラゴンクロー』。ドラゴンタイプの代表的な技の一つだな」
「凄いですよ、ガバイト！『ドラゴンクロー』を覚えたのですね！」
　ガバイトの鮮やかなドラゴンクローにめぐみんはいつの間にか完全に元気になった様子のめぐみん。
　それにしてもあのすれ違った一瞬で羽だけを斬り裂いてキャベツを落とすとは何という繊細さだ……一撃必殺をモットーとしているめぐみんのパートナーとは思えないな。
「ガバイト、貴方は好きにキャベツを倒してください。回収は私がしますので！」
「お前、魔力切れで動けないんじゃ」

「何言ってるんですか、パートナーがあんなにやる気なんです！ここで気張らずしてドラゴンつかいは名乗れません！」
「明日の爆裂魔法に響くんじゃない？」
「――――カズマ、オボンのみをください」
「最初からそういえよ」
　俺は念のために持っていた体力回復用のきのみ、オボンのみをめぐみんに渡してやった。人間にも多少は効果があるらしいことは、すでに実証済みだったからな。念のため。
～～～

体毛から氷の粒を生み敵に浴びせかける。怒らせると一瞬で氷漬けにされる。』
「なんだとっ!!?」
「コッ!?コーンッ！」
「ひょわぁぁぁぁぁぁ!!」
「だ、ダクネスッ!?」
ロトムの説明を聞いて、大声を出したダクネスに驚いたキュウコンが吹雪を浴びせかけてめぐみんの心配虚しく氷漬けにされてしまった。キャベツにやられて鎧もボロボロでおまけに氷漬けにされてるのになんて幸せそうな顔してやがる。
「メラルバ、ダンバル出してやれ」
「メラ～」
「ダン～」
うんざりした様子ながら、メラルバが氷を溶かしてダンバルが氷を砕いてダクネスを中から出してくれた。
「ふ、ふぅ～、氷漬けも悪くなかった……。」
「「大概にしとけ（きな）よ、ダクネス」」
全くこりた様子のないダクネスに俺とクリスがツッコむも、多分無駄に終わるんだろうなぁ。
「あ、あのカズマさん……。」
「どうしたゆんゆん？」
「進化ってあの光が合図なんですか？」
「そうだけど？焦る必要はないって、ゆんゆんのラルトスもそのうち」
「いや、そうじゃなくて……。」
「？」
「光ってるんです、ラルちゃん」
「「「!!!?」」」
ゆんゆんに言われて俺以外の三人も一斉にラルトスの方を向くと、確かにラルトスは全身から進化の兆候である青い光を放っていた。って、ちょっと待て！
「ダンバルとトゲピーも光ってんじゃん！」

「うわっ、いつの間に!?」
「気付け（なさい）よ!!?」
いつの間にか足元にいたトゲピーとダクネスの頭上にいたダンバルも進化の光を放っていた。
「また同時か」
孵化のタイミングと言い進化のタイミングも同じとは、仲がいいこった。
やがて、三体の進化が終了するとトゲピーだった光がクリスの目の前へと浮かび……いや、飛び上がる。
「チックチック♪」
「トゲちゃん!・トゲチックに進化できたんだ!」
トゲチックは丸っこかった体から首と手足が少し伸び、小さな白い羽で空を自由に飛び回っている。トゲピーのときは小さくて上手く動けなかったから、動き回れるのが嬉しい様子だった。
「クリス、なんでこの子の名前を知ってるんですか?」
「ロトムくんを借りたときに調べたんだよ、自分のパートナーの進化形くらい把握して起きたいし」
「ほ～、私は進化するまでの楽しみにしたいですけどね」
進化談義が始まったが俺はそれよりも他の二人だ。
「メタ～」
「キルッ♪」
他の二体も進化して、進化の喜びをパートナーに伝えるように笑っている。
「ラルトスの進化形のキルリアとダンバルの進化形のメタングだな」
「キルリアっていうんだ……。」
「キル～!」
「ふふ、じゃあ今日からキルちゃんって呼ばないとね」
「キ～ル」
ゆんゆんは足元にいる考えを読み取るための赤い角が二本になり踊り子のような姿となった、キルリアに嬉しそうに話しかけていた。
「メタング、まるでダンバルが腕になったような姿だな」

「メタ～」
「それが両腕になったということは、私への攻撃も二倍にっ！」
「メタ～」
「ん？何だこの光は、かっ、体が浮いてるっ!?」
　あいも変わらず変態発言をするダクネスが急に青い光に包まれて宙に浮かびだした。メタングの方を見ると、メタングの目が青く光っている。
「メタングの『サイコキネシス』か」
「や、やめろメタング！あっ、でもこれも焦らしプレイみたいでいいかもしれないいいいい!!」
　メタングは変態じみた悲鳴を上げるダクネスを浮かせたまま街の中に戻っていった。進化して更に立派になって、これからはダクネスへのツッコミは本格的にメタングに任せようかな。
「俺達も頑張らないとな、イーブイ？」
「ブイッ！」
　どうやらイーブイも自分の道を見つけられたようだし、キャベツ収穫クエスト。確かに色んな意味で美味しいクエストだったな。

このロトム屋敷と幽霊少女に幸せを！

「おい、クリス？ほんとにここなのか？」
「うん、間違いないよ。知り合いの魔導具店の店主さんから紹介された不動産屋さんがくれた家は」
俺とクリスとゆんゆんは今、アクセル郊外にある一つの屋敷の前に来ていた。今朝早くにクリスに呼び出された俺達は、パーティの拠点が手に入った！とはしゃぐクリスに連れられてここまで案内されたというわけだ。
めぐみんは宿からちょむすけを、ダクネスはアクセルの近くにある実家から荷物を取りに行っていて今はいない。
「しかし。まさかただでこんなでかい家をもらえるとは」
「本当はその魔導具店の店主さんがもらうはずだったらしいんだけどね」
「まぁ、幽霊屋敷なんて誰も欲しがらんだろうからな」
そう、ここをタダで手に入れられた最大のポイントは、この屋敷が幽霊屋敷だという点だ。まぁ、隣が共同墓地だから出ても仕方ないかもしれないが。そのせいもあってこの家は買い手が見つからないのだそうだ。
なんでも、クリスにこの屋敷をくれた店主さんは霊的なモンスターにめっぽう強いらしく、不動産屋さんでは浄化をしてくれるという条件でくれたというわけだ。
「でも、本当に出るんでしょうか？」
「問題ないよ、出たら出たでウチのリーダーがなんとかしてくれるって」
「正確には俺のゴーストタイプのポケモンが、だけどな」
そう、うちにはプリーストがいないが代わりにレイスやゴーストと同じ条件で戦えるゴーストタイプのポケモン達がいる。実際、何度かクエストでゴースト系のモンスターと遭遇したがゴーストタイプのシャンデラやゲンガーをぶつけたところ普通に倒せた。
仮に成仏できない魂だったとしても、そのときの策もちゃんと考え

てある。そっと腰につけてあるめぐみん達と同じクラフトタイプのモンスターボールにふれる。
「庭も広いし、きのみの栽培もできそうだな」
「とにかく中に入ってみようか」
クリスは預かっていた鍵で玄関の扉を開いて、俺達もそれに続いて中に入る。
意外なことに中は結構綺麗だった。不動産屋さんが定期的に掃除に来ていたんだろうか。
俺達はそれぞれ適当な部屋を自分の自室にする。俺が入った部屋は大きなベッドが備え付けてあるなかなか豪華な部屋だった。といっても、他の部屋にもベッドはあったから、これがこの屋敷の普通なんだろう。となると、ここは貴族の屋敷かなにかだったのかもしれない。
「イブイッ！」
「メラ」
「イーブイ、メラルバ。あんまりはしゃぐなよ」
大きなベッドに飛び乗り、ゴロゴロと転がるイーブイとノソノソと部屋を行き交うメラルバ。
「さぁて、俺は家具を置くとしようかね」
俺はスマホのアイテムボックスのページを開くと、『大切なもの』の欄にしまわれてるものの羅列を見る。
「まさか、これまでこっちに持ってこれてるとは」
こっちの世界にはないから助かるけどもさ。
～～～

「ドータ」
「ありがとうドータクン、戻ってくれ」
無事にキッチンの端にそれを置いてもらい、あとは自分でもできるのでドータクンにはモンスターボールに戻ってもらう。
そこへ、部屋に荷物を置き終えたのかゆんゆんがキッチンに入ってきた。
「カズマさん、これ冷蔵庫ですか？」
ゆんゆんは俺が持ってきた大きなオレンジの冷蔵庫を見ながら尋ねてくる。そう、俺がヒスイ地方でイチョウ商会のギンナンさんから買ったカラクリ箱こと冷蔵庫を。
こっちの世界にも魔法を使って作った魔導具としての冷蔵庫はあるが、家電としての冷蔵庫は俺が持ってるこれしかないだろう。
「そっ、でもただの冷蔵庫じゃないぞ」
俺は呼び出してあったモンスターボールを取り出すとそれがパカンと開いて中から見覚えのあるポケモンが出てくる。
「ケテテッ！」
「え？ロトム？」
「ロトム、頼むよ」
「ケテテッ!!」
ボールから出てきたロトムはコンセントから冷蔵庫の内部に侵入しモーターに取り憑く。すると、冷蔵庫にロトムのトレードマークである三角の角が現れ一番上の段にロトムの顔が現れる。
「カズマさん、これは？」
「フロストロトム、ロトムの姿の一つで冷蔵庫に取り付いた場合の姿だ。こいつにはうちの冷蔵庫兼盗難防止の留守番役を頼んだんだ」
『よろしく頼むロトよ、兄弟！』
『ロトトッ！』
万が一泥棒とかに入られて、スマホとかモンスターボールを盗まれたらたまったものじゃないからな。勿論、イタズラはするなと言ってある。
ロトム曰く、この家電の中は結構心地良いらしく頼んだら二つ返事

でオッケーしてくれた。
　さて、ダクネス達が来るまでに残りの家具も配置しておかないとな。
「カズマく～ん！」
「はいは～い！」
　クリスに呼ばれて、俺は洗面所の方に向かう。そこには案の条、思案顔のクリスとさっき置いておいた洗濯機、その中に取り憑いたウォッシュロトムがいた。
「これってロトムだよね？」
「ああ、ウォッシュロトム。洗濯機の中にロトムが入ってもらってるんだよ」
「せんたくき？」
　クリスは俺の言葉に首を傾げて疑問符を浮かべる。
　おや？　この世界、冷蔵庫はあるのに、洗濯機はないのか？　確かに洗濯に関しては、自分でやろうと思えば手洗いできるから冷蔵庫ほど必要性はないかもしれないけど。
「それじゃあ、試しに使ってみるか」
　俺は今日洗濯するためにしまっておいた土汚れのついた白いシャツを部屋から取ってきて、洗剤と一緒にウォッシュロトムの腹の部分に入れる。
「こうやって汚れた服と洗剤を入れて、よし、ロトムよろしく」
『ロト！ロトトトトトト!!』
　洗濯が始まりガタガタとウォッシュロトムの体が揺れる。それが止まると、ウォッシュロトムの腹が開いて中から脱水まで終わって、新品のように真っ白になったシャツが現れる。
「と、このようになるわけだ」
「あら便利ー！」
　真っ白になった俺のシャツに触れながら、ウォッシュロトムの有用性がわかったクリスが目をキラキラさせてロトムを見る。
「他にもロトム達はいるから一回全部説明しようか」
「ゆんゆんも呼んでくるよ」

「頼む」
～～～

カットロトムだな」
『ロ～ト』
『ロトトッ！』
　さっきまでいなかったダクネスとめぐみんにもウォッシュロトムとフロストロトムの説明をして、残り二体のロトムの説明もする。電子レンジに取り憑いた赤いロトム、ヒートロトムと扇風機に取り憑いた黄色いロトム、スピンロトムが宙を浮いている。
「スピンロトムは見たところ風を送る役目でしょうけど、ヒートロトムは何をしてくれるんでしょうか？」
「食べ物を温めたりお菓子を焼いたり、いわゆるオーブンとか窯の役目をしてくれるんだよ」
「ほう、それは便利そうだ」
　どうやら洗濯機と同じで電子レンジも扇風機もこの世界にはないらしい。俺が作るのは無理だけど、魔導具とか作る専門の人にアイディアを教えたら売れるかもな。
「俺達が留守の間はコイツらに家のことを頼んだ。ちゃんとお礼言っとけよ」
「「「よろしくおねがいしまーす!!」」」
『『ロトトッ！』』『任せるロト！』
　皆のお礼にヒートロトムとスピンロトム、スマホロトムが答えた。ロトム達の統括は人間の言葉で喋れるスマホロトムに任せてある。
「というか、カズマくんなんでこんなにロトム持ってるの？」
「大量発生のときにゲットしたんだ」
「大量発生？」
「偶にあるんだよ、特定のポケモンが大量に現れるときが。ヒスイ地方では図鑑を作るのが俺の仕事だったからな、ケースは多いほうがいいってことで、こうして複数体ゲットしたんだ」
　それにロトムは結構珍しいポケモンだったし、折角の大量発生ならってことでゲットしておいた。電気で動く道具なんてほとんどないあの世界で家電を手に入れられたのはラッキーだったとしか言えないな。

「もはや、幽霊屋敷というよりロトム屋敷ですね」
「確かにな」
キッチンに戻っていくヒートロトムとリビングに留まるスピンロトムを見ながら言ったためぐみんのジョークに俺も皆も得心した。
〜〜〜

イーブイはスピンの回転する羽を見て、俺が子供のときにやったたような扇風機の前であ～っていうのをやる。その姿が面白くて、つい吹き出してしまった。
「へぇ～、そんなこともできるんだ」
「まぁな、クリスたちも今度からやってもらったらどうだ？　髪は早めに乾かしてないとすぐに傷むっていうしな」
「そうだねぇ。確かに髪は女の子の命って言うし大事にしないとね」
トゲチックを抱いた、クリスと話しながら乾いたイーブイの毛を愛用のブラシでブラッシングする。
「ブイ～～～」
「気持ちいいか、イーブイ？」
「ブイッ！」
「「「……。」」」
イーブイのブラッシングにもスッカリ慣れたので、手を動かしながらさっきからこっちをジッと見つめる四つの視線の持ち主を見る。
「あの、やりづらいんだけど……。」
「あっ、ごめんなさい」
「やっぱり上手いなと思いまして」
「ああ、なんというか……長年の経験を感じる」
「あたしはほら、トゲちゃんがトゲキッスに進化したら自分もやらなきゃいけないから見学だよ」
トゲチックの進化形トゲキッス。確かにトゲキッスはトゲピーやトゲチックのようにタマゴのような姿ではなく、イーブイのようなフワフワの体だからな。
ただ、トゲチックをトゲキッスに進化させるには。
「トゲキッスか……なら、『ひかりのいし』を探さないとな」
「「「『ひかりのいし』？」」」
「ロトム」
『ロト？』
「あっ、ゴメン。スピンのほうじゃなくてスマホのほう」
『呼んだロト？』

「皆に『ひかりのいし』の画像を見せてやってくれ」
『了解ロト』
　スマホロトムはひかりのいしに関するデータのページを開き、その画像を皆に見せる。そこには半透明だが中心で太陽のように光る光源のある実に不思議な石だった。
「それが『ひかりのいし』。ポケモンを進化させる力を持つ進化の石の一種だ」
「一種ってことは他にもあるんですか？」
「あぁ、主にほのおタイプを進化させる『ほのおのいし』やみずタイプを進化させる『みずのいし』、くさタイプを進化させる『リーフのいし』。あとはあくタイプやゴーストタイプを進化させる『やみのいし』なんてのもある」
「トゲちゃんを進化させるには『ひかりのいし』が必要ってわけだね。お宝探しは盗賊の得意分野、きっと見つけてあげるからね、トゲちゃん」
「チックチック♪」
　やる気満々のクリスとトゲチック。ひかりのいしかぁ……まっ、俺が探してるのはその石じゃないし見つけたらプレゼントしてあげるかね。
　そんなことを思っていると、ダクネスが何かを思い出したように口を開いた。
「ゴーストタイプといえば、ここに出る幽霊というのはどういう幽霊なのかクリスは知ってるのか？」
「な、なんでこんな時間にそんな話をしだすんですか！」
　ダクネスが口にした話題に、めぐみんが目に見えて動揺を顕にする。それを見るなり、いつも弄られているゆんゆんが日頃の恨みとばかりに畳み掛ける。
「なに？　めぐみん、怖いの？」
「こ、怖くないわい！　そっちこそ、怖いんじゃないんですか？」
「私？　私は別に？」
「ぐぬぬぬ」

実際、ゆんゆんは怖がってる様子はない。こういうときはゆんゆんのほうが肝が据わってるのかもしれないな。
「ここに出る幽霊か、話は聞いてるよ。というか街ではちょっと有名だよ」
「聞いてもいいか？」
「ちょ、カズマ！　なんで聞くんですか！」
「怖いんなら耳でも塞いどけよ、なんならもう寝たらどうだ？」
「怖くなんてありませんよ！　で、でも、ここまで言われたら気になって眠れませんよ！」
ハァ……相変わらず強がりというか弱みを見せようもしないというか。仲間の前でくらい気を抜いてくれてもいいのに。
「なんでも昔ここに住んでた貴族とメイドの間に生まれた隠し子らしいんだ。ただ、やっぱりメイドと貴族の間に生まれた子ってことで世間体に悪いってことで疎まれてたらしくて」
「……幽閉か」
「……うん。おまけにその子、父親は早くに病死、母親は行方不明、その女の子も父親と同じで……親の顔も知らないまま亡くなったらしいよ」
「「「……。」」」
良くある話ではあるが聞いていて気持ちのいい話ではないな。
親の顔も、親から受けるはずの愛情も知らずに生を終えた少女か……。どんなに寂しい思いでこの世を去ったのだろう。
お通夜のような空気になってしまったリビング、その中で気を利かせたのか話をしたクリスがパンッと手を叩く。
「湿っぽい空気になっちゃったね、カズマくんなにか面白い話ない？」
「いきなりだな……でもそうだな、折角だから俺が体験したとっておきの恐怖体験でも話してやろうか？」
「え？　それは結構で……」
「なにそれ、面白そう！聞かせて聞かせて！」
「ちょ、クリス!?」
怖い話繋がりで恐怖体験を話してやろうと提案すると意外にも反

対のめぐみんをおしきって乗り気なクリスが声を上げる。
「じゃあ話すか。」
――あれは俺がカロス地方を旅していたときの話だ。
クノエシティという街に用があった俺はそこへ向かう途中道に迷ってしまってな、ある民家に辿り着いたんだ。
冷たい雨が降る夜中のことだった。
明かりのない家の中をおそるおそる探るのだけど誰もいる気配はなく俺はキッチンに立っていた。
冷蔵庫を見つけ開けるとうっすらと光が漏れ周りの様子がぼんやりとわかってきたんだ。そして、部屋の片隅にうずくまる一人の男の人を見つけたんだ。
俺は迷ったこと、一晩止めてほしいことを男の人に伝えるために近よろうとすると……男の人は『来るな！』と叫んだんだ。
俺は謝りつつ『すみません、助けてください』と男の人に頼もうとすると『お前じゃない！』と……俺は驚き男の人をじっと見つめた。
すると、男の人はこう尋ねてきた……『お前には見えないのか？お前の後ろには……
「――顔のない男ばかりだぞ!!』」
「キャアアアアア!!!!」
俺が話のしめを真似て皆の後を指さしながら叫ぶと年少の二人組が抱き合いながら悲鳴を上げた。俺はその様子を笑いながら二人に話しかけた。
「ハハハ、悪い悪い。俺の体験ってのは嘘、これは人づてに聞いただけの話さ」
そう、これはカロス地方の１４番道路、そこにある怖い家という場所で聞いた話だ。
そのことを教えてやるとゆんゆんが涙目で尋ねてきた。
「じゃ、じゃあ、本当の話じゃないんですか？」
「さて、どうかな？　本当の話かもしれないし、作り話かもしれない。もしかしたら、ゴーストポケモンのイタズラっていう線もあるかもな」

「「そ、そんなぁ……。」」
俺の煮えきらない返事にへたり込む二人組。ただ、ダクネスとクリスはそれほど怖がってる様子はなく二人の様子を見て微笑ましいものをみたような笑顔を向けている。
「さて、夜ももう遅い。今日は寝ようか」
「「そうだな（ね）」」
「ちょ、ちょっと待って下さい！　あんな話しといて、いたいけな少女を一人で寝かしたりしないですよね？」
「何言ってんだ、ひとりじゃないだろ？　ちゃんとパートナーがいるじゃないか」
俺は壁に寄りかかったまま眠りについたガバイトとキルリアとメタングを指差す。ついでにちょむすけも。
「「もう寝てるし!!?」」
二人のツッコミを無視して、俺達はリビングから出る。勿論、ダクネスはメタングをモンスターボールに入れてから、俺はメラルバを抱いてからだ。
「それじゃおやすみ～」
「ああ、おやすみ」
「おやすみ～」
「チックチック」
「ちょ、ちょっと待って……！」
「そんなに怖いなら、今日は二人で寝ろよな。じゃあ～」
俺達は二人を置き去りにして、それぞれの自室へと戻っていった。
～～～

「――――来たか」
噂をすれば影とはいうが、まさかこんなにあからさまなタイミングで来るとはな。俺は扉の向こうでノックをする相手に警戒しながらイーブイとメラルバを布団で隠して、モンスターボールを構える。
油断しないように警戒しながらドアへと近づく。
すると。
「カズマぁ～」
――――扉の向こうから聞こえためぐみんの泣きそうな声にずっこけそうになった。
「めぐみん、こんな時間にどうしたんだよ……。」
「私もいますぅ～」
ゆんゆんもかよ……。
俺は呆れながらも、扉を開ける。そこには、パジャマ姿のめぐみんとゆんゆんが予想通り泣きそうな顔でそこに立っていた。
仕方ないので、明かりをつけて二人を部屋に入れてベッドに座らせる。
「で、どうしたの？」
「ね、眠れなくて、その……。」
「ゆんゆんも？」
「は、はい……。」
めぐみんはもう強がる気力もない様子で枕を抱きしめ、ゆんゆんも申し訳無さそうに頭を下げる。俺は頭をかきながら、ため息を吐く。
まぁ、あんな話をした俺にも責任はあるしな。
「わかったよ、眠くなるまで話し相手になってやる」
「ありがとうございます、カズマ（さん）！」
「シィーーー。イーブイ達が起きちゃうだろ」
俺が人差し指を口元に当てて注意すると、二人は両手で口を塞いでコクコクと頷く。
「で、何の話をしようか？」
「じゃ、じゃあ、カズマの旅の話を聞かせてくれませんか？」
「俺の旅をか？」

「あっ、私も聞きたいです」
二人共小声で喋りながらキラキラして目で俺を見ている。しょうがない、リクエストにお答えしようか。
にしてもどこの話をするか、イッシュはライトストーンとダークストーンの正体に触れてしまうし、かと言ってカントーは少し味気ないか。
「――そうだな、じゃあ俺がアローラ地方という場所を旅したときのことを話そうか」
俺は自分がアローラ地方を旅したときのことを語りだした。
――温暖な気候と四つの島から形成されていることが特徴的なアローラ地方。そこで出会った、不思議なポケモン、コスモッグを連れた少女リーリエ。
――ぬしポケモンやしまキング達に挑む試練と大試練。
――しまキングの孫でライバルのハウと謎の少年グラジオ。
――ポケモンを保護するために作られた人工島、エーテル財団。
――アローラ地方の荒くれ者達、スカル団。
――それぞれの島を守護する四体の守り神ポケモン。
――異世界からやってきたポケモン、ウルトラビースト。
――そして、太陽と月を司る二体の伝説のポケモン。
二人は俺の話をワクワクした様子で聞いてくれた。そこにはさっきまで、怖い話で怯えていた恐怖はなくなっていた。
「――そうして、俺達は旅立っていくグラジオを見送ったんだ」
「いい話でしたね、ゆんゆん。ゆんゆん？」
「すぅ…すぅ…。」
「寝ちゃったみたいだな」
座ったまま眠ってしまったゆんゆんをそのままベッドに寝かせる。
「めぐみん、お前もそろそろ眠くなったろ。今日はこの部屋で寝ていいから、もう寝なさい」
「カズマはどうするんですか？」
「俺はリビングのソファでも使って寝るさ」
「でも……。」

「早く寝ないと、これ以上背が伸びなくなるぞ？」
「寝ます！」
俺が冗談めかして脅かしてやると、ゆんゆんの隣に寝転がった。そのまま目を瞑ると、二分もしなうちに寝息が聞こえてきた。どうやら、話を聞くために無理矢理起きてたらしい。
俺は部屋の明かりを消して、廊下に出る。
――その時だった、俺のポケットに入れていたスマホが振動したのは。
スマホを取り出し、画面を見るとそこには『非通知』の表示が出ていた。
「エリス様か？　こんな時間に、どうしたんだろう」
俺は通話のボタンをタップして、スマホを耳に当てる。
「もしもし、エリス様でしょうか？」
『……。』
「もしもし？」
『――楽しいお話をありがとう。また……たくさん聞かせてね』
たった一言、そう告げて、通話はきれた。それはひどく幼く無邪気な声だった。そして、女の子の声だった。
ツーツーという音がなるスマホを震える手で握りしめる。
「ッ……！」
その時、俺は気づいた。背後から、背筋が凍るような視線を向けられていることに。
――背後に、何かいる。いや、なにかなんて漠然としたものではないそこにいるのが誰なのか俺にはわかった。
『……親の顔も知らずに亡くなったらしいよ』
さっきリビングでクリスが話した話の内容が脳裏をよぎる。
「……。」
――俺はゆっくりと振り返った。
そこには半透明な体で廊下の奥からこちらを見つめる金髪碧眼の少女が立っていた。年の頃はめぐみん達と同じか、少し上くらいだろうか。自分を見てお驚いた様子のない俺に驚いたような表情を向け

ていた。
俺は笑いながら彼女に近づき、膝をついて彼女の目線と自分の目線を合わせる。そして、手を差し出した。
「俺なんかの話でよければ今からいくらでも聞かせてやるよ」
『……！』
俺の言葉に改めて驚いた少女だったが、すぐに笑顔になって俺の手をとった。その目尻に涙を浮かべて。
――触れられるはずのないその手は酷く冷たく、酷く震えているように感じた。俺達は手を繋いでリビングに向かった。
～～～

「……それもそうだな」
クリスに言われてダクネスも嘆息しながらも了承する。寝ているカズマの顔が寝心地が悪そうにしながらもどこか幸せそうな顔をしていたからでもあるのだろう。
「さっ、ダクネスはめぐみんとゆんゆんを起こしてきて。カズマくんがここにいるってことはもしかしたらカズマくんの部屋にいるかも知れないからそっちも見てきて」
「わかった」
クリスに言われて、ダクネスは二人を起こすためにリビングから出ていった。
「……ありがとね、カズマくん」
クリスはカズマの顔を覗き込みながら感謝の言葉を伝える。一人ぼっちの少女に素敵な冒険譚を聞かせてくれた、一人の冒険者兼ポケモントレーナーに。

このリッチーとゴーストタイプに祝福を！

屋敷での生活にもなれてきた今日この頃、庭に埋めたきのみの苗木の世話とタマゴの観察が日課になり始めていた。現に今も、傍らにいるイーブイを撫でながらクッションに乗せた三つのタマゴの観察日記をつけている。

近くではタマゴを温めるためにメラルバがゆったりとしている、最近肌寒くなってきたしメラルバがいてくれると暖炉いらずで助かるというものだ。

「また新しいタマゴの観察？」

「まぁな、今度のはゴーストタイプとドラゴンタイプのタマゴだ」

「で？　相変わらず中のポケモンがなにか忘れたんですか？」

「いいんだよ。今となってはどんなポケモンが生まれるか考えるのも楽しみの一つなんだから」

俺はめぐみんのちゃちゃを軽く受け流しながら、タマゴに触れて様子を確認する。最近では触れただけでなんとなく孵化のタイミングがわかる。勿論、多少の誤差はあるが。

「……。」

ふむ、この感じだと明日辺りに生まれそうだな。モンスターボールの作り置きは用意してあるし、問題ないな。

手帳にタマゴの様子を記録していると、ソファに寝転んでいたクリスに紅茶を飲んでいたダクネスが質問を投げかけた。

「しかし、ゴーストタイプか……私としては構わないが。クリス、お前は大丈夫なのか？」

「なにが？」

「お前、悪魔だけじゃなくて、レイスとかアンデッドとかの神の教えに反するものが大嫌いだろう？」

俺はダクネスとクリスの会話を聞いて、タマゴを守るように背に隠し、ファイティングポーズでクリスの前に立ちはだかる。

「……何してんのカズマくん」

「この子達に手を出すのなら、先に俺を倒してからにしてもらおう！」

「はぁぁぁ？　しないよ、そんなこと！　ダクネスも変なこと言わないの！」
タマゴの前で決死の覚悟で構える俺と言い出しっぺのダクネスに呆れながらもに怒鳴りつけてきた。
なんだ、悪魔の話をしたときの嫌悪感のこもった話し方を考えると冗談とも思えなかったので身構えてしまった、
「大体、シャンデラもギルガルドもゴーストタイプでしょ？」
「あぁ、そういえばそうだった」
考えてみれば、ジュナイパーもロトムももともとそうだ。だけど、クリスはゴーストタイプのポケモンに対して嫌悪感を持っていたような感じはしなかった。というか、ヒスイ地方のゾロアに関してはロトムで姿を見て可愛いとさえ言ってたっけ。
「それで、このタマゴから生まれた子は今までと同じ感じ？」
「まぁな、といってもゴーストタイプだからなぁ……。」
エリス様からのお願いは今のところ順調と言っていい。
この家に住み始めてからいくつかのタマゴを孵し、彼らが活躍できそうな場を仲間たちと相談しながら育て親を探した。
意外なことにあっさりと育て親を見つけることができた。と言ってもほとんどクリスの紹介なんだけどな。
――最近で生まれた奴らだと、かくとうタイプで力自慢のワンリキーとドッコラーは前に手伝った土木工事の親方さんに頼んだら二つ返事でオーケーしてくれた。今では現場でバリバリ活躍してるらしい。
――次に生まれたタブンネとチラーミィはダクネスとクリスが偶に様子を見に行っている孤児院で。前に様子を見にいったらタブンネはよく子供を見てくれてるし、チラーミィは細かい汚れも見逃さないからいつも部屋がきれいになって助かっていると言われた。
――次に貰い手に困りそうだったどくタイプのゴクリンだったが、意外や意外、パン屋のお姉さんが引き取ってくれた。残飯や余ったパンなどを残さず美味しそうに食べてくれるので愛着が湧いたらしい。

――最後に一番育て親を探すのが苦労すると思われたサイホーンという大型のポケモン、だが、今では人力の耕運機のようなものを動かして畑を耕してくれることから農家の皆さんの人気者になっている。
ただ、何故だろう。耕運機とかトラクターを連想するものを見ると、物凄い寒気を感じるのは……。
――そういえば、偶然知り合ったパーティの奴に懐いた？　のかついていったやつもいた。
ただ、ゴーストタイプのポケモンとなるとレイスとかアンデッドのせいでこの世界の人達はあんまり良い印象を持っていないだろうから。
もしものときは俺が面倒を見る。あの子のいい遊び友達になるかもしれないし。
そう考えていると、めぐみんが後ろから声をかけてきた。
「カズマ、ドラゴンタイプの子なら私が育てますよ」
「めぐみんにはもうガバイトがいるじゃない」
「カズマだってイーブイやメラルバの他にも沢山ポケモン育ててるじゃないですか」
「それはカズマさんがポケモンに詳しいからでしょ」
まためぐみんとゆんゆんが口論を始めそうになったので仲裁に入る。
「そこまでにしとけ。ポケモンを複数体持つこと自体は珍しくない。基本的に手持ちにできるのは六体までだけどな」
「となると私はあと五体までいけるわけですね」
確かにそのとおりだが、それは他の皆にも言えることだ。
めぐみんはドラゴン、ゆんゆんはエスパー、ダクネスははがね、クリスはひこうとそれぞれ気に入ったタイプを見つけたらしいのでそのポケモンが生まれたら相談しようとは思ってる。
ただ、クリスがひこうタイプなのは意外だった。てっきりフェアリーだと思ったのだが。
っと、クリスといえば。

「そうそう、クリス。あの話、ちゃんと伝えてくれたか？」
「ああ、あの話？　明日ならオッケーだって言ってたよ」
「そっか、じゃあ明日の……昼頃に行くか。飯時なら流石に人は少ないだろう」
「別にご飯時じゃなくても大丈夫だと思うよ？　あそこ年中閑古鳥鳴いてるから」
「それ大丈夫じゃなくね？」
「何の話です？」
　俺がクリスが話していると事情を知らない、めぐみんが話に入ってきた。
「ほら、この家をくれた魔導具店の店主さん。家をくれたお礼が言いたいから。クリスに約束を取り付けてもらったんだよ」
「ああ、なるほど」
　めぐみんが納得すると、キルリアの髪を撫でていたゆんゆんも思い出したように口を開いた。
「そういえば、ラル……じゃなくてキルちゃんがエルレイドナイトを見つけたのも、あそこでしたよね」
「キルッ！」
「そういえばそうだったね」
「ああ、そのことについても聞きたいしな。もしかして、他のメガストーンを見つける手がかりが見つかるかもしれないからな」
「……カズマ、私も行っていいですか？」
　めぐみんは顎に手を当てて何かを考えると、自分も同行すると提案してきた。あんまり大人数で行くとお店に迷惑がかかるから、俺とクリスだけのほうがいいと思うんだが。
　多分、めぐみんが行きたがってるのはガブリアスナイトの手がかりがほしいからだろう。
「クリス、大丈夫そうか？」
「まぁ、三人くらいなら大丈夫だと思うしいいんじゃない？」
「だってさ」
「ありがとうございます！　クリス、カズマ！」

元気よく礼をいっためぐみんは近くにおいてあった杖と、愛用の帽子を被る。その様子を見て、部屋の隅に座って爪を砥いでいたガバイトも立ち上がってめぐみんの隣に立つ。
「それではガバイト、今日の爆裂魔法を撃ちに行きましょうか」
「ガァバ！」
最近ではめぐみんは一人で、いや、パートナーのガバイトと一緒に爆裂魔法を撃ちに行くようになった。前までは俺がリザードンで送ってやってたんだが、ガバイトに進化してからいつの間にか一人で行くようになっていた。
なので、ふと気になり呼び止めて尋ねてみた。
「そういえば、お前爆裂魔法を撃ったあといつもどうやって帰ってきてるんだ」
「そのことですか。オボンのみでしがみつくくらいの体力を回復してから、ガバイトに背負ってもらってきています。ね？」
「ギャァバ！」
めぐみんに言われて、おうっと言うように鳴くガバイト。ガバイトの負担になってないなら別に構わないんだけどさ。
ガバイトは『りゅうのはどう』も覚えてるし、なにより瞬発力は大したものだ、背負いながらでも逃げるなり戦うなりはできるだろう。
それにめぐみんにはライトストーンの加護もある、心配は不要か。
「そっか、なら良かった。気をつけていってこいよ」
「はいっ！」
「ガァバ！」
俺がそう言うと今日も元気いっぱいの様子でめぐみんはでかけていった。こうしてみるとホントにただの子供だな、やることが少々物騒だが。
～～～

ンで出来た簡易ベッドに置いてあったはずの三つのタマゴのうち二つが消えていることに気付く。
あたりを見回すとクッションのすぐ下に二つのタマゴが落ちているのを見つけた。
「置き方が悪かったのか？」
俺は未だに寝ぼけて頭で今度はちゃんと落ちないようにしないとなと思い、タマゴを拾い上げようとすると。
――ヒョイ
「？」
――ヒョイ、ヒョイ、ヒョイ
俺が拾おうと手を伸ばすたびにタマゴ達はまるで俺の手を避けるように転がっていく。一度目は偶然かと思ったが四度も同じことが起きればそれはもう現実として受け止めなければならない。
あまりの光景に寝ぼけも相まって唖然としていると、今度はタマゴ二つがなにかに吸い寄せられるようにドアに向かっていく、閉ざされているため通れないはずのドアが勝手に開き二つのタマゴは一人でに俺の部屋をあとにした。
「おっ、おい！　何処行くんだ！」
いきなりの光景に唖然としたが俺はようやく目が覚めてきた頭で慌ててベッドから飛び降り、念のためにモンスターボールを一つ取って、イーブイとメラルバを起こさないように廊下を出る。
コロコロと廊下を転がっていく二つのタマゴを俺は慌てて追いかける。
「一体なんの騒ぎだ？」
丁度いいことに、俺が走る音かなにかでで目を覚ましたらしいダクネスがタマゴ達の前方の部屋から出てきた。
俺は廊下の向こうから慌ててダクネスに声をかける。
「ダクネス！　そいつら、捕まえてくれ！」
「ん？　タマゴ？」
いきなりのことで戸惑いながらもダクネスは反射的にタマゴを捕まえようと身構える。だが、二つのタマゴのうち、一つが跳ね上がり

ダクネスの顔面にヒットする。
「グハッ！」
　そのままダクネスを踏み台にして飛び上がったタマゴは、見事に着地してまた廊下をコロコロと転がっていく。もう一つのタマゴは倒れたダクネスをスルーして、転がっていってしまう。
　俺はタマゴにぶつかられ赤くなった鼻を押さえるダクネスに駆け寄る。
「大丈夫か、ダクネス？」
「あ、あぁ……しかし、なかなかいい攻撃だったなあのタマゴ」
「お前を心配した俺が馬鹿だった……。」
　タマゴから受けた攻撃に悶えているダクネスを放って俺はタマゴが転がっていた方向を向く。
「ねぇ、なんの騒ぎ？」
「……うるさくて眠れませんよ」
「何かあったんですか？」
　流石に騒ぎすぎたのか、クリスたちも起きて部屋から出てくる。俺は簡単に事情を説明すると、流石に半信半疑だったがダクネスも証言すると信じざるをえなくなったようだった。
「タマゴが勝手に動き出すなんて、そんなことあるの？」
「ポケモンのタマゴは未だに解明されていないことが多い代物だからな、こんなこともあるのかもしれない」
「ホンット、君といると退屈しないや」
　クリスの皮肉を聞き流しながら玄関に辿り着くと、俺の部屋のときと同じように勝手に開いた玄関から二つのタマゴが出ていくところだった。
　俺たちも慌てて家から出ると、タマゴたちは庭への入り口から出て、そこから隣に向かって転がっていく。
「あの方向って……。」
「ああ、共同墓地だ」
　墓地にゴーストタイプのポケモンのタマゴ、嫌な予感しかしないんだが……。

――タマゴを追いかけて、墓地に踏み込むと、昼間との違いは目に見えて明らかだった。
ただでさえ薄暗い墓地というだけで不気味な場所だが、今朝方にはなかったはずの妙なものがポワポワ浮いていた。
紫色の炎のような姿のそれは妖しい明かりを墓地に灯している。しかし、その光は淡く沢山あるはずなのに全く明るくならないのが不気味さを助長していた。
これがなにか尋ねようと、ダクネス達の方を見ると、彼女たちは人魂らしきものをスルーして墓地の先にどんどん進んでいく。
もしかして、これってこっちの世界では普通なのか？
キャベツが飛ぶ世界だし夜の墓地に人魂みたいなのが浮いていてもおかしくないのだろうか？
前にキャベツについて聞いたとき物凄く可愛そうなものを見る目をされたのでそう結論づけて、俺も気にしないようにして先に進んでいくことにした。
「うわ……。」
「どうした、クリス？」
先を進んでいた俺は後ろから聞こえてきたクリスの声に振り返った。彼女は心底嫌そうな顔でその理由を口にする。
「この先にアンデッドがいる、それも沢山」
どうやら、【敵感知】を発動していたらしくモンスターの反応を見つけたらしい。
「ゾンビメーカーかもしれんな」
「ゾンビメーカー？」
疑問符を浮かべる俺に博識なゆんゆんが『ゾンビメーカーとはなにか』教えてくれた。
なんでも死体に乗り移る死霊系のモンスターで、死体で作った取り巻きのゾンビたちを操ることからそう呼ばれているらしい。油断しなければ、初心者でも普通に倒せるらしいが。
「でも、ゾンビメーカーの取り巻きのゾンビって二、三体って聞いたような」

「クリス、何体くらいいるんだ。」
「少なくとも、五体かな」
アンデッドが嫌いなクリスは不機嫌そうに俺の質問に答えた。
五体？　上位種か、はたまた別のモンスターなのか……。一応、皆の方を見る、当然皆は夜中に叩き起こされたことで寝間着姿、武器など誰一人持っていない。
俺も咄嗟に持ってきたモンスターボールが一個。タマゴのことは心配だが、下手にいって返り討ちに遭うのもまずい……。
「一旦戻って体制を立て直す――――」
か、と言おうと踵を返した瞬間、俺の背後の土が盛り上がり何かが地表を突き破って飛び出してきた。
「あ゛、あ゛、あ゛、あ゛、ーーーっ！」
「ぎゃああーーーーっ!!」
「ッ！【ファイアーボール！】！」
不気味な声を漏らして出てきたそれ――――動く死体、所謂ゾンビやリビングデッドと呼ばれるそれの姿に俺は絶叫し、そんな俺を助けるためにゆんゆんが魔法を放った。
俺の真横を通り過ぎていった火球の爆発で俺は吹き飛ばされ、転がりながら着地する。
「だ、大丈夫ですか!?　カズマさん？」
「じゅ、寿命縮むかと思った！　サンキューゆんゆん！」
体を起こして助けてもらった感謝を込めて、ゆんゆんにサムズアップを送る。やばい、まだ、心臓がばっくんばっくん言ってる……。
ただ、さっきの魔法によって出来た炎の明かりに引き寄せられたのか、奥の方から続々とゾンビがこちらに迫ってくる。
「うわぁ、たくさん来た……。」
「ゆんゆんが炎系の魔法なんて使うから」
「ええっ、私のせい!?」
「おい、ふざけている場合ではなさそうだぞ」
明らかには五体では済まない数のゾンビたちが四方八方から現れ、俺達を取り囲む。まずいな、逃げ場がない。

「しょうがねぇなぁ……皆、俺から離れるなよ」
――夜中に戦わせるのは気が引けるからやりたくはなかったが、こいつに頼るしかないようだ。念の為に持ってきていたモンスターボールを構え、空に向かって勢いよく放り投げる。
「頼むぞ、バクフーン！」
「バァク！」
出てきたのは黄色と紫色の毛並みの毛並みの二足歩行のポケモン、ヒスイ地方のリージョフォームのバクフーンだ。
ヒスイ地方のバクフーンは原種のバクフーンとは違い、荒々しい様子ではなく落ち着いた様子の美しいポケモンだ。
バクフーンが鳴くと首元と背中から紫色の妖しい炎が吹き出し、ゆらゆらと揺らめく。
「『ひゃっきやこう』！」
「バァァァァク!!」
俺の指示を受けると首と背中から出ているのと同じ紫の無数の人魂が放たれ、それを喰らったゾンビたちを一気に焼き尽くす。
すると。
「きゃあーーーーっ!!!　なんですか、この炎！　消えちゃう、消えちゃいますーっ！」
「んん？」
炎の向こうからこの場に似つかわしくない女の人の叫び声が聞こえてきた。
「こ、この声！　カズマくん！　この炎消して！」
「え？」
「早くっ！」
「あ、あぁ……バクフーン！」
「バフゥ？」
いきなり取り乱したクリスに言われて、慌ててバクフーンに炎を消してもらうと炎の向こうでへたり込んでいるローブの人物がいた。
「た、助かりましたぁ……。」
「えっと、どちら様？」

そこにいたのは紫のローブで身を包んだ、長い茶髪の落ち着いた雰囲気の女性だった。そんな美人が涙目でへたり込む姿は男心に来るものがあるが、今はこの人とタマゴのほうが心配だ。
この人の正体を知ってるらしいクリスに事情を聞こうとすると、その人の顔を見たゆんゆんが前に出た。
「あっ！　貴方は！」
「ゆんゆん、知り合いか？」
「知り合いっていうか……」
「……例の魔道具店の店主さんだよ」
「この人がっ!?」
クリスがゆんゆんの言葉を継いで口にした真実に真夜中にも関わらず俺は思わず声を上げてしまった。
〜〜〜

ルーしてウィズさんの前に止まると突然孵化を知らせる光を放つ。
「なっ、ここで……!?」
突然の光に俺達は慌てて目を庇った。
「ムゥ？」
「モシィ？」
生まれてきたのは二体のゴーストタイプ。
――首に赤い玉をぶら下げた長い髪をたなびかせるよなきポケモンのムウマと、白いロウソクのような体で頭には生命力を燃やして大きくなるという青い炎をともしたろうそくポケモンのヒトモシが生まれた。
「ムウマとヒトモシか。こんなタイミングで生まれるとは」
「えっと、この子達は一体？」
「ムゥ～♪」
「モシ～♪」
この状況に唯一人ついていけていないウィズさんが戸惑いながらこちらを見るが、件の二体はウィズさんをその瞳に映すと、一目散にすり寄っていく。
「え？　え？　え？」
頭の上いっぱいに疑問符を浮かべるウィズさん。まぁ、目の前でなぞのタマゴが孵化して見たことない生き物が生まれて、その生き物がいきなり自分にすり寄ってきたらそりゃそうなるか。
それにしても、ウィズさんに甘える二体の様子を見て、俺の頭にある考察が浮かぶ。
「もしかして、この子たちウィズさんに会いたくて転がってきたんじゃ……。」
ゆんゆんの言葉に俺も口には出さないが同意する。
おそらく、レイスやアンデッドと似た性質を持つゴーストタイプのムウマとヒトモシがリッチーであるウィズさんに引き寄せられた……つまりはそういうことだ。
「とりあえず、タマゴのことはどうにかなったしウィズさんの話を聞こうよ」

「そうだな」
　二体の説明は後回しにして、クリスが話を進め、ウィズさんがポツポツと事の真相を語りだした。
「それで、ウィズさんはこの墓地で一体何を？」
「実は……この墓地にはお金がないためにロクに供養されないで、天に還ることもできない魂が毎晩彷徨っているんです」
　なるほど、さっきから見えてるこの灯火みたいなのはその魂ってことなのか。よくよく見ると、どの墓もマトモに掃除されているようには見えない。
「リッチーの私としてはそれを不憫に思い、定期的にここに来て天に送ってあげてたんです」
　やってることといい、見た目といい、話に聞くリッチーと真逆なんだが。
「あれ？　じゃあ、あのゾンビは……。」
「……あの子達は私の魔力に反応して勝手に起きてしまうんです」
　申し訳無さそうに言うウィズさん。死者の王の魔力による弊害か。
　それにしても迷える魂、か。
「その魂ってこのポワポワ浮いてるやつだよな、どんだけ供養されてないんだよ。メチャクチャあるぞ」
「「「「え？」」」」
「ん？」
　俺が近くの灯火を指さしながらそう言うと、皆が驚いたような表情でこちらを見ていた。
「カズマさん、見えてるんですか？」
　ウィズさんが目をまんまるにして驚く様子に、額に嫌な汗が浮かぶのを感じた。
「え？　あの、ひょっとして……皆は見えてなかったり？」
「私の力で可視化はできますけど、今はしてませんので……普通は見えないはずなんですが……。」
　ゆっくりと皆の顔を見ると、皆揃ってうんうんと頷く。
　つまり、その……この灯火のようなものは俺にしか見えてないと？

俺はギギギと錆びた人形のような動作で首をウィズさんの方に戻してどういうこと？　という顔を向ける。
「えっと……そういった素質かあるいは大きな加護を持っているとさまよえる魂が救いを求めて姿を表すことがあるそうなんですけど」
「大きな加護、か……。」
心当たりはある。というか、ほぼ間違いなくあいつだろうな。
――あの人も、そんなこと言ってたな。
『――なぜ、なぜ、あなたごときが！アルセウスの加護を得ているのだ!?』
「……。」
「カズマ、どうかしたのか？」
「いや、なんでもない」
嫌なことを思い出したな……。
ダクネスに指摘され、俺は表情の変化をこれ以上悟られないように話題を変える。
「だけど、そういった仕事って普通、街のプリーストの仕事じゃないのか？」
「その……あまりこういう事は言いたくはないのですが。この街のプリーストさんはお金が第一と言いますか……お金がない人は後回しで……ほとんどここに足を運ぶ人がいないんです」
「お金のない人の供養はしてくれないってことですか？」
「拝金主義の背教者ばかりですね」
「全く、大した罰当たり共だ」
めぐみんの言葉に心から同意する。そんなんでよく神に仕える僧侶なんて名乗れたもんだ。
「私としてはここで彷徨う魂が天に還ってくれてれば来る理由もないのですが……」
「となると」
何故か四人が俺の方に向き直りじーっと見つめてくる。
「なんだよ、皆して俺を見て？」
「カズマ、アークプリーストに転職する気はないか？」

「魂が見えるなら素質もバッチリでしょうし」
「入信はエリス教がオススメだよ？」
「ならんわ」
　確かにアルセウスの加護があればそれくらいできそうではあるが、何が悲しくてトレーナーやめて僧侶にならなきゃならんのだ。というか、クリスはなにサラッと入信勧めてきてんだよ。
　大体、そういうことなら他に方法はある。
「それに、バクフーンにどうにかしてもらったほうが早い」
「バッフ……。」
　炎が消えたバクフーンの首元を撫でながらそう提案した。
「どういうこと？」
「バクフーンの炎は魂を浄化してあるべき場所に還す力を持ってるからな」
「なるほど、だからさっきウィズが浄化されかけたんですね」
　めぐみんの言うとおり、いくらリッチーとはいえバクフーンの浄化の炎はアンデッドには効果抜群だったようだ。
　バクフーンは本来は食べて体内で魂を浄化するらしいが、さっきの様子を見た限り直接燃やしても効果はありそうだ。
　早速実践してみようとバクフーンに炎の準備をお願いする。
「ウィズさん、少し離れていてくれ。また巻き込まれるかもしれないからな」
「は、はい」
　もう消えかけるのはごめんらしく、ウィズさんはムウマ達を連れてそそくさと後ろに下がる。
「それじゃあバクフーン、頼むぞ」
「バァァァァク!!」
　バクフーンが吠えると再び紫の人魂が無数に発生し、そこら中に広がりあたりがあっという間に炎の海となる。ただ、熱くはないし俺が触れても燃え移ったりしない。
　やがて、墓地に浮いていた灯火が白い光となって空に昇っていく。どうやら、俺の仮説は正しかったようだ。

そして、その光はめぐみんたちにも見えているらしく、皆その光景に目を奪われていた。
「綺麗……。」
「あぁ」
ゆんゆんが呟いた言葉に俺は同意し、皆も同意を示すように静かに頷いた。ウィズさんも安心したのか胸をなでおろしていた。
――全ての魂が天に還るのを見届けるとウィズさんが笑顔で俺達に礼を言ってきた。
「本当にありがとうございました、おかげで胸のつかえがおりました」
「礼ならバクフーンに言ってほしい、頑張ったのはこいつだからな」
「はい、ありがとうございました。バクフーンさん」
「バァフゥゥ」
ウィズさんに撫でられて気持ちよさそうにするバクフーン。ムウマといいヒトモシといい、ウィズさんはゴーストタイプに好かれるらしい。バクフーンもゴーストタイプだから、ウィズさんに懐いているようだった。
ゴーストタイプに好かれる体質か……ホウエンの四天王、フヨウさんみたいだな。……はっきり言って、羨ましい。
そんなことを考えていると、バクフーンが俺の頭に自分の顎を乗せてきた。
「バクフーン？」
「バフゥゥゥ……。」
落ち着いた様子で俺を見下ろすバクフーン。その姿に俺はほっこりして首元を撫でてやった。
そして、俺は再びウィズさんの方に向き直る。
「それと、これは俺からのお願いなんだが」
俺達の足元でウィズさんに懐いてる様子の二体が別れを惜しんでる姿を見ながら、こっちからのお願いを口にした。
～～～

「よかったね、カズマくん。引き取ってもらえて」
「あぁ、あの様子なら仲良くやってくれるだろう」
俺からのお願いは当然、ムウマとヒトモシのパートナーになってほしいというものだ。
ウィズさんはどうも他人の気がしないと喜んでオーケーを出してくれた。
ゴーストタイプとリッチーか、これ以上にお似合いのパートナーはそうそういないだろう。モンスターボールは後で届けると言って別れた。ポケモンについて詳しい説明もそのときにしよう。
部屋で寝ているはずのイーブイ達を起こさないように玄関の扉を開き中に入る。
「ブイィ～……。」
「あっ、イーブイ。起きちまったのか？」
玄関で靴を脱いでいると、暗がりの中からまだ眠そうな目でよたよたとイーブイが歩いてきた。
音を立てないようにしたつもりだったが起こしてしまったらしい。悪いことしちまったなと謝ろうとすると、クリスがなにかに気づく。
「あれ？　何か背負ってない？」
「あっ、ホントだ」
暗がりで気づかなかったが確かにイーブイは背中に丸っこい何かを乗っけている。暗がりにも目が慣れはじめよくよく見ると、その丸っこいものが何なのかがわかった。
「ポケモン、ですよね？」
「ああ、留守にしてる間にもう一個のタマゴが孵化したんだろうな」
同じようにその正体に気づいためぐみんにそう答えると、イーブイの背中からその薄紫色の体に小さな触覚を四本生やしたポケモンを抱き上げる。
「メンラ～……。」
「寝てないか？」
「寝てるなぁ……。」
俺の腕の中で気持ちよさそうに眠るポケモン。

今の時間帯ならまだ寝てるのが普通だろうけど、タマゴから生まれたばかりなのに寝っぱなしってのは珍しいな。
「なんか可愛いですね」
「だね。わぁ、プニプニしてる」
「あっ、ズルいですよ！　カズマ、私にも抱かせてください」
「……あんまり、弄ってやるなよ」
ゆんゆんの一言から始まりクリスがほっぺたをつっつき始めたのをひきりに、今度はめぐみんが抱っこさせるようにせがんできたので、仕方なくそのポケモンをめぐみんに預ける。
まだ、夜中だっていうのに元気だねぇ。
「結構しっとりしてますね」
「そいつの体はほとんど水分で出来てるからなぁ」
「メンリァ……？」
「あっ、起きた」
めぐみんに抱かれたポケモンはそのつぶらな瞳を開いて、自分を抱いためぐみんを見上げた。
「こ、こんばんわ……。」
「メラァ……。」
「あっ、ちょっ、ちょっと！」
「メンラァ……。」
目が覚めたそのポケモンはテンパって何故か挨拶をしためぐみんの体をよじ登り、頭の上に達するとそのまま再び眠りについてしまった。
「ははっ、寝ぼけてるみたいだね」
「に、似合ってるわよめぐみん……。」
「何笑ってるんですか!?」
「しーっ！　その子が起きてしまうぞ」
「うっ、うう……。」
ゆんゆんが笑うのをこらえるのを見て、声を荒らげようとするがダクネスに注意をされて悔しそうに口を噤む。
ただ、そんな心配は杞憂でポケモンはぐっすり眠っている。

「しばらく起きなそうだし、俺達ももう一眠りするか。ほら、イーブイ。ベッドに戻るぞ」
「ブイ〜」
「え？　私の頭に乗ってるの放置ですか？」
「一緒に寝てやったらどうだ？　どうもめぐみんを気に入ったようだからな」
「そ、そうなんですかね」
　頭の上を占領されて戸惑うめぐみんにダクネスが助言をし、めぐみんに件のポケモンを任せて俺達は中断させられた睡眠を取ることにした。

この最弱ドラゴンと魔導具店に祝福を！

「「「ヌメラ（ですか）？」」」
「ああ、なんたいポケモンのヌメラ。それがこの子の名前だ」
「メンラァ～」
タマゴ騒動から一夜明け、リビングに集まった俺達はめぐみんになついたポケモン、ヌメラについて話していた。
皆、よく眠れたらしく今日はバッチリいつもの服装になっての集合だ。
当のヌメラはというと風呂から持ってきた風呂桶にくんできた水に浸かって気持ちよさげにしている。ヌメラは体のほとんどが水分でできているため、水気がなくなると干からびてしまうからな。
同じドラゴンタイプのガバイトは物珍しそうにつついている。
『ヌメラ　なんたいポケモン　ドラゴンタイプ
体の殆どが水分。乾燥すると干からびてしまう、最弱のドラゴンポケモン。角は優れた感覚器官、敵の気配を感じ取りすぐに隠れることで生き残ってきた』
「最弱のドラゴンポケモン？」
「確かに……。」
「強そうには見えないよね？」
「というか、本当にドラゴンタイプなのかこの子は？」
めぐみん達はロトムの説明を聞き、風呂桶に浸かっているヌメラを見ながら各々の感想を口にする。
事実生まれたばかりのポケモンの中でも群を抜いて弱いと言える。ただ、それはヌメラのままの場合だ。
「ヌメラはそのままだと弱いけど、ちゃんと育てればガバイトの進化形ガブリアスに匹敵するドラゴンに進化するんだ。ただ、それまでかなり時間がかかるんだがな」
「この子が？」
「そう、この子が」
クリスは俺の説明に信じられないと言わんばかりの顔だ。この癒

やしキャラみたいな子がそんな強いドラゴンに進化するなんて言われても信じられないだろう。
ガバイトにツンツンされているヌメラを見ながら、トレーナーをどうするか考えていると。
「カズマ、この子を私に育てさせてくれませんか？」
「……まっ、お前ならそう言うと思ったけどさ」
俺が予想していた通りめぐみんがヌメラのトレーナーに名乗り出た。
「この子、昨日からどうも私に懐いてくれてるようですし。このまま誰かのパートナーにしてしまうには忍びないです」
確かにこのヌメラは昨日の行動だけでなくめぐみんに懐いてる様子がしばしば見受けられる。
俺は確認のためにめぐみんにもう一度問いかける。
「さっきも行った通り、ヌメラは成長が遅いポケモンだ。
――お前はちゃんと、最後までこの子を育てる覚悟はあるんだろうな？」
「勿論です」
若干凄んでめぐみんを見ると、彼女はそんな俺に怯んだ様子はなくはっきりと答えた。
「カズマさん、めぐみんは爆裂魔法の習得に必要な沢山のスキルポイントも根気強く貯めきりました！　だから、きっとこの子のこともちゃんと強いドラゴンになるまで育てられるはずです！」
「ゆんゆん……。」
珍しくゆんゆんがめぐみんのことを庇護する。
正直なところ、俺もめぐみんがちゃんと育てることができるかを本気で疑っているわけではない。これはあくまで確認だ。
クリスとダクネスもそのことをわかってるのか口出しはしてこないからな。
となると、あとは。
俺はヌメラを風呂桶から上げて、持ってきておいた清潔なタオルでヌメラの体を拭いてやる。あんまり、水分を吸い込みすぎるとヌメラ

の名の通り過度にヌメヌメの体になってしまうからな。
「ヌメラ、お前はどうしたい？」
「メンラァ……？」
「彼女は君のパートナーになりたいと言っているが？」
　水気がちょうどよくなるとヌメラの体を床に置き、膝を折ってヌメラを見つめて尋ねる。最後はやはりポケモン本人の意志だと思う。
　俺の質問にヌメラはめぐみんを方を向いてじーっと見つめると、滑るように床を歩きソファに座るめぐみんの体をよじ登って膝の上に収まる。
「メンラッ！」
「……私と来てくれるんですか？」
「メンリャァ～～ッ！」
「……そうか」
　めぐみんの問いかけにうんっと言うように可愛らしく鳴くヌメラ。その光景に俺は満足して頷き、腰のホルダーから空のモンスターボールを外す。
「お前がそうしたいんなら、俺は止めないよ。めぐみん」
「はっ、はいっ！」
　真面目な俺の呼びかけに、何処か緊張した様子で返事をするめぐみんに空のモンスターボールを投げ渡す。めぐみんは飛んできたボールを両手でキャッチする。
「ヌメラを頼むぞ。大事に育ててやってくれ」
「カズマ……任せてくださいっ！　必ずこの子を立派なドラゴンに育ててみせます！」
　めぐみんはヌメラを一度床に戻すと空のモンスターボールを向ける。
「いきますよ、ヌメラ！」
「メラァッ！」
　ヌメラの返事を受けとるとモンスターボールを勢いよく投げる、ボールはポヨンッという音と共にヌメラの柔らかい体にあたって上に跳ね、パカッと空中で開くとヌメラが光になってモンスターボール

に吸い込まれる。
煙を出しながら飛び跳ねるボールは最後にポンッという音ともにゲットが完了した。
めぐみんはヌメラの入ったモンスターボールを拾い上げる。
「ふふふ、いでよ！　我が第三の眷属、ヌメラ！」
「メラァ！」
二体目のゲットで紅魔族の血が騒いだのか、厨ニモードになっためぐみんがゲットしたヌメラをボールの外に出す。現れたヌメラをめぐみんは抱き上げる。
「これから一緒に頑張りましょうね」
「メンラッ！」
「ガァバッ！」
「なー」
「ちょむすけとガバイトも仲良くするんですよ」
新しい仲間の誕生にガバイトとちょむすけも嬉しそうだ。
ヌメラはめぐみんの腕の中から抜け出すと、昨日と同じように体をよじ登り、めぐみんが被った帽子に滑り込むように入り込むと、帽子の下からヒョコッと顔を出す。
「メンラッ！」
「あらま、可愛らしい」
「そこが気に入ったんですか？」
「メンラァ～！」
「もう、仕方ないですね」
めぐみんの問いかけに嬉しそうに答えるヌメラにめぐみんは降りろとは言えなかったらしく、ヌメラの定位置はめぐみんの頭の上となった。
それにしても、魔女帽子を被ったヌメラか……なんて愛らしい。俺はスマホロトムを構えてめぐみんとヌメラをフレームに収める。
「めぐみん、ヌメラ。そのままそのまま」
『目線くださ～い、ロト』
「あっ、ちょっと……！」

俺が写真を撮ろうとしてるのに気付いためぐみんが慌てて止めようとしたがそれよりも先にシャッターを切った。フレームにはバッチリめぐみんとヌメラが映されている。
「待ち受けにするか……。」
「ブイ～……」
「はっ！」
撮った画像を待ち受けにしようかと悩んでいると、俺を見る視線に気づく。視線の気配を辿るとそこにはジト目でこちらを見るイーブイの姿が。
「ち、違うんだ、イーブイ！　決してお前のことをわすれてたわけでは……」
「ブイッ！」
「あっ、待って！　待ってくれイーブイ!!」
俺の叫びは虚しくイーブイはプイッとそっぽを向いて部屋の方に戻っていってしまった。
～～～

ああ、そうだった。メガストーンについても聞かないとな……。
「あの、カズマさんどうかしたんですか？」
「ここに来る前にパートナーと喧嘩したんですよ」
「ああ、それで……。」
視界の端でめぐみんがウィズさんに俺のテンションが低い理由を説明しているのが見えた。
そう、めぐみんの言うとおり、あのあと完全にへそを曲げてしまったイーブイは背中にメラルバを乗っけたまま俺の部屋に引きこもってしまったのである。
「カズマがこの子に構いすぎたせいで嫉妬したらしくてですね」
「メンラッ！」
「あら、可愛いらしい子ですね」
めぐみんが帽子を少しずらして中にいるヌメラが顔を覗かせる。因みにガバイトは流石に店のお邪魔になるかと思ったので、今はモンスターボールの中である。
そういえば、ウィズさんってリッチーなんだよな……。
「クリス、お前。ウィズさんがリッチーって知ってたのか？　墓地にいたときあんまり驚いてなかったけど」
「あ～、実はあたしさ。エリス様と同じ銀髪ってことで、加護を受けてさアンデッドとか悪魔の気配に敏感なんだよね」
答えづらそうに頬の傷をかきながらクリス。クリスってなにか話しづらいことを話そうとする時、頬をかく癖あるよな。
それにしてもそれはまた初耳だな……。ホーストのときのナイフといい、クリスにはまだまだ謎がありそうでちょっと怖いんだが。
「っていうか、大丈夫なのか？　ダクネスも言ってたけど……。」
クリスは大の悪魔、アンデッド嫌い。それこそ悪魔を見ると人が変わったみたいにナイフを持ち出し、バーサーカー化する……はっきり言ってやべぇやつだ。
まさか、闇討ちでもしようとでも思っているのではと、訝しげな目を向けるが。
「ウィズさんは例外中の例外だよ。ここまで心のキレイなリッチーな

んて他にはそうそういないだろうしね」
俺の視線を察したのかウィズさんについてどう思っているかを話してくれた。
「まぁ、確かに……。」
普通のリッチーっていったらダンジョンの最奥とかに潜んでるボスモンスターみたいな存在だって聞いたが、目の前のこの人は始まりの街で魔導具店の店主をしていて、彷徨える魂を天に還すなんて善行をしていたわけだし。
「ああ、でも。――あたし、ウィズさん以外のアンデッド……本当にだいっきらいだからね？」
「「ひ、ヒィィーーーっ!!」」
「メラァ～～～……！」
クリスの貼り付けたような笑顔に俺も、いつの間にか聞き耳を立てていた二人とヌメラも店の隅っこに固まって震える。
相変わらずこうなったときのクリスは怖すぎる……。
「チィク～～……。」
「あっ、ごめんねトゲちゃん！　怒ってたわけじゃないんだよ～」
クリスの腕の中のトゲチックも怯えており、慌ててあやすクリス。お陰で平常運転の彼女に戻ったから良かった。トゲチックはある意味で暴走しがちなクリスのブレーキ役みたいな立ち位置になり始めてる気が。
「――ああ、そうだ！　実はクリスさん達に相談しようと思ってたことがあるんです」
「？」
「ちょっと待っててください」
クリスの殺気から開放されて調子を戻したウィズさんはそう言って店の奥に入っていった。何かを取りに行ったようだが。
「相談ってなんだろうね？」
「さぁ？　俺に聞かれても……ん？」
「どうしたんです、カズマ？」
俺はポケットから淡い光が漏れ出ているのに気づき、その光源を取

り出す。出てきたそれをクリスとめぐみんが目を見開いて見つめる。
「キーストーンが」
「光ってますね」
「これは……なにかに反応してるのか？」
　ポケットから出てきたそれ、俺が持つ今の所この世界で唯一見つかっているキーストーン。それは、なにかに呼応するように虹色の淡い光を放っていた。
　この光の感じ、確かヒャッコクシティで……。
「お待たせしました～」
　メガストーンと深い関わりのある結晶で作られた日時計で有名な街を思い出していると、キーストーンと呼応しているそれを持ったウィズさんが奥から出てきた。
「あっ、それは！」
『新しいメガストーンロト！』
「あっ、やっぱりこれを知ってるんですね」
　ウィズさんが持ってきたのはエルレイドナイトとはまた違う配色のメガストーン。新しいメガストーンの登場にめぐみんとポケットから飛び出したロトムが身を乗り出して反応する。
　キーストーンはこれに反応していたのか。そういえば、カロス地方に散らばっていたメガストーンもメガリングに反応していたな。
「カズマ、これはなんのポケモンのメガストーンですか？」
　ウィズさんに許可を取ってメガストーンを手に取り中心のマークの配色と水晶の色を観察する。
「この配色……水晶の色……これは、ラグラージナイトだな」
「ラグラージ？　初めて聞く名前ですね」
「みずタイプのポケモンでな、パワー自慢で有名なんだ」
「みずタイプ……そういえば、みずタイプのポケモンって見たことなかったよね？」
　クリスに言われて気付く。
　確かに今までタマゴから生まれたポケモンの中にも俺が呼び出したポケモンの中にも、元々がみずタイプのポケモンはいなかったな。

『ウォッシュロトムはみず・でんきタイプロトよ』
「ああ、そういえば。でもあれって、洗濯機に入った場合の話でしょ？
君って元々でんき・ゴーストタイプだよね？」
クリスの言うとおり、ウォッシュロトムはフォルムチェンジによるタイプ変化だ。
「そうだな、今度見せよう。ウィズさん、これは何処で？」
「いつも商品を卸してくれる行商人の方から聞いた話だと、仕入れた魔導具を作った職人さんの家の近くでこんな石が沢山見つかったらしくて、キラキラしてて売れるかもってことで仕入れたんだそうです」
「メガストーンが沢山っ!?　なんですかその財宝の山のような場所は！」
「どうどう、落ち着けめぐみん」
ウィズさんの話に瞳をキラキラと輝かせて食いつくめぐみんをなだめる。俺もめぐみんほどじゃないが、内心テンションが上がっている。
「その人ってどこに行けば会えますか？」
「そこまでは、聞いたことがないので……今度聞いてみますね」
「お願いします」
すぐに知れないのは残念だがあてができたのは良かった。
もっとも、俺の後ろでめぐみんは肩を落としてクリスに励まされてるが。
「ウィズさん、よければこれを売ってもらえませんか？」
「もちろん、いいですよ」
俺は持ってきた財布から墓地の件のお礼ということでまけてもらった分のお金を支払ってラグラージナイトを譲ってもらった。
二つ目のメガストーン……これで今後の戦いに幅ができた。もっとも、エリス様のお願いを叶えるための地盤づくりで忙しいから魔王討伐とかは他の転生者に任せたいんだけどなぁ。
「ところで、ここって他にどんな魔導具があるんですか？」
イーブイのご機嫌を取るためになんかお土産を買っていきたいん

だが、俺は近くの魔導具の棚に触れてみる。見たところポーションのような液体が入った瓶がたくさん並んでいる。
「あっ、気をつけてください。その液体は強い衝撃を与えると爆発するので」
「うわっと！　じゃあ、これは？」
　ウィズさんの言葉に慌てて棚に瓶を戻す。隣の液体を指差す。
「それは蓋を開けると爆発します」
「じゃあ、これは？」
「水に触れると爆発します」
「これは？」
「温めると爆発します」
「ここって爆発するものしかないんですか？」
　流石にここまで爆発するものしかないので訝しげな目をウィズさんに向けるが彼女は慌てて首を横に振る。
「違いますよ！　そこはたまたま爆発するポーションを並べただけです！」
　なんでそんな危険物を同じ棚に……。
　どうも、イーブイへのお土産になりそうなものはなさそうだし……しょうがない、帰って誠心誠意謝るしかないか……。
「それじゃあ、ウィズさん。俺達はこれで。ムウマ達のことでわからないことがあったらいつでも呼んでください」
「はい、ありがとうございます。これからもウィズ魔導具店をご贔屓に」
　ウィズさんに見送られて俺達三人は店をあとにした。
「さて、帰ってイーブイに謝るかぁ……。」
「私も手伝ってあげますから、元気だしてください」
「うん、あたしも手伝うから」
「メンラッ！」
「チックチック！」
「あんがとう、二人共、ヌメラ、トゲチック……。」
　覇気のない声で二人と二匹にに感謝の気持ちを伝え、屋敷への帰路

につこうとした。
――その時。
『緊急！　緊急！　全冒険者の皆さんは、直ちに武装し、戦闘態勢で街の正門に集まってくださいっっ！』
キャベツ騒動以来聞いてなかった、街の危機を知らせるアナウンスが俺達の耳にも届いた。
「なぁ、無視していいかな？　早くイーブイのところに……」
「しょうがないよ、行かないと罰金ものだから」
「はあぁぁぁぁぁぁ……。」
俺は大きなため息をつき、このアナウンスの原因を作ったモンスターかなんかに対し、絶対許さんという気持ちで正門に向かった。

大いなる光？

――俺たちが正門に来ると、そこには他にも数多くの冒険者がやって来ていた。屋敷で留守番を任せていたはずのゆんゆんとダクネスも来ており、皆一様に同じ方向を向いている。

「何だあいつ……。」

その視線の先には首のない馬に乗った首のない真っ黒な鎧の騎士、俗に言うデュラハンと呼ばれるモンスター。小脇に抱えた自分のものと思われる兜を被った生首の目が、こちらを睨みつけている。

反対の手に持つ、見るからに業物の大剣からみた通りその風格は明らかに並のモンスターではない。

緊迫する雰囲気の中、冒険者達が見つめる中デュラハンが口を開いた。

「俺は最近、この近くに来た魔王軍幹部のものだが……」

「……。」

「毎日毎日、俺の城に爆裂魔法を撃ち込んでくる大馬鹿者はどこのどいつだぁぁぁ!!?」

魔王軍幹部のデュラハンさんはそれはもうお怒りだった。

「よく聞け貴様ら！　この街には低レベルの雑魚しかいないことは知っている！　どうせ俺には手を出せまいと放置しておけばポンポン撃ち込みおって！　ねぇ？　なんでこんな陰湿なことするの？　おかげで食事もまともに喉も通らんわ！」

「喉繋がってねぇだろ……。」

ってか、この街で爆裂魔法を撃つやつって言ったら……。

「めぐみん」

「ッ！　そ、その爆裂魔法を撃つところを探してるうちにあまりにも丁度いいところに廃城が立っていたのでつい……。」

「なんてことしてんのよ、バカめぐみん！」

ゆんゆんがめぐみんの襟首を攫んでがくがく揺らして、めぐみんを非難して責めたてる。

その様子から察したらしい冒険者達がモーセの川のごとく俺たち

パーティメンバーを残して真っ二つに分かれる。
「貴様か!?　毎日毎日、なんの嫌がらせだ!?」
「――――まんまと騙されましたね、悪しきものよ！　我は紅魔族随一の魔法使いめぐみん！　全ては貴様をあの城からおびき寄せるため！」
「嘘おっしゃい！」
すげぇ、開き直りやがったよコイツ。
……でも確かに。
「――――謝る必要あるのか？」
「え？」
「だって、向こうはモンスター。こっちは冒険者、敵対している者同士攻撃されても文句は言えないだろ？」
「そ、それでも最低限の礼儀くらいあるだろう!?」
「は？　じゃあ、お前。今から食べる奴に、『今から食べまーす』っていう初心者殺し見たことあんのか？」
「え？　い、いやそれはないが……。」
デュラハンはが押し黙るのを好機に俺は次々と言葉をぶつけていってやる。
「大体さ、お前らだろ。魔王城から出てきた幹部連中って？　お前らのせいでこっちはこの間の悪魔討伐で王都からの援軍が来てもらえなくて死にかけたんだけど？　迷惑って言うなら、こっちもそうなんですけど？」
「そんなこと俺が知るかっ！」
「それはこっちの台詞だ、ゴラァっ！」
「っ!!?」
あ～、駄目だ。ただでさえイライラしてんのに、ペチャクチャペチャクチャくだらねぇこと言いやがって！
「こっちはな、テメェが襲撃してきたせいで愛しのパートナーに謝りにいけてねぇんだよ!!　こうやって時間取られてるせいでアイツの機嫌がどんどん悪くなったらどうしてくれんだ！　ああん!?」
「ほんとに何いってんだお前っ!?」

我慢の限界を迎えてブチギレて怒鳴り散らすとデュラハンが何を言ってるのかわからないと言わんばかりに混乱して叫んだ。
その様子を、俺達の背後で街の冒険者が唖然として見つめているがそんなことは知ったことではない。
「カズマくん、あたしやダクネスのこと色々言ってくれるけどさ……。」
「あいつ自身も重度のポケモン狂いだぞ……。」
「ですよね……。」
後ろで俺のパーティメンバーが呆れた声音で色々言ってるが否定はしない。まごうことなき真実だからだ。
ああ、そうさ！　俺はポケモン狂いさ！　ポケモン大好きさ！　俺が正常でいられるのはパートナーのイーブイがいるからさ！
そのイーブイと喧嘩別れしたのに、この首無し中年が来たせいで謝りに行けない……そりゃとっくに怒りのゲージは振り切れてるに決まってんだろうがっ！
「大体なぁ！　テメェ魔王軍の幹部のくせに何駆け出しの街の近くに陣取ってんの？　ねぇ、大人気ないとか思わないの？　プライドとかないの？　なに？　自分より格下を廃城から眺めてお山の大将気取り？　そういうの俺の地元では井の中のケロマツっていうんだけど!?」
「ちょっとちょっと、ストッッップ!!!」
「私が言うのも変ですけど一回落ち着いてください、カズマ！」
「そうだぞ、罵るならぜひ私を！」
「黙ってろ変態クルセイダー！」
「はうん！」
ツラツラと俺の口から出るデュラハンへの抗議の言葉。やばい、言い始めたらなんか止まらなくなってきた。
そんな俺をクリスとめぐみんとダクネスが止めに入った。
「駄目だよ、カズマくん！　アンデッドっていうのは基本的に人間のクズしかならない最底辺の存在なんだから。そんな正論言ったって怒らせるだけだよ！」

「あっ……。」
「……クリス、お前今、火に灯油をぶちまけたぞ」
「き、貴様らぁぁぁぁぁ!!!」
「「あっ、やば……。」」
俺とクリスの口撃に我慢の限界を迎えたのか、ベルディアからモヤのような不気味なオーラが立ち込める。
「素直に謝るなら、何もする気はなかったが！　ここまでコケにされて黙って帰れるか！」
そう言って、奴は左手の人差し指の先を俺を定める。そして、俺か避ける間もなくベルディアはすかさず叫んだ。
「汝に死の宣告を！　お前は一週間後に死ぬだろう!!」
黒いモヤのようなものが俺に一直線に向かって飛んでくる。見るからによくないものであるそれを反射的に両手でガードしようとした。
――だが、しかし。
バキッ！
「ッ!?」
「なんだとッ!?」
突如、俺の前に展開された光の壁がモヤと衝突し、ガラスが割れるような音ともにモヤは完全に消え去った。
「カズマくんっ、大丈夫ッ!?」
「なんともありませんか!?」
「あっ、ああ……。」
俺を心配して一番近くにいたクリスとめぐみんが俺の体をポンポン触って異常がないか確かめる。
あのモヤ、俺に当たる前に完全に消え去ったよな……というか、一瞬凄く見覚えのある金色のリングが見えた気がしたんだが。
「馬鹿な！　アークプリーストでもない小僧が俺の死の宣告を無効化しただと!?　何だ今の力は……！　何なのだお前は!?　お前の背後に一体何がいる!?」
「？」

デュラハンは狼狽した様子で俺を指差し、絶叫にも似た言葉を俺に投げかけてくる。
俺の背後、だと？
一応、俺の後ろを見るがそこにはことの行く末を見守っている冒険者達のみ。実際の意味ではないと思うので、それはそうだろう。
なら、俺の背後にいる存在……。
『……。』
――やはり、あいつか。脳裏に俺を守護する創造神の姿がよぎる。
どうやら、あいつは俺のことを相当好いてくれてるらしい。いや、もしかしたら、勝手にヒスイ地方に飛ばしたのを気に病んでるのかもしれない。
恨んでないといえば嘘になるが、新しいポケモンとかリージョンフォームに出会えたことには感謝はしている。それで、相殺ってことにしてやる。
「――そうかっ貴様かっ!?　あの預言者が言っていたこの街に舞い降りたという大いなる光は!?」
「何の話をしてやがる？」
「……。」
なにかに気付いた様子のベルディアは確信めいた口調でわけのわからないことを言ってくる。クリスも意味がわからないのか黙り込んでるし。
預言者？　大いなる光？　全く訳がわからない。
「……どうやら、手ぶらで帰るわけにも行かなくなったようだ」
「ッ!?」
――突如、身を裂くような殺気がこの場に充満する。
これが、魔王軍幹部の殺気ッ……!?　ホーストのときと同じ、いや、それ以上だ。
「その男を引き渡せば今回は引き下がろう、悪い取引ではあるまい？
ただし断れば、この街の人間全員を殺すッ！」
「ッ！」

確かな殺気のこもったその言葉はハッタリと言うにはあまりにもリアルすぎる。
この言葉に冒険者達がざわめき出す。一人の冒険者と、一つの街全員の命。比べるまでもない。
仕方ない……ここは捕まったふりをして、スキを見て逃げ出すか……。
そう思っていると、俺の前にダクネスが立ちはだかる。
「確かに我々は駆け出しの街の冒険者だ。だが、仲間を見捨てるほどプライドを捨てるつもりはないッ！」
「そ、そうだっ！」
「あんたなんかに仲間を売るもんかっ！」
ダクネスが叫ぶのに決起されて、冒険者達が次々と俺の前に立ちはだかる。
「なんで……。」
「あんたには森の悪魔を倒してもらった借りがあるからな！」
冒険者の一人がそう言うと他の皆もうんうんと同意するように頷く。
「結束の強い冒険者ならそういうと思っていた。……仕方ない、皆殺しにしてから連れて行こう」
デュラハンの足元が黒い沼のようになると鎧を着たアンデッド達――アンデッドナイト達が大量に現れる。その光景にクリスがうげぇと顔をしかめた。
「聞けっ！　我が名はベルディア！　魔王軍幹部が一人、デュラハンのベルディアだ！」
「ッ！」
「街の者たちを皆殺しにしろ！」
デュラハン――――ベルディアの号令でアンデッドナイト達が一斉にこちらに向かってくる。
「だ、誰かプリースト呼んできて！」
「聖水ありったけもってこい！」
あまりの数に冒険者達は冷静さを失ってしまう、ここはウィズさん

のときと同じようにバクフーンのひゃっきやこうで……！
「ん？」
バクフーンのボールを投げようと握りしめたときに気付いた。
――アイツら、俺の方だけ見てない？
周りの連中もそれに気づいたのか、再び俺を取り残して左右に別れる。すると、アンデッドナイト達はなんの躊躇いもなく一直線に向かってきた。
「ちょちょちょちょ、ちょっと待てやぁぁぁ!!!」
俺は全速力でアンデッドナイトに背中を見せて駆け出す。それに合わせてアンデッドナイト達も駆け出し、俺を追尾してくる。
どうなってんだこれ!?
「カズマくんっ！」
「クリス!?」
混乱していると、いつの間にか隣にいたクリスが俺と並走しながら叫ぶように声をかける。
「あいつら、君に引きつけられるんだよ！」
「だから、なんで俺なんだよ!?」
「ウィズさんが言ってたでしょ！　迷える魂は大きな加護を持つものに救いを求めるって！」
「……そういうことかよっ!!」
俺が持ってるアルセウスの強大な加護に、迷える魂であるアンデッドナイト達が引き付けられているのか。
「おいっ！　お前達、そいつは後でいい！　まずは他の冒険者共を、おーい！」
「……。」
ふと向こうを見ると、ベルディアは必死に指示を出しているが、アンデッドナイトたちはガン無視で俺の方に走ってくるのが見えた。
どうやら、俺の方に引きつけられてるというのは間違いないらしい。
――だとしたら、やりようはある！
「ロトム！」

『ロト！』
「俺が言うポケモンを呼び出してくれ、それとめぐみんに伝言を！」
『任せるロト！』
「カズマくん、何する気？」
　クリスからの質問に答える余裕はなく、全力で走りながらロトムがポケモンを呼び出すのを待つ。
　三十秒ほどたって、ポンッという音ともに俺の腰のモンスターボールの一つがクラフトタイプのモンスターボールに変化する。
『入れ替え完了ロト！』
「よし。出てこい！　アヤシシ！」
「ブルゥゥ……！」
　出てきたのはヒスイ地方のオドシシが進化した白い毛並みのシカのようなポケモン、おおツノポケモンのアヤシシだ。
　俺は、アヤシシの背中に飛び乗る。
「クリス、捕まれ！」
「う、うん！」
　アヤシシの背中から手を伸ばし、クリスの手を取って俺の後ろに跨がらせる。
　ロトムは俺の伝言をめぐみんに伝えにいった。
「カズマくん、前からも来るよ！」
「しっかり捕まって、頭下げとけ！」
「う、うん！」
　いつの間にか前方と後方に別れて追いかけてきたアンデッドナイト達が前後から迫ってくる。
　クリスは俺に言われた通りに俺の腰に回した手に力を込める。
　くっそ、こんな時じゃなければ最高のシチュエーションなんだがなぁ！
「アヤシシ、『バリアーラッシュ』!!」
「ブルァァァ!!!」
　アヤシシの雄叫びとともに、アヤシシ自身とその背に跨がる俺達を光の壁に覆われ、そのまま速度を上げてアンデッドナイトに突撃し屍

の騎士達を蹴散らす。
「アヤシシ、向こうだ！　アイツに突っ込んでくれ！」
「ブルァァァ！」
アヤシシは俺の指示に疑う素振りも見せず、ベルディアに向かっていく。こういう信頼はヒスイを駆け抜けた間柄だからこそ、そういう点ではアルセウスに感謝する点が一つ増えたな！
「行くぞ、ベルディアァァァァ!!」
「ほう、騎乗対決か。面白い！」
俺の叫びを挑発と受け取ったのかベルディアは首無しの馬とともに俺に向かってくる。当然、俺の後ろにいるアンデッドナイト達はそのままに……。
少しずつ近づく、俺とベルディアの距離。
――そして、ベルディアの大剣が俺達に当たる寸前に声を張り上げて叫ぶ。
「今だ、跳べっ！」
「ブルァッ！」
ベルディアの大剣のリーチの寸前で叫ぶと、アヤシシは僅か数ミリで届きそうだった大剣を回避して天高く飛び跳ねる。
「なんだとっ!?」
「バーカ！　アヤシシを正面から突っ込ませるわけねぇだろ！　前見てみやがれ！」
俺達が自分の頭上を通過したことに驚愕するベルディア。しかし、そこになだれ込むのは俺を追いかけてきたアンデッドナイトの大群。
「ぬおぉぉぉぉぉ!!」
自身の配下の波に飲まれるベルディア。これで奴は少しの間とはいえ身動きは取れない。
――チャンスはここしかない！
「めぐみん！　今だぁぁぁーーーっ!!!」
「この絶好のシチュエーション！　感謝します！　深く感謝しますよ、カズマ！」
ロトムの伝言を聞き、爆裂魔法の準備をしていためぐみんがそのす

きをついて魔法陣を展開する。
「我が力、見るがいい！『エクスプロージョン』ッッッ！」
めぐみんが放った爆炎がベルディアとアンデッドナイト達を飲み込んだ。
「何とかうまくいったな……。」
「流石カズマさん！」
「こういうときの作戦は右に出るものなしだね！」
「伊達に何度も修羅場超えてないんでね」
魔力切れで倒れためぐみんをおんぶしたゆんゆんとクリスの称賛にアヤシシから降りながら応える。
この程度、グラードンとカイオーガとどつきあったときと比べれば大したことはない。
「まっ、あれで終わればの話だけどな……。」
「ふっ、ハハハハハッ！　まさか、こんな駆け出しの街の冒険者に配下を全滅させられるとはな！
――――さて、今度はこの俺自らが貴様らの相手をしてくれようか！」
「嘘、爆裂魔法が直撃したのに……。」
「驚くことじゃない……アイツは毎日めぐみんの爆裂魔法喰らってるんだからな」
「あっ、そういえば……。」
「そのとおり、お陰で耐性がついたわ！」
それはなんとも……ご愁傷様です……。
少しだけベルディアに同情していると、数多の冒険者達が狙われている俺達を援護するように冒険者達がベルディアを取り囲む。
「ほーう？　今度はお前たちが相手をしてくれるのか？　そこの小僧と同じくらいは楽しませてくれるのだろうな？」
「たった一人で何ができるってんだ！」
「いくら強いっつっても後ろに目はついちゃいねぇ！　一斉に攻撃すればすきができる！」
「おいバカ、よせっ！」

冒険者達が一斉にベルディアに向かって一斉に斬り掛かっていく。同時に、ベルディアが自身の頭を空に向かって放り投げる。
すると、空中に禍々しい目が現れ冒険者達を見る。
――経験でわかる。あれはヤバい！
俺はエルレイドのモンスターボールを投げて、ベルディアの頭を指差しすぐさま指示を送る。
「エルレイド、『サイコカッター』」
「「「「え？」」」」
「エル、レイッ！」
皆が唖然とする中、エルレイドは意にも介さず俺の指示の通りベルディアの頭に両手の刃からサイコエネルギーで作られた刃を放った。
「ぎゃあああああーーーっ!!」
「ったく、あんな見え見えの弱点。狙わないほうがおかしいだろうが……。」
「「「「た、確かに……。」」」」
黒い煙を上げながら落下していくベルディアの頭部。体は慌ててそれを回収に向かった。
今のうちに攻撃に出た前衛職達を下がらせる。どうやら、全員さっきの一瞬でエルレイドがサイコカッターを放たなかったら斬られていたことを直感的に感じ取ったようだった。
「……死角ができることはないようだな。多分、死の宣告と同じデュラハン固有の能力だろう。あの投げた頭があるかぎり１８０度全てが奴の視界なんだ」
「じゃあ、どうやってアイツに攻撃を当てるのさ？　この街の冒険者の魔法じゃ絶対に決定打にならないよ？」
「私の爆裂魔法ももう打てませんし……。」
「……あんまりやりたくないんだけどな」
「エルッ！」
俺が自分で作った作戦に乗り気になれないでいると、俺の考えを読んだエルレイドが任せろと言わんばかりに声をかけてきた。
その様子にフッと笑みをこぼして、作戦を口にする。

「俺とエルレイドで時間を稼ぐ。その間になんでもいい、遠距離系の攻撃を間髪入れずにあいつにぶつけてくれ」
「でも、この街の冒険者であいつに決定打を与えることは……。」
「それでもいい、目的はあいつにダメージを与えることじゃないからな」
「？」
　俺の作戦にいまいち目的がわからない冒険者達にこの作戦の目的を教えてやる。
「弱点だ。いくら低威力でも苦手な属性の攻撃には何らかのアクションを見せるはず。そこから切り崩す」
「あいつに弱点がなかったら？」
「……そこまでだな」
　俺の不吉な呟きに冒険者達は静まり返る。だが、どのみちここで倒すしか生き残るすべはない。
「わかった、その案に乗ろう。ただし、私も前に出るぞ」
「ダクネス……。」
「攻撃は当たらなくても盾くらいにはなる……そう、寧ろ肉壁にしてくれるつもりでいいぞ、エルレイドッ!!」
「エ、エェル……？」
　そんなことだろうとは思ったけどさぁ……もう少しカッコつけようぜ……。相変わらずのダクネスの発言に俺もクリスもガクリと肩を落とす。
　エルレイドも完全に混乱してる、『あやしいひかり』とか使ったわけでもないのに混乱させるとか一周回ってすごいわ。
「うちのエルレイドに変なこと吹き込むんじゃねぇ、ドＭクルセイダーが」
「くうっ！　やはり普段温厚な奴の罵倒は一味違う！」
　ダクネスは俺の罵倒に相も変わらない反応を見せる。
　ったく、あまりにもいつも通りだからこっちの肩の力が抜けちまったよ。いい意味で、だけどな。
　俺はダクネスの目を見て、一言忠告をした。

「……死ぬなよ」
「ああ、任せておけ」
――どうやら、向こうも頭を回収したらしくこれ以上は待ってはくれなさそうだ。
流石に頭に攻撃を喰らったのは効いたらしくハァハァと息を切らしながら戻ってくるベルディア。アンデッドでも息切れするんだ……。
「異論はないみたいだから、俺の作戦通りに行くぞっ！」
「「「「おうっ!!」」」」
俺が号令をかけると他の冒険者達も覚悟を決めたのか勇ましい声を上げる。それでこそ、冒険者だ。
「ここまでコケにされたのは生前でもデュラハンになってからも初めてだ……。もう加減はせんぞ、なんとしてでもこの街を滅ぼすッ!!」
ベルディアは完全にキレている。もはや、和解は不可能。俺も殺されるのは御免だからどのみち、和解の道なんてなかったけどな。
「エルレイド、最初からとばしてくぞ！」
「エルッ！」
ポケットから取り出したキーストーンを握りしめると、拳の隙間から光が漏れ出し、エルレイドの持つエルレイドナイトから同じように伸びた光が結びつきエルレイドの全身が輝き出す。
「エルレイド、メガシンカッ!!」
「エェェェェルッ、レェェェェェェイッ!!」
メガエルレイドへと進化を遂げて駆け抜ける、一気に接近するとその鋭さを増した刃でベルディアの大剣と切り結ぶ。
「ほう、貴様も剣士か？　面白いッ！」
兜の下からベルディアがニヒルに笑う声が聞こえると、エルレイドの両手の刃と奴が持つ一振りの大剣が火花を散らしあう。
二合、三合と剣が混じり合い、二人が互いに一歩退く。
「……貴様も中々だが、剣の腕は俺に分があるようだな」
「エェル……。」
ベルディアの言葉に悔しげに顔を歪ませるエルレイド。互いに卓

越した剣士故に、たった数回剣を合わせただけでお互いの実力が読めたようだ。
「【ファイアーボール】！」
「【ライトニング】！」
「【ブレードオブウィンド】！」
だが、それと同時に魔法使い職たちの攻撃が一斉に放たれる。炎、雷、風の中級魔法がベルディアに向かうが奴は避ける素振りも見せずマントを翻し受け止めてみせた。
「やったか!?」
「それ、フラグ……。」
炸裂した魔法による煙がもうもうと立ち込めるが、それが晴れるとそこには無傷のベルディアが余裕の様子で立っていた。
「魔王様の加護を受けたこの鎧にその程度の魔法が通用するわけなかろう」
「そっちも加護持ちかよ……！」
上等だ……アルセウスの加護を持つ俺か、魔王の加護を持つベルディアか……白黒つけてやるッ！
「エルレイド、『かげうち』だッ!!」
「エルッ！」
俺の指示を受けるとエルレイドの目が赤く光り、足元の影が凄まじい速度でベルディアの背後まで伸びていく。それはやがて実態のように地面から離れ背後からベルディアを攻撃した。
「ぐっ……！　なんだ、今のは？」
ゴースト技『かげうち』は必ず相手より先に攻撃を当てることのできる技、威力は低いが注意力をそらすには十分。
「続けて、『つじぎり』！」
「エルッレイッ！」
青い光を纏った鋭い刃がベルディアの体を斬りつける。メガシンカしてエルレイドの攻撃に僅かながらに後ずさる。
「くっ……！」
「よしっ！」

確かに手応えがあった！　僅かながらもダメージは通っている。
ただ、決定打になるような攻撃にはなりそうにないかっ……！
「今度はこちらからだ！」
「エルレイドッ、回避だ！」
ベルディアは次々と受ける攻撃に激昂し、エルレイドに攻撃を仕掛ける。あの鈍重な鎧からは考えられない速度で大剣をエルレイドに振り下ろす。
まずい、回避が間に合わない！
「ッ！」
だが、その剣はエルレイドには届かなかった。
「私を忘れないでもらおうか！」
「ダクネス、ナイスだっ！」
控えていたダクネスがエルレイドとベルディアの間に入り、大剣を自身の剣で受け止めていた。
「ほう、クルセイダーもいたか。思っていたよりも楽しませてくれる！」
剣を構え直したベルディアが次々と剣戟をダクネスにぶつけていく。やばい、いくらダクネスの防御力がピカイチでもあんなに連続で喰らったら持たない。
「エルレイド、『サイコカッター』で距離を取れ！」
「エルッレイッ！」
エルレイドの両腕から放たれた光の刃がダクネスの横からベルディアに直撃する。そのすきにエルレイドがダクネスを抱えて退く。
「おい、大丈夫か！」
「あ、ああ……なんとかな」
「ッ！」
口では大丈夫と言っているがダクネスの鎧は既にボロボロで至るところに斬り傷ができている。とても、大丈夫に見える姿ではない。
「ダクネス、一旦戻れ！　俺とエルレイドでその分の時間は稼ぐ！」
「それはできないっ！」
「ッ!!?」

俺の叫びに間髪入れずにダクネスが叫び返した。
「私は聖騎士として……守るものとして……背に守るべきものがある以上一歩も譲れない。絶対にッ!!」
「ダクネス……!」
ダクネスは剣を構え、デュラハンを見据えながら思いの丈を口にする。その言葉に俺はさっきまでの発言を飲み込む。
さっきの発言は彼女のクルセイダーとしての誇りを傷つけるものだからだ。
「なにより、このデュラハンはなかなかやり手だ！　さっきの攻撃で私と鎧を少しずつ傷つけて悦んでいるんだ！」
「えっ!?」
「……あいつはぶっ倒れるまで盾役になってたほうが本望かもしれないな」
「縁起でもないこと言わないでよ！」
少し前の俺の感動を返してほしい。ベルディアもとんでもない風評被害を受けて動揺してる、流石に同情する。
――魔法での攻撃はあらかた撃ち尽くしたし、今度はポケモンの技を試してみるか。
「めぐみん、ゆんゆん、クリス！　ポケモンの技も試してくれ！」
「わかりました！　ガバイト！『りゅうのはどう』です！」
「キルちゃん、『マジカルシャイン』！」
「トゲちゃんは『エアスラッシュ』！　メタングは『ラスターカノン』！」
俺の声に反応して、次々とめぐみんたちのパートナーが技を放っていく。
「くっ、いい加減うっとおしい！」
連続で攻撃を喰らっていてもベルディアは怯んだ様子は一切なく、体験で煙幕を払い飛ばしエルレイドとダクネスに斬りかかっていく。
ドラゴン、フェアリー、ひこう、はがね系の技もダメか……さっき頭に撃った『サイコカッター』も決定打にならなかったところを見るとエスパーも弱点じゃない。『かげうち』も『つじぎり』も僅かなダ

メージにしかならない。
くっそ、このままじゃネタが尽きちまう！　まさか、本当に弱点がないんじゃないだろうなあのデュラハン！
俺が焦っているとめぐみんの帽子がモゾモゾと動き出した。
「メラッ！」
「ヌメラ？　危ないですよ、早く戻ってください！」
「メンラッ！」
「まさか、貴方もやるというのですか？」
「メンラァ！」
皆が戦う姿に感化されたのか生まれたばかりの赤ん坊同然のヌメラがめぐみんの帽子から飛び出し、自分も戦うと表明してみせた。
「っ！　わかりました、それでこそ私のパートナーの一人です。やりましょうヌメラ」
「メンラッ！」
『ヌメラなら『みずでっぽう』が使えるはずロト！』
「わかりました、ヌメラ『みずでっぽう』！」
「メエリャアァァァ!!」
口をすぼめたヌメラが一直線に水を放つ。
「っと！」
「わぷっ！」
しかし、その水はベルディアに回避され、その直線状にいたダクネスが頭から水を被った。
「ああ！　すみません、ダクネス！」
「い、いや……水責めもわるくないかも」
「流石に時と場所を考えようよ！」
ヌメラの『みずでっぽう』を受けても自分の趣味を曲げないダクネス。
だが、今はそれよりも気になることができた。
「……アイツ今、なんで避けた？」
「え？」
「今まで攻撃を受け止めるばかりで避けなかったアイツがヌメラの

『みずでっぽう』を、なんで避けた？」
――俺の脳がその答えを導き出すのに１０秒も必要なかった。
「めぐみん、ヌメラにもう一発『みずでっぽう』を撃たせてくれ！」
「わ、わかりました！　ヌメラ、もう一度『みずでっぽう』！」
「メリャァァァ!!」
「とおぉっ！」
ヌメラの『みずでっぽう』はまたも当たることはなかった。回避され、小さな水たまりが足元にできるのみだった。
「決まりだな……！」
「みたいだね」
俺とクリスはニヒルな笑みでベルディアを見る。そして、後の冒険者達に大声で奴の弱点を伝える。
「水だぁぁぁぁぁぁ!!　ありったけの水をあいつにぶっかけろぉぉぉ！」
「【クリエイト・ウォーター】！」
「【クリエイト・ウォーター】！」
「【クリエイト・ウォーター】！」
俺の号令で魔法使い職達が次々と水属性の初級魔法【クリエイト・ウォーター】で作った水を放ちまくる。
その水、ベルディアはぴょんぴょん跳ね回りながらその水を必死に避けている、あの様子だとただの水でも喰らえば相当のダメージになるようだな。
「ロトム！　俺の考えはわかるな!?」
『モチのロンロト！』
ロトムが俺の想像するポケモンを呼び出すのを待っている間も、ベルディアの様子を観察する。
――やはり、あの鎧の硬さよりもあの速さが一番の難点だな……まてよ、確かあいつの特性は。
「メェェェェラァァァァ!!」
「ッ！　ヌメラ？」
俺の思考は突然叫びだしたヌメラの声で遮られた。

「ヌメラ、一体何を……？」
「めぐみん、空がっ！」
「空、なっ!?」
ゆんゆんに言われ、めぐみんと同じように俺も空を見る。
そこには、曇天の雲が広がっていた。さっきまで快晴だったはずの空が今にも降り出しそうな天気になっているのに冒険者もベルディアも目を剥いて驚いていた。
「これって……。」
「ヌメラの『あまごい』だっ！」
みずタイプの技、『あまごい』は文字通り少しの間だけ天候を雨にする技。湿気を好むヌメラが早い段階で覚える技の一つだ。
そして、一粒の雫が空から降ったのを皮切りに、土砂降りの如き雨が大地を濡らした。
「ぎゃあああーーっ！　水が、みずがぁぁぁぁぁあーーっ！」
「マジで苦手なんだな……。」
天から降り注ぐ無限の水を避ける術を持たないベルディアはなすすべもなくずぶ濡れになり絶叫を上げる。
『カズマ、交換完了ロト！』
「よっし、エルレイド！」
「エルッ！」
ポケモンの交換が終わり、エルレイドを下がらせる。戻ってきたエルレイドはメガシンカが終わり元の姿へと戻る。
「本当に……よく戦ってくれた、あとは任せろ。ゆっくり休んでいてくれ」
「エルッ……。」
傷だらけの体を労るように支えて感謝の言葉を送り、エルレイドをモンスターボールに戻す。
「エルレイドからもらったバトン、必ず繋げるぞ！　いけっ、ラグラァァァジ!!」
「ラァァァァァジ!!!」
力強い雄たけびとともに現れたのは青い体に大きなヒレを尻尾と

頭に持つ、ぬまうおポケモン、ラグラージだった。
「ラグラージ、ラグラージナイトだ！」
「ラージ！」
ウィズさんの店で手に入れたラグラージナイトを投げ渡し、再びキーストーンを強く握りしめる。
二つの光が結びつき、ラグラージの姿を変えていく。
全身の筋肉が盛り上がり、両腕は丸太のように太くなり、その力は巨大な岩すらコナゴナに砕くと言われているほど。
「ラァァァァァジ!!!」
メガシンカが完了したメガラグラージが雄たけびとともに両腕を地面に叩きつけると、その場が窪み小さなクレーターを作り出した。
「今度は何を出すかと思えば……そんな鈍重そうな姿の使い魔を出して、俺の速さに対抗できると？　この雨さえ止めば貴様は今度こそ……」
「なら……試してみるか？」
「なに？」
メガラグラージの姿から、自分の速さに追いつけないと侮ったようだがそんなことは百も承知なんだよ。
「ラグラージ、『アクアブレイク』」
「ラージッ！」
ラグラージは足に力を込めると一瞬の間にラグラージはベルディアの眼前に迫った。そのまま、水の力を纏った巨大な拳をベルディアめがけて思いっきり振り抜く。
「速ッ……！」
「ラージィィィィィ!!!!!」
「ぐおおおおおおおーーーーっ!!!!」
殴り飛ばされたベルディアは地面をえぐりながらバウンドし、平原にあった岩をぶち砕きようやく止まる。
「す、凄いパワー……。」
「それに、なんてスピード……！」
『あれがメガラグラージの特性ロト！』

「メガラグラージの、特性？」
「特性、『すいすい』。天候が雨のときに素早さが二倍になる。そして、ラグラージは元々大型船を押して泳ぐことすらできるパワーを持つ。それで殴られりゃああもなるさ」
　メガラグラージのスピードとパワーに唖然とするクリス達にその種明かしをしてやる。
「ヌメラ、お前の『あまごい』がアイツの力になっているんだ」
「メェラ？」
「すごいですよ、ヌメラ！」
「メラ？　メンラッ！」
　よく事情がわかっていないらしいヌメラだが褒められていることはわかったらしくピョンピョン跳ねて喜んでいる。
　しかし、その喜びはまだ早いようだ。
「はぁ……はぁ……危なかった……。もう少しであの世に還るところだったぞ……。」
「なんてしぶとい！」
　崩れた岩を払い除けてベルディアが立ち上がる。だが、鎧はところどころヒビが入り体が崩れるようにモヤが立ち込めている。
「ラグラージ、もう一発行くぞッ！『アクアブレイク』！」
「ラージッ！」
「ッ！」
　再びラグラージの拳がベルディアに叩きつけられると思われたが、すんでのところでかわされカウンターの大剣が迫る。
「地面に向かって『ハイドロポンプ』！」
「ラージィィィィ!!」
「なにっ……！　くっ！」
　咄嗟の指示でラグラージが口から放ったハイドロポンプが地面を跳ねる様にベルディアは慌てて飛び退く。
　直接ぶつけようとしたら避けられて終わりだが広範囲に撒き散らせば離れざるをえまい！
「やはり動きを止めなきゃ駄目か……なら、地面に向かって『れいとう

パンチ』！」
「ラージッ！」
　地面に放ったれいとうパンチは、雨の水たまりに加え【クリエイト・ウォーター】の水気によって湿った地面を一気に凍らせベルディアの足を凍らせる。
「くっ、こんなものぉ!!」
「なっ!?」
　ベルディアは大剣で自分の足を縛り付ける氷を叩き割り、脱出を試みようとする。
　まずい、このままだと雨が止んでまた向こうのペースに。そうなったら今度こそ勝ち目はない。
　――そのとき。
「ッ、捕まえたぞ……！」
「な、なんだと!?」
「ダクネス！」
　いつの間にかベルディアの背後にいたダクネスが羽交い締めにしてベルディアを拘束した。
「今だ、カズマ！　私ごとやれ！」
「なっ、何いってんだ！　そんなことできるわけっ！」
「おのれっ！　離せ、変態クルセイダー！」
「くっ！　この罵倒も悪くない……じゃなくて、長くはもたない！　安心しろ、私はこいつよりも水に耐性はある！　死ぬことはない」
「……わかった」
　ダクネスの必死の叫びに俺は頷くしかできなかった。
　隣のクリスの顔を見ると目があい、ダクネスを信じ切っているのか俺に向かって撃てと言うように頷いた。
「行くぞ、ラグラージ！」
「ラァァァァジ!!」
「や、やめろ……！」
　もはや逃げ場はないと悟ったのか命乞いじみたことを口にするが、騎士なら騎士らしく最後は潔く吹き飛びやがれッ！

「全力の、『ハイドロポンプ』だッッッ!!!」
「ラァァァ……」
ラグラージの口に水でできた球体が発生する。限界まで圧縮されたそれがベルディアめがけて放たれる。
「ラァァァァァジィィィィィ!!!」
「う、うおおぉぉぉぉーーーっ!!」
――地面をえぐりながら放たれた激流がベルディアとダクネスを飲み込んだ。

この勝利に祝宴を！

――ラグラージの放った【ハイドロポンプ】によってベルディアとダクネスが激流に飲まれると、まるで戦いの終わりを告げるようにヌメラが【あまごい】で呼び出した雲が散っていく。

水気のないはずの平原で、吹き散った水が朝霧のように視界を妨げ、雲の隙間から漏れ出た夕焼けの光が空気中の水分で反射してこの場に似つかわしくない幻想的な景色を見せていた。

「ハァ……ハァ……」

「ラァジ……。」

俺もラグラージもベルディアとの戦いの疲労で肩で息をしている。使った技は数発だが瞬間の判断の連発で結構キツイ、だが、俺が音を上げるわけには行かない。俺はメンタルだけの疲労だが、ラグラージやエルレイドはメンタル的にもフィジカル的にも俺とは比べ物にならない疲労を抱えているはずだからだ。

やがて、霧が薄れていきその先の景色が明らかになる。

――そこにいたのは。

「「「ダクネス（さん）ッ！」」」

霧の先にはベルディアの姿はなく、水溜りに仰向けで浮かぶダクネスの姿だった。冒険者カードの討伐欄を見ると確かにベルディアの名前が刻まれているのでどうやら跡形もなく吹き飛んだらしい。

ベルディアを倒したことを確認すると、俺とクリス、ゆんゆん、めぐみんは慌てて倒れているダクネスに駆け寄る。

「ッ！」

「ひどい……。」

ダクネスの有様にゆんゆんが口元を抑える。ダクネスの体は全身、ベルディアの剣による斬り傷でボロボロ、鎧も【ハイドロポンプ】の強すぎる水圧でへしゃげとところどころ砕けている。

「カズマくん、きのみを！　あれでも少しなら体力を回復できるでしょ」

「あぁ、任せとけ」

俺はロトムのきのみボックスのページを取り出して【オボンのみ】を取り出そうとする。
――ただ、雨で濡れてたせいか指が滑って【オボンのみ】の下にあったきのみをタップしてしまった。
「やべ……。」
「貸してっ！」
「あっ、待て！　そのきのみは！」
俺の手に現れた赤い小さな突起が沢山あるきのみをクリスがかっさらい、ダクネスの口に近づける。気を失っていても反射的に口に近づけられたそれをかじって口に含んでしまう。
喉に放り込まれたきのみの欠片はそのままゴクリとダクネスは飲み込んでしまう。
――すると、気絶していたダクネスが突然目をかっと開く。
「かっ、からぁぁぁ

くダクネスの動きが止まりその場にへたり込む。
「大丈夫、ダクネスッ！」
「ま、まりゃ舌がひりひりする……うぅ、倒れて無防備なわたひにぼうけんひゃ共がなにをするか期待していれば、まひゃか、こんな目にあうとは――しかし、これはこれで」
「おい」
「あっ」
　自分の失言に気づいたのかゆっくりと俺達を見上げるダクネス。そこには当然、白い目で自分を見る四つの視線がある。
「人が心配していれば……。」
「ひどいですよ、ダクネスさん！」
「最初っから、起きてたんだね？」
「実はお前、まだまだピンピンしてんだろ？」
「――ヒュ、ヒュ～」
「下手な口笛吹いてんじゃねぇ！」
　次々と仲間に責められ流石に気まずいのか、らしくない誤魔化し方をするダクネスだが【マトマのみ】のせいで口笛が上手く吹けない様子だ。そんなダクネスの頭を掴んでその長い髪をこれでもかというくらいワシャワシャとしてやる。
「や、やめろぉ！　髪をくひゃくひゃにするなぁ！　あぁ、でもこれも……。」
「メタング、連れて行けッ！」
「メタッ！」
「あっこりゃ、めひゃんぐ！　まひゃ勝手に【サイコキネシス】を使うのはやめりょッ！　こんりゃ、何もできない状態でボロボロの姿を街の冒険者に晒すなど――ふむ、ありかもしれん」
「あいつ、無敵かよ……。」
　また新しい扉を開こうとしているダクネスをメタングに連行してもらおうとすると、まだ興奮したようで身を捩っている姿に俺は頭を押さえる。おまけに全身ずぶ濡れで鎧や服が斬り裂かれていたり砕けたりしているせいで扇状的になっているのも相まってあの表情は

まずいと思う。
だって、男性冒険者の何人かがその姿に前かがみになっているもの。……対照的に女性冒険者はゴミを見る目をそいつらに向けてるけど。
「「カズマ（くん）（さん）？」」
「えっ、俺も？」
男性冒険者がダクネスを卑猥な目で見ているせいでそのメタングに連行するように言った俺までクリス達に睨まれるという弊害を受けている。……何故だ、解せぬ。
若干心を痛めながら沈みかけている夕焼けを感傷にふけるように見つめる。
「ん？　夕焼け？」
戦闘に夢中ですっかり忘れていたが――今、何時だ？
「へいロトム、今何時？」
『僕はシ〇じゃないロトよ……まぁ、いいロトけど。午後四時ロトよ』
「やっべぇじゃねぇか！」
ロトムが答えた時間に頭を抱えて叫んだ。いきなり叫びだした俺にクリス達がぎょっとしてこっちを見るが、そんな事を気にしている暇はない。
「すまんクリス！　俺は先に帰る！　後のこと任せる！」
「え？　あっ、ああ。なるほどね。わかった、早く行ってあげて」
「恩に着る！」
うちのパーティのサブリーダーと言えるクリスに短く要件を告げると、それだけで事情を察してくれたらしく早く行けとひらひらと手を振ってくれる。
ただ帰る前に、今回活躍しくれたラグラージの頬に触れる。しっとりとした体に触れるとラグラージは懐かしむように瞳を細めて微笑み、俺もそれにつられて口元が緩む。
「ラグラージ、突然呼び出して戦ってもらって悪かったな。でも、おかげで本当に助かったよ」
「ラージ♪」

「久しぶりにお前と戦えて楽しかったよ。ありがとう、ゆっくり休んでくれ」
心からの感謝の言葉をラグラージに送り、モンスターボールに戻ってもらう。
――――さて、それじゃあ行かないとな。
「うおぉぉぉぉぉぉ!!! 待ってろ、イーブイぃぃぃぃぃ!!!」
俺はベルディアとの戦いでの疲労を無視して自分の出せる最大速度で街を駆け抜けていく。本当はアヤシシに乗って爆走したいところだが流石に街中でそんなことをするわけには行かないので足で走る。
――――余談ではあるが、その時の俺の姿をクリスを含めた冒険者たちはひょっとしたらベルディアよりも速かったかもしれないと語っていたとかなんとか。
～～～

パートナーだったことに驚く俺。
……どうして、今朝はあんなに怒ってたのに。
「ブイッ！」
イーブイは俺の考えを察したのか家の中を振り返る。すると、そこにいたのはのそのそと歩いてくるメラルバ。
――そして。
『……。』
「そうか、君か……。」
そこにいたのは例のあの子。彼女はニコニコと笑って小さくこちらに手を振っている。俺がその姿を確認するとふっとその姿は宙に消えた。
――そうか、君がイーブイの怒りを宥めてくれたのか。
「ブイッ!?」
「ッ、この光は!?」
ありがとう、と彼女に言おうとした途端イーブイの体が進化を告げる青い発光を始め俺もイーブイも驚愕する。
おかしい、確かにイーブイには【かわらずのいし】を持たせていたはずなんだが……。
「ってない!?」
まだ完全な変化が始まっていないイーブイの首元を見ると、たしかに紐に通して首にかけていたはずの【かわらずのいし】がどこにもない。
馬鹿な、勝手に外れるような代物ではないのに！
「って、そんなこと言ってる場合じゃない！　Bボタン、Bボタンはどこだ!?　現実世界にBボタンなんぞあるかっ!?」
テンパってったせいでらしくない一人漫才をしているうちにイーブイの進化が本格的に始まってしまった。
小さかった体が二周りほど大きくなり、首元からリボンのような触覚が伸びる。
「フィア～」
やがて、進化の光が消えるとイーブイは本来はピンク色の毛並みだ

が、色違いである故に、薄い青色の毛並みのポケモン、むすびつきポケモンのニンフィアに進化していた。
「あちゃ～……。」
とうとう進化が完了してしまった。
この子はキュウコンに憧れていたようだからグレイシアになりたかったはずなのに……。
俺がどうしたものかと思っていると、てっきり自分の望む進化先じゃなかったから凹んでると考えていたニンフィアを見る。
「フィア♪　フィ～ア♪」
ところがどうしたことか、ニンフィアは凹むどころかむしろ上機嫌にピョンピョン飛び跳ねている。
「？」
ニンフィアがリボンのような触覚をたなびかせる姿に俺は何か既視感を覚えた気がした。なんだろう……凄く見覚えがある動きだけど。
『コ～ン』
「あっ！　キュウコンの尻尾か！」
「フィ～ア！」
俺の答えにそのとおりというように鳴くニンフィア。そっか、イーブイの奴、キュウコンの氷じゃなくてあの綺麗な尻尾に見とれてたのか。そういえば、アローラのキュウコンはこおりタイプの面が強くて忘れがちだがフェアリータイプも持ってたんだったな。
今の今まで気付かないとは、俺もまだまだだなぁ……。
「フィ～ア」
「ん？　ニンフィア？」
若干落ち込んでいるとニンフィアは触覚をたなびかせるのをやめて俺の腕に巻きつける。
――余談だがニンフィアが触覚をトレーナーの腕に巻きつけるのは親愛の証だと言われている。
「――これがやりたかったんだな、ニンフィア」
「フィ～ア」

うんっと答えると鳴くニンフィアの目を見て俺は朝からずっと言おうと思ってたことを口にした。
「今朝は悪かったな、生まれたばっかのヌメラにばっか構っちまって。だけど、お前のことを忘れたわけじゃないんだぞ？　これは信じてくれ」
「フィ～ア……。」
ニンフィアは俺の言葉を受け取ると今度は自分が謝るように頭を下げた。そっか、お前も謝りたかったんだな。
「改めて、俺のパートナーとしてやっていってくれるか？」
「フィ～アッ！」
「メラッ！」
「勿論、メラルバも忘れてないぞ」
俺が手を差し出すと、ニンフィアが前足をメラルバが小さい手を乗せてくる。
自分でもよくはわからないが、この二体は俺にとって他のポケモンとはまた違った意味で大事な存在になっているからな。
「これからも仲良くやっていこう！」
「フィアッ！」
「メラッ！」
こうして俺とイーブイ、いや、ニンフィアは改めてパートナーとなった。
その後、帰ってきたクリスとゆんゆんが進化したニンフィアの可愛さにメロメロになってもみくちゃにするのだがまぁ、これは仕方ないことだから割愛しよう。
――そういえば、【かわらずのいし】は自室の机の上にあった。一緒に見覚えのない西洋人形が置いてあったのだが……誰の仕業かはあえて語るまい。
～～～

「メンラァ～？」
「「「「こっちの子もかわいい～～～～～!!」」」」
現在、ニンフィアとヌメラはギルドの女性冒険者やウェイトレスさん達に囲まれている。あそこの密度がギルドの中で一番密集している状態だ。
あそこから連れ去ったりしたら、暴動が起きそうだし二体とも嫌な顔はしていないのでしばらくあのままでいてもらおう。
「凄い人気だな、お前のニンフィアとめぐみんのヌメラは」
「実際、あの二体は人気の高いポケモンだからな」
「メラッ！」
「勿論、お前もだぞ～」
受付カウンターからベルディア戦の報酬の入った袋を持ったダクネスが戻ってきた。
今日はベルディアとの戦いでの報酬をあの戦いに参加した冒険者達全員に配られる。全員、命がけで戦ったのだから当然と言えば当然だ。
因みに俺はトドメをさしたことや、作戦を立てたという功績を認められて特別報酬としてベルディアにかけられていた懸賞金が支払われるらしい。ただ、金額があまりにも大きいので俺の報酬の受け渡しは一番最後となった。
冒険者の殆どはその金を使って、今日はベルディアへの勝利を祝って盛大に盛り上がるそうだ。
「で、ダクネス。体の方はほんとにもう大丈夫なのか？」
「ああ、ハピナスのお陰でもう万全だ」
「……。」
俺はあっけらかんと答えるダクネスの打たれ強さにもはや呆れてしまう。
雨のときみずタイプの技の威力は上がる。その状態でぶちかましたみずタイプ最強クラスの技である【ハイドロポンプ】を喰らってハピナスの【いやしのはどう】を受けただけで復活するとか……。
耐久力だけなら伝説級なんじゃないか？

「おおっ、カズマじゃねぇか！」
「うわっ！　なにすんだよ、ダスト」
「いやぁ、ベルディアとの戦い凄かったなッ！　お前はいつかはやるやつだって思ってたんだよ！」
「お前、前に俺に喧嘩ふっかけてイーブイとメラルバにボコボコにされてなかったか？」
「うっ……嫌なこと思い出させんなよ」
いきなり背後から肩を組まれたので驚いてそいつの顔を見ると、そこには既にしこたま酒を飲んだのか顔の赤い粗暴そうな金髪の男がいた。片手には並々注がれた酒がまだあるし、酒臭いから離れてほしいんだが。
――――この男の名はダスト。最近街で噂になっている俺に上級職に囲まれて楽してるだけのペテン師といちゃもんをつけ、さっきも言った通りイーブイに【シャドーボール】をかまされ、メラルバに【ひのこ】で焼かれた街で有名なチンピラである。
調子のいいことを言っているダストだが、俺に当時のことを言われてそのことを思い出したのか赤かった顔が少し青くなった。
「しっかしすげぇなポケモンってのは……ウチにいるアイツも育てりゃあんくらいになんのかねぇ」
「ああ、お前についていったアイツか。今どうしてるんだ？」
「今はリーンの面倒見てるぞ」
「逆でしょうが！」
「ぐふっ！」
俺達が話しているとダストの背後からポニーテールの少女が持っていた杖で思いっきりダストの頭をぶっ叩いた。
因みにここからなら叩く前にダストに教えられたが、あえてやらない。
「リーン久しぶり」
「久しぶり、カズマ。今回は大手柄ね」
「頑張ったのは俺じゃなくてエルレイドやラグラージだけどな」
この少女はリーン。ダストのパーティのウィザードで、ダストのお

目付け役的立場だ。俺としてはあの狸みたいな模様の尻尾が凄く気になるのだが、触れないほうがいいと本能が言っているので聞かない。
　そして、そんなリーンの足元にいるのがダストについていったポケモンだ。
「ナックラーも久しぶりだな」
「クラー！」
　オレンジの体に大きな口がトレードマークのこのポケモンの名前はありじごくポケモンのナックラー。タマゴから生まれたこの子の育て先を街で探しているうちにナンパをしていたダストを発見。それを見たナックラーが尻に噛みつき、なんやかんやあってパートナーになった。
　――ふむ、改めて言ってもわけがわからない。
　ただ、こいつはリーンに次ぐダストのお目付け役らしく。ダストが馬鹿なことをすると噛み付いてそのままリーンのところに引っ張っていくらしい。
「ナックラーのお陰でこの馬鹿がやらかしたときの苦情が減ってほんとに助かってるよ」
「そっか、偉いぞナックラー」
「クラー！」
「こっちはいい迷惑だっつの！」
　俺がナックラーを褒めてやるとダストは噛まれたことを思い出したのか、尻を押さえながら叫び声を上げた。
「そんなこと言って、なんだかんだ一番甘やかしてんじゃん」
「へぇー、意外だな。お前に生き物を慈しむ心があったなんて」
「だったらなんでそいつ渡したんだよ……なんか、昔飼ってた犬に似てんだよそいつ」
「犬には似てないと思うが」
「いや、姿じゃねぇよ」
　そんなことはもちろんわかってる。
　ただ、なんとなく聞いてほしくなさそうな雰囲気を出しているので

あえて聞かないように話をそらした。
その後、二言、三言話してダストとリーンとは分かれた。
さて、まだ俺の番まで順番があるしどうしようかと思っていると、この場に似つかわしくないどんよりとした空気がこちらに何処からか流れてきたのを感じた。
「うわっ！　ど、どうしたんだ二人共ッ!?」
空気の出処に目を向けるとそこには小さなテーブルで向き合うようにして座っているクリスとゆんゆんだった。二人共うつむいていて、空気が重い。
クリスの近くで飛んでいるトゲチックもゆんゆんの椅子の近くにいるキルリアも二人を見てどうしたものかとあたふたしている。
「いや今回の戦いを振り返ってみると、あたし達……」
「全く良いところなかったですねって……。」
「ああ、なるほどね……。」
俺は二人の発言に納得する。
言われてみれば、クリスもゆんゆんも今回はこれと言って目立ったことはできてなかった気がする。
でもそれはしょうがないだろう……クリスは接近戦が得意故にベルディアとは相性最悪だっただろうし、ゆんゆんも魔王の加護を受けた鎧だかのせいで魔法が全然通らなかったからなぁ。
ただ、今回活躍したせいで天狗になってるのがいるけどな。
「まぁまぁ、いいじゃないですか。たとえ、ライバルのこの私が！　大活躍しても、今となっては同じパーティメンバーなのですから」
「だったら、あからさまにマウントとるんじゃないわよ！」
めぐみんがゆんゆんにそれはもうドン引くようなマウントを取り始めた。この子の将来は果たして大丈夫なのだろうか……。
ただ、少しはマシな大人になれるように釘は刺しておこう。
「今回の原因を作ったのが誰か、忘れたわけじゃあないよな？」
「うぐっ！」
俺の言葉にギクリとさっきまでの余裕な様子を崩すめぐみん。俺も苛ついて挑発したのはやっちまったけどな……。

クリスあたりにそこらへん、ぶり返される前に帽子の上からめぐみんの頭に手を置いて話題を変える。
「まぁいいさ、俺もお前くらいの歳の頃は結構無茶したからな」
「たとえば、どんなだ？」
「うん？　一人でポケモンを悪用する悪の秘密結社のアジトに乗り込んで、その組織を壊滅させたりとか？」
「君それ、無茶じゃなくて無謀でしょ……。」
「めぐみんのやらかしが可愛く見えてきました……。」
今にして思うとよく無事だったな……ギンガ団の基地に乗り込んでユクシー、アグノム、エムリットを助け出したり、ジョウト地方で復活しかけてたロケット団を潰したり、プラズマ団を二年かけて潰したり、フレア団からイベルタルとゼルネアスを助け出したり、アクア団とマグマ団はまだ情状酌量の余地があったな。
あそこは本気でポケモンと人類、それぞれの幸せを願ってたわけだし。ポケモンを無駄に傷つけなかったところもポイント高いな。
「ただ、今度からは爆裂魔法を撃つときは俺と一緒に行くぞ」
「カズマもですか？」
「俺はお前らのリーダーだし、それに俺はお前達をトレーナーにした人間だ。お前達やそのポケモンが危険な目に遭うようなことをしてるなら何があっても止める義務がある」
「とても一人で悪の組織のアジトに侵入して、組織を壊滅させた人の台詞とは思えないのですが……。」
「俺も大人になったってことだよ」
めぐみんの言葉に少しだけ哀愁の籠もった口調で答える。
――ヒスイ地方での経験は俺を精神的にも肉体的にも大人にしたからな。良くも悪くも今までしたことのない経験だった。
ヒスイの大地に思いを馳せながら黄昏れているとすっかり復活したクリスが俺を小脇でつついてくる。
「なーに、カッコつけてんのさ」
「いいだろ、別に。男はいくつになってもカッコつけたい生き物なんだよ」

「サトウカズマさん」
「おっと、呼ばれたようだぞ？」
「ああ」
　ルナさんが俺を呼ぶ声にダクネスも気付き、カウンターの方へと向かう。
　ルナさんの元に行くと彼女の側に二体のポケモンがちょこんと付き従うように立っている。
「よっ、イエッサン。元気してるか？」
「イエッサン！」
　俺の挨拶に手をあげて答えるのは白と黒の体毛を持つ二体のポケモン、かんじょうポケモンであるオスとメスのイエッサンだ。
　イエッサンはオスとメスで体の色や姿が大きく違うポケモンの一種。オスのイエッサンはどこか鋭い視線で体の黒い部分が多くアタマの角が上を向いているのが特徴で、対象的にメスのイエッサンは温和な視線で体は白い部分が多く頭の角は下を向いてるのが特徴だ。
「どうですか、ルナさん？　二人の調子は」
「ええ、二人共本当によく働いてくれて私達も助かっています」
　イエッサン達のトレーナーであるルナさんは世辞ではなく、本気でそう言ってくれているようで安心した。
　イエッサンは頭がよく、人やポケモンによくつくすことで知られているので、ルナさんに相談したらギルドで働いてみないか？　とお誘いを受けて送り出したところ天職だったらしく今はここでギルド職員のお手伝いをしてつくしてくれてるらしい。
「それじゃあ、イエくん、あれ持ってきて。イエちゃんは向こうのほうでウェイトレス達のお手伝いをしてあげて」
「イエッサン！」
「へぇ～、そう呼び分けてるんだ」
　オスがイエくんでメスがイエちゃんか。なるほど、わかりやすい。
　ルナさんのネーミングセンスに感心しているとオスのイエッサン――いや、イエくんが小切手らしきもが乗ったトレーを持って戻ってきた。

「イエッサ！」
「ありがとね。それではサトウカズマさん、大変おまたせしました。こちら今回のベルディア討伐の報酬です。あまりにも金額が大きいので小切手という形ですが」
「ありがとうございます」
なんか小切手にゼロが沢山あるけど、確かホーストのときは五百万エリスだったか。魔王軍幹部っていうくらいだから、かなりの額の懸賞金がかかってるんだろうけど。
小切手に書かれたゼロを指で追いながら数えていく。ええっと一、十、百、千、万、十万、百万、千万、お、お、お、億……。
「さ、さ、さ、三億、エリス……。」
「「「「うおぉぉぉぉぉぉぉ!!!!」」」」
俺が唖然としてその額を告げると聞き耳を立てていた冒険者たちから歓声が上がる。俺はそのあまりの額に卒倒寸前なんだが……。
あまりにも大きい額に俺は震える手で小切手を握りしめながら、ルナさんに確認を取る。
「こ、こんなに……？」
「はい。デュラハンのベルディアは今まで数多くの勇者候補を屠ってきた、名のあるモンスターでしたから」
ベルディア。お前そんなに有名な奴だったのか。水を喰らってから威厳だだ下がりだったけど、凄いやつだったんだな。
それにしたって三億エリスって……あっ、やばい改めて認識したら気が遠くなってきた……。
「ねぇねぇ、カズマくん！　折角だからパァーッと使おうよ！」
「だ、駄目だ！　これからやることにはいくらあっても足りないんだ、ちゃんと貯金しないと」
気を失いかけてた俺だが、クリスの声で我に返り小切手を懐にしまい込む。そんな簡単にこれを使うわけにはいかない。これからポケモン達を野生に離すまで育てる施設の事とか本格的に考えなきゃいけないのにこんなところで無駄遣いできるか。
「えぇ～、そんなけちくさいこと言わいでさぁ～！」

「「「「そうだ！　そうだ！」」」」
「……はぁ、わかったよ。――――ここの支払いだけだぞ」
「「「「いえ～い!!」」」」
　ただ、クリスがいつまでも文句タラタラなうえに他の冒険者達も煽ってくるので、折角のめでたい席ということふまえて多少は妥協した。
「ほらカズマくんも飲んで飲んで！」
「いや、俺。酒はあんまり……。」
　クリスがジョッキに注がれたシュワシュワなるアルコール飲料、要するに酒を持ってきてぐいっと差し出してくるが俺は二十歳になるまで酒を飲む気は……。
「カズマが飲まないなら私が」
「お前はもっと駄目だろ！」
「何故ですか!?」
　俺がシュワシュワを受け取らない様子にめぐみんがジョッキを奪おうとするが流石にそれはまずいので俺が先に奪い取る。
　この世界では飲酒に関する規制はそこまで強くない。基本的に冒険者になれる歳のものなら普通に飲んでも構わないが、流石に十三歳の女の子に酒なんて飲ませたら間違いなく成長に悪い。
「……。」
「ほらほら、ぐいっと」
　クリスの手からうばったシュワシュワの入ったジョッキを見ながら、こんな日だしいいかという気持ちでジョッキを口に当ててシュワシュワを口に流し込む。
「ふぅ……意外とスッキリしてるな……。」
「お～、結構いい飲みっぷりだね。もっと飲む？」
「いや、俺はこれでいいよ。朝っぱらからそんなに飲んで夜、寝付きが悪くなってもまずいし」
「真面目だねぇ、君は」
「そこがカズマさんのいいところだと思いますけど」
「それより、カズマ。私にもシュワシュワを飲ませてください！」

「子供にはまだ早い。向こうでオレンジジュースでも飲んでろ」
「んな！　子供扱いしないでください！」
　俺に子供扱いされたのに腹を立てたのかむきになって俺のグラスを奪おうとするが頭を掴んで近寄れないようにする。手をジタバタさせるが俺との身長差と腕の長さではどうやっても俺の体にめぐみんの手が届くことはない。
「なんだ、お前。子供扱い嫌なのか？」
「当たり前でしょう、私はもう一人前の冒険者なんです！」
「爆裂魔法しか使えないくせによく言うわよ」
　ゆんゆんがボソリと漏らした言葉にめぐみんの動きがピタリと止まる。そして、ゆっくりとゆんゆんの方に歩み寄っていく。
「なにか言いましたか？　今回何も活躍できなかったゆんゆん？」
「え？　ええ、言ったわよ！　爆裂魔法しか使えないめぐみん？」
　一瞬物怖じするかと思われたがゆんゆんは真っ向からめぐみんに向き合って言い放つ。ホースト戦から肝が据わってきたよなゆんゆんも。
「なんですかっ!?」
「なによっ!?」
「やめないかっ！　このめでたい日に！」
　至近距離で睨み合っていためぐみんとゆんゆんは横から乱入してきたダクネスによって引き剥がされる。こういうときのダクネスは本当に頼りになるな。普段からこうだと俺もメタングも楽なんだが。
　ええっと、なんでこんな事になったんだっけか……。
　あぁ、俺がめぐみんを子供云々って言ったのがきっかけだったか。
「子供、ね。子供でいるのも悪いことじゃないと思うけどな」
「なんですか急に」
　俺がこぼした言葉にめぐみんが訝しげな目でこちらを見て話しかけてくる。
「お前らは大人になればできることが増えるとか思ってるんだろうけど、大人になってできることなんて意外と大したことなかったりするんだぜ？」

「そうなんですか、ダクネスさん？」
「ふむ……確かにそう言われるとこれと言って大した変化はなかったような」
「そっ、意外と少ないんだよ。大人になってできることって。逆に、子供の間しかできないほうがもっとずっと多いんだよ。
――ただ、大人になってからじゃないとそこに気付けないのが難儀なところだけどな」
言いたいことを言い終えると、長台詞で乾いた口にもう一度シュワシュワを流し込む。ゴクゴクと喉を鳴らしながら残り半分くらいになるまで一気の飲み干してぷはぁと息を吐く。
さて、小腹も空いてきたしなにかつまみにいくかと思ってテーブルに近づこうとすると。
「あの、カズマさん」
「ルナさん、どうかしましたか？」
料理が乗っているテーブルに向かおうとする俺をさっき俺に小切手を渡したばかりのルナさんが引き止めた。
「実はこの間の戦いを見て自分たちもパートナーを持ちたいという方が何人か名乗り出まして」
「本当ですかっ!?　あぁ……でも、ギルドに名乗り出たってことは……」
「はい。冒険者の方々です」
冒険者ってことは当然、危険がつきまとう。タマゴから生まれたばかりのポケモンには危険なパートナーだ。ナックラーはまぁ、大丈夫だろう。ダストの奴この町では結構、腕は立つらしいし。
いや、待てよ。タマゴから生まれたポケモンではなく、ヒスイ地方で大量発生のときにゲットしたポケモンならどうだ？　あのポケモン達も俺のポケモンではあるが滅多なことでは呼び出してあげられてないし、俺のところにいるよりも大事にしてくれるパートナーのもとに送ってやるべきかもしれない。
問題はヒスイ地方のポケモンは気性の荒いのが多いって点か……。相性が重要かもしれない。

「そうですね、渡せるポケモンには当てがありますが相性が悪いと厄介なことになるかもしれないので、面接とかしたいんですけど、場所とかって貸してもらえますか」
「そうですね。ギルドとしてもパートナーがいることで死者や怪我人が減ることは利益となりますし、それくらいの協力ならギルドの部屋を貸すことは可能かと」
「なら、早速詳しい日程を」
俺はルナさんと面接日取りや内容をどうするかなどの相談をするためにギルドの別室に向かった。
あれ？　俺何をしようとしてたんだっけ……まぁいいか、まずは目の前のことを片付けないとな。
～～～

（確かに、カズマくんの立ち振舞はあの平和な地球で生きてたの人間のそれじゃない。ただ、あたしの考えてるこれが本当だとしたら……アクア先輩すごいな、これ以上ない人材をこの世界に送り込んでくれたってことだし）

心のなかで自分に仕事を押し付けたり面倒事に巻き込んだりする困った先輩に久方ぶりに尊敬の念を抱く。

（そろそろ、本格的に君の正体を暴かないとねカズマくん。

いいや、正確にはあのポケモンが君に何をしたのかを調べないとね。何が何でも答えてもらうよ――――アルセウス）

翡翠の記憶

「悪いな、皆付き合ってもらっちゃって」
「構わんさ、私達もポケモンには世話になっているからな」
「冬も本格的になってモンスターも冬眠し始めたからロクなクエストもないしね」
　今日、俺達は街でそれぞれパートナーを見つけ、役割を持ったポケモン達の健康診断を行っていた。トレーナーになった人の住所や名前はロトムのメモアプリに残っているので場所はわかる。
　本当は一人でやるはずだったんだが、ダクネス達が手伝いを名乗り出てくれたお陰で大分スムーズに訪問することが出来た。今は次のお宅に訪問するために移動中だ。
「でも、本当にいいのか？　なんなら、ギルドを通して正式な依頼として」
「何度も言ってるでしょう、別にいいですって」
「それにカズマさんからお金なんてもらえませんよ」
「ただ、次回からは場所を決めたほうがいいだろうね、これじゃあ数が増えるたびに時間が長引いちゃうから」
「そうだな」
　場所、か。やっぱり、ギルドの場所を借りるしかないかな。
　ベルディアとの戦いでの報酬もあるし、どっかの家を借りるって手もあるか。だけどなぁ、折角ならもっと広い場所を手に入れてもっとポケモン達がのびのびできる場所が欲しいんだが、そう例えるならエーテル財団の保護区みたいな場所が理想か。
「カーズーマーくーん！」
「うわっ、どうしたクリス！」
「前にもあったよねこんなこと……。」
　いつの間にか正面にいたクリスから大声で名前を呼ばれて、思考を中断してクリスの顔を見る。
「カズマは考え事をすると、周りが見えなくなるのが欠点ですね」
「あとはポケモンのことになると、暴走しがちなところだな」

「お前に欠点云々言われたく――「フィア～？」――ん～？　どうしたんだ、ニンフィア～？」
「「言った側から……。」」
背中にメラルバを乗せたニンフィアの声に立ち止まって頭を撫でる。
めぐみんとダクネスがなんか言ってるが……まぁ、いっか。
「良くないでしょうが！」
「いててて!!　耳引っ張んな！」
目線を下げてニンフィアとメラルバの頭を撫でているとクリスに耳を引っ張られ無理矢理立たされる。
「ったく、なんだよクリス」
「だ～か～ら～、残りの健康診断の場所は何処なの？」
「あ～、そのことね。えっと、確か残りは農家のご夫婦のところにいったコロボーシあとはウィズさんのムウマとヒトモシで最後か」
「ここから近いのはコロボーシのところだな」
「コロボーシってどんな子だっけ？」
「むしタイプのポケモンで触覚をすり合わせてコロコロって鳴く可愛らしいポケモンでな」
「コロロロ～」
「そうそう、こんな感じでな……ん？」
聞き覚えのある鳴き声に振り返ると、そこにはナイフのように鋭い腕を持った口元に生えたひげが特徴的な虫ポケモンが立っていた。
「この子は……。」
「コロボーシの進化系のコロトックだな」
『それでは久しぶりに僕の出番ロト！
コロボーシ　こおろぎポケモン　むしタイプ
鳴くときはナイフのような腕を交差させる。即興でメロディを作る。感情をメロディで表す。メロディの法則性を学者たちが研究している。』
ロトムの図鑑説明を聞くのも久しぶりな気がするな。
「カズマのポケモンじゃないですよね」

「あぁ」
「ということは」
「コロちゃーん！」
　何故か街中にいたコロトックに俺達が頭を捻っていると、何処からか聞き覚えのある声が聞こえてきた。声のした方向に視線をやると道の向こうから大きな紙袋を抱えた妙齢な女性が走ってきた。
　あっ、この人は。
「農家の奥さん」
「あらまぁ、カズマさんじゃありませんか」
　この方はさっき話していた農家のご夫婦の奥さんだ。と、いうことはこのコロトックはもしかして。
「あの、もしかしてこの子は」
「実は、この間じゃがいもの収穫中に突然光りだしてこの姿に。それで、カズマさんが今日、ポケモン達の様子を見て回ってると聞いて探してたんです。そしたら急にこの子が走り出して」
　やっぱりか。
　そういえば、進化についての説明はあんまりしてなかったな。
　――俺は奥さんにポケモンの進化について簡単に説明する。
「じゃあ、特に病気とかではないんですね？」
「はい。寧ろ成長に近いものです。……心配なのは進化して体が大きくなって不都合なこととかは？」
「いえ、寧ろこの姿になってから収穫も前よりも捗って助かっています。あぁ、そうだ！　これを」
「ん？」
　奥さんは持っていた大きな紙袋を俺に差し出す。中を見ると、そこには結構な数のじゃがいもが入っていた。
「じゃがいも？」
「ええ、この子が眠らせてくれたお陰で楽に収穫ができたのでお裾分けをと」
　あぁ、そういえばこの世界じゃがいもも動き回るんだっけ……。サンマも畑から生えてたし、この世界の生態系ってホントにどうなって

んだ……ポケモンのことも簡単に受け入れられるわけだ。
しかし、眠らせてってことはコロボーシの【うたう】か。確かに、それなら収穫は楽だろう。
「しっかりやってるようで安心したよ」
「コロロ～♪」
コロボーシの頭を撫でて、奥さんからじゃがいもを受け取る。なんか、受け取らないのも悪い気がしたので。
「それじゃあ遠慮なく」
見たところ健康状態も問題なさそうだし、コロボーシの健康診断はこんなものでいいか。
その後、なにか困ったことがあったらギルドを通して俺に連絡して欲しいと伝えて旦那さんにもよろしく言っといて欲しいと伝えてその場で別れた。
「皆、それぞれの役割を全うしているんですね」
「あぁ、安心したよ」
めぐみんがふとこぼした言葉に心から同意する。
――こういうことをしていると本当にヒスイ地方でのことを思い出す。
建築舞台の隊長のサザンカさんのもとへ行ったいたずらピッパ達や医療隊のキネさんのもとで薬の開発を手伝うことになったグレッグル、方向音痴の製造隊のカエさんの元へ行ったノズパス。
こうして人とポケモンが共存して生きられる手伝いをしていられると思うと、本当に誇らしく感じる。
なんて、昔のことを思い出しているうちに最後の目的地に到着した。
「ウィズさん、少しいいです……か……。」
ウィズ魔導具店の戸を開いて中に入った俺は絶句し、じゃがいもの入った袋を落としてしまう。
「カズマさん、どうし……たんです、か……。」
続いて店に入ったゆんゆんも店の光景に絶句した。
俺が落とした袋がドサリと倒れ、中に入っていたじゃがいもの一つ

がコロコロと俺達が言葉を失っている原因へと転がっていく。転がっていったじゃがいもの先にあったのは、うつ伏せに倒れたウィズさんと近くで心配そうにその姿を見ている彼女のパートナーであるムウマとヒトモシだった。
「うぃ、ウィズさーん!!」
慌てて店の中に突入する俺とゆんゆんに続いてめぐみん達も店に入ってきた。
〜〜〜

「痛っ！　痛いってムウ――――熱っ！」
「モ～シ～！」
「ヒトモシやめろ！　服燃える！　服燃えるって！」
　ウィズさんを叱っている姿に俺がウィズさんをいじめているように見えたのかムウマが髪を引っ張り、ヒトモシが足元から頭の炎を服に引火させようとしていた。
「二人共余程ウィズを慕ってるんですね」
「そうだね。だから、カズマくんの言う通りウィズさんになにかあったらホントに悲しむよ」
「あぁ、私のメタングもなんだかんだ私のことを心配してくれてるしな」
「ダクネスの場合は心配かけ過ぎなんですよ」
「あの、そろそろカズマさんを助けないと火達磨になっちゃいますよ？」
「あっ、そうでした。ヌメラ【みずでっぽう】、お店の中なので弱めで」
「メラッ！　メラーっ！」
　めぐみんが帽子の中にいたヌメラに【みずでっぽう】を命じてくれたお陰でズボンが少し焦げた程度で済んだ。あ～あ、このズボン気に入ってたのに。
　ムウマとヒトモシはウィズさんを守るように俺とウィズさんの間に割って入っている。まいったな、これは嫌われちゃったか？
「ウィズさん、キッチン借りていいですか。流石にきのみだけじゃまだ足りないでしょう」
「さ、流石にそこまでは……！」
「いいって。ちょうど材料もあるし」
　遠慮しようとしているウィズさんだが、俺は立てかけてある紙袋に入っているじゃがいもを持ち上げてみせる。これがあれば懐かしいものを作れそうだし。
～～～

「ねぇ、カズマくん。何を作るの？」
「ヒスイ名物、イモモチだよ」
「「「「イモモチ？」」」」
聞いたことのない名前に小首をかしげる五人。いいって言ったのに、皆手伝うと行ってキッチンについてきた。
ムベさんや弟子のセキさんほど上手く作れる自信はないが、これでも料理にはそれなりの自身がある。
「まずはじゃがいもと片栗粉を用意する」
「ふんふん」
「ここは好みの問題だがチーズなんかを用意すると隠し味になるかもな。ただ、今はないから省略しよう」
まず、じゃがいもを洗い、芽が出ていないことをよく確認する。ある場合は包丁やピーラーで取り除く。三個ほどのじゃがいもをそれぞれで水洗いしながら芽が出ていないかを確認すると今度はシチューなどを作る用の少し大きめの鍋を取り出す。
「ヌメラ、【みずでっぽう】頼めるか」
「メラッ！」
鍋にヌメラの【みずでっぽう】で水をなみなみと入れていく。水の次は火の準備だな。
「ウィズさん」
「はい、ヒトモシ。竈に【ひのこ】を」
「モシッ！」
ウィズさんに頼まれてヒトモシが竈に炎を灯す。その竈の上に鍋を置き、鍋、芋、水、火と水から茹でる。または蒸す。
「この火力なら多分三十分くらいで茹で上がるだろう。その間に、タレの方を作ってしまおう」
タレの材料は醤油、砂糖、味醂（ない場合は酒）、水、片栗粉を適当に混ぜて火にかけるとみたらし団子風の甘辛いタレが仕上がる。
鍋の中から甘いい匂いがキッチンに広がるのに女子たちは目ざとく反応する。
「ちょっと味見を」

「あっ、それあたしにさせて」
「いいよ」
　真っ先に味見係に名乗り出たクリスに味見用のスプーンを渡す。クリスは鍋から少しだけタレをすくうとワクワクしたように口に運んだ。
「んー！　美味しい！」
「そんなにですか？　カズマ、私にも……。」
「はいはい、なくなると困るから少しずつだぞ」
　めぐみんを始め、クリスの様子に皆物欲しそうな目をしてきたので少しずつ味見させるが、この様子ならタレの方はこんなものでいいか。
　――さらに、十分後。
「さて、芋も茹で上がった頃だな」
　ホクホクと煙を上げるじゃがいもを鍋から出し、竹串で中まで火が通っていることを確認する。そして、やけどしないように注意してでも冷めないように素早く皮を剥いていく。ここは危険なので俺とそういったものに耐性のあるダクネスにやってもらう。
「んじゃ、ダクネスもう一仕事頼む」
「カズマ、こういう仕事は男がやるものでは……。」
「だってお前のほうが力強いじゃん」
「それはそうだが、私だって偶には女として扱って欲しいんだが……。」
　ぶつぶつと文句を言いながらも俺の指示を聞いてくれるダクネス。ここは速さが大切だからな。
　ボウルに皮を剥いたじゃがいもを入れて滑らかになるまで、熱いうちにすり潰す。潰し終わったら冷める前に片栗粉を入れて、モチモチになるまでさらにかき混ぜる。これも冷めないうちにやるのがポイントだ。
「ふぅ、こんなものでいいのか？」
「オッケー、お疲れ様ダクネス」
「いや、最初はどうかと思ったが……このいい感じの腕の痛みがまた

……。」
「はい、次行くぞ、次っ！」
もういい、もう流石にいいッ！　ダクネスの性癖にこんなところでまで付き合いきれん！
じゃがいもと片栗粉を混ぜたものを時分のお好みのサイズに丸める。チーズなんかを入れるときはこのタイミングなんだが、ないので省略、省略。
ヒトモシやムウマも小さい手でコロコロと小さいサイズを丸めている。ニンフィアは……なっ！　触覚を使って丸めているだとっ!?
そんな器用なことができたのか。
ニンフィアが触覚を使って器用に丸める姿に度肝を抜かれたが、一つ咳払いして調理に戻る。
「コホン！　ここで、一つ豆知識。作りすぎたものは冷凍して保存しておけば好きなときに焼いて食える。鍋やスープにいれてぷるもちで食べてもいいな」
食べきれなさそうな量の丸めたじゃがいもを冷蔵庫に保存する。
さて、と。あとはフライパンにバターを入れて焼くだけだな。
「……。」
「どうした、めぐみん？」
切ったバターをフライパンに乗せて、熱して溶かし全体に広がるようにしているとめぐみんが俺の手元を見ていることに気付いた。
「前々から思ってたんですけど、カズマって料理の時の手際ホントにいいですよね……。」
「そういえば……。」
「あれ、言ったことなかったっけ？　俺、一時レストランでシェフの見習いみたいなことしてたんだよ」
「えっ、そうなの？」
「初耳だな」
俺の言葉に意外そうな顔をする面々。そうか、話してなかったか。
――あれは確か、カロス地方を旅してたときのことだったかな。いまいち、旅の目的を見つけられなかったときに、たまたまカロス地

方の四天王の一人、ズミさんがジムリーダー達を集めて行う食事会に誘われてひょんなことからアシスタントを頼まれたのがきっかけだったかな。
　次にどこを旅をするのか決めるまで、そのままズミさんが経営するレストランで見習いとして雇ってもらって、まぁ、料理の腕はそれなりに自信があったからズミさんからの評価は結構高かった。
「つっても、三ヶ月くらいで次に旅する場所が決まってやめさせてもらったんだけどな。」
「どうりで、作る料理がいちいち凝ってるなと思ったんだ」
「もったいないと思わなかったんですか？」
「いや、働かせてもらっておいてなんだけど、なんか違うなーとは思ってたんだよ。やっぱり俺はポケモンともっと積極的に関わっていくのが性にあってるってズミさん――――オーナーにも言われたよ。ただ、やっぱポケモンにはうまいもん食わせてやりたいから旅の合間に料理の勉強はしてたんだよ」
「確かに、カズマはそっちのほうがらしいように思いますね」
　さて、昔語りをしているうちにイモモチの両面が綺麗なキツネ色に焼ける。
「よし、最初の分が焼き上がったな。ウィズさん、皿をもらえますか？」
「はい、どうぞ」
　ウィズさんから皿を受け取り、ヘラを使って皿に焼き上がったイモモチを盛り付けていく。最後にさっき作った甘辛タレをかけてっと。
「よし、出来た。ヒスイ名物、イモモチ完成だ」
　甘辛タレをかけると、香ばしく焼かれたイモモチの湯気にのってタレの匂いが厨房に広がっていく。俺にとってはとても思い入れのある、懐かしい香りだ。
「いい匂いですね」
「そうだな」
「よし、そんじゃ早速。ウィズさん試食お願いします」
「では……。」

ウィズさんは俺から皿を受け取り、フォークを持つとイモモチをフォークで小さく切ってそれを口に運ぶ。口元を手で隠しながら食べる姿に、料理人として僅かな緊張が走る。
「っ！　美味しいですっ！」
「良かったぁ～！　こっちの人の口に合わなかったらどうしようかと思ったよ」
ホッと一息つき、残りのイモモチもどんどん焼いてテーブルに持っていってもらう。
～～～

なんだと、思って顔を近づけると小声で店の売れ行きの実態を話してくれた。
「……ウィズさんっていい人ではあるんだけど、目利きに関しては絶望的でね……毎回毎回ロクに使えないアイテムを仕入れてくるんだよ」
「あ～……。」
クリスの言葉を聞いて思い出されるのはいつかの爆発するポーションがが並んだ棚。
「前なんて【スティール】が使えるようになる魔導具を仕入れたって言うから気になって聞いてみたら、盗賊職しか装備できないうえに魔力量が爆裂魔法並っていう魔導具だったっていう話もあってね」
「コスパ悪すぎんだろ」
「でしょ～！」
【スティール】って言ったら盗賊職が全員持ってるマイナー魔法だ。それを使えるようにする魔導具をわざわざ盗賊職に装備させても無駄でしかない。そして、アークウィザードでもないのに爆裂魔法並みの魔力なんて持ってるわけがない。
「他にも最高品質のマナタイトだとか、最高硬質のアダンタイトだとか、駆け出しの街の冒険者が絶対買わないようなものばっかり仕入れてくるもんだからついたあだ名が【貧乏店主】さんってわけ」
「そりゃ、赤字になるわな」
もう納得しかない……。
考えてみたらメガストーンだって、俺からしたらお宝だが他の人から見たらちょっと変わったガラス玉にしか見えないだろうに。
「となると、純粋に使えるアイテムを売るしかないか」
「当てがあるのか？」
「こういうときこそ、困ったときのポケモン頼みさ」
俺はスマホのバッグ画面からシンオウで買いだめしておいたあるものを取り出す。
それをゴトンと食器が片付いたテーブルの上に置く。
「なんですか、この黄色い液体？」

「もしかして、これハチミツですか？」
「そう、シンオウ地方、名物【あまいミツ】だ」
「そのまんまですね……。」
　ヒスイ地方では【キラキラみつ】って呼ばれていたが、まぁ、俺はシンオウ出身だしこっちのほうが馴染み深い。
「味の由来は舐めてみればわかる」
「舐めればって、甘いんでしょ？」
「いいから、いいから！」
　俺の言葉に半信半疑の様子の皆だが、ウィズさんが持ってきた小さいスプーンで少しずつすくって口に含むと。
「「「「甘いっ！」」」」
「そう、そうなるんだよ」
　同時に叫ぶ五人の様子に俺も初めて食べたときはああなったと懐かしみながらうんうんと頷く。
「なにこれ、ちょっとしか舐めてないのに口に甘さが残る」
「しかも、しつこいようでなくさっぱりとした甘みだ」
「君達、評論家？」
　妙に饒舌に味を解説するクリスとダクネスの様子にどっかで見た光景だなーと思い浮かぶ。あっ、農作隊のユノスケさんか。
「なんなんですか、このハチミツ」
「このハチミツはミツハニーっていうポケモンが集めてくれるんだ。群れや場所によって味は異なるが、良質な蜜になることだけは間違いないと言われている」
「なるほど、確かにこれは売れるな」
「でもこれだけじゃ……。」
「あとはグレッグルってポケモンの毒から作られる塗り薬なんてのもあるな」
「毒っ!?　大丈夫なんですか、その薬？」
「カズマ、試作品はぜひ私に」
「今大事な話してるから黙っててくれ。問題ないぜ、作り方は教わってるし。実際、俺も肩に塗ってもらったけど凄い効いたし」

塗ったばっかのときはちょっとピリピリするけど、次の日嘘のように肩が軽くなったし。
「ほらよく言うだろ？　毒と薬は紙一重って」
「確かに聞いたことがあるような……。」
あとはミルタンクのモーモーミルクとか、エンニュートの毒ガスを薄めて作る香水とか、あとはケロマツのケロムースを利用して作る石鹸とかを説明していく。
「結構あるんだな」
「それで大量生産できそうなのは？」
「グレッグルとミツハニーと、エンニュートはなんとかなるかな」
グレッグルとミツハニーは群れがいるし、エンニュートは毒ガスを薄めるからそれほど量はいらないかな。
ミルタンクとケロマツはやっぱり専用の施設がないと無理かなぁ……。
「あとはきのみとかで作る【どくけし】とかかな……。」
「えっ？　きのみってそんなものまで作れるの？」
「ポケモンならそのまま食べれば大丈夫だけど、材料次第で人間用にもできるって、ヒスイ地方で習ったんだよ。あそこは生傷が絶えない場所だったからな」
野生のポケモン達は容赦なく攻撃してくるし、道はロクに整備されてないから危ないし、キング達はえげつない攻撃をこれでもかっていうくらい撃ってくるし。
それでも、まぁ。決して辛いことばかりじゃなかったことってだけは、はっきり言えるかな……。
「カズマくん？」
「どうした、クリス？」
「気付いてないのか？」
「カズマさん……泣いてますよ」
「えっ……？」
ゆんゆんに言われて目元に手を当てると、確かに水滴がついていた。まずいな……ヒスイ地方を思い出すことばかりで、懐かしさに涙

腺がもろくなったらしい。
「悪い……昔のことを思い出しちまったんだ」
「ヒスイって場所のことですか？」
「よければ、どんな場所だったか聞いても？」
俺は話の流れで嫌とは言えず、ヒスイ地方での話を簡単にした。
――ヒスイ地方でポケモンの調査をする組織、ギンガ団。
――時を司るシンオウ様を祀るコンゴウ団と空間を司るシンオウ様を祀るシンジュ団。
――各エリアに存在するシンオウ様の血を引く十体のキングと呼ばれしポケモンたち。
――その地で出会った個性豊かな人達。
「彼処は今まで旅したところとは違ってポケモンの知識がそれほどない場所だったから、それについて調べる日々はある意味で新鮮だったよ。少しずつだけど、危険視されていたポケモンが生活の中に溶け込んでいく姿は見ていて幸せだったしな」
「まるで今のアクセルのようだな」
「もしかして、カズマさんの活動ってギンガ団の活動なんですか？」
「いや、彼処はヒスイ地方での移住のためにポケモンの知識が必要だったから、そのために結成された組織だ。やってることも、内容も俺とはぜんぜん違うよ。それに俺はもう、ギンガ団のメンバーじゃないし」
ウィズさんの疑問にはＮＯと答えざるをえない。
ギンガ団はヒスイに移住する人々がその地に住む危険な生物であるポケモンについての対策などの詳しい知識を得るために結成された組織だ。
元々、人に懐いているポケモン達を信頼できる人に渡し、ポケモンと人間の共存によってより良い世界にするという俺の目的とは根本的なところが違う。
「ねぇ、コンゴウ団とシンジュ団が崇める神様って時間と空間を司るって言ってたよね？」
「時間と空間……何処かで聞いた話ですね」

「あっ、ディアルガとパルキアじゃないですか！」
「そのとおりだ、ゆんゆん」
「ディアルガとパルキア？」
　ウィズさんはディアルガとパルキアのことを知るはずもないので簡単に説明して話を続ける。
「ただ、あそこはシンオウ様が一体だと思っていたようでお互いこちらが本物で向こうが偽物っていう考えに縛られてたんだ」
「宗教観の違いってやつですか」
「そのわだかまりもギンガ団を中心に協力することで少しずつ変わっていったけどな……。」
　――思い出すのは二体のシンオウ様を鎮めデンボク団長の計らいで開かれた三つの団を巻き込んでのコトブキ村での宴。あのときの光景を俺は決して忘れないだろう。いや、忘れてはならないんだ。
　――もう二度と見れない景色だからこそ。
「ディアルガとパルキアを神と崇める人達がいる地ですか、龍使いとしては是非とも一度行ってみたいですね」
「――行けないよ、もう彼処には」
「え？」
　俺の言葉にめぐみんを含め皆が俺に視線を向ける、同時に皆が俺の表情を見て驚いたような顔をしていた。
　多分、今の俺は今まで皆が見たことのない顔をしてるんだろうな。
「俺は自分の意志でヒスイ地方に向かったわけじゃないんだ。ポケモンの力で移動させられたんだよ」
「それって、ランダムテレポートみたいなものですか？」
　ランダムテレポート。転移魔法【テレポート】の亜種で、本来は登録先が決まっている場所にしか転移できない魔法である【テレポート】だが、場所を指定しないことで使用者でも転移する場所がわからないというものだ。
　俺の場合はあの人が作った時空の歪みとそのせいで暴走したシンオウ様達の血を引き継ぐポケモン、キング達を鎮めるためにアルセウスに呼ばれたわけだから全く違うがアルセウスの存在を口にするよ

りかはいいか。
「まぁ、似たようなもんさ。だから、あそこが何処なのか正確な位置はわからない、だから二度と――あの場所にはいけない。――当然、彼処で出会った人達にも会えない」
「そんな……。」
「でも、それじゃあどうやってカズマはアクセルまで来たのですか？」
「それは――」
――ズキッ！
めぐみんの質問に答えようとした時、頭に鈍い痛みが走り咄嗟に額を押さえて瞼を閉じる。すると、ザザッと壊れたテレビに映る砂嵐のような光景が脳裏に映る。
次第にそれは鮮明さを増していき、砂嵐の中にある本来の光景を映し出してきた。
――真っ赤に燃えるなにかが空から落ちてくる光景。大地に向かってくるそれの前に立ちふさがる二体のオリジンフォルムのシンオウ様達。
なんだ、この光景……こんなものは知らないぞ。ゲームでもこの世界に転生してから得た記憶にもこんな光景はなかったはずだ。
「カズマくんっ、カズマくんっ！」
「ハァ……ハァ……クリス？」
「どうしたんだ、カズマ。すごい汗だぞ」
クリスの呼びかけで目を開けると、クリスが心配そうに俺の顔を覗き込んでいた。ダクネスに指摘されて額に触れると、もうすぐ冬も本格的に始まる季節だとは思えないほどの汗が流れていた。
ウィズさん達を見ると、皆一様に俺の様子を心配そうに見ていた。
「フィア～？」
「メラ？」
ニンフィアとメラルバも心配そうに俺を見つめている。俺は皆にこれ以上心配をかけないように、荒くなっていた呼吸をなんとか整えて平静を装う。
「――悪い、皆。なんでもないんだ」

「いや、なにもないわけが――――」
「――――本当に、なんでもないんだ」
席を立って、キッチンの戸口を開く。
「少し、風に当たってくる」
「カズマ！」
ギィとキッチンの戸を開いて外に出ようとすると、背後からガタリと席から立つ音とともにめぐみんが俺を呼び止めた。
「……。」
「今は詳しくは聞きません。でも、もしも本当に辛くなったら話してください。――――話して楽になることもきっとあると思うので」
「――――助かる」
気を利かせて深くは聞かないでくれためぐみんの言葉に感謝すると、そのままキッチンをあとにした。

勇者候補同士の密談

――健康診断の翌日の朝。
今日の朝食当番である俺はキッチンでヒートロトムと一緒に今日の朝食を作っていた。
――あのあと、気まずくなってしまったまま夜を迎えた俺達は夕食もそこそこにそれぞれの部屋に戻って眠った。原因が自分にある以上、なんとかしなければいけないと思いながらキッチンに立っている。
といた卵をバターをひいたフライパンに流し、少し待つ。ヘラで少しずつ固まっているのを確認するとヘラでかき回しながら火を通していく。ある程度形ができあがってきたら火を消し予熱で火を通していく。
チーン！
『ロト！』
「サンキュー、ヒート」
ヒートロトムがオーブンで焼いた食パンを完成したスクランブルエッグとプチトマトと一緒に皿に盛り付けていく。完成した五人分の朝食をそれぞれの盆に乗せて、俺が手と脇に二つずつと最後の一つをヒートロトムが、テーブルに向かう。
「待たせたな、食ってくれ」
「あ、あぁ……。」
「待ってました！」
ぎこちない様子の三人に対して一番空気の読めるクリスがなんとか場を盛り上げようとオーバーなリアクションを見せるが、その必要はない。
俺は覚悟を決めて皆に話を切り出した。
「――それと、昨日のことだけど」
「カズマ、そのことは落ち着いてからでいいと」
「いや、皆には話しておく必要があるから今言う。下手に隠してお前らに心配かけるよりかは遥かにマシだからな。めぐみんには昨日は

気を使ってくれたのに悪いと思うが」
「いえっ、そんなことは」
「だから、皆も聞いてほしい」
「――わかった、聞かせて」
　クリスの言葉に頷き、俺は昨日自覚したことを口にする。
「昨日自覚したけど、俺には昔の記憶の一部が欠落しているらしい」
　俺の一言に皆が一様に固まるのがわかった。
「それって、大変なことなんじゃ……。」
「今の今まで気づかなかったんだから、生活に支障はないだろう。なくなってるのはヒスイ地方をどうやってあとにしたか、だけだからな。ただ昨日、僅かだけどその断片を見た気がする」
「じゃあ、昨日のあれは」
「記憶が戻った影響というわけか」
「本当に僅か、だけどな。」
　結局、あの赤いなにかの正体は考えてもわからなかった。だけど、あれが俺の記憶の一部ならいつかは思い出すことができる日が来るかもしれない。
「もし、記憶が全部戻ったらちゃんと全部話す。約束する」
「――わかりました。それまでは詳しくは聞きません。皆もそれでいいですよね？」
　めぐみんの確認に皆が安心したように頷く。
「はいっ！　じゃあ、この話はここまで！　早く朝ごはん食べようよ」
「そっ、そうですね！　それにしても美味しそうですね」
　クリスが締めくくるように手をたたくと話は丸く収まり、いつもの風景が戻って来る。
「ゆんゆんのお弁当より美味しそうですね」
「なっ!?　いつも人のお弁当を奪っといて何いってんのよ！」
「失礼な、正当な戦利品です！」
「めぐみん、お前そんなことしてたのか……。」
「それにうちは貧乏だったのでゆんゆんのお弁当が生命線だったんですよ」

ゆんゆんの言葉に俺とダクネスとクリスの三人がジト目でめぐみんの事を見る。その視線に慌てて弁解する姿に呆れると同時に安心してしまう。
「ったく、今度からは腹が減ったら俺に言えよ。簡単なものなら作ってやるから
さて、お前達も飯だぞー！」
「フィア～」「メラ～」
「ギャバッ！」「メンラ～！」
「チック！」
「キル～」
「メタ～」
きのみのパウダーをまぶして皆の好みに合わせたポケモンフーズをそれぞれのパートナーの前においていく。この仕事だけはダクネス達には出来ないから毎朝俺の役目だけど、特に文句はない。
美味しそうにポケモンフーズを食べるニンフィアの頭を撫でる。こうやって、美味しそうに食べる姿だけでも十分に癒やされる、労働の対価としてはお釣りが来るレベルだ。
――記憶が全て戻る時が来たら、俺が地球から転生したことも話したほうがいいのだろうか？　いや、そうなるとポケモンの世界での話と齟齬が出来てしまうからやめたほうがいいのか？
ただ、最近になって感じる違和感。
地球にいた頃の記憶よりも後付されたはずのポケモンの世界の記憶のほうが強くなっている……いや、あれは本当にただの架空の記憶なのかすら疑っている。
この答えを知っているものがいるとしたらアルセウスくらいなんだろうけど、聞くに聞けない自分がいる。
――自身の記憶の謎について考えていると、家の呼び鈴がなった。
「ん？」
「誰だろう、こんな朝っぱらから」
「俺が出てこよう」

ニンフィアの頭を撫でていた俺は立ち上がり、玄関に向かう。もう食べ始めてる皆に行かせるのは悪いと思ったからだ。
――玄関の扉を開くと、そこには金髪の整った顔立ちの青年が立っていた。青い上等な鎧を纏った青年は俺を見て安心したように息を漏らす。
「よかった、今回はいてくれて」
「えっと……。」
「いや、こんな朝早くから申し訳ない。君はよく外出しているからこんな時間じゃないから会えないと思ってね」
「はぁ……。」
安心した様子のあとにすぐ、こんな時間から尋ねてきたことを謝罪する青年。なんだろう、どっかで会ったことがある気がするんだが……どうにも思い出せない。
「えっと、どちら様でしたっけ？」
「――あぁ、そうか。こうして話すのは始めてだったね、覚えていないかい？　君に一度助けられたものなんだけれど」
青年の言葉に俺は記憶の糸を手繰り寄せる。
ちらりと青年の腰を見ると、見るからに立派な剣を差している。職業は多分【クルセイダー】か【ソードマスター】。【ソードマスター】？
何処かで覚えがあるような。
「あっ、あの悪魔騒ぎのときの！」
「ようやく思い出してくれたか」
俺の言葉に青年は頷いた。
そうだ、思い出した。彼はホーストと戦う前日、奴にやられて瀕死だった【ソードマスター】だ。助けられたってのは多分、ハピナスの【いやしのはどう】のことだろう。
「あれから教会のプリーストに治療してもらってね。でも、あのときの応急処置がなかったら危険だったと言われて礼を言いたかったんだ」
「それはご丁寧に」
わざわざお礼を言いに来てくれた礼儀正しい【ソードマスター】さ

んに恐縮して頭を下げる。荒くれ者揃いの冒険者にこんな礼儀正しいやつがいたんだな。
「実は話はそれだけじゃないんだ」
「？」
「同じ地球からの転生者として君に話がある、佐藤和真くん」
「!?」
こっちに来てから一度も聞いたことがなかった『地球』、『転生者』というワードと名字と名前を分けたイントネーションにまさかと思い青年の顔を見る。
青年はそんな俺の様子を苦笑しながら、自分の名前を名乗った。
「僕の名前は『御剣響夜』、君と同じ女神アクア様からこの世界に転生させてもらった人間だ」
～～～

他に二人（多分彼を助けたときの近くにいた二人）女の子がパーティに居るらしいのだが、司令塔や後衛職がいないらしい。そこで、ベルディアとの戦いで指揮をしていた俺を是非ともパーティに迎え入れたいということだ。
「いや、俺もうパーティ組んでるし」
「もちろん君のパーティメンバーも一緒にだ、スカウトというより合併のほうが正しいかな」
俺は腕を組みながらう～んと唸りながらこのミツルギという青年を見る。
どうもこの男、本気で魔王を倒すことを目標としているらしい。それで、近々王都にたつというので俺にもついてきて欲しいといっていた。
――正直、答えはもう決まっている。ただ、どうやってそれを伝えようか……やっぱりシンプルに理由を伝えるべきか。
「悪いけど、そういう話なら俺は行けないよ」
俺はきっぱりとミツルギの申し出を断った。ミツルギはあまりにも唐突に断られたことに唖然としたがすぐに我に返って問い返してきた。
「――理由を聞いてもいいかい？」
「俺には俺の夢がある。だから、この街を離れたくない」
俺はミツルギに自分の夢を語った。今はまだ絵空事の段階だが、いつかこの世界で人とポケモンが当たり前のように共存できるようにしたいこと、そして、ポケモンとともに魔王軍やモンスターのせいで荒れ果てた大地を開拓したいことを、誠心誠意、俺が持てる情熱の全てを込めて話したつもりだ。
――勿論、エリス様のことやアクアの政策のこととかは話していない。秘密って約束だからな。
「――俺にとって、この街は夢の縮図なんだ。夢を叶えるなら、俺はここで叶えたい」
「なるほど……。」
俺の話を清聴していた御剣は腕を組んで何かを考え込む。

他人から見たら、俺は一種の革命家か、あるいはそれになりきれない絵空事を語る道化に映るだろう。問題は御剣がそれをどっちとして捉えるか、転生者がそんな絵空事に特典を使うと考えるのか、それとも俺の革命に共感してくれるのか。
「――――気持ちはわかるよ。俺達転生者は元々魔王を倒すために送り込まれた存在だからな。でも、俺は上辺の使命より自分の夢を優先させたい」
「いや、君の話は僕にとってもためになったよ」
「？」
「どうやら僕は、魔王を倒すことばかりに気がいってその後のことを考えていなかったようだ」
　そういうと、ミツルギは腰に刺してあった豪華な剣を鞘ごと俺に見せるように持つ。こうして、近くで見ると素人の俺ですらわかるほどの気配を感じる。
「この【魔剣グラム】は確かに僕に【ソードマスター】に相応しい力を与えてくれたが、言ってしまえば戦闘でしか使えない力だ。君のように、その後になにかをするのには向かない力だよ」
「……。」
「僕は君より先にこの世界の色んな所を見てきたが、確かに魔王軍やモンスターとの戦いの傷はどの地でも深いのがわかる。魔王を倒せたとしても、その復興にはきっとそれ以上の労力がかかることになるだろうね。だけど、もしも君の考えが認められれば文字通り世界が変わるかもしれない」
　そういうとミツルギは剣を腰に戻し俺に手を差し出してきた。
「パーティを組む話は断られたが、僕に力になれることがあるなら是非いってほしい」
「いいのか？　やってることはともかく、動機は俺の夢なんだぞ？」
「元々転生の特典は魔王軍を倒すためじゃなくて転生者が簡単に死なないための保険のようなものだからね。使い方は自由だ」
「えっ、そうなの？」
「えっ、知らなかったのかい？」

ミツルギの口からこぼれた何気ない一言に俺は面を喰らう。マメパトがみずでっぽうを喰らったような表情に同じように唖然とする御剣。
「転生のときにアクア様から説明があっただろう？」
「あっ……。」
ミツルギに言われて俺は転生したときのことを思い出す。言われてみれば、確かにそんなことをアクアがいってたような気がしてきた。ポケモンと早く会いたくてそれまでの話、結構忘れてたかも……。
「その顔だと、忘れてたみたいだね」
「あぁ……今思い出した……。」
でも、だとしたらさっきまでの俺の葛藤は一体。
頭を押さえると、ミツルギから手を差し伸べられていることを思い出す。俺も立ち上がり、その手を取る。
「一応、俺も魔王軍の幹部を倒してるし、俺の夢を達成するには最終的に魔王軍が一番の難敵だからな、進んで協力はできないけど、俺で力になれるんだったら同郷のよしみで協力させてもらうよ」
「ああ。それと、折角出会えた同郷同士、下の名前で呼び合うのはどうだろう？　これからはキョウヤでいいよ」
「遠慮するわ」
「即答ッ!?」
だって、ぶっちゃけ今日始めて会ったようなもんだし……。そんなすぐに名前で呼べって言われても。
――ただ、俺の場合サトウって呼ばれるとどうしても反応が遅れちゃうんだよな、こんなこと昔はなかったのに。

この機動要塞襲来に太陽を！

「やっぱりダメか……。」
　ある日の朝。俺は自室でテーブルに積み上げられている無数の紙束の中身をペラペラとめくっていた。
　これは俺が昔、旅の間に書いたレポートだ。シンオウ、ジョウト、カントー、イッシュ、カロス、ホウエン、アローラ、ガラル、そしてヒスイ地方の記録の数々、読めば読むほどに俺が書いたという記憶が蘇ってくる。
　もしかしたらこのレポートの中に俺の記憶の謎について、なにかわかる手掛かりがあるかと思ったんだがなぁ……。
「肝心のヒスイ地方のレポートがこれじゃあなぁ」
　テーブルの上にある紙束の中で一際異質な存在感を放つレポート、《半分以上が焼け焦げた小冊子》を手に取った。
「どうやったらこんな風になるんだよ……。」
　他のレポートもところどころ汚れてたり濡れたあとらしいしわがあるがここまで損傷が酷いレポートは他にない。確かにヒスイ地方は野生のポケモンが凶暴な奴らが多く、見つけられるたびに攻撃されてきたがここまで酷い状況にはならない、寧ろよくこれだけ焼け残ったと思うレベルだぞこれ。
「本当に野生のポケモンにやられたのか？」
『野生のポケモン相手でもそこまでボロボロにはならないロト』
　ポケットから出てきたロトムが俺の言葉を否定した。
　――となると、もしかしたらこの焼けた原因そのものが、俺が記憶を失った原因なのか。
「しっかし、我ながら随分と色んな地方を旅したもんだな」
「メラ？」
「ダメだぞ、メラルバ。それは大事なものだからな」
　レポートと一緒にテーブルの上にいたメラルバが不思議に思ったのか近づいてきたが、燃やされたら困るのでその前にレポートを手に取る。わざと燃やすようなことはしないだろうが、体から熱を放つ以

上、紙を近づけるのは危険だろう。
時間もあるし、折角だから手に取ったレポートを見ようとページをめくろうとしたときだった。
――プルルルル！
「ん？」
『エリス様からの着信ロト』
着信音にレポートから顔をあげるとスマホロトムの画面に『エリス様』の名前が映されている。俺とエリス様は仕事上のパートナーと言うか、上司、部下みたいな関係だから既に番号を登録して着信時には名前が出るようにある。
――それ以前に、もうひとり俺に電話してくるいたずらっ子がいるからな。
向こうから電話してくるのは久しぶりだなと思いながら、手のひらに収まったスマホロトムの画面の通話ボタンをタップしてスマホを耳に当てる。
「はい、もしも――『ほんっとうに申し訳ありません！』――うおっ！」
エリス様の声が聞こえてくるや否や、右耳から左耳を貫通すると錯覚するほど大きな声でエリス様の謝罪が俺の耳を襲った。いきなり至近距離で聞こえてきた声に慌ててスマホを耳から遠ざける。
「ど、どうしたんですかエリス様……いきなり……。」
『すみません！　本当にすみません！』
「あの、だから理由を……。」
『すみません！　すみません！　すみません！』
謝ることに必死になったる様子でこちらの言うことに全く反応してくれないエリス様。ただ、エリス様の声音の必死さから電話の向こうで容姿もわからないエリス様が必死に頭を下げている姿が目に浮かぶ。
――謝り疲れたのか、ようやく正気に戻ったらしいエリス様から事情を聞けるようになるまで十分くらいかかった。
「それで結局、どういうわけですか？」

『そ、それが……その貴方から預かっている伝説のポケモン達なのですが何体かが、その――――ました』
「え？　今なんと？」
　とてもいいづらいことなのか、だんだんか細くなっていくエリス様の声が最後の方だけ聞き取れず、聞き返すと、息を飲む声のあと覚悟が決まったらしい声音で告げた。
『――――貴方から預かった伝説のポケモンの何体かが、天界から逃げ出しました』
「……は？」
　イマコノヒトナンテイッタンダ？
『……天界の特別な空間で過ごしてもらっていた何体かが、地上に逃げ出したようでして、本来はそんなことはならないようにアクア先輩が結界を張るんですが、その……。』
「ナニシテヤガッタンデスカアノバカ？」
『あのカズマさん？　口調が片言に……。』
「ナニシテヤガッタンデスカアノバカ？」
『え、えっと……それがその……昼寝してたそうです』
　――――これがロトムが入ってるスマホロトムで良かった。でなけりゃ怒りでスマホを握りつぶしていたかもしれない。
「ふっざけんな、あの駄女神!!」
　エリス様には大変申し訳なく思うが一度怒鳴って、ガス抜きしないと正気を保っていられそうにない。エリス様は俺の怒鳴り声に平謝りするしかない様子だ。
『すみません！　本当っに、すみません！　アクア先輩は今上から責任を問いだされて始末書を千枚書いていますので、勿論その後ちゃんと処罰も受けますので！　それでなんとか怒りを鎮めていただけないでしょうか？』
「っ！　あぁ、もうっ!!　……わかりました」
　頭をガシガシとかきながらもう怒り疲れて脱力した声で返した。
　エリス様に何を言っても仕方ない。やらかしやがったのはアクアなんだから……ほんっとどうしようもないなアイツ。しかし、伝説の

ポケモンが数体地上に野放しってのはあまりにも危険すぎる。
「エリス様、逃げ出したポケモン達が今何処にいるかわかりますか？」
『現在、天界の総力を上げて捜索中です。どうやら一点に集まってる様子ではなく、バラバラに散らばったようで難航しています』
「アルセウスに【さばきのつぶて】をあの馬鹿に落としてもらうよう伝えてもらっていいですか？」
『そんなことしたら天界も吹き飛びます！』
　チッ！　アクアはともかく天界には俺のポケモンもその世話をしてくれてる天使さんやエリス様もいる、しかし、マジでアイツに天罰落ちないかなぁ……あっ、アイツ天罰落とす側じゃん。
　ハッハッハッ、大丈夫かなこの世界……。
「それでまさか、俺に伝説のポケモン達を探せ、と？」
『申し訳ないですが……今の所ポケモンのエキスパートであるカズマさんに頼るしか……。』
「いやぁ、エキスパートだなんて」
『あの、照れてるところ申し訳ないのですが……場所が分かり次第、座標を送りますので捕獲、または説得していただければ』
　エリス様のお願いに俺は違和感を覚えた。捕獲はわかるが、説得？
「説得ってどういうことですか？」
『――これは上からの提案なのですが……前に話してくれましたよね、伝説のポケモンはその土地の守り神のような立場にあるものもいると』
「まさか、アイツラをこの世界の守り神にするつもりですか？」
『もちろん、カズマさんが良ければですけど――私としては天界でこのまま窮屈に過ごすよりも、世界で力を発揮してくれたほうがあの子達のためだと思っています』
　つまり、俺がゲットする前の状態に戻るってことか。ただ、そんなことをすれば当然、あのポケモン達は俺のポケモンではなくなる、それは結構……いや、かなり心に来るものがあるが、あいつらの幸せを考えるならそれが一番いいのかもしれない。
――以前、コギトさんに言われたことが脳裏をよぎる。

俺は伝説のポケモンを捕獲したけど、それはあくまで俺が生きている間その力を借り受けているに過ぎない、俺とて永遠に生きられるわけではない。俺の生が終われば彼らは本来の役目に戻っていく。
それが、この世界でほんの少しだけ早くなっただけ――――って言えば、話は通っているが……。そんな簡単に受け入れられるかどうかは別問題だ。
「捕獲の依頼は受けます、ただ、説得に関しては……少し考えさせてください」
『――――わかりました。今回の事件は間違いなく、こちら側の非ですのでまたカズマさんに頼ってしまうのは心苦しいですがどうかお願いします』
「はい……。」
声音から複雑な心境を察してくれたのか優しい声で答え、もう一度謝罪とお願いを受け取り電話を切った。脱力し、ボスンと椅子により掛かるように倒れて額を押さえて天井を見上げる。
「……。」
「フィア～？」
「メラ？」
「あぁ、大丈夫だよニンフィア、メラルバ。ありがとう」
その俺の姿を心配した様子のパートナーたちが近づいてくる。二人をこれ以上、心配させないように笑いながらその頭を撫でてやる。
こんなときはポケモンと触れ合って癒やされるべきだ、ウールーとかチルタリスののモコモコに顔を埋めたい。あっ、そういえば最近生まれたポケモンがいいかもしれない。
どうせならクリスも誘おうかな、こないだチルタリスとじゃれあってたら交ぜてくれって言ってきたし。
思い立ったが吉日。レポートをスマホロトムにしまってリビングに入ると、そこにはキルリアと楽しそうに話をしているゆんゆんとガバイトの爪をといでいるめぐみんがいた。
「あれ、クリスは？」
「今朝早くに出ていきましたよ」

「昔の知り合いにクエストを手伝ってほしいって言われたとかなんとか」
ふ～ん。クリスは俺達の中でも一番クエストにいく頻度が高い。【盗賊】という職業はダンジョンに必須な職業であるため結構、頼られることが多いらしい。
個人的には俺の活動も手伝ってくれてる上にそんなにクエストに行って大丈夫なのかと聞くが、いつも「へいき、へいき」っていって元気に出かけるから大丈夫とは思うけど……トゲチックにも無理してそうなら俺にいってくれってこっそり伝えてあるし。
「そうか、この子と遊んでもらおうと思ったんだけど」
「そのボールは？」
「先週生まれたばっかの子なんだけど、生態上人に懐きづらくてな」
ポイッとモンスターボールを床に放ると、光が漏れてそれが大型犬くらいの大きさになってポケモンの姿をかたどる。
現れたのは白い子馬のようなポケモン、頭と尻尾、そして足首にモコモコとした体毛が生えており、額からはユニコーンのような角が生えている。馬と言っても子馬なのでかなり小さく、広いリビングには十分入る大きさだった。
「ブルゥゥゥ……。」
「馬、ですか？」
「ガラル地方に生息しているポニータってポケモンなんだ」
『ポニータ　ガラルの姿　いっかくポケモン　エスパータイプ
小さな角に癒やしの力を秘めている。ちょっとした傷なら角を擦り寄せ直してくれる。瞳を覗いて心を読む。邪な気持ちを見つけるとたちまち姿を消してしまう。』
「エスパータイプってのは気持ちを読める分、警戒心が高いポケモンが多いんだ。だから俺以外になかなか懐いてくれなくてな……。」
「エスパーってことは、キルリアと同じですね」
「キル？」
「ブルゥ……。」
ポニータは小さく嘶くとキルリアに視線を移すと、そのそばに立つ

ゆんゆんへと視線を映す。一分ほど、ゆんゆんを見つめると、ポニータは歩き出しゆんゆんのそばに近づく。
「ブルゥゥゥ」
「えっ？」
　ゆんゆんの目の前に立つと、ゆんゆんの体に頭を甘えるように擦り寄せる。いきなりのことにゆんゆんは目を点にしている。
「警戒心の高いポケモン、なんですよね？」
「そのはずなんだけど……ゆんゆん、良ければ撫でてやってくれ」
「え、えっと、こうですか？」
　ぎこちなくゆんゆんがポニータの頭を撫でると気持ちよさそうな声を上げるポニータ。その姿に硬かったゆんゆんの表情が柔らかくなる。ラルトスのときも思ったけど、もしかしたらゆんゆんはエスパータイプに好かれる何かがあるのかもしれないな。
「これは、パートナーは決まりですかね？」
「みたいだな。ゆんゆん！」
「えっ、うわっ！」
　めぐみんの言葉に同意し、ゆんゆんにポニータのモンスターボールを投げ渡す。
「良ければ、その子の面倒を見てやってくれないか？」
「い、いいんですかっ!?」
「その子の姿を見れば考えるまでもないさ」
「え、えっと、いいかな？　私がパートナーで？」
　ゆんゆんがポニータにモンスターボールを差し出すと、ポニータは額を自分からモンスターボールに当て、そのまま光になってボールに収まった。
「おめでとう、ゆんゆん。これでポニータはキルリアと同じ君のパートナーだ」
「は、はいっ！　私、この子もキルちゃんも立派に育ててみせます！」
　いやぁ、いい話だなぁ。これであの馬鹿への怒りも少し収まった。そう思っていたその時。
『デストロイヤー警報！　デストロイヤー警報！　機動要塞デストロ

イヤーがこの街へ接近中です。住人の方は直ちに避難、冒険者の皆様は装備を整えてギルドに集合してください！』

――そんな和やかな空気に水を差す、凶報が街中に響き渡った。

～～～

ギ。正直、アクアに夢を見ないほうがいいと思う。ただ、それを言うと一生関係が修復できなくなりそうだから言わないが（俺もこいつの前ではちゃんとアクアに様つけてるし）。
「それで聞きたいんだけど、デストロイヤーってなんなんだよ？」
「あ、あぁ、そうか。君はこっちに来て日が浅いから知らないのか。冒険者の間では古の古代兵器と呼ばれているものだよ」
――――ミツルギの話を要約するとこうだ。元は対魔王軍用の兵器として魔導技術大国ノイズとやらが大金をはたいて作り上げた巨大な蜘蛛のような姿をした兵器らしいがどう言うわけか暴走、大陸中を蹂躙しながら今も動き続けているらしい。おまけに超強力な魔力結界があり魔法は通じず、自立型のゴーレムやバリスタを搭載した文字通り大陸を蹂躙する要塞なのだという。
なんでこの世界にはそんな訳のわからない兵器があるんだよ。
「というか、この世界でそんなもん作れるのか？」
「確かに、いくら魔法文明が発達したといっても無理があるような気がするな」
「それこそ俺達みたいな転生者が持つ特典、みたいな……。」
「……。」
なんの気なしに口にした言葉に言い出しっぺの俺もミツルギも額に嫌な汗を浮かべながら、黙り込む。
「まさか……。」
「い、いやっ！　それはないだろう。アクア様だって人を選ぶはずだ、そんな厄災を生み出すような人間にそんな力を渡すなんて――――」
「あの女神、今朝俺の伝説のポケモン達を昼寝を理由に逃したぞ」
「……。」
「キレた伝説のポケモンなんて天変地異以外の何者でもないぞ」
俺が何を言おうとしたのかを察し、アクアを庇護しようとしたミツルギだったが今朝アイツがやらかしたことを改めて伝えてやると何も言えずに押し黙ってしまった。
「……一応、後でエリス様経由で聞いておくけど、期待はすんなよ」
「わかったよ……でも今は、目の前のことが先決だね」

見るからに空元気、というか現実を受け止めたくない様子だが、ミツルギの言う通り今はこの街に向かってくるデストロイヤーをどうにかするほうが優先だ。
「――俺の夢は何者であろうと邪魔をさせる気はない」
古の古代兵器だか、デストロイヤーだかなんだか知らないが……この街に危害を及ぼすというのなら容赦はしない、寧ろこっちがデストロイして必ずスクラップにしてやる。
ただ……実際、どうしたものか。ジガルデの【コアパニッシャー】とかムゲンダイナの【むげんだいビーム】とかなら可能性があるが、二体揃って伝説ポケモンだし。しかも二体とも逃げ出したポケモンの名簿が記載されたメールに名前あったし……！
となると、手はかなり限られてくる。一番厄介なのはその結界とやらだろう……強力な技ってだけでは破壊は無理かもしれない。それこそ守りの力を貫通してダメージを与えられるほどの一撃が必要なのかも。
――持てる手札で考えうる最善の策を思案しているとめぐみんが何かを思い出したように「あっ」と声を漏らして駆け寄ってくる。
「カズマ、前に話してくれたアレですよ！」
「アレ？」
興奮しているめぐみんだが俺には何を言っているのか全くわからない。自分が言いたいことを察しない俺にいらだちを覚えたのか今度は興奮だけでなく若干の怒気を含んだ声で答えを口にした。
「アレと言ったら、アレですよ！　Ｚ技です、Ｚ技！」
「それってアローラ地方の話に出てきた……。」
「なんなの、そのＺ技って？」
――Ｚ技とはアローラ地方に古くから伝わる伝統出来な技。【かがやくいし】という石から作られる【Ｚリング】と、各島に伝わる試練を突破した証である【Ｚクリスタル】が揃って初めて使うことが許される技。リングとクリスタルを通して、トレーナーの思いを【Ｚパワー】というエネルギーに変換しポケモンに送ることで本来決して出せないはずの威力の技を放つことができる。

原理はメガシンカに酷似しているが違うことが数点ある。例えば、Z技を放つ際にはZポーズというポーズを取らなきゃいけなかったり、あとはポケモンだけでなくトレーナーにも精神力や体力を【Zパワー】に変換するため、トレーナーにもガッツリ負荷がいくので連発が出来ないことなんかだろう。

「――こんな具合に使うポケモンによっては爆裂魔法に匹敵する威力の技だ。確かに一部のポケモンのZ技なら結界は壊せるかもな」

「まさにこの状況にぴったりじゃない！」

「カズマ！　そんなもんがあるなら早く言えっての！　もったいぶりやがって！」

簡単にZ技の説明をするとリーンが希望を見出したように声を上げて、ダストがZ技のことを話さなかったことを非難しながらも笑って肩を組んでくる。

「おい、行けるんじゃないか？」

「確かにカズマのポケモンって……魔王軍の幹部も倒してるし……。」

「もしかしたら、デストロイヤーも……。」

ベルディアとの戦いのことを思い出したのかさっきまで俯いていた冒険者達が顔を上げ始める。

「そんな切り札があるならもっと早く言ってほしかったよ」

ミツルギも完全に乗り気になってるようだが、残念ながらそれは不可能だ。

――盛り上がってるところ大変申し訳無いが、これ以上ぬか喜びさせるのも悪いし、そろそろ現実を教えなくてはなるまい。

「Z技が使えたら！　だけどな」

「「「「え？」」」」

俺の叫びに全員が何を言ってるんだという顔をこっちに向ける。嫌々ながらも【Zリング】が嵌めてあるはずの左腕の手首を皆に見せる。

「ないんだよ、Z技を使うために必要なZリングが」

「「「「……はぁっ!?」」」」

渋々告白した内容に俺のパーティメンバー＋ミツルギだけでなく、

冒険者たちが一様に唖然として固まり次の瞬間、驚愕の声がギルド中に響いた。
「確か、カズマさんのZリングって守り神様からもらったんですよね!?」
「そんな大事なもの一体何処に置いてきたんですかッ!?」
「実家……。」
「「「「実家ぁっ!?」」」」
アローラでの話を知っているゆんゆんとめぐみんを筆頭に冒険者たちの何してんだよこいつみたいな視線が俺に一斉に降りかかる。
――そう、俺のZリングはアローラの旅を終えた後、シンオウの実家で大切に保存しているのである。俺としてはそのままつけていっても良かったが、Z技はアローラ地方特有の文化……アローラリーグが出来たばかりで他の地方のリーグでは使うことがまだ認められていなかったのである。
そのため、変な疑いを受けないために実家に置いてきたのだが……。
「まさか、それが裏目に出るとは……。」
――ただ、一つだけ気がかりなことがある。
「Zクリスタルはあったんだけどな……。」
そう、Zリングはなかった……だが、俺が試練を突破した証であるZクリスタルがZクリスタルのタブにあったのである。それだけじゃない、大切なもののタブには俺が今まで旅した先で勝ち取ったジムバッジまであったのだ。なのに、キーストーンやら、Zリングやら肝心なものが無くなっていた。
ガラルで手に入れたこれもあったんだけどな。
――ちらりと右腕に嵌めたそれを見やる。ただ、エネルギーが足りてないのかうんともすんとも言わないが。これが使えればなんとかなるかもしれないんだが。
「ないものねだりをしても仕方ない、別の案を――」
「――皆さん、大変です!」
ダクネスがうなだれる冒険者達の気分を切り替えようと声をかけ

ようとしたとき、ギルドの扉が勢いよく開き意外な人物が息を切らしてギルドに入ってきた。
「ウィズさん？　なんでここに」
「い、一応、私も冒険者登録をしていますので」
　そういえばウィズさんって元々凄腕のアークウィザードって話だったな。リッチーになってからは冒険者を続けるわけには行かないから、魔道具店の店主になったって言ってたけど。
　以前ウィズさんが話してくれたことを思い出していると、いつものおっとりとした雰囲気からは想像もできないほど鬼気迫る表情で俺たちに訴えてきた。
「こ、この街にとても大きな力を持った存在が近づいています！」
「いや、ウィズさん。だからデストロイヤーの対策をこうして――――」
「デストロイヤーではないんです！」――――はい？」
「デストロイヤーと同じ、いえ、もしかしたらそれ以上に強い力を持った何かが物凄い速さでこの街に近づいてきているんです！」
　ウィズさんが取り乱しながら口にした言葉で冒険者たちの間に衝撃が走る。
「ウィズさん、それは本当ですか？」
「はい、私の感知系スキルに反応しまして……今もこの街に近づいています」
　ルナさんが皆を代表してウィズさんに真偽を確かめる。平静を装っているが彼女の額からたらりと汗が流れるのが見えた。
「まさか、魔王軍？」
「このタイミングでかよ！」
「やっぱり逃げたほうが……。」
　デストロイヤーに加え、さらなる脅威に冒険者達の顔が青くなり次々と逃げたほうがいいという声が上がっている。今朝のことといいなんで悪いことってのはこうも重なるんだよ！
「ウィズさん、今その反応は何処にいますか？」
「えっと……あっ、今、街の正門を抜けました！　――――アレ？」
「どうしました？」

瞳を閉じて、反応を追っているらしいウィズさんが首を傾げる様子に質問を投げかける。
「この反応、このギルドに向かってまっすぐ近づいています！」
「「「「なっ！」」」」
鬼気迫るウィズさんの口から放たれた絶望的な言葉にその場の全員が固まる。そんななか反応を感知し続けたウィズさんがギルドの頭上を見上げる。
「――――い、今、ギルドの真上にいます」
震える声で絞り出された言葉に、ミツルギをはじめとしたこの街の実力者達が武器を取る。
「こうなったら逃げることは出来ない！　僕が先頭に立つ、皆は続いてくれ！」
「「「おうっ!!」」」
ミツルギが号令とともにギルドの入り口から飛び出そうとしたその時だった。
「ラリオーナァァァァ!!!!!」
――――天を震わせるような力強い雄叫びが俺達の耳を貫いたのは。
「っ！　何だこの雄叫び！」
萎縮し、武器を持っていた冒険者達が入り口からでようとしてた足を止めてしまった。
――――ただ、その中でたた一人――――俺だけがその声に耳を塞ぐことなく立ち尽くした。なぜなら、あの雄たけびは俺がよく知るものだったからだ。
「カズマさんもしかして今のって、ポケモンの……。」
「まさかっ！」
「あっ、カズマ！」
めぐみんが呼び止めるよりも早く駆け出し、出ようとしていた冒険者達をかき分けてギルドの入り口のドアを押し開き外に出た。左右や空、ウィズさんが言っていたギルドの天井をせわしなく見回し、鳴き声の主の姿を探す。ぐるんとあたりを見回すが、奴の姿は見えない。

だけど、この感覚は間違いない。あそこで、【日輪の祭壇】であいつが真の姿へと覚醒したときに感じたものだ。
「おーい、いるんだろうっ!? 姿を見せてくれ！」
「カズマッ！ 一体、どうしたんだ？」
「ウィズさん、そいつの反応は今何処に!?」
「えっ？ えっと、まだギルドの上に」
俺を追って出てきた冒険者たちの中からウィズさんにそいつの場所を問い直し、ギルドの真上を見る。そこにはちょうど太陽が昇っており、その光で上手く直視が出来ない。
――♪～～♪～～♪
――そのとき……風にのって、懐かしい音色が流れてきたような気がした。
「なぁ、なんか聞こえなかったか？」
「あぁ、綺麗な音だったな……。」
どうやら、他の冒険者達にも聞こえたらしくその音色の感想を口々に話し始める。空耳じゃなかったってことは、もしかしてあいつが聞かせてるのか？
――もしかして、あいつ。あの曲が聞きたいのか？
あいつからのメッセージに気付き、懐に大事にしまっていた【天界の笛】を取り出した。
「カズマ、それは……笛なのか？」
「あぁ、かなり特殊な形をしているが、神にすら音色が届くとすら言われた由緒ある笛だ」
ダクネスの言葉に答えると冒険者達がざわつき始める、こっちに来てからこの笛を吹くのは初めてだが、ヒスイで何度も吹いた笛だ。自然と指に馴染む。
「【太陽の笛】じゃないけど、我慢してくれよっ」
残念だが、今手元にはあのときに使った【太陽の笛】はなく、かわりにヒスイ地方でセキさんからもらった【カミナギの笛】が神の欠片たる十八枚のプレートの力を受けて変化したこの【天界の笛】しかないが、アルセウスに音色が聞こえるこの笛ならアイツにも届くはず

だ。
――因みに【太陽の笛】は【月輪の笛】とともに元あった島に戻した。あれはアローラ地方の人達にとって大事なものだからリーリエやルザミーネさん、しまキング、クイーンたちとも相談してそう決めた。
「カズマさん、一体なにを……？」
「しっ！　ウィズ、静かに」
アローラでの話を知っているめぐみんが俺が何をしようとしているのかを察し、質問をしようとしていたウィズを呼び止めた。その様子に皆も俺がすることを静かに見守る。
「ふぅ……よし」
――皆が息を呑んで見守る中、息継ぎをしてそっと【天界の笛】の口に息を吹き込む。
【♪♪～～♪～♪♪～】
奏でるのは【日輪の祭壇】で俺がリーリエとともに奏でた曲。アローラ地方の伝説のポケモン達に捧げる、神聖な曲。そして、その曲に反応するように俺達の頭上からある音が響く。
――ガシャン！　ガシャン！
「なんだ、この音？」
「足音、なのか？」
「でも、空からきこえるぞ？」
「ん？　おいっ！　なんか、空にいるぞ！」
頭上から聞こえてくる鎧がで地面を踏みしめる時になるような大きな足音に皆が顔を上げる、俺も笛から口を外さず目を開いて視線を空に向ける。
――そこには太陽を背に空中を踏みしめながら大きな影がこちらに向かって降りてくるのが見えた。
ガシャンッと一際大きな音と共に着地した大きな影が俺の目の前に降り立つ。その姿を例えるなら銀の獅子、けがれのない白銀の姿、発光する鬣はまるで太陽のように光を放っている。その力強く神秘的な姿に冒険者たちの口が塞がらないようだった。

「ラリオーナァァァァっ!!!!」
「「「「ーーーッ!!」」」」
銀の獅子は笛から口を話した俺の姿を宇宙のように澄んだ青い瞳で捉えると、空気を震わせる雄叫びを上げる。体の芯からビリビリと震えるような雄叫びに冒険者達は言葉を失い萎縮してしまう。
「……。」
【天界の笛】を懐にしまい込みゆっくりと銀の獅子に近づいていく。
「会いたかったよ、ほしぐも――――いや、ソルガレオ」
銀の獅子――――ソルガレオの名前を口にして、ソルガレオの顔を撫でた。

太陽を喰らう獣

「「「「カズマのポケモンーーーっ!!?」」」」
「あぁ、ソルガレオっていうんだ」
「ガウッ！」
冒険者一同がマジかよって顔で叫ぶので、ソルガレオと一緒に堂々と言い切ってやる。
因みにソルガレオは頭を撫でてたらいつの間にかお座りのポーズで座っていた。お前、犬じゃなくてライオンだろう？
――――【天界の笛】の音色に導かれて現れたソルガレオを、俺がなれた手付きで撫でる姿に思考をフリーズしていた冒険者達がようやく再起動したので、（仕方なく）頭を撫でる手を止めてこいつも俺のポケモンだと紹介したんだが……皆半信半疑のようだ。
「実は今朝方、俺のポケモンを預かってる人から連絡が来てな。俺のポケモンが何匹が逃げ出したって、どうしようかと思ってたらまさか向こうから来てくれるなんてなぁ」
皆、一様にソルガレオから感じる圧倒的なオーラの前に萎縮し、さらには緊張で動けない様子だ。
「カズマ、まさか……。」
「ああ、天界から逃げ出したポケモンの一体だ」
「なんでここに……「邪魔です！」……ぐはっ！」
事情を知っているミツルギが小声で尋ねてきたが、次の瞬間めぐみんに押し飛ばされ持っていた杖が不運にも頭にヒットして痛みに悶える。
憐れなミツルギから興奮した様子のめぐみんに視線を移す。彼女はいつも以上に瞳を紅く輝かせている。
「あ、あのカズマッ！　ソルガレオってもしかして！」
「めぐみん、あのポケモンのことをなにか知ってるのか？」
ダクネスはソルガレオがタダのポケモンではないことはなんとなく察してはいるものの、ドラゴンタイプではなさそうなその姿にめぐみんが興奮している様子に疑問符を浮かべていた。確かに、ポケモン

についての知識が皆無と言っていいこの世界では驚く理由はさほどない。ただ、その存在を知っているもの、各地方の博士や、俺から話を聞いている二人にとっては十分興奮する理由に値するだろう。
「知ってるも何も、ソルガレオと言えばアローラ地方に伝わる伝説のポケモンの一体ですよ！」
「なんだとっ!?　では、ディアルガとパルキアと同じ？」
　アローラの話を聞かせたことがあるめぐみんとゆんゆんは、ソルガレオがアローラ地方に伝わる太陽と月を象徴する二体の伝説のポケモンの一体であることを知っていた。ゆんゆんもめぐみんほどじゃないがその姿に目を輝かせて見ていた。
　対照的にダクネスは、【伝説のポケモン】というワードだけはディアルガとパルキアの件で知っているので、あの神々しい姿の二体の龍と同格の存在が目の前にいるという真実に気付き、完全に固まってしまった。
『ソルガレオ　にちりんぽけもん　エスパー・はがねタイプ
　別世界に住むと言われる。全身から激しい光を放ち闇夜も真昼のように照らし出す。コスモッグが進化した♂だと言われている。第3の目が浮かぶとき別世界へと駆け抜けていく。』
「じゃあ、この子がカズマさんが話してた【ほしぐもちゃん】なんですか？」
「あぁ、そうだよ」
　ゆんゆんもなんとか人波をかき分けて話の輪に入ってきた。
　――【ほしぐも】。それはこの子の一番最初の進化前である【コスモッグ】というポケモンを連れていた少女、リーリエがコスモッグの雲のような見た目からつけた愛称だ。
　メレメレ島の守り神、【カプ・コケコ】を崇める【戦の神殿】の入り口付近、橋の上でオニスズメに襲われているコスモッグを助けて欲しいと言われたのが彼女との出会いだった。
　それから、ずっと一緒だったわけではないが島巡りを目的にアローラをともに冒険した。今まで旅の先々でライバルや知り合いと会うことはあったが、一緒に旅をするという経験は彼女とだけだったから

新鮮で……とても楽しかった。だから、コスモッグがソルガレオに進化して全てが解決し、旅が終わってしまったときは本当に寂しかったよ。

――いつかもう一度、一緒に旅をしたいと思っていただけに胸に空いた空洞に風が吹き抜けるような、そんな筆舌につくしがたい感情が湧き上がる。

「――カズマくん？」

「うわっ！」

ソルガレオの鬣に触れながらアローラでのリーリエとの楽しい旅を思い返していると、いつかのように背後から声をかけられ慌てて飛び退いた。

慌てて振り返ると、そこには朝から姿が見えなかったクリスがあまりにも驚いた様子の俺に逆に驚いた様子だった。

「く、クリスッ！　お前、いつの間に！」

「さっきようやく、先……知り合いから頼まれた仕事が一段落して急いで合流したんだよ。事情は皆に聞いたよ。それにしても、なるほど【伝説のポケモン】っていうだけはあるね」

クリスは怖気づく様子もなく、ソルガレオの周りを歩きながら興味深げに観察している。ただ、いきなりピタリと足を止めてソルガレオの鬣の裏に手をのばす。

「この子、鬣の裏になにか引っかかってるよ？」

「え？」

「よっと！　なんだろうコレ？　黒い、腕輪？」

「んなっ!?」

クリスがソルガレオの鬣の裏から引っ張り出したそれに目を剥き、クリスの手からそれをひったくる。

「見覚えがあるんですか？」

「これ……俺が実家においていったはずのZリング……。」

「「「「はぁ……!?」」」」

俺の声が木霊するように、さっきまで俺たちの会話についていけていなかった冒険者達が一斉に叫び声を上げた。

ダクネスが今にも俺の胸ぐらを掴むような勢いで前に出てきて、【Ｚリング】を眺める俺に詰め寄ってきた。
「間違いないのか、カズマっ？」
「間違えるもんか。【Ｚリング】は一人一人デザインが微妙に違うんだから。こいつは間違いなく俺の【Ｚリング】だ。
でも、なんでお前の鬣に引っかかってんだよ、ソルガレオ？」
「グルゥ？」
「あっ、知らないわこの反応……。」
ソルガレオはコテンと首を傾げるだけで特に何かを訴えかけるようなことはしない。
「この子、ひょっとして見た目より子供？」
「あぁ、進化ってのはあくまでレベルが上がって起きるもので年は関係無いからな……ぶっちゃけ、めぐみんの逆だな」
「おい、それはどういう意味か詳しく聞かせてもらおうか？」
つっこむめぐみんを無視してソルガレオの頭を撫でてやる。
――忘れがちだが、ソルガレオはおそらく他の伝説のポケモンと比べてかなり幼い部類に入る。コスモッグがエーテル財団のもとにいた正確な時期がわからない以上、何歳かはわからないが、リーリエと初めて会ったあの頃からかなり幼い様子だった。進化したからといって急に中身まで成長するわけではないのだろう。
となると考えられるのはアルセウスかカプ・コケコか……。
「ん？　まてよ？」
まさかアイツ、デストロイヤーがこの街に来るのがわかっててアクアがやらかすのをわざと止めなかったんじゃないだろうな？　……やりかねないな、アルセウスなら。
……まぁ、今回は結果オーライか。必要なものはなんとか揃ったんだから。あとは火力だな。
いつのまにかソルガレオの勇ましい姿を熱心に観察しているめぐみんに声をかける。
「めぐみん」
「はひっ！　な、なんですか？　急に声をかけないでくださいよ。私

は今ソルガレオの観察で忙しいのですから」
「ソルガレオが見たいなら後でいくらでも見せてやるから、なんなら頼んで背中に乗せてやるから――「本当ですかっ!?」――本当だ。だから、質問に答えてくれ」
「なんですか？」
「結界が破れたとして、お前の爆裂魔法でデストロイヤーってのを破壊できるか？」
　めぐみんは俺の質問にボソボソと恥ずかしげに、
「わ、我が爆裂魔法でもアレほど巨大なものを破壊するのは……。」
　と答えて、ソルガレオの影に隠れた。そんな姿に昔の自分を重ねたのかソルガレオがめぐみんの頬を軽く舐めた。
　となると、もう一手欲しいな。せめてもうひとり、爆裂魔法が使える人が……そう考えていると意外な人が名乗りを上げた。
「あ、あの～」
「ウィズさん？」
「爆裂魔法なら、私も使えますが」
「本当ですかっ!?」
「そうだ！　俺たちにはまだ貧乏店主さんがいた！」
「店主さん、いつもあの夢でお世話になっています！」
「店主さんがいるなら、勝てる！　コレで勝てるぞ！」
　ウィズさんが名乗り出たことで一斉に息を吹き返した冒険者一同。クリスが以前、ウィズさんはかなり名のしれたアークウィザードだって言ってたし、その噂はこの街の冒険者なら誰でも知っているようだ。
　何人か意味のわからないことを言ってる奴がいたが……今はどうでもいいだろう。
「そうなってくると必然的に作戦は決まってくるな。まず、俺とソルガレオでデストロイヤーの結界を破壊、その後、めぐみんとウィズさんでデストロイヤー本体を破壊するって感じですかね、ウィズさん？」
「……そうですね。爆裂魔法を撃つなら脚を狙うのはどうでしょう？

デストロイヤーの脚は本体の左右に四本ずつ。コレを、めぐみんさんと私で。左右に爆裂魔法を撃つのはどうでしょう？　機動要塞の脚さえ何とかしてしまえば、あとはなんとでもなると思いますが……。」

ウィズさんの提案に俺も冒険者も、ギルド職員たちもコクコクと頷く。

確かに脚さえ破壊すればデストロイヤーは自力では動くことは出来ない。あとは監視して、めぐみんの爆裂魔法で日をかけて破壊するなり、はがねポケモンの餌にするなりすればいい。

「……聞きそびれてたけど、あのデストロイヤーってなんで今も動いてるんですか？　千年以上昔のものなんですよね？」

「伝承によると、まだデストロイヤー本体の内部に開発責任者が残っていて、その人物が操っていると」

ルナさんが俺の質問に答えてくれる。

アンデッドにでもなったのかその責任者？　でなきゃ話の辻褄が合わないしな。

「となると、脚の破壊後に中に乗り込む必要があるかもしれませんね」

「わかりました。ロープ付きの矢を準備します。アーチャー職の方はコレを装備し、デストロイヤーが停止時にコレを使って内部に侵入し開発責任者を拘束、これでどうでしょうか？」

「……うん。今出せる作戦はこれが一番有力かな。なにか意見があるものはいるか？」

俺が冒険者の方に視線を向けて質問すると、ミツルギが手を上げた。

「もしものときに備えて、脚を破壊できるように前衛職を配備するのはどうだろう？　爆裂魔法でダメージを受けた脚なら、多分、僕の魔剣やハンマーなんかで十分破壊できると思う」

「……よし。話をまとめよう。ロトム、今の話を簡単にまとめた映像を出せるか？」

『お任せロト！』

ポケットから取り出したスマホロトムの画面から光が漏れてまる

でホログラム映像のような画面が空中に投影される。青空教室なんかで使ったことがあるからこの機能は知っていた。
　ロトムが投影した映像には巨大な蜘蛛型ロボットと街の外壁の様子が横からの図で表されていた。蜘蛛型ロボット――――デストロイヤーの周りには結界が青い膜として記されている。
「まず、デストロイヤーが街の外壁から見えたら俺とソルガレオのZ技で結界を破壊する。続いてウィズさんとめぐみんで両脚を攻撃。万が一に際してミツルギ率いる前衛職をデストロイヤーを取り囲むように配備。ハンマーなんかの破壊力のある装備で脚を完全に破壊して動きを停止させる。要塞内部にいるというデストロイヤーの開発者が何かをする恐れがある、内部に突入できるようにアーチャー職はロープ付きの縄を装備しておく」
　スライドショーのように次々と映像を切り替えながら今回の作戦のプレゼンテーションを行っていく。プレゼンが終わると、画面を閉じてグルッと冒険者たちを一瞥し異論がないことを確認する。
「作戦は決まった。各自、自分の持ち場で準備を始めてくれ！」
「「「「おう（はい）っ!!!!」」」」
　俺の号令で冒険者達はそれぞれの役目を全うするために動き出した。
「アレ？　カズマさんのやってるのって私達の仕事じゃ……。」